

奇譚クラブ

新しい風俗文献誌

6月号



6-JUNE '66

奇譚クラブ

昭和四十一年六月号

定価 三〇〇円

THE KITAN CLUB
Published Monthly By Tenseisya
Osaka Japan



6月号 ¥ 300

限定版グラビア写真集へ美しき縛しめⅤ第八集

大塚啓子
鈴木晃子
山原清子

女斗緊縛競艶写真特集 完成

頒価一部 一〇〇〇円 (送共) 略号 (美8)

「女性対女性」の激しい女斗美、緊縛プレイの
フォト化―動きのある縛り場面の美しい展開―

女性対女性、女性同志の組打ち(六尺襦
着用或はパンティ着用)から緊縛に至るま
での動きのある縛り動作の連続を、大塚啓
子、鈴木晃子、山原清子の三女によって傍

若無人に展開させました。数十枚の素晴らしい
美女争闘、相互緊縛の拘束たる写真がこ
の一冊によって皆様のものとなるのです。
今すぐお申込み下さるようお願いいたします。



限定版グラビア写真集へ美しき縛しめⅤ第七集完成!

山原清子 刺青の魅力を探ぐる

頒価一部 一〇〇〇円 (送共) 略号 美7Ⅴ

全部最近撮影の力作! 未公開の秘蔵写真集!

刺青の女王―山原清子の魅力を最高度に発揮した強烈な緊縛フォトの結集版(思わず息をのむ凄いポーズ)

このグラビア写真集の刊行のために、近々三カ月の間、山原清子を連日のように煩して特写した、総て未公開の傑作写真は、そのす。山原清子の刺青の魅力を探索して、その肉体の隅から隅までを強烈な緊縛によって、マニアの皆さまの目にのびにいられます。今

後二度と手に入らない素晴らしいと、おきの写真多数をこの「限定版写真集」のみに投入いたしました。一般市販は絶対にいたしませんから、直接発行所へ「略号 美7Ⅴ」と御記入の上、お申込み下さい。本欄に掲載の写真は、写真集には入っておりません。

☆最新撮影△総天然色▽写真分譲品☆

両手吊りに悶える

大手札三枚一組 一〇〇〇円
大塚啓子 略号△てき▽

両手首を揃えて鴨居に吊られ、豊満な裸身をくねらせて爪先立つ若々しい見事な肢体が、美しい嗜虐絵模様をカラープリントにて原色そのまま迫真的に写されている。

後手裸身柱縛り

大手札四枚一組 一二〇〇円
大塚啓子 略号△てか▽

後手高小手の厳しい縄目が柔肌の二の腕、胸、腹、太股、膝とくびるように柱に縛りつけられている。裸身を正面に向けて羞かしげに身もだえしている可憐な表情が華麗な色彩によって美しい。

縄目にあえぐ裸女

大手札四枚一組 一二〇〇円
大塚啓子 略号△てく▽

ピンク色に染まった柔肌に紺と白のまだらの縄が、くびるように全身を締めつけ背中で高々と背負ったように後手首が固定され、僅かに自由な脚をばたつかせる。

豊麗裸身の縄目

大手札四枚一組 一二〇〇円
大塚啓子 略号△てこ▽

均整のとれた豊かな裸身に情容赦のない縄目が高小手にきびしくまつわりついている柔肌のくびれ具合が天然色によって、まるで錦絵のように見事である。

後手高小手縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
大塚啓子 略号△てま▽

典型的な後手高小手縛りの裸身をマニアの眼に触れることの羞らいで顔をのけぞらし、全身をくねらし悶えるさまを実物を眺めるのと変らぬ着色フオートでどうぞ。

長襦袢緊縛色模様

大手札三枚一組 一〇〇〇円
東浦ひかる 略号△てみ▽

華やかな色彩の長襦袢をまとって腕も折れよとばかり、ぎゅうぎゅう縛りしめ上げられた女体が白い脚から赤いお腰を蹴出してものがく様をカラーにてお目にかけます。

緋腰巻緊縛色模様

大手札三枚一組 一〇〇〇円
東浦ひかる 略号△てむ▽

白い肌に真紅の腰巻。この白と

赤のコントラストはカラーでなければ見られませんか。女体は勿論緊縛されて苦しさにもがき悶える姿態を十分にごらんにいれます。

猿ぐつわに呻く

大手札三枚一組 一〇〇〇円
東浦ひかる 略号△てめ▽

ムムムム、と鼻も口も蔽われて呻めきもならぬ猿ぐつわで、縄目の痛さは只、眼の表情のみが訴えている息づまるような真迫場面が美しい色彩でごらんになれます。

柱宙吊り縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
東浦ひかる 略号△ても▽

肥り肉の女体が正面向いて両手を浮かして柱に宙吊り縛りになっている。全身に喰い込む縄、支えのない両足先は空を掴んで真直ぐにピンと伸びてもがいている。

ポリウムを縛る

大手札三枚一組 一〇〇〇円
東浦ひかる 略号△てん▽

肉づきの見事な裸身を一つ一つ刻み込むように縄目がポリウムを縛ってゆく。縄目と縄目の間にふくれあがる肉。肌と縄の抑揚が光と影の色彩で華やかにいろどる。

縄の苦悶を狙う

大手札三枚一組 一〇〇〇円
東浦ひかる 略号△てる▽

マゾヒスチンと自称する流石の東浦ひかるもぐるぐると裸身を力いっぱい締めあげられて長時間放置されたので苦痛の悲鳴を挙げたところをすかさずキャッチした。

真紅の腰巻着用

大手札二枚組 八〇〇円
大塚啓子 略号△うお▽

真紅な腰巻を全裸の腰にまとうところ、従来の黒白写真ではあらわせない色彩を腰巻フアンの方々の要望によって特にカラー写真にて分譲品に加えました。

悶える緊縛色模様

大手札二枚一組 八〇〇円
東浦ひかる 略号△うて▽

真紅の腰巻をまとった大塚啓子を高小手に縛り上げた珍らしくも東浦ひかるが責め手に回って啓子の縄尻をとるという今までの嘗てなかった横図が、カラーにてお目みえいたします。

真紅の腰巻緊縛

大手札四枚一組 一二〇〇円
大塚啓子 略号△うこ▽

真紅な腰巻の乱れた裾から、真白な太股が、脛が、素足がこぼれるエロチックな緊縛シーンが、力強い責めフオートです。

◎新趣向△責と悦虐▽フオト分譲品◎

強烈あぐら縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(えめ)

柱を背負って両膝を左右に思いきって開いてアグラをかけた両足首を揃えて縛り、背後の柱と連結して締めあげると、二の腕豊胸を括られた女体は二つ折りになる。

自刃血まみれ屍体

大手札十枚一組 一二〇〇円
山原清子 略号(えし)

白禪一本の刺青女性が脇差短刀を用いて下腹から鳩尾にかけて、したたかに切り更に止めの刃を咽喉へ。豊富な血紅を使つて切腹と屍体有様を微細に描写した。

驚づかみの乳房

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦、大塚 略号(えう)

後手に縛りあげられて身動きの出来ないひかるは、その膨大な乳房を縄のため更に大きくして仰臥する。啓子は、その乳房を驚づかみにして弄ぶ。悶えるひかる。

縛りあげられる女

大手札十二枚一組 一二〇〇円
大塚、東浦 略号(えの)

大塚啓子の手によって高手小手

に縛りあげられてゆく東浦ひかるの姿態を、十二枚のフオトに連続的に一枚一枚順序を追って刻明に演じてもらいました。

縛り虐める悦楽境

大手札五枚一組 六〇〇円
大塚、東浦 略号(えわ)

二の腕から双胸、胴、後手と厳しく縛りあげられた東浦ひかるは、大塚啓子から息もつけぬ猿ぐつを喰まされ呻めき悶えながら、弄ばれいじめられる数々の場面。

血まみれ女斗場面

大手札十二枚一組 一五〇〇円
山原、東浦 略号(えみ)

六尺禪一本の入墨姐御が赤い腰巻一枚の娘を相手にアイクチを振りまわしての大立ち回り。豊富な血紅を利用しての断末魔にあえぐ娘の凄惨な場面を刻明に描写。

くすぐり責め地獄

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦、大塚 略号(えな)

股間縛で両手吊りにあっている東浦ひかるの伸びきった腋の下を大塚啓子が両手の指先をつかかってくすぐる。身をくねらして懸命に耐えている東浦ひかるの裸身。

強烈くすぐり責め

大手札四枚一組 五〇〇円
大塚、東浦 略号(えぬ)

両手を鴨居から吊られて一本の棒のように伸びきった大塚啓子の脇腹から下腹、腋の下をくすぐる東浦ひかる。くすぐったさに蛇のようにくねる啓子の裸身の美。

手吊り股間縛責め

大手札五枚一組 六〇〇円
東浦、大塚 略号(えお)

両手を高々と鴨居に吊り上げられた東浦ひかるは呻めき声を出してはいけないというので猿ぐつを喰まされ大塚啓子から毛髪を撫まれ股間縛の縄を弄ばれる。

ポリウムをくびる

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(ひか)

最近になって、ひとしおポリウムを増してムクムクと肉のついてきた張りきった裸身を縄目が、まるで俵のようにくびって、縄目の間に肉がむくれあがっている。

両手吊りにあえぐ

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(ひお)

両手首を揃えて縛られ格天井の梁に高々に吊り上げられて、脇腹を空間に寒々とむきだしにして操り責めの試験におびえ、全身をさしして悶える豊満な裸身の美。

後手垂直しばり

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(ひけ)

背後で後手を垂直に揃えた両の腕を、そのツケ根から手首に至るまで、グルグルと縄でひきしほり更に胴体と密着させて一本の棒のように縛りあげられた女体。

一糸まとわぬ緊縛

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号(ひく)

最近になって一層の美しさと色気の増してきた啓子の全裸の女体に思ふさまに縄を掛け、身動きできぬまま翻弄される柔肌に光と影の屈折が麗美な画面となす。

豊胸をくびる縄目

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号(ひき)

ぶっくりとふくらんだ恰好のよい乳房を暴虐の縄が切りきざんで斜光線が、その陰翳をくつきりと描き、可愛い臍窩の窪みが強調される女体神秘の苦悶表情。

浣腸とオシメ装着

大手札四枚一組 五〇〇円
大塚啓子 略号(ひそ)

男性の手によって浣腸を施された上、更にその排泄をオシメのなかにさせられるために、オシメをつけられ、オシメカバーを装着されるシーンを写真化しました。



四月一日からメートル法が施行される。度量衡に関しては、かなり長い準備期間があったので人々の受入態勢も十分だと思われる。学業中のかた、家庭の奥さまがたには、メートル法が日常茶飯事として、すっかり身につけているようにお見受けする。

お恥かしい次第だが私など、未だに一〇〇グラムいくら、といわれてもピンとこない。百匁・五十匁といったほうが、実質的な重量（手応え容量感）に受けた感じを察知することができるとくに面積など、平方メートルよりも坪のほうが分りやすい。これは、住宅が大抵和室なので、畳〇枚〇帖〇坪という計量過程を直感的にたどっていくためのようである。（畳も最近では、むかしからいう八京間・東京畳の差異

以外に、縮少寸法のものが増え畳数が計測基準にならなくなっているが……）

これではいけないと思いつつ、何となく、尺貫法を懐しむ気持ちもどまっている。

結果的には、無駄めしを喰った自己の年令を表明しているようなものだが、それでもまだまだ「不便」と感じているかたも多いと思う。このように意識してみると、法律や制度の中には、守らなければならぬ事柄なのに、ずい分と不便（迷惑的なもの）なものが多い外に多く驚くことがある。

少し意味は異なるが八売春防止法・性病予防法について「不便」「迷惑」的要素がないでもない。

「制度の不便さ」

保藤久人

売春防止法は八ザル法という汚名を着せられ、近頃、識者の間でも公然と八赤線復活が提唱されるようになってきているが、その際には、性病蔓延や非行増大に對しての憂慮がふくまれているようである。

売春行為が人間性の尊厳を冒し性道徳をみだし風俗を害する、ということに異論はないが、人間は健康であればあるほど性本能が活発であることも事実で、その是非は軽々しく口にできる質のもてはなからう。

しかし、法律そのものが八ザル法で成果がなく、その結果、性病は増加一途ということとをきくと赤線があれば、こういう事態に到らなかつただろうに……と、勝手な話だが慨嘆せざるを得ない。今度、超党派の共同提案による八改正案が国会に提出されるかどうかなることか――。

必ずしも規制されていないが八当用漢字も「有難迷惑」の部類に入りそうだ。

今まで苦にせず情性的に文字を綴っていたが、教えられるとかな

づかいもむつかしく、日ごろ使用している漢字に当て字が多いことに気づいて私など、書きながらウロウロしている現状である。

活字にする以上、新聞と同程度に統一しなければならぬようだが、かな文字では実感のともなわない語句が多く、不便さを痛感し何とかならないか……と、いいなくなる。

某大学の入試問題には八旧かなづかいなどもあったときいているが、（古文を理解するには当然必要）このあたりにも不便と迷惑が隣居している。このように、ふと自分の周囲を見渡すと八制度の不便さが、多種多様にあり判断に苦しむことさえある。

社会の秩序を保つていくためには、鑄型のような規制の中にはまり、大抵のことは抑制が必要らしく、加えて、人の集中する都会では、日とともに、人間をからめる経緯（たてぬき）を、人間みずからが作り出していく。

その形態が社会の営みだとしたら、それならばせめて、不自由さをかこちながらも内側の生活（家庭）だけでも、大いに羽根を伸ばしたいものだと思うのだが――。

短信往来

麻生保様へ

三原寛より

谷崎潤一郎「饒太郎」「富美子の足」について、早速御教示に預り厚く御礼申し上げます。

大変に行届いた御説明頂き、全集が出る度に期待に反し、この二篇にお目にかかれぬ理由が判明致しました。昭和六年の出版では本当に、入手困難とは存じますが御蔭様で、手がかりを得る事が出来ましたので、努めて探してみます。

それよりも、麻生様往年の御作品には、学生当時の私は、まるで罪に悩む者がはじめて聖書を手にしたような感激と興奮をもって、愛読させて頂いたものでしたが、今後とも、一層磨きのかかった御作品を続々御発表される事を心より待ち望んでいる次第です。先は、誌上を拝借して、御礼迄申し上げます。

夜乃探郎様へ

間宮清満彦より

四月号での（話題梶山季之）については大変ありがとう御座居ま

した。と申しますのは五月号を御覧いただければおわかりかと存じますが、私は氏の人のファンであります。それにもかかわらず私とした事が小説現代三月号は未読でありましたが、貴方様の御蔭でどうにか読みもらさなくて済みませんでした。でも、私の感じでは、あれは氏のベストではありません。少し力を抜いて、通り一遍のものになってしまっていました。

ところで五月号では貴方様の健筆振りが見られなく残念でした。陰のある様な、そうして流麗な文章、私は大好きです。私は、M・フェチ専門ですが、貴方様の文章はそんな傾向のちがいを越えて私の心の中に浸透してゆきます。どうかここにも貴方の文章に魅せられた一人が居る事をお忘れにならず、御活躍下さい。共に我々が難読奇クのためがんばろうではありませんか。

つたない文をお笑い下さい。

御健筆をお祈り致します。

沖村れい子様へ

熊野良雄より

五月号のSMカメラハント、非常に面白く拝読しました。今迄にも辻村氏のカメラハントは何度も読んで居りますが、これ程感動

した事はありません。勿論私の様な無粋者には同氏の様にロマンチックな所はないかも知りませんがプロでないといっても緊縛自体については負けるとは思われません。私は今迄数人の女性を縛っており、その中一名はマゾ的な女性もありましたが、初対面からこれ程積極的で然も縛られる為に生まれてきた様な女性はありません。

私の好みは責めより先ず徹底した緊縛にあります。全身がしびれる程の緊縛、そのため変ってくる皮膚の色、高々と吊り上げられた両手、千切れる程、喰込んだ縄、何れもすばらしいものです。そして緊縛ポーズを楽しみ又縄の喰込んだ肌の感触を楽しみながら、ゆっくり縛ってゆくのは、とても愉快なものです。

責については、緊縛の伴ったもの、例えば海老責、逆海老責の様なものが好きです。私は神戸市内三宮に住んでおりますが、如何でしょう。中津川迄三時間半もあればゆけますので一度試してみてもどうですか。但し私は今年四十才になる技術家で、男性としての魅力はないかも知りませんが、却って、あなたにとっては良いと思われれます。尚、中津川で具合が悪

ければ、多治見でも良いと思ひますので、日時、場所、目印を書いて次号の読者通信で返事を貰いたく吉報お待ちします。

千草忠夫さんへ

よるの・たんろうより

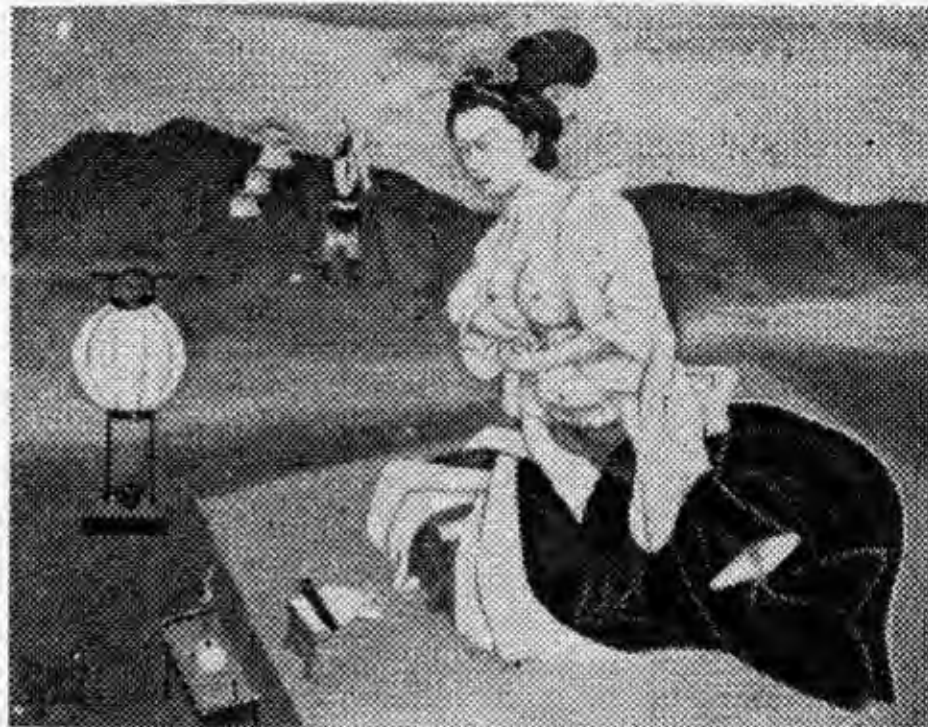
「のおと・あと・らんだむ」が二月号に発表されてより、四月号の八六、SMにおける美とは何かVまで、興味深く、拝見させて頂きました。これは何も私のことが度々、取上げられているからだけでなく、マニア全体に及ぶ重要なテーマが盛込まれているからでもあります。ただ、私にとって心から残念に思っていますことは、せっかく「昨今の『奇譚クラブ』は、まさに文字通りの百家争鳴」と登場された時は、すでに「百家争鳴」に近い読物本位の風潮が論壇にしのびよってくる気配を知るときでもあったことです。ものいえば唇淋し（論壇）——ということとは良いことではない。しかし、いま私はその事については何もふれたくありません。ただ、没を覚悟で、昨夜「朝顔的耽美論」を脱稿、投稿しました。そのことだけを述べたいのです。いくら「論評ものが嫌われる」といった風潮と答えが出たといっても、実際に、「のお

初夜の誓い

森田敬三

瀬川泰子女史作、三原三樹氏画のカット絵を、私の好みに描き直して、見ました。大体原文の通りに黒装束で膝はくくって居ません。

時しも慶応四年八月半ば、会津藩士輩沢東吾氏の妻、二十才の珠江夫人は、戦雲の中に消え去った最愛の人の後を追って、結婚の夜、行ぜられた切腹の儀法をそのままに、見事に脛下一文字を激甚な痛苦に耐えて浅く大きく（深さ一・五センチ幅三〇センチ）掻き切った後、心臓を深々と刺して絶命しました。グサリと一度刺した九寸五分を、更に力をこめて、もう一度、柄の隙まで刺し込んだ場面では悲鳴をあげて覚えず踏み開いて



た膝前に、赤い腰巻をチラと覗かせています。

夫婦愛の深さもさることながら武士道故に藩主松平容保が、敗れると知りつつ激しく抵抗した故の悲劇です。若し瀬川女史に進言が許されるなら、表題の「戦国女人悲史」を「武士道残酷史」とされた方が適切ではあるまいかと愚考します。

と・あと・らんだむ」が発表続けられていであらう千草さんにとっても、反響が少くは張合いが無いことでしょうし、それでは百花撩乱期に活躍されたセンパイのせつかくの登場を遇する道にもかかってないと思うのです。

千草さん。もし、私のハ——耽美論V発表されたとしたらお受け取り下さい。八方破れの粗雑な文ですが、心意気だけはよみとり願います。ただし、この稿以後は、よほどのこととしないと論評のペンは取りません。また機会あって、何かふれて頂いても、欠礼するかも知れませんので、前もってお断りして置きます。

好漢、千草忠夫さんよ。一層の彩筆を期待します。（三月十日記）
新田英雄様へ

小竹一浩より

新田英雄様、実は五月号の「夫婦SMプレイ雑感」の文中で貴方への呼びかけも書いたのですが、文の拙さか、あの文に不釣合だったかわかりませんがカットされてしまったのです。そこで通信欄を借りて、お便りする次第です。
名古屋の小川様からもお便りがあつたようですが、小生も仲間に入れて頂けませんか。小生も東京

に住んでおりますので貴方とお逢いできればと思っています。よろしかったら、小川様、鳥取の南様も何か名案をお考え下さい。プレイバシーには絶対に触れず、飽くまでもSMプレイヤー同志として文通ができれば、どんなに楽しいことでしょう。プレイの楽しさを増し短い人生をより有効にエンジョイしたいものです。

末筆ながら、ゆう子さんのフォトにつき感じたことを書かせて下さい。身体の調子が悪くすっきりやせてしまったといわれますが、どうして、どうして、相も変らぬ麗姿、羨ましい限りです。乳房とウェスト、それにヒップの見事さは股間縛りと相まって全く魅惑的です。唯一一言苦言を呈するならば、ここ二、三回のフォトが全く同型のものであることです。それと、大変急所を心得たすばらしい縛り方ですが、殆んど二の腕を縛ったものがありませぬ。このような高手縛りでないポーズの場合は縛り過程フォトが見たいものです。縛り易いように両手を上げて乳房縛りを待つゆう子さんの姿態等想像しただけでも楽しくなります。新田様如何がでしょうか？お便りお待ちしております。

写真「首輪」

小竹一浩



編集部の皆様、二月号に続き五月号に拙作掲載下され有難う御座居ます。今後ともよろしく御願います。愈々カメラマニアにとってもSMプレイヤーにとっても、最良の時候に入りましたが、皆様は如何ですか。私もプレイ意欲の湧起に張り切ってカメラやロープを手に使っています。

今回は首輪フォト三葉を同封しました。大きな犬に用いる首輪ですが、これは大変サデイスチックなムードの出るもので、もう七年程前より時折愛用しているものです。雪枝も首輪をはめられると奴隷にでもなったような気分になるといっています。四つん這いにして、お尻をたたいて歩ませたり、写真のように首輪吊りと両手吊りを併用しておいての種々の責めを

奇倶雑感

佐治泉夢

私はもう十年近くも奇倶を愛してきた一人である。初めて手にしたのは色表紙の頃で、グラビヤは伊吹さん等が活躍していた懐しい時代であった。

その頃、街はずれの静かな喫茶店の片隅でT子に始めて逢った。面長のどこか憂愁をただよわせた娘である。横顔の美しさについて見とれて隣のボックスに席を移してぬすみ見すると、彼女

女の読んでいる雑誌に見覚えがあった。声を掛けると真赤な顔になり下を見つめた。

折よく奇倶特集号があったので彼女に手渡した。間もなくT子との愛の遍歴が始まった。

和服のよく似合うすらりとした彼女は抱きしめると花の崩れるような多彩な色を畳にこぼした。帯締で後手に縛り、肩



近く引握げると痛いツと悲鳴をもらした。帯揚げで猿ぐつわをかませ黄色地の博多帯を解くと、シュツシュツと音を立てた。緋の長襦袢の胸許が乱れて白い乳房の高まりがのぞき、やがてぶどうの実の様な可愛い乳首が固く上を向いてふるえているのが淡い灯影にゆらぐ。声にならぬうめきが帯揚げのあたりからもれ、白い脚をばたつかせてもだえるT子――。

長い歳月をかけた愛の遍歴については、何れ稿を改めて報告したいと思うが、奇倶のあり方に、少し希望があるので述べさせて頂き

行うのも面白いものです。このフ
 オトを撮った時は、くすぐり責め
 と軽い鞭打ちをしたあと、相当長
 時間に亘りこの体放置しましたが
 解放された時、雪枝は首筋と肩の
 痛みに呻いていました。

カメラ技術の拙劣さを弁解する
 つもりはありませんが、三十路の

れるものが撮れましたら又送らせ
 て頂きます。

本誌上サロンの欄にては、毎月い
 ろいろの方の「夫婦プレイ」のフ
 オトが掲載され、毎月大変楽しく
 拝見させて頂いており、且つ誌上
 とはいえ非常に親近感を抱いてお
 ります。満天下の夫婦プレイファ



坂を越えたモデル故、思うような
 ものがとれず、カメラハントの諸
 嬢を見るにつけ、辻村氏の手腕に
 羨望の念を禁じ得ない次第です。
 次回は少しく変ったプレイを計
 画していますので、観賞に耐えら

ンの方々、どうか写真の巧拙に拘
 らず、遠慮せずどんどん投稿され
 んことを願います。そして、
 編集部の方も、きっと沢山送られ
 てきているでしょうが、残らず掲
 載されるようお願いいたします。

出来れば次の様な企画があればと
 考える。

一、以前に見掛けたレポート、
 責の実験記の復活、例えば鼻障子
 を貫通して鼻環をつけるとか、エ
 ビ責で体が白くやがて紫色に変わ
 っていく課程とかが記憶に残ってい
 るが、新しいレポートはないもの
 だろうか。

二、モデルに人形を使用して、
 四十八手の責のスタイルを挿絵入
 りで説明してほしい。人形なれば
 非難されることもないだろう。ゴ
 ム製の人形で仲々精巧なものがあ
 るように聞いている。

三、SMに関係ある映画、雑誌
 演劇、書籍、浮世絵、絵画、写真
 等の紹介記事又は批評等を編集し
 て頂きたい。ブルーフィルムにも
 三分の一は着表、三分の一は全裸
 での縛り場面が出てくる時代であ
 る。場末のストリップ小屋とか芝

△相撲通信△ 奮斗士好太

雪崎京人氏の提供によるさし画
 はなかなか感じが出ていて大へん
 けっこうです。4月号読者サロン
 にM氏のマワシ姿の前後が載って
 いましたが美事なものでした。
 大塚さん東浦さん木村さんら女
 力士の皆さんのさっそうたるマワ

居小屋では迫真の縛り場面が見ら
 れる由。第七グループの映画にも
 (花と蛇、日本拷問刑罰史等)仲
 タスリルに満ちたものがある。出
 来れば、予告、演出者も記載願
 いたい。

四、責められる女の手記、感想
 等を出来るだけナマのものを集め
 られたい。「着衣がよいか、半裸
 がよいか、全裸がよいか」又は猿
 ぐつわをかませた方がよいか。目
 かくしをする方がよいか等アンケ
 ートを取ると面白いと思う。

五、同好者の集いを催して会員
 の増加を企てるのもよい。座談会で
 も雑談会でも結構、会費は千円以
 内に留めなるべく多数集まれるよ
 う場所日時を選ばれては如何。郊
 外での楽しい一刻が持たれれば春
 宵価千金の思いがすること必至だ
 と考える。

シ姿や熱戦の有様が拝見できたら
 どんなに感激だろうと思います。
 スタッフの方々がうらやましい限
 りです。三嬢の熱戦を実際に拝見
 するのは、ちょっと望めないのが
 残念。せめて女相撲熱戦写真集の
 刊行が実現することを切望するも
 のです。

禪人生一代記 (その2)

間和志締男



学徒出陣で海軍に入団した私は
武山海兵団にまわされました。新
兵教育のくるしさは言葉ではいえ
ません。相模湾の風は身にしみて
真冬の時は手・耳・足の先は感覚
はなくなり、本当に軍隊の厳しさ
を痛切に感じました。でも私が
嬉しかったのは、海軍に入って渡
された下着でフンドシを受取った
時は、なんともいえず心は明るく
なりました。又、訓練の時間には
相撲の時間があり私は中学時代の
相撲が役に立って、こんな嬉しい

ことはありませんでした。
教官から渡された禪は白でも「
ケンパス」といって普通の雲芥木
綿より目がつまっていた固く締め
る前に水で霧を掛けるのです。そ
れを二人で締め合うのですが、水
を喰っている禪は腰といわず股と
いわず内股陰部と、ところかまわ
ずすれてまいました。勿論、最
初のうちは学校時代と同じ四股か
ら始まり蹲居の姿勢、鉄砲、運足
運動、転倒法、伸脚、全身柔軟運
動と、基本運動の毎日です。私は

学校時代一通り基本を身に付けて
いたので楽でした。ただ、一番こ
たえたのは、前にもいった寒さで
す。禪一本で相撲場所に行く時、
いくら禪を締めて身が締まったと
はいっても、言葉と現実の違いは
す。私は一週間に二回の相撲の時
間は前の夜から寝られず早く朝に
なれと頭の中で思い乍ら「ハンモ
ック」の床に就きました。
稽古の厳しさは中学校時代より
は少しはましで、一時間の間に約
二十名の人が教官の指導で五人一
組で行います。勿論、後の三組は
それぞれの運動を交代に教えられ
約十時間の課程が終ると、一対一
の勝負に入ります。最初十組の
勝負を二週(四回)行い、次の週
より三人抜、五人抜、十人抜と行
こなわれます。今、この思い出を
書いている私は、その時代の若人
の気持を現代の年代に置きかえて
みますと、一入感慨深いものがあ
ります。
私は戦争は絶対に反対です。だ
が、人間一人を作り上げるうえに
置いては、どうしても、きちっと
した人間教育、いわゆる一つ一つ
に責任を持つという事が必要では
ないかと思えます。その意味にお
いて団体教育、集団訓練は一定の

編集部だより

○春のお彼岸に四天王寺境内の仮
設見世物小屋で蛇娘の興行中との
ことで、辻村、箕田両人揃って見
学に行った。若干の撮影を行った
が、カメラハントですでに紹介済
なので今月号では掲載しない。
○新宮明夫氏御夫妻が春の休暇を
利用してわざわざ来阪される。次
では、カメラハントで新宮明夫、
洋子夫妻をテーマにした「妻こそ
わが命」と題した辻村隆の一文が
掲載される。それに関連して辻村
新宮両氏の対談「夫婦プレイの夜
は更けて」が予定されている。
○尚、好評のカメラハントでは、
七月号に引続いて、八月号分の予
定として、本誌四月号所載「可愛
い小悪魔の群れ」の続篇ともい
うべき「続可愛い小悪魔の群れ」
(一宮百合子の巻)が企画されて
いるので御期待を。その他カ
メラハントでは、毛色の変った若
き女性のハントが精力的に次々と
敢行されているので、必ずファン
を熱狂させることと思う。
○カメラハントといえは、本誌連
載小説「花と蛇」の映画化された

期間、学校を卒業してから社会人になるまでに施す必要があるのではないかと考えます。そういう意味で奇クを愛読される皆様、通信欄を利用されるからは個々の責任という事をお忘れなくハッキリと承て下さい。責任を、お忘れな

五月号の文章から

福田 久 文

◇「彼が自分の『性』の中に自認し、そして信奉しようとする斯道にとって、この時、発作的に噴流しようとする気持は異端児ともいえるし、日頃の信条の放棄をも意味する」

◇この文（国文法の術語です。念のため）の難点の一つは前の文またはパラグラフ（段落。文のいくつかの集合であって、一字分下げて書き始め、改行によって終るもの）を参照しなければ理解が困難なことでしょう。「発作的に噴流しようとする気持」は直前のパラグラフの「仮令暴行じみた行為を加えても」という気持のことだと気がつかなければ分らない虞れがあります。同じことは「被膜のそ

く。口さきや、面白半分でなく自分がかうと思つたら先に立つて実行して下さい。又、受けて立つ方（相撲用語だね）一つどんなやつか見てやろうという気持でなく駄目なら駄目とハッキリいい、良ければすぐに進むという事をお忘

れ」「新書版のそれ」という表現についていえます。「それ」という代名詞がその直前の文の「カプセル」「八鍵V」であることを読む者はふりかえって確めなければなりません。

◇話される言葉でも、書かれた言葉でも、言葉の最終構成要素は文であって、単語ではありません。文こそよく言葉を構成する細胞であり、それは自立して生きているものです。このことは何も専門学者の指摘をまつまでもなく、翻訳通訳をなさった人なら多分じかに肌を感じておられる事実でしょう◇この種欧文直訳調は、三原氏が「シチュエーション・ウォンテッド」において見事に創見を発揮さ

れなく。輝、女相撲ファンの皆様、くだらぬ事を申し上げてガッカリされたと思いますが、これが私の本当の気持です。で、今後共、何分御引立ての程、皆様の忌憚のない意見をお待ちしてペンをおきます。

れたように、英文の代用品として仮名で表示される場合以外は読者に無用の負担をかけます。この優れた心理小説「変身」が、その読者を制限することを慮れるのです◇これと対照的なのが田代氏の「続・みみずのたわごと」でしょう読者を抱腹させるユーモアが、実にスムーズに読者に伝わりやす。文の一つ一つが自立して生きているからです。

◇よく分る文章とは、どれ一つ抜き取ってみても理解可能の文が有機的に集って、一つのシンホニーをかなでている文章のことです。よく分ることこそ文章に課せられた最高の機能だと信じます。◇誤字や脱字といった初歩的なミスをしているような門外漢のわたしがこのような雑文を草することはおこがましいこととごいいます。が、お許しくださいますよう。

映画「花と蛇」の主演女優がカメラハントの素材となって辻村隆の健筆により誌上を飾ることになるかもしれない。但し今のところ日時その他確定的でないため、一応予告程度にとどめておく。実現の暁には、次号のこの欄にて詳細をお送りすることにする。

○「山原清子を囲む座談会」の件山原清子の一身上の都合のため、延々になつてゐるが、いずれ会員の方々には、文書を以て連絡したいと思つてゐる。

○妊婦フォト撮影の件も残念ながら企画倒れとなつてしまった。妊婦フォトといえば、読者通信Y生氏から送られた数葉の妊婦フォトは全く素晴らしい臨月腹で、このような妊婦を被写体に選べたらと念願したが、昨年の八月では、時すでに晩し無念残念というところ。○芳野眉美氏に花田沙登子嬢を紹介したところ、忽ち長駆来阪。早速神酒奉戴の「濡れにぞ濡れし」の一文を送つて来られる。彼に彼女を紹介した日もうとうとし雨の日であったが今回の会見も雨の日であった由、どうも彼は雨男のようだ。次回の六月来阪の予定は梅雨の候だから、どうも雨の公算が大である。

サロソ楽我記

辻村 隆

(第二十四回)

前触れもなく、芳野眉美がやって来た。どうやら関西でのオモシロサにしばれて、矢も楯もたまらなくなったらしい。目的をきくと花田沙登子さんに逢ってノンできたとか。奴隷扱いにされてクタクタになったと愉しそうに語る。私も即実主義だが、花田さんはSだけに、何か異質を感じるが、彼は神酒奉戴者だから、M的な扱いをうけて、ノマされたのが、心の奥底までしびれたらしい口吻りであった。ユリコからも二度許り便りがあったが、今回は逢えなかったと残念そうだった。

マスミどうしているときくから便りはあって、そのうち会いたい会いたいと思いつら、ついその暇がないのだという、じゃあ、この際紹介してくれという。彼の熱心さに負けて、マスミの勤めている会社に電話した処、長い間待たされて、やっと電話口に彼女の声が出た。先日一緒だった、赤いセーターの東京ボーイが逢いたといってるよと告げると、弾んだ声で「嬉しいわ」とかえってきた。若

い娘はサバサバ割り切って、どうやら私ひとりの独占は到底、手に負えそうもないことを、彼女の声で感じとった。少し惜しい気もしたが、気前よく芳野眉美にマユミを托す。

京都、奈良の先月の見残した古き仏達をたずねたあと、マスミに会って帰りますよと彼はいそいそしている。私宅で一泊して翌朝勿々に立ったが、若い彼は私と違つて、やはり行動派であることを認めずにはいられなかった。手紙しませんが、マスミとのプレイの一件、「濡れにぞ濡れし」に書きま

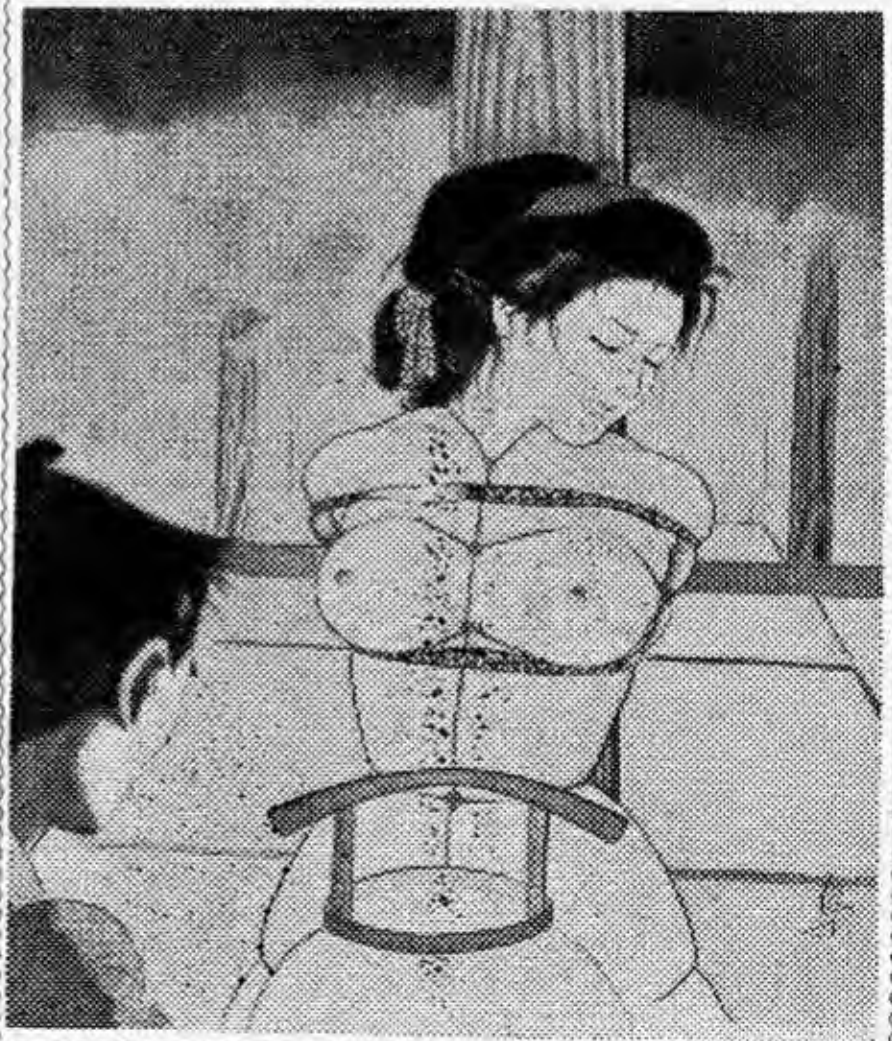
すとのことだったが、成果や如何？ 彼の文を楽しむにしている。

× × ×

新宮明夫夫妻の訪問が、遂にこの稿に間に合わなかった。三月の末なので『楽我記』をギリギリまで伸ばしたが、若しお目にかかって対談、夫婦プレイをとったとしても、筆にはすぐなにくい。私のカメラ・ハントは来月号は、新宮夫妻の夫婦プレイ帯同記になる事だろう。期待に胸を弾ませている

梶 太郎

影 灯 の 燈 行

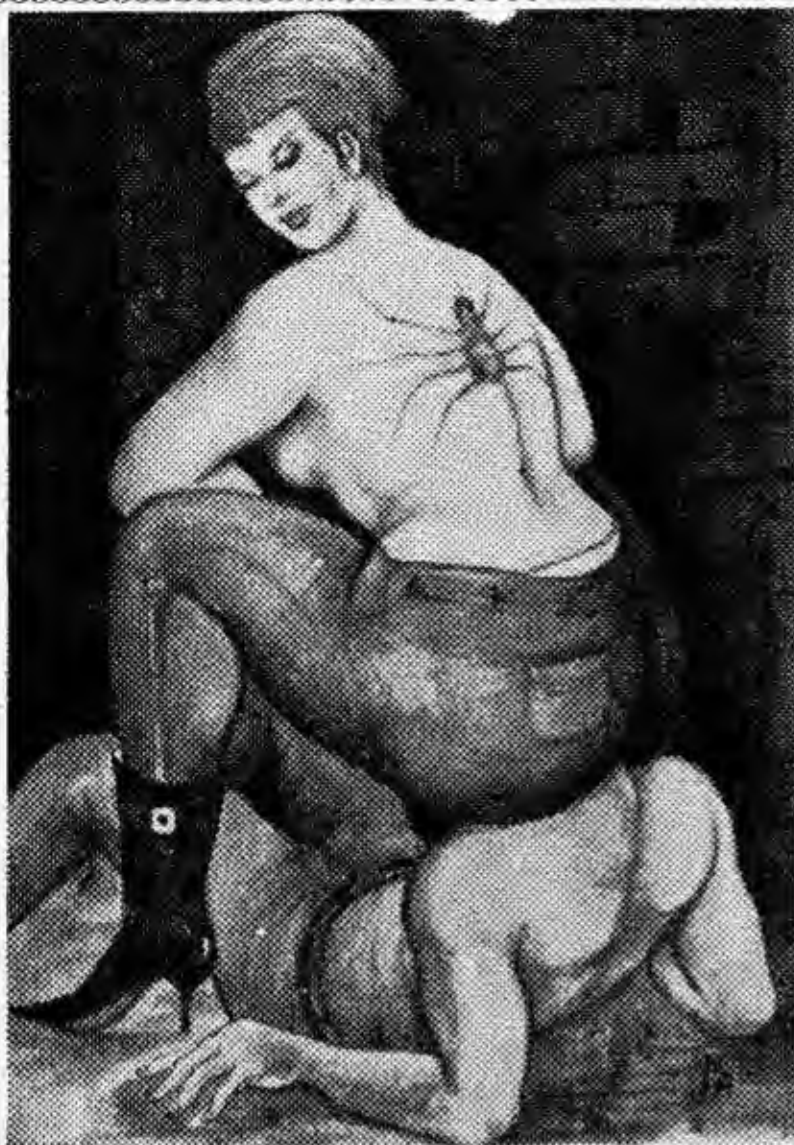


が、新宮夫妻にとっても、夫婦揃っての関西旅行は、新婚以来始めてとか。彼等の歓待に心を配り、箕田氏にも連絡して、彼のタウンスで、一緒に、京都、宝塚方面を春の一日ドライブしようと書き送ったが、それも断わってきた。貴重な旅行の数日しみじみと心ゆくまで、夫婦プレイに耽溺したいそうである。さもあらばあれ、私もそれならと、色々と彼の趣向を凝らしているが、すべては来月

号をどうぞというところか。

× × ×

電話で箕田氏と、いろいろ喋べるうち、モデルの件になって、一度豊かな長い黒髪の娘を撮ってみたいなという、モデル募集の中から、若い長い髪のひとがいるから、すぐ連絡してやるとの事だった。忙がしい彼の事だから、口約束だけかと思っていたら、それから五日目、チャンと私に引合してくれた。カメラ・ハントなら、



「蜘蛛の入墨をした女」

春川ナミオ画

君等二人の方がいいだろうと、彼は紹介してそそくさと帰ってしまふ。この娘、菊田アツ子とのカメラ・ハント、ここに余り精しく書く、いざ本番であっけない。いずれ発表させていただきます。

× × ×

伊吹真砂子の紹介で撮った、佐伯あけみから便りを受取り、彼女の相手の牧野雅子以外の若い女性とのプレイをとったから、一度フ

オトを見がてら遊びに来ないかと誘って来た。

佐伯あけみは、かなり高度の成長をとげた、立派な女性Sプレイヤーである。M男性にとっては垂涎ものだが、相手はM女性専門らしい。女同志のプレイの面白さを知ると、男は不潔だと仰有るが、真の男女のプレイの格別の楽しさは、未だ御存知ないらしい。しかし如何にも面白い女性の一人。近

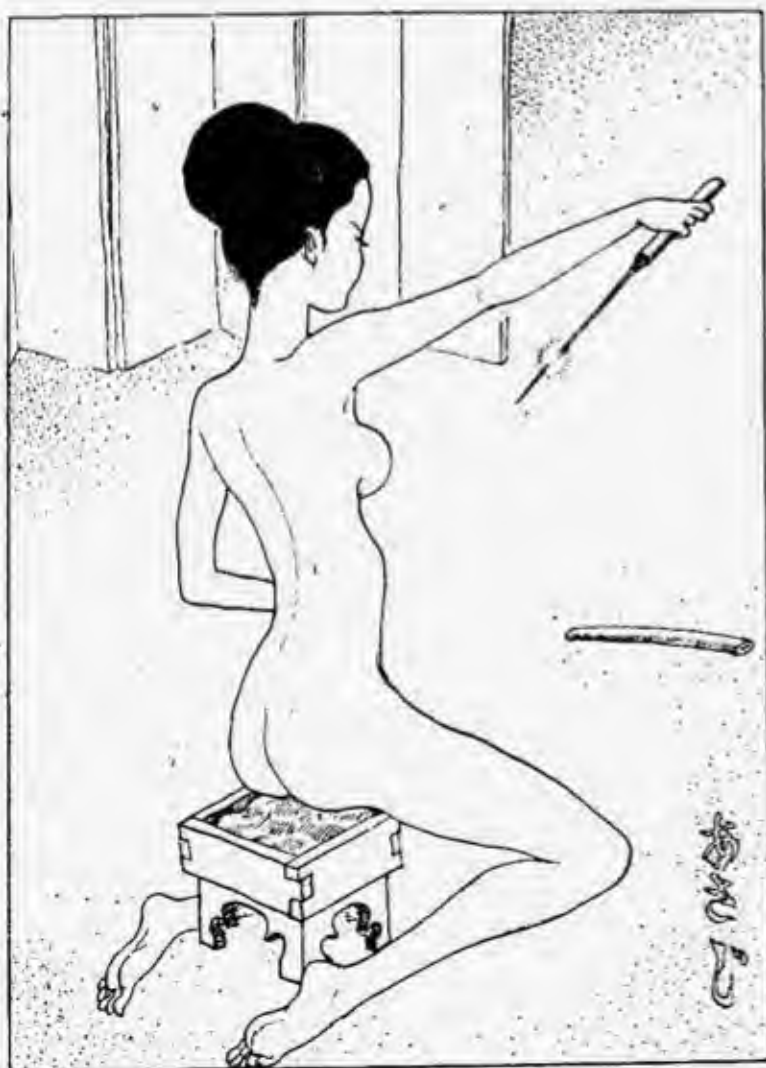
々拝見とゆくか。

× × ×

『讃岐の蛇娘』で紹介した蛇娘がお彼岸中の大阪四天王寺境内にかかっていると、友人より連絡をうけ、箕田氏と、急拠かけつけてみた。入場料はこの物価倍増の時代にやはり五十円。流石に有名な天王寺さんの彼岸中だけに、満員の盛況で、彼女の実演時間も早い。次々と客を回転させないと、稼ぎ

時だけに儲らないだろう。箕田氏がスリ―Sのフィルムで、しきりにパチパチやっていたが、既に旧聞に属するこのゲテモノショウ。なつかしかっただけで紹介にとどめた。全国のタカマチで、諸賢もいつか一度はお目にかかれよう。夜野探郎氏など、是非どーぞ一度エエ、らっしゃい、らっしゃい。では、来月またー。

× × ×

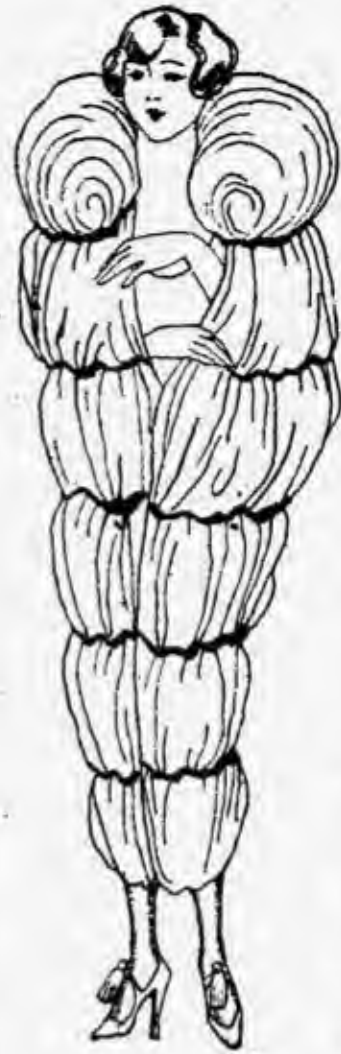


僕のイメージ画集「切腹」

室井亜砂路画

「わたしの好きな三人の奇ク作家」

須礼部英郎



一月号の宗像氏、二月号のオー
ルド・ファン氏などの卒直な提言
が編集部を受け入れられて木戸川
氏、夜乃氏などのわけのわからない
文章が減った。結構なことであ
る。三月号で黒田氏は「どの投稿
も奇クを愛する人のだから自分の
趣味に合わぬという理由で中傷す
るのはやめよう」と言っているが
マニアにとって貴重な公共の広場
である奇クの誌面は限られている
からこそ「何を言っているのか分
らないものは止めてくれ」という
注文が出るのであって、決して中
傷ではないと思う。(中傷という
のは、むしろ、二月号夜乃氏の「
珍学的善讚美論」における沼氏評
のような書き方を、いうのである

う。)それにしても、ある作品を
ケナスよりある作家をホメル方が
奇クにとって建設的であることは
間違いない。田沼醜男氏の四月号
再登場を機会にそれを試みて見よ
うと思う。それは同時に自分のM
を語ることでもあるだろうが。

田沼醜男氏

かつてわたしの最も愛した奇ク
の作家は沼正三氏であった。「手
帖」と「ヤブー」とが他のどんな
文学書よりも強く深くわたしの心
をゆさぶった一時期があった(そ
ういう経験をもつM傾向の人は、
ほかにもあるのではないか)。M作
家として鬼山絢策氏も尊敬に値し
たが、わたしは自己の傾向から沼
氏の方を愛した。それは白人美女

狂崇が一番濃厚なのは沼氏だった
からである。その沼氏が筆を折つ
たころ、現れたのが田沼氏の第一
次「マゾヒズム天国」であった。
わたしは、今も、金髪美女のアン
ドロイドに日本人が征服される短
篇を読んだときの興奮をアリアリ
と思い出す。一カ月位はその幻想
が頭の中を占領していた。アニタ
・エクバーグとミレーヌ・ドモン
ジョと……それからだれだったか
とにかく四人の美女が出て来とい
る筈なのに、人間決斗の賞品が「
顔面騎乗」「ハイヒールによる踏
みつけ」「パンティ授与」の三種
しかないのが不審であった。検閲
にそなえて削られたものと考え、
あとを空想した。(どうしてもネ
クターに違いなかった。ヒール
かワインの味がして日本人の舌を
魅するのであるうと思った。)……
その文学的感興の質が同じなの
で、わたしは、はじめは、田沼氏
を沼氏の変名かと信じたが、「天
国」を読むうちに、田沼氏の方に
は沼氏にはあまりはつきりしてい
ない巨体狂崇、少女狂崇があるの
が分って来た。しかし、沼氏が手
帖に発表したネアンデルタール人
とクロマニヨン人との混血が白人
中のマゾヒズムの根源であるとい

う説と田沼氏の日本人混血説、あ
るいは手帖の派出夫会構想への田
沼氏の経理案など、この二人の作
家が発想と性向を殆んど共通して
いることは否めない。だからわた
しには、沼氏なきあと、田沼氏の
「天国」が第一の読物であった。
ところがそれはいつか中絶した。
たしか「タイム・マシ」という未
完成品だったと思う。(あのころ
は、特に削除が多かったもので、書
きにくかったのかと思う。かもか
ずえ達が老文士や老大臣を馬にし
たり便器にしたりするところで、
「近頃の大人は感謝ってことを知
らない」と気焰をあげる少女がそ
の前に飲ませてやったらしいと想
像はついても、削除されていて、
やはり空想をたくましくするより
なかったことを思い出す)近頃
になって、サスペンス誌に田沼氏の
一連の作品が乗り出した。(わた
しは、橋行司子がSM時評と題し
ながら奇ク作品の評に限定し、結
局KKになってしまった行き方
は反対で、沼氏の速報のように他
誌の作品にも視野をひろげたSM
時評こそ読者の要求するところ
と思う。だから、ここでも、他誌作
品に触れる。)面白いが、意外な
ことに、舞台が外国である。関西



弁を、上手に使った作品など、神戸あたりを舞台にして在留外人女性あるいは混血美女といった設定にすればずっと迫力を増したと思うのに、外国の話にしているのが惜しい。そういう批評を書き送ったら、その部分だけ削除されて、もう一つの女生徒サドに苦しめられるのを男生徒にかぎらず、先生も、と書いた部分だけが載せられた。S誌の編集者は白人美女が日本男性を苦しめるテーマを嫌っているのだ、原作には横浜や神戸が舞台だったのを書き直させたのだろうか。それはさておき、そういう他誌での活躍を見て、かつての「マゾヒズム天国」の麗筆を思い出しているとき、四月号での再登場を見て、すっかり嬉しくなったのである。わたしのうちに熱心なファンのいることを知って貰って今度は中絶などということのないように続けて、いただきたいものである。

る。ネクター・ファンテンのある地下工場（地上はアンドロイド？）の場面など、もっともって書いて下さい。
三原寛氏
今の奇クでは、田沼氏に次いで好きである。それは「ラムール・デスクラヴァー・ジュ」が白人美女への屈伏をテーマとして以来で、あの二回連載分が半分は重複し、またイタリィ女性に売り渡されてからのことがちっとも出ないのが残念だった。あのころに比較して「モッキン・ボード」などはずい分上達されたという感じがする。しかし譲をもっとノーマルにした方が金森の三者関係的マゾは深くなるのでなからうか。鬼山氏の名作「らぶ・すれいぶ」の大観のように、「ソバイの記録」も面白いしかし、四月号のサロンでまでホンヤクのように書いておられるのは（サロンの性質は、私信的なフ

イクションを交えないはずのところだから）良心的でないと思う。三月号のシアックヴィンが白人系女性であるのは嬉しかったが、ペン女王との対面の場面は、パロウズの「火星の女神イサス」の場面と同じで、これから見ても、創作であることは明らかだ。創作であることは、この作品の価値を傷つけないと思う。目明千人盲千人。読者（みんなマニアだ。「女神」とあれば読んでいるのだ）をなめないこと。

河津安春氏

成長株として注目している。二月号の「波瀾の一年」は、白人女性対黒人女性の場面があったので興奮させられた。ポケット・ブツクの紹介という形式でありながら創作以上にわたし達の心を惹くものがある。四月号サロンでは馬族保氏に答えておられるけれど、三月号で呼びかけたのは、麻生保氏で別人であることをごんじなかつたのだろうか。「美しき暴君」馬族保氏を知る人が、女性乗馬党の第一人者麻生保氏を知らぬはずがない。どちらもマゾツホと読めることからの混同であろうか。こう書いて思い出すのは、奇ク誌上もう一人マゾツホのペンネー

ムを使った作家がいたことだ。魔像保。題名はもう忘れたが、キンチャク頭でチビのマゾヒストが女性の侮蔑を楽しみつつ街を徘徊するものがたりで、横浜の映画館で美女二人の脚下に坐り、ハイヒールを慕う犬になる場面は、四月号読者通信の宮田明の経験とそっくりだが、もっと面白かった。当時東京にいたわたしはわざわざ横浜のその映画館をたずねていった位である。誰かも提案しておられたが、全盛時代（それも色表紙時代と白表紙時代と二度ある。）の名作をアンコール掲載には賛成である。近頃の下らない作品しか知らない読者に昔の名作を少しづつでも紹介すれば、作品批評の基準も上るのではないだろうか。その方が「文章のかき方」なんてものに誌面を割くよりずっと意義があると思うのだが。それにしても、初めて、こういうものを書く気になったのは、木戸川氏一派のアチャラカきわる文章を節減する方向を示した奇ク編集部の新方針に賛成をおぼえたからである。くりかえすが、好き嫌いとは別に、良い悪いも卒直に言って、この貴重な誌面を少しでも良くしてゆこうではないか。

天津竜子舞踊団の目見え相撲を見る

雪崎京人

去る二月末東京日本橋の三越劇場名人会を見る機会を得、その演し物天津竜子舞踊団による「目見え相撲」に大変興味を引かれた。

天津竜子はじめ六人の女性によって演じられる能狂言風の舞踊劇である。先ず大名腰元を従えて登場、松羽目の能舞台である。これはこのあたりの大名であるが男が不足し、召使いに女を使っているという様なせりふがあり、やがて高島田に結った、二人の女が出る。太郎冠者、次郎冠者のかわりに女が務めているという。

大名は女ばかりでは何かと仕事に差支える、矢張り男の家来が欲しい、そち達が男の家来を探して来いと二人の女に命じる。そこで二人の女従者は男の家来をスカウトすべく退場する。やがて各自、一人ずつ男を引連れ、再び登場、この二人の

男は天津竜子と、もう一人の女優が扮する。たっつけをはき狂言に出る従者の服装である。そこで大名は二人の男に武芸の特技を尋ねる。男を連れて来た女従者が夫々の男の特技を大げさに自慢宣伝する。一人は弓の達人、一人は馬術の名人と披露する。しかし弓を取りよせた所弦がなく、馬を求める



と馬がいらない。そこで大名は兩人に相撲によって勝負定め、勝った者を召かかえると申渡す。

これからが長唄の地によって舞踊となるのだが相撲の手を巧みに取入れ激しい動きを伴う舞踊が天津竜子と相手の女優、更に行司役の女従者によって繰広げられる。たっつけをつけて能狂言の従者の姿のまま相撲を取るのだが、行司役の女従者が美声で兩人を土俵へ呼ぶと兩人四股を踏み準備運動の足を屈伸し、やがて塩をつかんで土俵上にまき、仕切に入る。一方が突かければ一方はきらって受けず仕切直しになる所など、写実的で又コミックでショッキリを見る様な面白さだ。又四股を踏む形などさすがは舞踊家、鮮やかな形で美しい。

やがて立上り激しい突張り合い張手の応酬と目まぐるしいばかり四十八手を取入れ長唄の地につれて大相撲を展開して行く、上手投下手投の打合、吊出し、はたき込みと舞踊化されてはいるが相撲の型を遺憾なく見せ、きまきまの型の美しさと置舞台を踏み鳴らし一方の体が宙に舞ったり、土表際の攻防の有様など女性が演じているだけに柔かさと型の美しさがある。

代理部だより

○臨時増刊号「写真と絵画、文獻特集号」(略号A文獻V)が売切れました。いつものことですが、売切れ間際に注文が殺到しましたので、相当数の方にお断りしなければなりません。

○本誌既刊号の在庫について、定価一五〇円及び二〇〇円の旧号は全部売切れました。在庫一覧表に示してあります定価二五〇円の分も在庫は極めて僅少です。

○カメラ・ハントに登場しました女性の緊縛写真を分譲してほしいという希望が大分集まっています。分譲の目途がつきましたら、誌上に広告いたします。

○今月号に広告を予定してありました限定版グラビア写真集「第九集」「女性刑罰拷問特集」西洋篇「革具に拘束される女」は都合により延期いたしました。

○限定版グラビア写真集は好評にてマニアの方々から、その優秀な内容を大変喜ばれております。只今在庫しておりますものは、
第四集 縛られた美女八十態
第五集 女性刑罰拷問特集 日本版

マニアの手帖

M男の生態

花田沙登子

一人のM青年を飼育しているのと違って最近のように、何人ものM男を操っていると、同じM性傾向といっても、各人各人によっていろいろと個性があることに気がついて面白い。足舐めを好むものや顔面騎乗を好むもの、いろいろとあるが、大別して、緊縛による束縛を好むか全然緊縛を好まないとかいう二つに分かれる。

る。やがて四ツに組んだまま呼吸も荒く動かなくなる。観戦している大名が「水だ水だ」というと女行司が組手など確かめて分ける。両力士腕を揉んだりして休息よろしく、再び組み合う。女行司組み手を直したりする場面あり両力士の背を叩いて戦斗再開、再び四十八手の色々の型が演じられるがどうしても勝負がつかぬ。そこで引分けとなり、兩人共召抱えられることになる。やがて先程の弓と矢が二人に与えられ天津竜子扮す

る男が弓取式をする。これも本式にやり四股を踏む所など気合が入っており置舞台を踏みとどろかし見事な型を見せる。観衆も思わず笑と嘆声が上がった程だった。終つて劇場から出る人達も、天津竜子の演技に感嘆と微笑で語り合っている人達を多く見かけた。

女性としてこの「目見え女相撲」を演じ、豊かな真白い素裸に紫や濃緑などの相撲褌を着けた美女がこの天津竜子達の様に長唄の地に合せて（土俵舞台）狭ましとばかり取組み、息をはずませ、汗をしたたらせ踊る有様を想像し、この「目見え相撲」そのままの振りでよいから、これを裸の力士姿の女性にやらせて見たら何と素晴らしいことかと思つた次第である。（カット・海野美津男提供）

私の最初飼育した青年は強い緊縛を好むタイプだということが、最近になってわかったが

見するような目つきをするものである。

全然緊縛なしで、ムチ一本によって支配される猛獣馴しというのも、案外面白いお遊びである。

私自身、余り衣服を脱ぐのは好まないが、思いきりムチをふりまわしたときなど暑くなつて半裸の姿になることもある。衣服を脱ぐと案外グラマムなので、いつもそんなとき、男は私の肉体をまぶしようにチラチラ覗き



大いに威張る花田沙登子嬢

第六集 緊縛美女艶姿百態集
第七集 刺青の魅力を探る
第八集 女斗緊縛競艶写真特集
第二集 「豊満と清楚」写真集
の六集です。詳細誌上に広告しておりますから、ごらん下さい。
○旧号の御注文で、ずっと以前に発行しました「悦虐写真と悦虐小説特集号」「サディズム特集号」「グラフィック特集号」或はすでに打ち切りになった分譲品などを突然御送金になられる方がございますが、最近号の誌上に広告してありませんものは、如何に旧号誌上に広告してありまして、只今では在庫しておりません故、悪しからず御諒承願います。
○各地書店にて本誌新刊号の入手困難を訴えられる向きが多く、販売書店名を照会される方がありますが、地方の本誌販売店についてはお答えできる資料の持合せがございませぬ故、何卒直接発行所宛購読お申込み願います。
○連載小説「花と蛇」の単行本についての御照会が多いので一括してお答えいたします。既刊の花と蛇特集号の在庫並に再版の意図はありませんが、只今連載の続篇完結の目途がつき次第、改めて企画したいと考えています。

水中のゴムプレイ

梅川幸子



四月号で森中雨奇男様の台風の中
のゴムプレイの記事を拝見して私
も筆をとりたくなりました。
実は私も昨年の九月十日、近畿
地方を襲ったあの台風の日に、私
自身ゴムプレイに我れを忘れたの
でございませう。色々とアイデアが
浮かんで来まして皆様にも御紹介
したくなる事が一杯ございませう。

森中雨奇男様の書いておられま
す様に、あの日は本当に激しい風
雨でした。閉めきった雨戸を叩く
激しい風雨の音を聞いていますと
久しぶりに思いきりプレイを楽し
める喜びに胸をわくわくさせて停
電した薄暗いお部屋の中で鏡に自
分の姿をうつしながら身支度をす
るのでした。着ている物を全部脱

ぎすててゴムマスクをはめます。
頬からあごをすっぱり覆いかくし
息をする度に口に吸いついたり、
ふくらんだりし、息をするために
鼻孔を出しておきます。

それから洋服ダンスの鍵を開け
戸を開けますと、中にはプレイの
用具がぎっしりとつまって、誰に
も知られない私だけの秘密がここ
に収まっているのです。まず腰ま
で届くお百姓さんが田植仕事には
いている爪先が足袋の様になった
茶色の裏表共総ゴム製のゴム長を
はきますと、ヒヤリとした快い感
触が両足を包みます。

何着もある婦人用ゴム引きレイ
ンコートのの中から、特に私の好き
な真紅のを一着取り出してガサガ
サとゴム引き布特有の音を立てな
がら身にまとい腰のベルトを結び
フードをまぶかにかぶりますと、
これが着物を着る場合の長じゅば
んの役をします。

今度は着物に相当する役目の男
物の黒い（裏面が赤茶色）ゴム合
羽をまといまして、やはり腰のベ
ルトを結び、フードをかぶり、フ
ードについている小さいベルトを
締めます。男女混装の異様な姿と
なつて我れながら苦笑しつつ、お
台所で使うオレンジ色のゴム手袋

を両手にはめました。

薄暗い室内で閉めきった雨戸を
叩く雨風の音を聞きながら、この
身仕度を終える頃には、もう全身
から汗が吹き出してきて身体を動
かすのも、おっくうに感じます。
これから外出の為に男物の黒いゴ
ムマント（裏は茶色木綿地）を羽
織りフードをかぶりフードのベル
トを締めると、これで私独特のゴ
ム装束の姿が出来上りました。し
ばらく無心に鏡にうつる自分の姿
を見つめます。黒いゴムマント、
フードから眼と鼻先が僅かにのぞ
き、引きずる様なその裾からはゴ
ム長の爪先がのぞいています。

「さあ出かけましょう」とつぶや
いて何やら一つのゴム製品をタン
スの中から取り出してゴムマント
の中にしまい込み、風雨の荒れ狂
う戸外へ出て行きました。忽ちバ
ケツの水を何杯も浴びる様に激し
い風と横なぐりの雨がゴムマント
を叩きつけ滝の様に流れてゆきま
す。昼前というのに、どんよりと
暗く曇った空、人通りの絶えた田
圃道、風雨に叩かれて何度も体の
向きを変えたり、しゃがんだりし
ながら、せせと歩きました。
そして、以前から目をつけてい
た小さな池のほとりに着くと背高



両手錠に鼻輪ぐさり、それに腰枷くさり付きといったドレイスタイルで破れたボロボロの赤の腰巻をつけさせられて、家事を諸々の雑用をさせられる美貌の青年。彼はそんな人生に対して、限らない喜びを感じているのだ。

美 枷 輪 生

〔連作 M フォト〕



く生い茂った草むらの中に、へなへたと坐り込み（とても立って歩ける位の風雨ではありません）そのままの姿で、身も心も喜びにふるえてゴムプレイの佳境に入っただけになりました。気がつくとも全身汗まみれになり、ゴム引きレインコートが素肌にびったりとまつわりつき、ゴム長もゴム手袋もそれぞれ汗でグショグショに素肌にまつわり、その上から着たゴム合羽も汗とゴムの匂いにむせ返り全身をすっぽり包んだゴムマントは、雨水が浸み込んで裏の木綿地がまるで

濡雑巾の様になりました。

黒いゴムマントにくるまって草むらでしばらく横たわり、坐ったまま上体を起し、うつむきかげんに風雨に背を向けると、さっき家を出る時持ってきたゴム製品を取り出しました。これは空気でふくらませる浮き袋です。フウフウと息を吹き込むと、だんだん大きくふくらんできました。普通の輪型の浮き袋と違い、大きな馬の型に作られた浮き袋です。充分にふくらんだら、これを使って池の中でプレイを致します。

ドボドボと池の中へ入り、ひざ位の深さの所に、この浮き袋を浮かべ、これに乗ります。どっかりとまたがり両手で抱きかかえ、両足を水中で動かして、丁度アヒルが水を掻く様にして深い方へ動きます。さすがに、この大きな浮き袋も馬の型をした背中まで水に沈み、私は腰から下が冷たい水に浸ってしまいました。それに腰までとどくゴム長も全部水の中に沈みまるで重りの役をするので、足を曲げると胸のあたりまで水の中に浸っています。

一番深い所でも肩まで位ですのどで危険がなく、バレーかダンスを踊っている様に手足を存分に動かして色々なポーズを作ったりブクブクと沈んでみたり、水の中で十分に楽しみました。その後、雨の降っていない深夜も、この池へ来て楽しみ、冬はお風呂の中でプレイに耽溺しました。

森中雨奇男様御夫婦と、男一人女二人でプレイが出来たら、どんなに素晴らしい事でしょうか。ゴム装束で責具を使っていじめあったり出事たらと空想しています。

「ボクの責め方」

宝塚二三夫



肉づきのよい張りきった若い怪の持主富美子のフォトをごろんに入れよう。跳にさせるとピンク色に染った健康色の足をピッチリと揃えて、円らな瞳をぱちくりとさせて、さてこのオジサン、これから一体何にをするのだろうと、鳩のように従順な彼女は、ボクの手にする縄を見ても一向に驚くような気配はない。

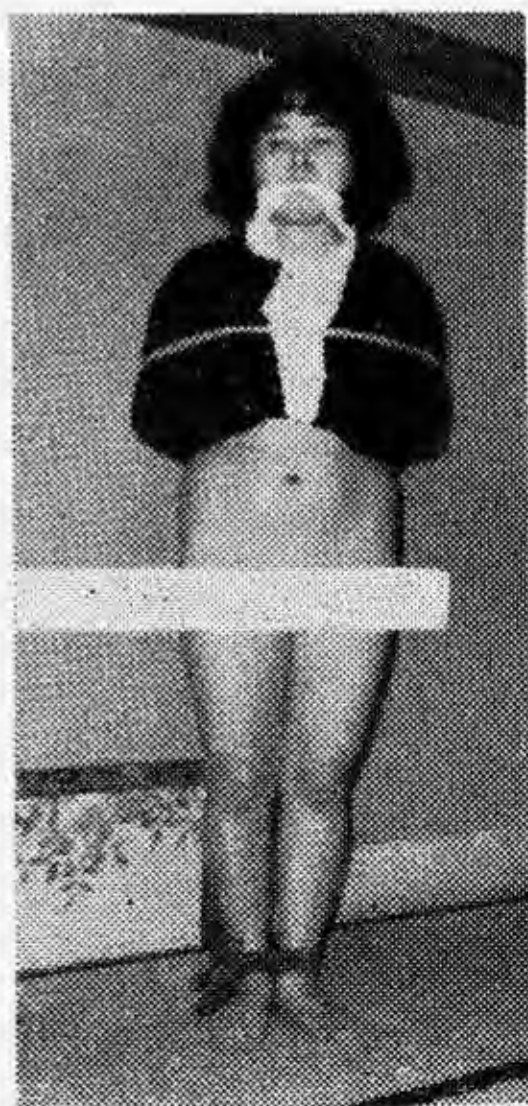
例の通りボクは、ごたごたと縄を並べたてて、ヤケクソ式の縄掛けはしない。只単に後手に回した

両手を括るか、胸に一巻き二巻きするぐらいである。ボクの好きな足首しぱりにしたって、ぐるぐる巻きや変型的な女性を痛めつけるやり方は好まない。簡単に女性の自由を奪う。否、女性の自由を奪うといった形式的な縄の捌き方で満足なのだ。

そのかわり、あくまで、女性の足の自然美が発揮されることに目的が注がれる。ペデュキュアされた華麗な足指の美しさは好まないボクである。あくまで自然美とし

ての健康色に輝く足指や爪先がボクの心をゆさぶるのだ。そのためには、やはり人工によって汚されない若い女性である必要がある。従ってボクの対象となる女性は番茶も出花の十六、七才を最高として、十八、九才にとどめをさすのである。女性の若さの美こそ、

ボクの垂涎おくあたわざるものである。そして、ボクは永遠に、この世で一番美しい自然美の追求にすべてを捧げたいと思っている。次回は富美子の着物姿と、足の美しさを強調したフォトを提供したいと思っている。



奇 譚 ク ラ ブ

昭和 41 年 6 月号

(1966年・6月号 <第20巻第6号・通刊第215号>)



本誌の信条

- 一、本誌は特殊な風俗文獻を研究する成人を対象にして編集しておりますので、十八才未満の方には絶対販売いたしません。
- 一、本誌は平和で穩健な社会生活を営む真面目な成人を対象としておりますが、青少年の保護育成に関する条例には抵触しないよう十分注意して編集いたします。
- 一、新聞紙やその他に本誌の広告は一切いたしません。従って発行部数は最低限定にとどめ、部数の増大を企むための努力はいたしません。
- 一、徒らに煽情的な写真や刺戟的な絵画によって読者を獲得しようとはしません。その為グラビア写真と口絵は廃止いたします。
- 一、本文中の挿絵も極力数を減らし、読む雑誌としての体裁を漸次徹底してゆきます。



女奴隷の告白

冬子の日記

山中 冬子

私をご主人様に奴隷として飼われるようになってから、もう、早いもので一年近い日がたってしまいました。今でも、奴隷としてメス犬としての生活は辛くて恥しいものですが、この家に始めて連れてこられた当時よりは、いくらか慣れてきたような気がします。冬子の相変らずの暮しは、今までにも誌上にのせていただきましたが、最近の生活を日記のようを書いてみましたので、お読み下さい。

○月○日

一週間ぶりでご主人様がいらっしゃいました。仕事で疲れておられる様子で、私もあまり責められませんでした。ご主人様がウイス

キーをお飲みになっていられる前で私は四つ這いになって、くみ子様の鞭を浴びました。回数も少なくて済ませてもらったせいか、痛みもすぐ消えました。いつも、この位だと助かると思いました。

○月○日

日曜日なので、ご主人様は午後まで居られて、それから本宅へお帰りになりました。午前中、全裸で庭掃除をさせられました。手錠も足錠もはめられませんでしたが、割合暖かかったので楽でした。夜はお手伝いさんたちと一緒にテレビを見るのを許してもらいました。

○月○日

暖かい日、ご主人様不在。くみ子様に犬の首輪をつけられ、鎖を引っぱられながら、庭で小用を足しました。その時、「あんまりよくぶったから皮が厚くなったかな」と言われて、お尻をピシャピシャ叩かれました。とても悲しい気持。

○月○日

ご主人様がいらっしゃった。「もう大分暖かくなってきたから、冬子に着物はいらないだろう」と言われて、たった一枚お借りしていたユカタをとりあげられてしまいました。また、今日から毎日毎晩、鎖や縄だけしか身につけられないかと思うと、やはり悲しい。

でも、以前もそうだったのだと、自分に言い聞かせます。ユカタと紐をお返えした時始めて、この家に来て、ご主人様の寝室から後手錠をはめられ、生まれたままの姿で、お手伝いさん方のいるところへ突き出されたときの恥しさ、情なさを感じました。

ご主人様にいじめられるのは承知していましたが、まさか他人の手でまで責められるとは思っていませんでした。まだ今のように従順になれなかった頃でしたから、ご主人様に、さんざん毒づいたものでした。でも、結

局皆の手で適当に痛めつけられ、お詫びの言葉と言われました。あの時が、メス犬への脱皮の第一歩だったと思うと、今でも、そのときの気持が忘れられません。

○月○日

ご主人様不在。足錠だけはめられて放っておかれた。足錠は、鎖の間が二十センチぐらいなので、歩くのは不自由だ。お手伝いさんに呼ばれると、急いで歩けないので、ウサギ跳びのようにして行くことがある。人間でないと思えば、どんな恰好でもしなければいけない。

○月○日

台所のお手伝いをしていたら、ふと手がすべって、お皿を割ってしまった。さんざん叱られた末、お仕置を受けた。いつもの手錠で右手首と右足首を、左手首と左足首をつなぐれ、そのまま庭へ追い出された。本当にぶざまな歩き方をしなければならぬ。その上、庭木に両足を大きく広げたまま、両側にひっぱるようにつなぐれた。手首が足にくっついていてるので、前のめりになって、お尻をつき出したような恰好になった。

「今晚は、そのまま夜明かしするのね、小用がしたくなったら、たれながしていいよ」と

言われた。夜食は与えられず、水を一杯貰っただけだが、冷えるし、お腹が圧迫されるので、夜中に我慢できなくなってしまった。体から出る水が、庭土にはじいて顔にまではねかえりそうになる。

もちろん一睡もできない。寒い。苦しい。たったお皿一枚で……。

○月○日

皆さんが起きてこられるまで、手足を一杯に広げた姿で凍えそうになっていました。頭は、前のめりになって地面についてしまい、頭と両足で体を支えていました。トミさまがいらして

「ああ、ずい分もらしたのね、臭いわ」

といわれました。

「もう、お許し下さい、寒くて、苦しくて」と申し上げますと

「そう、一寸温めてあげようか」

といわれて、竹の鞭で背中やお尻を打たれました。やっと十時ごろまで、そのままの恰好を続けて許して頂きました。体中の節々が痛み、くたくたになりました。

○月○日

ご主人様がいらっしゃいました。今日は麻縄で縛られました。「フンドシの代りだ」と

云われて腰だけに縄をかけられます。タテ縄がなんといってもイヤです。いっそのこと、体中ぐるぐると縛られた方が、あきらめもついて気持も楽だと思えますが、ご主人様は、あまり、そういう縛り方はされません。

腰だけに縄をつけられただけで、手足は自由なのですから、ほんとうに奇妙な恰好で、余計恥しいのです。ご主人様は、縄尻をとって家中、私を歩かせました。

「こうやって銀座でも歩かせたら、さぞ面白いことだろうナ」と言われました。そんなことは出来る筈もないのですが、何だか、いつの日にか、そんな目にあわされるような気がしてしまいますから不思議です。

○月○日

奇クを読む。自分の手記がのっているのが面映ゆい。△花と蛇▽で静子夫人が酒樽にされるのを読んだ。静子夫人が自分のような気がして体がほてった。あんなことをされたら自分はどんな気持になるかよく判る。

午後、くみ子様が「またオヒゲが生えてきたわね、落したら、どう？」といわれた。仕方なく、くみ子様が見ているところで、洗面器と石鹸を用意してあぐらをかいて坐る。自分ながら何ともみっともない恰好だと思う。



ひだりまき

朝顔的耽美論

—「のおと・あと・らんだむ」を見て—

夜乃探郎

悪名高き夜乃探郎よ。オメエさんはいつまで投稿続けるつもりだね。ツーカー式の悪友？ 木戸川健氏が時期を見るに敏^{びん}。もって、あわやというとき、機先を制して、いとも簡単に「ア・ロハ」しちゃったのに。なあに答えはカンタンさ。ぼくのスーちゃん（奇ク）その者が、悪女の深情けというか、まだウイソクを消さない？ そうウヌボレているからよ。そうかと言ってこれはスーちゃんの罪じゃない。たでくうムシもなんとやら、こんなゲテモノひとり位、天下のSM城（共通の広場）場処の不足はないさね。下駄箱の隅^{すみ}だっ
て飼^かっておけようさ。紳士の雑誌、大いにけ
っこうだが、そればかりじゃ面白くない。の

ら猫だって数の内、ニャンとか色もそえるさ
——そのノラ猫探郎君。あまりオフザケが
すぎて、さすがのスーちゃんもたまりかねて
か、この頃はメーとにらんで、ときたまお尻
をつねるので、少しはこりたか、うつらウツ
ラと幻を夢みて、じゃれつくことは目下休業
中。

そんなぼくに千草忠夫の『のおと・あと・
らんだむ』は、まことに毒だ。猫にカツオブ
シかマタビをちらつかせることでね。ネが
論争好きなのが、強者^{つわもの}どもの夢の跡と、なり
をひそめているのに（本来ならばあーりがた
や、ありがたやと猫じゃ踊りをする所だが）
△二、「花と蛇」一つのユートピアVで、先

ず夜乃探郎氏の提出された「読物か小説か」
という問題について「わざわざ千草忠夫殿が
考察なされて△四、相互理解は可能かVでも
夜乃氏の探求精神の旺盛さを賞讃するのに
やぶさかでないが」と持上^{もちあ}げたと思ったら、
すぐ「深い疑惑を」いだかれ、これで終るか
と見送ったら（くどいようだが、この方面は
目下休業中だからね）またも△六・SMにお
ける美とは何か？Vと、二月号で夜乃探郎
氏が「珍学的善讃美論」を発表され、その中
で次のように述べられているのを見て、筆を
取る気になった」とおいでなすった。正直の
所、やれやれと思ったね。これじゃ寝た児を
起すようなものさ。しかも、ドストエフスキ

「カラマーゾフの兄弟」を持出されてはたまったもんじゃない。「ドストエフスキーの文学」というと、まるで難解のサンプルのように考へてゐるが、なほにロシアでは「君の名は」を読む程度に普及された大衆読物となつてゐるのさ——と、常日頃うそぶき。その耽美派のスタートを、ワイルド、ボードレールなどの作品と共にドストエフスキーを、その筆頭にあげてゐるからだ。

△これからは当分読物本位で充実させてゆきましよう▽四月号の編集後記を横眼でにらみ、大時代的にハムレットのそぶりをまねてノラ猫探郎君、天を仰いでタン息、これ久しうの図でもある。

さて、論争は致しません。なるべく低姿勢で、感想を述べさせて頂きたい。スペースがあれば「読者通信」でも、無ければ没でもけっこう。そんなわけで、おそろおそろとペンを取る。

△二、「花と蛇」一つのユートピア小説▽二月号。を読んだ地点から話を運んでゆきたい。ぼくが「読物か小説か」という問題を提供したことは、本質的に千草殿のおっしゃるように「この問題は無意味である」という言葉に同意したい。ぼくのねらつたのは敵は

本能寺にあつたからだ。もっと「花と蛇」評が読みたい為のヤジ馬的言葉のレトリックに過ぎない。その意味ではうれしく△意味▽があつたと思つてゐる。その裏付として十一月号（40年度）で久我庄一「文学的悪讚美論」を引出し、十二月号「ガン作・マニヤのノート」で芳野眉美△A・白浜津子さんの読者通信を拝見して▽で「花と蛇」の文学的な評論がほしかつたからでしたが△と楽屋裏をさらけ出させ、二月号（41年度）に至つては堀夏彦「夏彦蛇行録」で△鬼六先生礼讃▽また御本尊の作者、団氏が「日本三文映画」でも「KK的小説」という言葉をひれきし、保藤久人「小説△花と蛇▽その文学性について」までも発展。そして、またまた「のおと・あと・らんだむ」にまで「花と蛇」が取上げられた。

ぼくとしては、そのヤジ馬作戦をあばかれず表面的な見方をされたことに苦笑の他はなかつた。この問題について一番痛いところをつかれたのは、実は芳野さんの「夜乃探郎氏はローカイですから」の言葉だったことをいま、白状して置く。（読むだけの花と蛇ファンの、ペンを取るショックを投じた、——これがホントである）

「四、相互理解は可能か」三月号。水玉による△F・実験告白▽に手品はない。ぼくにとつて数少い赤裸な告白のひとつである。千草殿に、真剣に取上げて頂いたことに感謝したい。その意味で千草殿のぼくの告白に対する論評のあげ足取りはしたくない。そんなことは「建設的な何物をも生み出し得ない」からだ。むしろ、せっかく「ペルソナの本質に肉迫すること」これが「我々の相互理解は可能であろう」と立派に突破口をひれきされてゐるのだから、その主旨に従つて、ぼくなり感想を述べることが、いまの場合の正しい道と思う。ぼくは、すぐに参考として三十六年八月号「奇ク私見……」（エロとどぎつさについて）……という千草殿のエッセイをひらいてみた。芸術に現れたエロは美と結びつく事によって、それをより高いものに昇華させる「つまり「健康なエロチシズム」であり芸術的なエロということになる。エロと美を結び付けたことに注目したい。△エロ▽それだけでは、その要素は性の範囲に属する世界で、芸術というより生理的な衝動を意味する分野の物だろうか。△美▽が加味されることでKK的美論も発展されると考へたい。

ところで、本筋に入るのだが、ぼく流の考

え方によると、エロチシズムという表現を八性的衝動Vとしたい。そして八性Vという万人共通の世界を出発点としペンを進めることによつて、「相互理解」というテーマもおのずと解明されてくるのではないか。なぜか、マニアにとつて八性Vという事柄のみが不変の文字をきざみつけられているからだ。実のところ、千草殿がペルソナとか、エロ実体とか大分、コムズカシイことを論されているのを拝見して、ゴク로우サマなことだとニガ笑いを禁じ得なかった。あのような文体にならざるをえないのは、おそらくK誌上では八性Vという事柄が、タブーのひとつになっている。ところが、SM論は八性Vをぬかしては、砂の上に家を建てるようなもので、カユイところに手がとどかないうらみが出てくる（さればといつて、下手なことを書いてはタブー、タブーと、ブーブー批判される）。ことのついでに云わしてもらつと、文学的にも評価されよう、本格的なSM小説が出ない一つの原因も、実はこんな所に問題があるうと考えられる。エロ（性的衝動）から出発されよう、そこから芸術と結びつこう。SMの世界も、カンジンの始点がボヤけては（いや、そうならざるを得なくては）あまり書く方法も見当

らない。

八六、SMにおける美とは何か？V四月号
 ぼくは二月号の「珍学的善讀美論」を説明を節約し、小手先のワザで書きなぐつた。つまり逆説手法をふんだんにもり込んだアクロバチックな珍文である。シャレの判る方のみ対象としたので、カユイところに手を、わざと出さなかつた。文学的な仲間と駄ジャレ連発している気分でペンを取つたので、千草殿に真面目な態度で「表現はまことにアイマイである」などひらきなおられると一言もない。あれは八探郎ジャズVと笑つて頂いて、あらためて「美」についてよく流のお答えをさせてもらう。——と言っても、「美とは怖かないものだ」というドストエフスキーの文章の一章を出される千草殿には、もうシャカに説法のそしりをまぬがれないけど。
 ぼくにとつての美は八乱調美Vと表現される世界のもので、それが関係されるとき、ぼくはいつもアウトサイダー（疎外者）意識を持つ。それはキリストを知つて、背をむけ黒ミサを祭式する異端者の戦慄であり、砂漠であり、深淵であり、奈落であり、黒い部分より形成される地点だ。だから、千草殿が八悪業Vという言葉を用いられるとき、ぼくは、

こと新しくショックを感じる。クリスチャンに取つていつも十字架が、その度ごとにショックであるように。八美Vとは、戦慄が裏返しされた境で、妖しい毒の香りをともなつて開花される。耽美派という言葉を出すとき、ぼくは次のような一例を提出したい。かつてぼくは、藤原藤男の「贖罪論」にめり込み、プルトマンの実存論神学における非神話化の問題にはんろうされ日夜「信じられない」と悲痛な叫びをあげては、のたうちまわっていた時。その世界で知りあつた重患のけがれなき美少女が、病院より一通の書簡をよこした。八神を信じて天国にまいりますVと。ぼくはその足でみぞれ雪降る夜の巷に飛出し、娼家にかけてみ、女の紅く毒々しくちびるを、それが悪と痛いほどに知つてからこそむさぼり、自分をよごすことによつて魔味的世界に、強烈な八美Vをまさぐることができた。この場合の美とは外見的な意味でなく、通例的な美でもなく、地獄にあるお互い（娼婦とぼく）を意識することで親近感がもたらされた。その悪業故に発見された物である。
 ぼくの耽美主義とはヤブレカブレの哲学であり、いつも空間に張られたロープをつな渡りする曲芸師を持つて裏付けされ（その終点

は無い。美の無いと思われるところにぼくはりの「美」をさぐろうとする。ぼくの人生はいつも混沌として常に答えは未完を象徴する。

キリストを裏切ったユダが登場しなかったら、サタンが顔をのぞかせなかったら聖書が構成されない——そのような悪を肯定した上に組立てられようとする危機神学は、これは宗教の世界だけでなく、人間社会に通じる耽美派的「美」の論理でもあろうか。戦慄と快楽とが入りまじった「理性の目で汚辱と見えるもの」が、感情の目には立派な美と見える。世界は、影の部分の物であり、死が甘美な香りを発散させる。

ぼくは「美」の極致は「死」であると思っている。そこまでゆきつかなければ、夜のほかに透明な美は顔をのぞかせない。そこまで足をのばせないからいつもカストリなどをあおっては悪の香にむせり、ヒステリックなさげびをあげるか、酔顔もうろう千鳥足（異常なるが故に刺戟を感じ、異常なるが故に絶望を感じる）。それでもそこにこそ、耽美な影像がまざるなら、ぼくは進もう。千草殿は「美」と「追求」という言葉を女を責めるプレイの場合に持出され、これを否定していられる。「美はあくまで条件であって目

的ではない」とも付け加えられている。ぼくのホン音は（『珍学的』）は「クロバチク」な文体を取っている。この文章をこの場所、そのまま応用できないので御諒承を願いたい。プレイの行動そのものに美は無いと思っている。あるのはお互いの性的衝動である。このことは、プレイの経験者、各自が、御自分のむねに問う問題だろうか。では、プレイと「美」を結び付けるのはナンセンスか——という課題が出てくる。また、プレイとその行為の「善悪」問題も必然されよう。ぼく流の耽美哲学から割出せば「SM」というそれこそ「恐ろしいばかりでなく神秘」な世界を、どうかこうとか常識計算でハジキだそうとすること、そのものがナンセンスであると思われる。ぼくの「珍学的」もそれに対する諷刺とも思っただけは少しは、理解できよう。と考える。「花と蛇」が悪でも善でも美でもなく、いわゆるKK的世界を描いた小説である。プレイも然りである。ではプレイは美でないか。ぼくは美であるとも言いたい。宗教的用語とか哲学的用語とかあるように、KK的用語がなくては、いつまでもたってもこの問題は水かけ論に墮してしまふ。こんなとき、宗教の立場だと「あわれみ」と

か「せつり」とかいふ表現でこと足りる。また哲学的に「不条理の条理」はプレイの場合、追求でも無ければ、条件でも無い。ありのままの人間の姿がさらけ出されたとき、赤裸な人間と人間の密着感から発散する、異常なるが故に感じ取れる、その哀れさに美は求めずとも詩となって流れるものである。その「美」は、美など絶対に無いのだ——と、自覚される時にのみ、妖しき毒素をはなつ。この地点に「善・悪」がからんでくるが、それは、美をマイナスするためでなく、悪業故に、一層のプラス感を増長させる。この点についてもっとわかりやすくする為に、辻村さんの「カメラ・ハント」を提出したい。ぼくが、なぜ、あのように「サロン」に「読者通信」に殆んどいつてもよい位に、讚美論を投稿するか。一言で言えば、その「ほろ苦い哀愁」を感じる故に。四月号の「可愛い小悪魔の群れ」を見てみよう。

△所詮男は浮気者である。△凶星。この老いたる狼は、君を噛み殺すかもしれんぞ。△私も中年男の卑らしさを身につけて、欲望を剥き出しにしてのぞんだ方が「美」などなど、すべて、美とはまことに縁遠い言葉がいたる所に点在している。まことに、小悪魔マスキ

と中年男のプレイの状態が有りのままに、むしろ生ぐさい位に紹介されている。ぼくはその業の中にぼくの肌に感じられる生命をゆさぶられ、そこから、アブ的共感故にぼくなりのキラリと光る宝石のような、哀詩を大事なものとして受取ることができるのだ。

そこに△美▽という表現が許される一瞬があるろうか。SMに於ける△美▽は、美が無いと思つたときに、はじめて必然される△美▽でなければならぬと思う。むりに美が意識される世界はナンセンスの他はなく、美はいつのまにかマニアのむねに、しのびよってくるべき性質のものではなからうか。△美▽は、文章構成上の方便のようなもので、美という文字そのものに意味はなく、人間存在そのものに意味があろう。それは△美▽が恐いのでなく、人間そのものが恐いという認識上の問題が成立されるからでもある。

耽美派とは、八方破れであり、朝顔的論法より発言する機会をもたない。一寸先は闇の世界に棲息し、つねにドナリ、ワメキ、おどろき、よっぱらい△魔字▽を持って記さなければ表現できない、自分でもろくに知らない言葉を使用する他、人間付き合いが出来ない宿命をもっているからだ。いつもスキ間だら

け、その空洞には飢を狼が遠吠えする。

△七、エロスの涙▽の中に「レダ」（獣姦）「ロトとその娘たち」（父娘姦）などこれらギリシャ神話や聖書の中の挿話をかりて、画家たちが何を表現しようとしたか」と千草殿は一節している。悪を出して、より正しい神の光りを浮彫させようとする常識論は別として、むしろ、このような背徳的な主題（罪の構図）を提供することによって、見るものに妖しい願望をかりたせ、ひめられた恥部をえぐり出すことによって、各自の意識する快楽と恐怖とが入りまじった深淵をとおして、絵との連がりをもたせ、そこから耽美なエロチシズムを散発させようとした——こう考えることにより、ぼくは一層、この画集を見たい欲望を燃えあがらせる。また「バタイユがこの書物の結論として主張しようとする、エロチシズムと死との近親性の証明に外ならない」という言葉は、絵を見なくても言葉だけでうなづくものがある。ぼくは二度くり返すようになるが、美の極致は死である——と思つてゐるからだ。

千草殿は「見終つた後に残るのは、美に洗われたすがすがしい感情なんかでなく」不思議な恍惚感などであると言つたのは、そこ

ら辺の美術書的な場合の△美▽はないが、

人間の根元的な衝動の一つであるエロチシズムが美術の世界において、どのような形で表現されてきたかを、数々の作品を通じて解いている。完成でなくあくまでも過程による、雑然とした「エロスの涙」に耽美はあつた。そう述べたかったのであろうと、ぼくに受取りたい。△耽美▽という世界はもともと五里霧中、どろどろとした妖美感から、うかがわれる物だからである。ただし、この画集が完全にエロチシズムと死の極致まで描写が可能であつたとしたら、もっと別な答えが出たのではなからうか。しかし、完全という世界が、人間によってはたして絶対に可能であらうか。この紙一重のところではじめて、われわれは、自己の存在を賭けねばならない。「という美を獲得するための「カラマーゾフの兄弟」の一節が意味を持ってくる」とぼくは思う。そして、もし「エロスの涙」画集にそれ（完成）が仮定されるならば、千草殿は、すがすがしい感情などよりもっと透明な——死をよぶ伝説、あの冷たく輝く宝石をのぞくような非情△美▽感とも似た印象に戦慄されるだらうか。耽美派に自爆覚悟は当然のこと。そうでなければ地獄に美は探せない。

(フェチ小説)

カード・プレイ(続)

富 樫 丸 三



(一)

翌る朝早く診療所を引払って下山の途に就いた仲間の一行と別れて僕はひとり悦子たちの小屋へ足を向けた。昨夜の生々しい印象が僕の脳裡に焼きついて殆んど朝まで眠れなかった。三人それぞれに魅力たたえた若い異性の稍アブノーマルな被膜のかかった生活模様に果てしない好奇ともう既に慕情と呼べる感情が僕をかりたてて仲間のいぶかるのも一

向に気にならなかった。朝のオゾンが胸いっぱいになり込むと山の冷気が気持ちいい。今昇ったばかりの太陽だけがやけにまぶしい。一瞬ためらってから、思い切って扉を開ける。意外に静かでストーヴの湯の煮えたぎる音と炊きたてのご飯の芳ばしい香りが朝餉の近い雰囲気漂わせている。淑江がひとり居た。振り向いてびっくりしたようだったが問いかけると案外素直に口をきいてきた。洋子

と悦子はご来光を観に二時間も前に出たきりで自分が留守番で炊飯の支度をしている。もうぼつぼつ帰ってこようからよかったら、お待ちになって一緒に朝飯にしましょうと仲々好意的である。僕はストーヴの傍に腰を下ろしピースをつけて一呼吸いれた。ややあって「お茶をどうぞ」

「や、アリガト……」

僕としたことがちよつときこちなく淑江の差出すカップを受取った。即席だがレモンテイの香りがこちよい。

「気分はどう。すっかりよくなったかい」

僕は話のつぎ穂を探すあまりその選択を誤ったことを直ぐに後悔したが遅かった。果して、

「ええおかげさまで」

よく聞きとれないような小声で口ごもると顔が、みるみるうちに紅潮し俯向いてしまった。身も世もない風情だ。

「あッ」

次の変化は僕の上に起った。慙愧の思いで気もそぞろに飲みこんだ熱湯にしたたか喉を焼いてむせ返ってしまった。

「あつすぎました？ ごめんなさい」

僕の様子が余程可笑しかったか淑江は、つ

いクスクスと忍び笑いに相好を崩してしまった。さっき泣いた鳥がもう笑った。この機をのがさず僕は淑江の手を極く自然に握って引寄せた。抵抗はなかった。切なげに僕を見つめる淑江の瞳。一現の男に処女の肌を見せてしまった女の悲しい性か、それともまことの思慕が宿ったのか。へもう何も言わないで：Vと言いたげに訴えている。やがて視線を落す。僕は顔を淑江の頬に寄せて、その耳許へ囁いた。

「いけないこと聞いてゴメンね。しかし君ももう洋子のことを忘れるんだな」

「ハイ」

蚊の鳴くようにしかしはつきり淑江は肯いた。

「女同志の愛情なんて仕合せを保証してくれないと思うよ」

女の髪が頬に触れてくすぐったい。それよりも汗臭いにおいが僕感覚を刺戟する。やにわに抱き締めて淑江の柔かい頬に口づけした。

相手の激しい胸の動悸がじかに伝わってくる。やがて、僕の唇は淑江のそれを探し当てた。ほんの僅か本能的な拒絶ののち、それは難なく受け入れられた。ヤツケの上から硬く

締った乳房のふくらみに手が触れた時、淑江は新しい喜びにおののくように戦慄した。

僕の想像に間違いがなければ、洋子の寵愛を搾られた上、その不具戴天の悦子にさえ奴隷の仕打ちを甘んじて受けていた大人しい淑江。ただその間、洋子と悦子の二人に対する被虐の感度が徐々に育くまれて現在に安住したかどうかは知るよしもない。

急にあたりの静寂な空気を破って小屋の外に人の足音がした。僕は素早く淑江から身を引いた。さっき喉を焼いたお茶はすっかり冷めている。洋子と悦子が元氣よく帰ってきた「おじゃましてるよ」

「あら先生。昨夜はどうもお世話になりました」

洋子はそう愛想よく挨拶したが、その視線を淑江から再び僕に戻した時、何を感付いたか瞳を曇らせたのを僕は見逃さなかった。

と、悦子の首にかけたトランジスターから台風予報が入ってきた。

……十八号台風は途中その進路を変え足摺岬南方五十軒を北上。最大風速は三十軒。そのため中部山岳方面は今夕よりかなりの風雨が予想されますので……

その警告は人間関係の小さな葛藤をいっと

き彼方に追いやるに充分なものであった。

(二)

事故のなかったことが先ず何より幸いだつた。まだ夕方六時というのに登山口のA市はまるで死の街のよう。台風の襲来に備えて駅前の商店街もすっかり大戸を下ろして寄せつけない。バスは予定より一時間遅れたが土砂降りで山路の路肩がもろく運転は慎重を極めこれでも精一杯。それは誰よりも我々乗客がよく知っている。しかしそのため最終の新宿行に遅れてしまった。夜汽車の発時刻にはまだ五時間余りある。それより何よりもずぶ濡れの体を何とかしたい。人気ない街を見やうて途方に暮れる女たち。

「夕ご飯の前に、どこかで一風呂浴びたいわね」

「でも、着替えがもうないでしょ」

「下着だけでも買えないかしら」

「でも店はどこも開いてないわ」

「汗くさいのでも濡れたのよりましだわ。洗濯ものをもう一度着るなんて無精な男の子ならよくするのよ」

女たちの疲れ果てたような愚痴を聞くとともに聞く聞いている時、僕は此の町に居るときいた一人の友の存在が頭に浮んだ。旨く居てく

ればいいかと念じながら、ここでも騎士道を發揮した。

「ちょっと心当りがある。待っててくれ」

僕は駅の売店の赤電話に足を向けた。二本かけ運よく二本とも我が意を得た。足どりも軽く、

「さあ行こう。直ぐそこなんだ」

「どこへ行くの」

「当り前さ。その旅館だよ。着替えも用意してあるとさ」

僕はひとり悦に入って先を続けた。

「此の町にちょっと知った女の子がいてね。」

中山敬子っていう文学部二年だ。それに電話したら近くの洋品店から取り寄せて持って行く。但しピンクのブルーのと贅沢は言わんことだね」

そう言ってどんどん先を歩き出た。女たちは黙ってついてくる。降りしきる雨の中ももう苦にならない。じっとしている方が却って不快になるものだ。ふと僕の口からずっと以前流行った『ジャスト・ウオーキング・イン・ザ・レイン』のハミングが出て来た。

(三)

敬子はもう先に旅館に来て部屋に待っていた。派出な柄のワンピースを着こなして垢ぬ

けしている。明眸である。暫く人里離れていたせえか僕は敬子にまぶしいほど新鮮な魅力を感じた。一通りの紹介が終ると敬子は早速「サイズも好みもわからないので適当に借りてきたわ」

持ってきた風呂敷包みを無難作に解いて中を展げた。ズロース、ブラジャー、パンティスリップがさまざま、白のなかに時おりカラフルなものが混って何ともなまめかしい。僕は眼をしばだたかせた。洋子と淑江は熱心に品選びに没頭したが悦子が真先に平凡な白のショーツを取り出すと

「わたし、これだけでいいわ」

そう言って正札通り百円札を一枚おくと着替えを一抱えにして「お先きに」と声を残して風呂場へ下りて行った。

「あの子まさかパンティだけで歩くんじゃないでしようね」

「まだ着替え持ってるのよ。それに常日頃から無駄使いは慎んでいるようよ」

「何てったってまだおねえね」

残った二人は勝手なことをおしゃべりしながら、それでも買物を決めて勘定を済ますと敬子に会釈して入浴に立った。敬子と僕の二人だけが取り残された。

「ところでボクのも持ってきてくれたかい」
「あら、聞いてないわよ。あなたお電話でも女性の下着だけって言ったでしょ」

敬子はさも当然のように答えてすましているがその眼は悪戯っぽい笑いを含んでいる。すると妙な好奇心が僕を支配し始めた。

「よし判った。ボクに女ものを穿かせようっていう魂胆だね。止むを得ん」

「どれに致しましょう。お客さまにはこのパンティなどとてもお似合いじゃないかしら」
敬子はおどけてみせた。マイペースにことが運んでとても楽しそうだ。

「パンティよりズロースの方が無難だね。ゴムを抜けば男もので使えるだろう」

僕はその一つに恐る恐る手を出した。

「ゴムならわたしが抜いてあげましょうか」

「いいよ、いいよ。自分で出来るから」

「とか何とか言って結局はズロースが穿いてみたいんですよ。エッチなひと」

とまた上眼使いに急迫する。

「図星ね。でも羞かしがらなくてもいいわ。」

それに今持ってるそれね、Tレーヨンの新製品でとっても穿きよくってよ。大体婦人ものは殿方の下着と比べものにならないわ。品質が進んでて」

敬子は、コマーシャルまで込めて得意そう
だ。三百円は安くないなと思ったが何となく
値切るのも億劫になって言いなりに支払った
間もなく女たちが湯上りの上気した艶やか
な顔を揃えたので僕は入れ違いに風呂に行っ
た。久し振りの入浴ですっかり汗と垢を流し
てさっぱりした気分です求めたばかりのズロ
ースに足を通した。軽く柔かい感触が下腹部
一帯を掩った。太腿のゴムも思ったよりきつ
くなく苦にならない。ハ成程。敬子の言う通
りだ。これならマニヤでなくても穿きたくな
る。ふと目の前の姿見にうつった自分の下半
身像を見た時、或る興奮を感じて思わず狼狽
した。それは男子の極く自然な変化だが。だ
がそうなるとズロースの前の恰好が如何にも
可笑しい。僕は一人で恥しくなって早々に宿
のゆかたでグロテスクな裸体をかくした。ハ
ナルシズムというやつか。下にサポーターか
褌でも、締めれば不恰好にならんかも知れん
な。僕はひとりごとのようにつぶやいて浴室
のドアを押した。

(四)

楽しい夕餉のひとときだった。雨にたたら
れた苦斗の下山行だっただけに今こうして全
員の無事を祝福して乾杯するビールは五臓六

腑にしみ渡るようだ。苦あれば楽ありとはよ
く言ったものだと思う。思い出は尽きず懐し
く語り合った。ビールが幾ら飲んでも旨い。
女たちも驚くほどの食欲を発揮している。若
い胃袋は活潑に働き入ってくるすべてを許容
した。女たちは快い酔いにまかせて軽口を叩
き合った。誰かが僕の沈着なリーダーシップ
を讃えるときみな葉すっぱに同調した。

「とてもこわいと思ったわ」

「それだけに信頼できたわね」

「まさにナイトってとこね」

「昨夜もナイトだったし」

「夜だからナイトだろう」

と僕は話を落した。哄笑が湧き起る。その
時僕は此の話に入って行けずただ微笑をたた
えて肯いている敬子が気になって話題を転じ
た。

「この敬子はね。百人一首の名人でね、この

春のインターカレッジで優勝したんだよ」

「うわーすごいね」

「駄目よ。優勝なんて嘘よ。決勝で負けたん
だわ」

「それにしてもすごいだろ」

「来年はチャンピオンってとこね。わたしな
んか、何も知らなくて恥しいわ」

「素質なんだね。麻雀だって男の子にも決し
て負けやしない。先天的に勝負ごとに強いん
だ。それ君の親爺の血かね」

余り賞めすぎたのか敬子はその返礼を考え
た。彼女としては当然のエチケットのように
「此の方ーナイトだったかしら。ナイトさん
はね。とても秀才よ。もうN証券へ就職が決
ってんの。三年の時の内申で、つまりイチコ
ロ。正規だとこれから試験があって何十倍っ
て押しかけるんだけど」

「おい、おい。ちょっと大袈裟じゃないか」

その時悦子が横から鋭く切り込んできた。

「あら医科で証券へ行くの。珍しいわねえ」

「何故。医科だなんて。此の方、法科よ」

敬子は巧まずして僕の正体を暴露してしま
った。

「まあひどい。医科だなんて。此のひと嘘つ
きね」

「医学生ってことでわたしたちに近づいたの
よ。ナイトなんかじゃない。ペテン師！」

「わたしもそう信じこんで初めてのこのひと
に羞しかったけど肌も見せたのよ。エッチな
ペテン師！」

洋子も加わって悦子と二人で酔いにまかせ
て口々に非難を鳴らしてきた。こんな筈では

なかったのに。

「淑江はどうなの。何か言ったらどう。あなた最大の被害者よ」

ついに洋子は淑江の参戦を促した。自分こそ最大の加害者である身も忘れて。ところが淑江は

「わたしはそうは思わないわ。そりゃあ嘘をついていたのは悪いけど今日無事に山を下れたのもナイトさんのお蔭だわ。わたしたちだけじゃとても心細かったと思うの」

堂々と所信を表明した。へわれに味方あり！これで淑江はすっかり洋子たちとの異常な関係から足を洗うだろう。これはその宣言だ。僕がそんな感慨に耽っていると、

「トシエノなによ。あなたって浮気ね」

とうとう洋子の怒りが爆発した。台風の目は僕からそれが淑江に襲いかかった。トイレが近くなるからと、さっきからビールを断って自前のサントリイで気焰をあげていた洋子。つい危険水位まで達した所へあれば従順だった淑江の裏切り。嫉妬の炎と共に怒りが堰を切ってしまった。

「惚れっばいひとね。尤も昨夜は身内も及ばぬ看護。今朝は今朝でわたしたちの留守に二人きりで小屋にこもったきり。フン何してた

か知れたもんじゃないわ」

「まあひどいことを。ねえさんたら」

たまりかねて思わず詰め寄る淑江の頬を洋子の右手がしたたか飛んだ。

「ピシッ」

「あっ」

と叫びも短く淑江は上体をのけぞらし畳に俯伏してしまった。髪が顔に乱れスカートがまくれたまま。その裾からはんのり酔いに染った内腿が露わになった可哀想な淑江。いよいよ捨てては措けない。

「こら。洋子止めんか」

たまりかねて僕は洋子の前に立ちはだかった。

「折角の楽しいコンパを君は……」

言葉が旨くまとまらない。僕も心の平衡を失っている。悦子がうしろから洋子をなだめにかかった。だが飽くまで僕に敵対して、

「もとは嘘をついたあなたの方よ。さあねえさん。帰りのお支度しましょう」

時間はもう十時をかなり廻っている。

「そうだ。みんな支度を始めよう。淑江も元氣を出して立つんだ」

更に言葉をついで、

「いいか。汽車に乗ったらみんなまた仲直り

して帰ろう。折角の登山が、こんな幕切れじゃあみじめだ。みんな夫々自分がみじめなんだよ」

めいめい最後の装備に取りかかった。僕も身支度をしよう。と何の気なしにゆかたを脱いで――。しまってから入はっVと思った。悦子が僕の腰のものを眼ざとく捉えた。

「あらノ男のくせにズロースを穿いたりして。ズロースを穿いたナイトさん」

実に小気味よく歌うような悦子の復讐。それまでことの成行をじっと静観していた悦子が悦子のあとを受け継いだ。敬子にも嫉妬があったろう。口許に残忍な笑みさえ浮かべて

「ヘエーおどろいた。ひとは見かけによらないものね。でもわたしにもちょっとそんなところあるのよ。例えばボーイッシュなショートパンツね。カッコよくて大好き。倒錯の美っていうのかしら。ねえみなさん。東京へ帰ったら時々集っておもしろいお話や遊びをしない。トランプなんか使ってもいいし。その時はナイトさん。あなたなんかぎゅうぎゅうしごいてあげるわね」

窓辺に寄っかかり、そう呼びかけた敬子の中から片方の脚から覗いた膝小僧が、媚めかし僕に挑戦した。

(未完)

S M カメラ・ハント

・：・：・佐伯あけみ・牧野雅子の巻▽・：・

「夜は乱れる」

辻村 隆

「夜は乱れる」

桜のたよりもチラホラというのに、街には冷めたい春の嵐が吹き荒れて、どんより曇った大阪の空は、今にも泣き出さん許りの、鬱陶しい午後であった。

待つ間もなく伊吹真砂子は、私の指定した喫茶へ約束の時間通り現れた。いつも乍ら、時間はきっちりした彼女である。近視でもないのに、近頃は洒落れ伊達メガネをかけているから、一層インテリめいて見える。

「寒い日に呼び出してすまないネ」

「どういたしまして。いずれロクな用事でもないと思うんだけど、辻村さんに呼び出されると、ついつい来てしまう。芳野眉美さん、お元気？」

「凄く元気だね。三日許り前、突然、ヒョッコリ現われて、したい放題で風の如く去ったよ。あんたにも逢いたかったらしいが、手が廻らない」

「ノミに廻ってるのネ」

「奇クで紹介されていた、Sの女王にね、奴隷にされてノマされたって話だ。私も一人別口を紹介したけど」

マスのことを彼女に精しく話したって、それぞれ別の世界に住む彼女達だ。改めて説明の要もあるまいが、若しフォトを見せて、マスのことを喋ると、或いは女好きの真砂子のことだから、悠紀子不在の孤閨の淋しさから紹介しろと迫るかも知れない。そんな

事を突嗟にフト思ってた見たりした。

「私なんかオバアちゃんだから、芳野さんイヤになったのかしら……」

「とんでもない。あんたが余程気に入ったのか、一度東京へ呼んでもいいかなどときいてたぜ。勿論往復の旅費から、すべて一切彼もちの話だ。行くかい？」

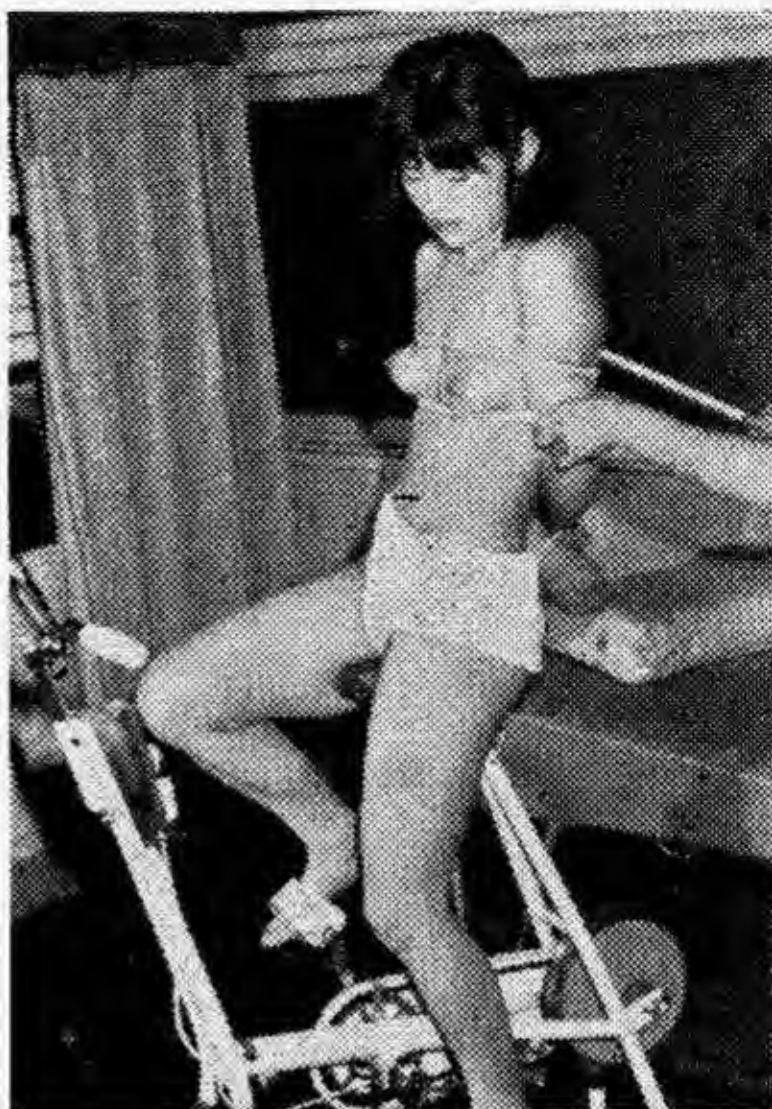
「有難いおハナシね。若くてスゴくハンサム・ボーイ。しかもフェミニストよ、あの方ー」。辻村さんのように、一方的でないだけでも紳士ですものネ」

「おいおい、私が紳士でない見たいでヒドいよ。でも莫迦に氣にいったもんだネ」

「二人でホテルへ入って、何もなかったなん

「それでも、辻村さんならいざ知らず、ヒトは信用しないでしょう。でもあの日、事実何もなかったのよ。一寸考えられないわ」

「それが彼のいいところさ。だから彼には皆女はマイってしまふんだネ。若いし金離れはよし、インテリだし、後味がいいからネ。しかし真砂ちゃんは彼等の世界じゃないだろうが、あれを神酒と呼んで、女性から戴くと、すべてのセックスは、その一事によって、昇華してしまうらしいのさ。生ぐさい私なんかは、そうはゆかないが……」



「私なりに随分あの時努力したことだけは確かよ。初めての経験だったけど、ノンだあとには至極あっさりしたもののヨ」

「あっさり過ぎてガッカリってわけ？」

「部屋で辻村さんが頑張っておられちゃ、あの狭いおフロの中では何も出来っこないじゃないの。あんな時は気をきかすべきよ」

「じゃあ、次は二人で、まあ御ゆっくりと、シケてくれたらいいよ。私はお呼びでないからね」

逢った途端、いきなりこんな会話で、挨拶も何もない。それほどに、伊吹真砂子と私はお互いに気心の知れ合った仲ともいえよう。私は伊吹真砂子を出したのは、或る一つの目的があったからだ。一旦狙った獲物はどうも一度当って見ないと気が済まないのも、厄介な性分であるが――

『断層の女』で述べた、伊吹真砂子が、梨花

悠紀子とのSMプレイフォートのD・P・Eを依頼した、佐伯あけみという娘。さらに彼女の対象でもある牧野雅子。この二人をどうしても紹介して貰いたかったのである。

「真砂ちゃんが、この間言っていただろう。ホラ、例のHデパートの、二人の彼女ネ、あれを紹介して欲しいんだよ。タダでとは言わない。アンタに春ものの服地の一着分ぐらいプレゼントするからサ。但しうまくいった時の話だけど……」

「だろうと思った。辻村さんの地獄耳に知らせたら、滅多に放っておかないと思っただわ。でもネ。ずっと長い間会っていないから、現在Hデパートに勤めているかどうかは分らないわヨ」

「その時はその時さ。ただね、話の緒口をうまくつくってくれば、あとは私が何とかやるからサ。一緒に行ってくれよ」

「相変らず強引ね。辻村さんにかかっちゃ、まるで魔法にかかったみたいで、すぐズルズルと引曳られちゃう。まあいいわ。じゃあ、兎も角行ってみましょう」

伊吹真砂子は実に気のいい女である。頼まれたら滅多にイヤと言えない。そこをつけこんでの私の魂胆であったが、些か強引の感な

きにしも非ず。しかし同好者はともかく自己本位のものが多い。そんな人々に反撥を感じるくせ、私自身やはり自己本位に走りがちで此の際、伊吹真砂子の思惑なんて、てんで考えてはいないのだから、自分勝手なものである。同好者の誰しもそうであろうが、一旦緩急あれば、目的に向って猪突邁進しようとするのが、大体の傾向のようである。

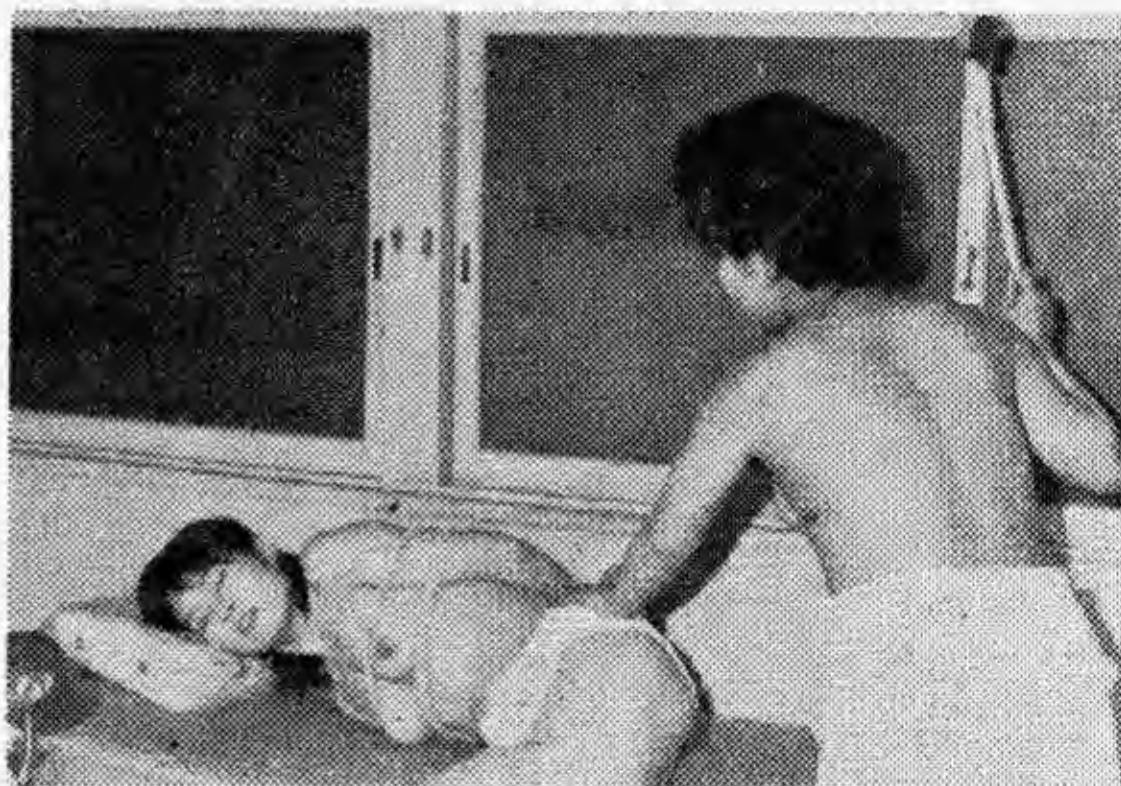
今の私は、端的に言って、その最たるものである。

ミナミからキタへは、タクシーで走るより近頃の大阪は、地下鉄の方が早い。

私達二人は、ややトウの経った恋人同志の如く肩を並べてナンバから地下鉄にのり、梅田へ到着した。午後一時半。地下鉄は比較的空いている。私の支度は、僥倖を慮んばかりで、いつもの紺の袋に、早撮り用の道具一式をチャント揃えてある。さあといえば、いつ何時でも間に合う様にと心掛けているのは、カメラ・ハンターがそろそろ板について来たのだろうか。

地下からじかにデパートに入る。食品売場のムツとした一種独特の空気が鼻につく。

空に海に地に、異変は続発して、今年一世の多難さを想わせる黒い不吉も、各階の売



場の雑踏には、そのカケラも見出せない。レジャー用品はところ狭しと並べられ、人々は春の行楽を迎えて、買物に狂奔しているかに見受けられる。

エスカレーターで目指すカメラ売場へと到

達。勝手知った伊吹真砂子は、私の先に立ってズンズン歩いて行く。私は少し離れて彼女を追う。合オーバーが重く汗ばんでくる。

供給過剰のカメラ群が、陳列棚いっぱいに展示されてあって、カメラ・マニアなら、大なり小なり購求慾を、そそられずにはおかないだろう。ケースをグルリと廻って、カメラ材料売場の女店員に、真砂子はさりげなく近づく。

「佐伯さん、いらっしゃる？」

「佐伯さん？」

女店員は佐伯あけみを知らない口吻であった。現在彼女がこの売場に勤務していれば、こんな返事は少しおかしかった。

「その佐伯さんって方カメラ部なんですわね。一寸お待ち下さい、一度きいてまいります」「ええ、そうなの。でも、もう二年許り前のことだけど」

私は内心、不安と落胆と少しの希望で、手持不沙汰に、彼女のうしろに突立っていた。

女店員はレジスターの方へ行って、何か訊ねている様子であったが、やがて二、三度うなづいて戻って来た。

「お待たせしました。佐伯さんと仰有る方は半年許り前、おやめになったそうです」

「そう、やめてから、何処へいったか御存知ない？」

「何でも、カメラ納入先のA商会におつとめだということですが……」

「どうも有難う」

伊吹真砂子は心持ち頭を下げながら、私を振りかえり首を振った。

「折角張り切つて来たのに、残念でした。どうする？」

「ウン、本当に残念だ。A商会の電話番号を調べて兎も角電話して見ようか。それとも佐伯嬢のねぐらへ押しかけて見るか」

「駄目よ、いきなりそんなこと。勤めていた留守にきまつているじゃないの。それよりもう一人の、あの娘を訪ねて見たらどう？」

「牧野雅子の方だね」

「ひよっとすると、一緒にやめたかも知れないけれど、ここまで来たのだから、無駄足ついでに当って見ましようか——」

「そうしよう、望みなきに非ずだ」

時計部へ廻つて見た。真砂子は私の腕をついた。

「いるわいるわ。ホツとしたでしょう。ホラあの娘よ。若いグリーンのセーターを着た女の子に応待している子あるでしょう。確かあ

れよ、牧野雅子」

私達はさりげなく、高級時計の並ぶケースに肩をならべて眼を落している。若いセーターの子は買わずに向うへ去つていった。真砂子は見すまして、スツと牧野雅子に近づく。

「雅子さんワタシ。びっくりしたでしょう」

「まあ、伊吹さんネ。お久し振りだわ」

なるほど、雅子もマサコだし、真砂子もマサコなら、どちらもマサコと呼ばばややこしいことになる。牧野雅子は伊吹さんと呼びかけ、真実なつかしい顔になり、彼女に連れのあることを知って、私の方へ視線をやつてから、何故かポツと顔をあからめた。

伊吹真砂子の想い出が、佐伯あけみとの二人のプレーに繋がる連鎖反応を起したのであらうか。

「あけみさんとの、おつきあい、続いているの？」

「ええ、まあネ。でも、伊吹さんのお仕込みで、あの人、何だか段々スゴくなってゆくんですよ。ここでは余りお話出来ないけど、いろいろなことあったのよ」

声を潜め、チラチラと私をながし眼の視線に入れ乍ら、牧野雅子は辺りに気兼ねしていた。

「この人、辻村隆さん。いつか話したことあるけど……。そうそう雅子さんには余りいかなかったわね」

「あの人からききましたけど……」

彼女は真赤に頬を染めて、私に深々と淑やかに頭を下げた。私も無言で挨拶を返す。

私の名が出た事で、彼女の頬の染ったことは、プレーに関して、すべて知っているからに違ひなかった。同性二人のプレーの場合、SとMが交互に行なわれる時もあるが、大抵は、一方がS——即ち男性的立場にあって、一方のM——即ち女性的な立場を強要してプレーされることが多い。

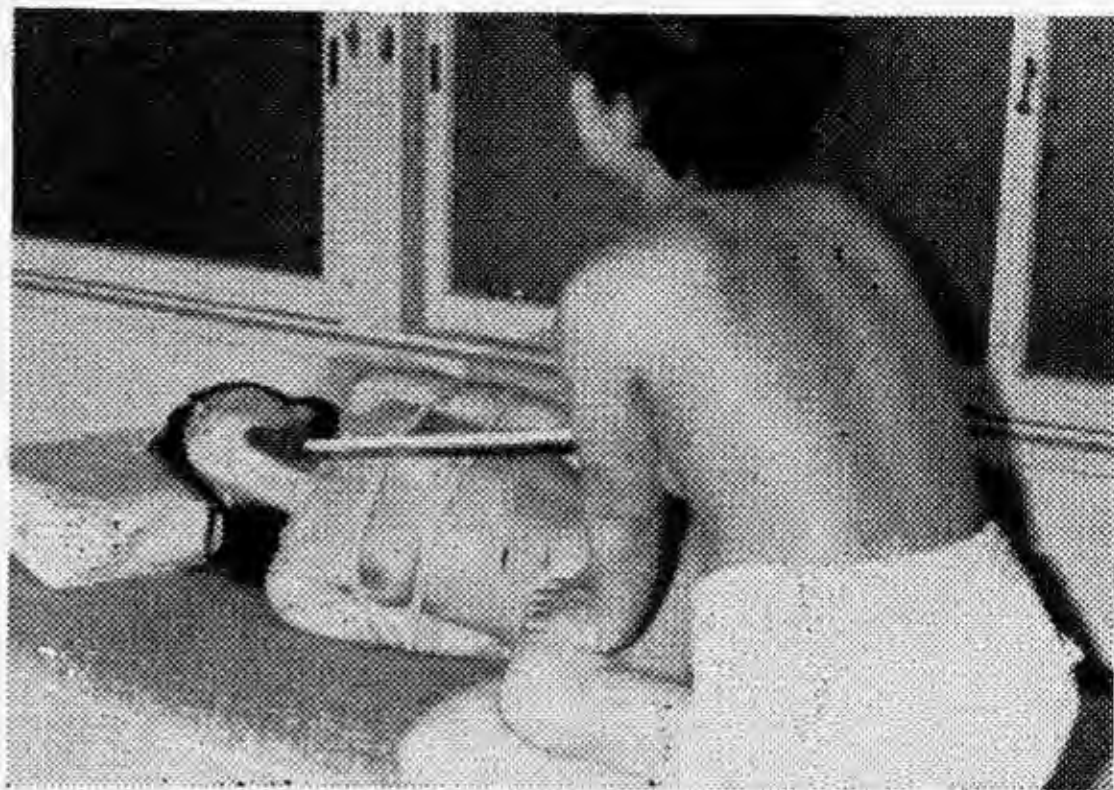
牧野雅子の楚々とした、純真なタイプの女性性は当然Mの立場にあった。クリクリと可愛い瞳は、小鳩のようにまたたき、前髪を揃え、内巻気味のさりげないカットは、まるで女子高校生に、デパートの制服をきせた様にあどけなく可憐だった。

「佐伯さんに電話していただけないかしら。辻村さんが紹介していただきたいって仰つてるのよ。いけないかしら」

「ええ、構いませんけど……」

「今も、御一緒に住んでいるの？」

「ええ……」



彼女は言葉少なだった。第三者の私が混って、これから始まる何ものかに不安がっているのかも知れない。このあどけない娘にとって、中年の私の存在は、直感的な危惧を覚えたのであろうか。

「売場電話だと、一寸困りますので、公衆からかけて見ますわ」

牧野雅子は同僚に席を外す声をかけて、売場を出た。売場のケースで隠れていた彼女の下半身がフロアを出て、私達の先を歩いた。スラリと伸びた脚線が素晴らしく、かもしかの様にしなやかである。

一階下った階段の隅に赤電話があった。ダイヤルを廻し受話器をとる。そのしぐさのひとつひとつに若い娘の爽やかさと巧まぬデパートガールの洗練されたツヤが光っていた。

数歩離れて私達は佇んでいる。彼女のうなずきと同時に受話器は降された。

「いいそうです。午後七時に桜橋のU喫茶で待ちましょうってました。でも伊吹さん、一緒にこられるのですし？」

「ええ、勿論よ。私も久し振りにあけみさんにお目にかかりたいもの。雅子さんもじゃあその時ネ」

鈴やかな可愛い瞳がうなづいた。二人のどちらへともなく、

「じゃあ、ここで失礼しますわ」

軽く会釈して彼女は売場へ戻っていった。「よかったわ。どう、嬉しいでしょう。うま

くいって」

冷かし気味に真砂子は悪戯っぽく笑った。

「有難う。約束通り、生地をプレゼントするよ。それに少し時間もあるし映画でもどう」
「奢ってくれるところなら、どこへでも遠慮なくついてゆくわ」

「エロ事師『人類学入門』だがネ。いい？」
「いいわよ。面白いじゃないの。辻村さんのもっとも好むところじゃない」

「いやなことをいうね」

私は夕方までのひととき、精々サービスに努めずばなるまいと、腹をきめて階段を下っていった。

× × ×

午後七時ジャスト。U喫茶で落合った私達四人は匆々にここを出て、程近い、渡辺橋畔のグリルで食事をしたためていた。『人類学入門』の女主人公、坂本スミ子の発狂のポーズ、あの脂っこい大阪女の露わな胸許から覗けて、豊かな乳房が、ともすれば私の脳裡にちらついて離れない。坂本スミ子も大胆だが御主人の栗原玲児もよく出演を許したものだ、芸に徹した彼等に今更の如く感心させられたりしたが、とあれ、現実には若い花やいだ三人の女に囲まれて私は幸福であった。

佐伯あけみは、私の想像通り男性的であった。スポーティな上着に、細身のズボンスタイルは、彼女の心を表徴していた。色は少々浅黒く丸顔。テキパキした言語動作にも、彼女のS性がチラチラと覗ける想いであった。アイラインが幾分ギョロリとするくらい、佐伯あけみの瞳を大きく見せ、盛り上った胸のふくらみに、旺盛な女盛りの既に適令期の成熟さがありとよみとれるのであった。

「私、そろそろ失礼するわ。少し廻って行きたいところもあるし——」

「そう、じゃあどうも……」

真意を知っているから私は引止めない。廻るところなんて彼女にありやしない。勿論去るための口実に過ぎない。

「御一緒にいらっしゃらないの？」

牧野雅子が心細い声をかけた。

「ええ、用事があるの」

さりげなくいって、真砂子は佐伯あけみをチラリと見る。

「御用事なら仕方ないわね。じゃあ真砂子さん、又、近々きつと一度いらっしゃいネ」

佐伯あけみは真砂子にいつて、デザートのパナの半切の皮を剥ぎ始めた。

真砂子の帰ったあと、テーブルに僅か乍ら

も真空状態が漂った。それを破ったのは私。いよいよ私の出番だ。

「変ったところにお住いなんですネ。ビル和管理人なんて怖くない？」

「ビルっていったって、三階建の四十坪たらずのものなんです。ここ当分の間なんですけど、今迄の管理人のおじさんがガンになっちゃって入院してるんです。おばさんはつききりだもので、突然のことと、私達、おばさんの応援で行ったんですけど、それが縁になっちゃって、おばさんは病院に行ったきりで、この処、マサコと二人暮しがずっと続いているんですの」

「そのビルと何か関係あったんですか？」

「ええ、私の現在勤めている処が、カメラ材料の卸し屋なんです。その卸し屋がつまりこのビルの二階全部をしめてるってわけ」

「じゃあ、勤め先のビルなんですネ」

「体のいい住込みですわ。夜の電話なんか、いつも管理人の私に連絡あるもんだから、便利がって、一向追い出そうとしないの」

「そりゃいい、でも少し物騒じゃない？」

「夜八時頃には、ピタリとシャッターを降してしまいますもの、大丈夫ですわ。あとは私達二人きり、ビルの一階から三階まで自由に

私達のもの。それに一番の魅力はタダであること」

「タダ程いいものはない。それで一階は？」

「ガレージと倉庫と管理部屋と私達の部屋、それに業界紙の事務所です」

「二階はあなたの会社、そして三階は？」

「スポーツ用品卸し。美容体操用の道具が沢山あるのよ」

「そりゃいい。それを利用してゐるから、あなた達は随分綺麗なんだな」

「ホホ、辻村さん、お世辞がうまいのネ」

明るく二人は笑った。フルコースにブドウ酒が、彼女達の胃袋を充分にみたし、仄々と温かい雰囲気をつくりつつあった。最初警戒しがちだった牧野雅子の、やや硬い白磁の頬は、いつしか柔かく崩れていた。佐伯あけみはその点ざっくばらんだった。男なら、やあ」といわん許りのくだけた態度で、初対面の私と喫茶で挨拶を交した時も、堅苦しいのは苦手そう、サバサバした態度であったし今こうして、私の奢りのフルコースも、さも当然の様に次々平らげていった。過去の仕事柄、接待されるのには馴れているのであるのか。伊吹真砂子よりきかされている予備知識のうち、年令の点で、佐伯は二十六才であり

牧野は二十四才の筈であるが、現実の二人は二十七、八才と二十才過ぎの精神的にも肉体的にも開きがあるように見受けられた。

彼女達の臨時管理のビルは、この渡辺橋より車で十分足らずの長堀橋の近くにあった。

それだけでも気分的にゆとりがある。

佐伯あけみはナプキンで口許を軽く拭いたあと、ハイライトに火をつけて、さも旨そうに、細く煙を吹き上げた。大きなアレキサンダーの指輪の石が、紫にブルーに紅く、手の動きにつれて変化して薬指で光った。二人とも自分から口は切らないが、私から問えば何でも応答しそうな気配であった。

ここで話題を変えて、そろそろ核心へもって行くことにする。

「佐伯さんは、D・P・E全部やるんですってネ。大したもんだなあ」

「いえ、見様見真似のホンの真似事ですわ」

「いやいやどうして。伊吹さんの家で、佐伯さんに焼いてもらったというフォト拝見しましたよ。大した腕じゃないですか」

「まあ、あれを御覧になりましたの。いややわ。恥かしいじゃない」

「貴女達のも、ついでに拝見しました。いいですな」

「いやネ。真砂子あんなもの見せるなんて」
佐伯あけみは声で恥かしがり、牧野雅子は全身で羞恥した。

「映画紙は何です？。冷黒調だから『月光』じゃない？」

「よく御存知ね。でも、貰いもの許りだから何でも使うわ。主に『月光』それに『吉野』

『ペロナ』も使うし、『シーガル』の時もあるのよ。でも『月光』がいいわネ」

D・P・Eの事になると、佐伯あけみは雄弁になった。私はペロナとシーガルというと、あれはどうの、これはどうのと、映画紙やクロスリに関しては私より遥か博識で、流石に勤務がら精しかった。その機会に乗じて、私はカメラ・ハントでかなり、女性モデルを撮ったこと、そしてそのフォトが、所謂、真砂子と悠紀子式のSMプレイのものが主であることを、淡々と喋べった。

佐伯あけみは、薄々乍ら私の素姓をしって、いるらしいことは口吻からも察しられたが、牧野雅子は私に関しては未知であるらしかった。

この席上、だから未知の雅子がいることはSMプレイに関する話はしにくかったが、二人の仲を裂くことは出来ない。私がさりげな

く言葉の端々で匂わすような仕方がない。

「私のとったフォトでね、面白そうなものを百枚許り見て戴こうと思って持参したんだけど、この席上じゃお見せも出来ないし、どうお邪魔してはいけないだろうか」

「私は構わないわ、結構よ。マサコ、いいでしょ」

「おネエさんさえよかったら、私……」

雅子はすべてに消極的で、自己の意志表示をしない。すべておネエであるあけみに任せきっているらしかった。

「じゃあ、車を拾いますよ」

私は立上ると、伝票を掴んで入口に歩き、支払いをすまして、支度する彼女達より一歩先に出て、車を拾うナイトになっていた。夜になって風も納まり、夜空は相変わらず、低く垂れこめていたが、春のはの暖かさが、そこはかとなく身に感じとれる。

止まったタクシーに二人をのせ、私は助手席にすわる。紳士の心づかいもシンドイ。

× × ×

ビルの十数米手前で下車。私は少し離れて彼女達のあとに歩く。目指すビルの二、三階は暗く、一階の業界紙の事務所のみ明るかった。あけみは外出に際して、ここの事務所に



留守をたのんだらしい。灯が消えて若い男が事務所を出た。私は数米離れてたたずんでいる。男の姿が通りから消えると、あけみのシルエットが私を招いていた。無言で近づきビルの右側の入口のシャッターの扉をくぐる。

ガラガラガラガラとシャッターが降り、内側から掛金をかけ、止金を落す。ビル内は外部から断絶されて私達三人きりだ。プレイには申し分のない場所が、こんな市内の中心地に夜にはひっそりと点在しているものなのか。

塚本鉄三なら、思い切ったアイデアを駆使して、ビルでのプレイをとりまくることだろう。塚本さんの仕事も、しかし現在の奇クの状態からして半身不随、腕をつぶして不運をかこっているに違いない。

二人の部屋は思ったより狭かった。六帖くらいの一室に、二人のそれぞれの持物がぎっしり一杯。ステレオ、テレビ、三面鏡戸棚、ダンスなどが四囲を占め、中央部にデコラの机が置いてある上に、部屋の片隅に引伸機一式が、四角い机に材料と共につんであった。空白はほんの三帖少々であるうか。三人が坐ると、もう余地はない。

「えらい狭いところでしょ。でも私達二人きりならこれで充分なの。狭いから抱き合って寝るより仕方ないから反ってイイじゃない」

「あんた等、どこでフォト撮ってるの？」
「ビル中皆私達のものよ。広いところは幾らでもあるわ。それより、先程いていた

フォト見せて下さる？」

「いいとも」

私はキュウクツに膝を崩して、袋よりビニールでしっかり封蔵した封筒をとり出し、目張りをはがした。梨花を始め、伊吹、愛川、大塚、絹川などの古いものから、最近の増田みゆき、小原真澄、沖村レイ子、美木乃々子、山原清子、志村善子、刑部典子など、各数枚ずつ、すべて緊縛のかなり自信のある、よく撮れたものの許りをずらりと並べた。

佐伯あけみは喰い入るように、それを次々と見て行き、牧野雅子は消え入りそうにおずおずととり上げて、眼を伏せて、視線を外らす様にし乍ら、チラチラ見た。

「これ全部、辻村さんがお撮りになったの」「そうだよ」

「スゴいのねえ、見直したわ。世の中にはプレイする人が随分いるのネ。伊吹さんと梨花さんぐらいかと思って、私達そんな真似事し始めた時も、内心は私はヘンなのかと思ったけど、まあまあとてもじゃないわ」

「熱愛の究極の姿でもあるし愛すればこそ尚更虐めたくなる。そんな人も多いのだよ。たべてしまいたい程可愛いっていうのもね。煎じつめれば、愛する相手をすべて意の尽に



の裏面の真の姿を探求して見たい、それが私をカメラ・ハンターとして、夜となく昼となく対象があれば動き廻らせる様にしたのさ」

「でも私達……」

「そう、いきなりあなた達に、この様なフォートの責めのプレイを要求するのは無理だろうネ。しかし私は伊吹より聞き、又あなた達の二人のプレイフォトを見た以上、その探求心が一途に、私を行動にかき立てるのだよ。分ってくれる？」

「……」

自分の思う様にしてしまいたいという表現に外ならないのさ。佐伯さんが牧野さんを好きだから、いろいろと二人の姿を永久にフォトにしてとっておきたいと思う様になるのは当然だと思ふね。伊吹さんが梨花悠紀子を愛する余り、変型的なフォトでの愛の行為をうつしとったとしても、普段の伊吹さんのイメージは変わらないよ。愛する者のみが持つ二人の秘密——。それを持つ事に愛の確認がある。私は現実的でそのくせ幾分虚無的なんだネ。人生の綺麗ごとづくめのうわべに飽いて、そ

無言の気拙い沈黙が暫く続いた。羞恥と、他人の介入。所詮はシークレットであるべき行為が、私によってあばかれようとしている今、二人は身を硬くして、この直面した現状を、どう処理すべきかに迷っている様子だった。それに二人は、既に私の持参した数多いフォトを見ていた。見るだけ見て、帰ってくれとは云い兼ねる状態も、二人の気持をくじ

けさせているに違いなかった。

「マサコ、とも角お茶入れるから、これにお水入れて来てわかせて来て頂戴」

勝手元のない悲しさ。水もガスも管理人の部屋らしい。そういえば、この部屋は或いは控室程度のものであったのかも知れない。湯沸しを差出すと、雅子は救われたように立上って出ていった。出てゆくのを見ずまして、あけみは口を切った。

「辻村さんが、何とか理窟をつけてプレイに誘導しようとする気はよく分るんですのよ。でもそんな事もういいの。伊吹さんのフォトを頼まれて、いろいろ引伸してあげてから、こんな愉しさを私は知ったの。本当よ。その時始めてしつたの。雅子を口説いて、今迄にかなり撮ったけど、私達のプレイは少し違うの。何ていったらいいか。つまり、辻村さんのフォトはすべて、縄のかけ方や、縛ることに重点をおいていらっしゃるけど、私達のフォトは、縛ったり、自由を束縛する事は従なのネ。嬉々と戯れられる私達二人の姿が本質のもので、そのため必然的に縛ったりするところもあるけど、それは縛ったフォトをとるための縛りではなく、遊びの道程の一過程に過ぎないのよ。だから、私達こんな狭いところ

で我慢していても天国のように嬉しいのよ。犬ころのようにたわむれて、いろんなことをして、疲れるとその昏朝まで寝てしまおう。私にとっては、雅子は世界中で一番大切な私のペットなの。雅子のいない生活なんて考えられないの」

「分るネ。プレイはそれが本来の姿なんだ」
「私にも、雅子にも縁談は度々あったわ。雅子の気持が動きかけると、私必死になってプチこわすの。私の話には勿論ハナから相手にもしない。女同志で不自然だと思っても、どう仕様もないの。だから今、雅子をゼッタイ誰にも紹介せず、私独りのものにしておいてくれると約束するのなら、少しぐらいプレイしたっていいのよ。雅子は私が云うと絶対に逆らわない子だわ」

「貴女に信用してもらう方法は、どうすればいいんだ。どんな約束だって守るから。それで貴女が安心するなればネ」

「私達はプレイって言葉つかっていないの。二人で分る言葉として、愛の戯れの行為は（ゲーム）。フォトとる時は（ピクチャー）。」

この言葉は私達が勝手に考え出したのだけど自分ではピクチャーだと思っているのよ。どう今夜ゲームしないの？とか、今日のゲーム

はピクチャーよ”て具合に使うんだけど……」

「イイジャンナイ……いや、いいんだよ」

近頃流行りの漫才師の言葉が出てしまう。

ゲームにピクチャー、これはいい言葉だ。

「もっとあるわ。これからのテクニクはヘビー級でやるわよ」とか、少し疲れているからライト級にしくわよ」とか、おさずりは「おタッチ」とか、二人だけで分る言葉を随分つくってあるの」

「プレイにしろ、ゲームにしろ、みなスポーツ語から来たのだから同意語だよネ。ヘビー級もフライ級もボクシングなみだしネ」

「さしずめ、辻村さんは、そのチャンピオンってことになるわネ」

「とんだチャンピオンだな。私達ではSというサジストのイニシャルで、嗜虐者。Mはマゾヒストのイニシャルで被虐者って事になるけど、嗜虐、被虐というのは、少しどぎつい言葉でしょう。だからSとMで現わしている。さしずめ佐伯さんはS、牧野さんはMの立場ということになるんだな」

「別段、SとかMとか考えてゲームしたことないけど、マサコおとなしいから、結局私が主導権を握ることになるの。私に力強く命令する人が現われたら、私だって辻村さんの仰

有るMになる要素だってあるわ。でもマサコは私をどうしても逆の立場にはしたがるの。怖いわ怖いわっていつて尻込めるのよ。そんないじらしい子なのよ、あのコ」

話はとめどなかったが、徐々に光明はさしきつつあった。既にSMプレイの本質に佐伯あけみは不知不識触れていた。では私は彼女の命令に従おう。先ずカイより始めよう。ところで、さっき貴女が言った話、私はどうしたらいいの？」

「そうね」

佐伯あけみは暫らく思案していたが、思い切った様に口を切った。

「私達のゲームの前に、辻村さんを縛らせていただくわ。ハダカにして……」

俄然Sの本性がムクムクと台頭してきたらしい。やはり本質的に女は魔性なのであるうか。女性から私を縛らせてくれといい出したのは佐伯あけみをもって嚆矢とする。

M的扱いは、先に魔子によって洗礼をうけ甘美な降服をしたが、今女性二人に縛られる羽目になるとは、私も予想だになかった。これはエライコトデスヨ。M男性なら願ったリ叶ったリだが、私にとっては、どうも奇妙キテレツなケイケンである。

「それから、辻村さんの本籍、現住所、お仕事、電話番号、家族のことなど、この紙に書いていただきたいの」

益々もって一大事である。戸籍調べもやるというのか。何たる大胆不敵なる申し出よ。でも乗りかかった船、今更そんなこと嫌だともとへも引けない。

「全部承知しましたよ。もうこれ以上ない」「もう一つ、私達のゲームは私の意志で行ない、一切辻村さんは干渉しないこと。傍観者になって戴きたいの」

「フォトはとっていいんだろ」

「それは構わないわ。その代り、辻村さんの縛ったフォトは私のカメラでとりますわよ。」

ギブ・アンド・テイクで行きましょう。この条件でいい」

どうも大いに不利なる条件であるが、我方己むなく涙をのんで全面的にそれをノムことにした。S女性だけあって、仲々しっかりしている。まかり間違った時、私を難詰し、文句をいうだけの材料をチャンと自分の方でも作っておく慎重さだ。

「私にひとつ許してほしいのは、カメラ・ハントとして書いている雑文を、雑誌に掲載させて欲しいこと。いけないかしら……勿論困

る個所は全部伏せておくけど……」

「カメラ・ハントというの？」

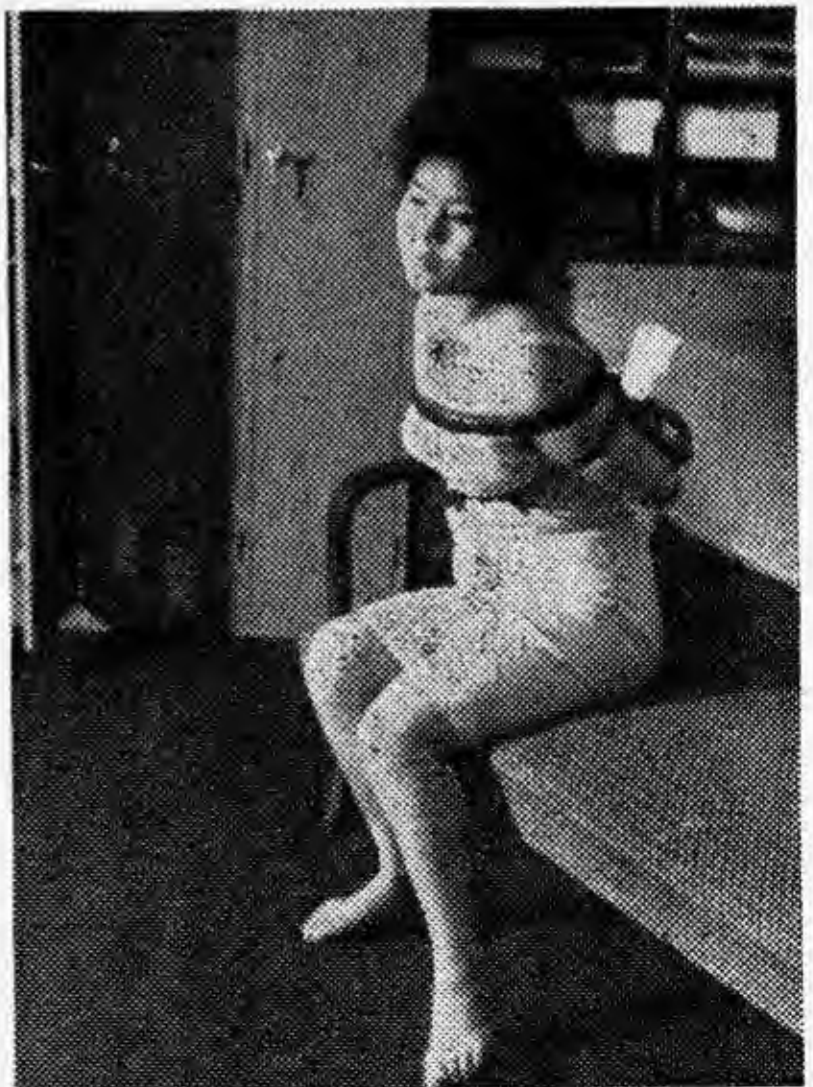
カクカクシカジカである。私は微に入り細に穿って説明、決して迷惑かけない事を約し、或る程度のフィクション個所をきき出して、どうやら納得してくれた。

「若し辻村さんが約束を破るとなると、貴方のじめな姿のフォトを、辻村さんの奥さん宛に送るわよ。いい？」

私は苦笑した。今日の出来事をすべて家内に話す私である。フォトに驚く家内でもないし、送られて困る私でもない。むしろその出来栄えの如何を見たいくらいのものである。しかし、佐伯あけみにとっては絶対の切札のつもりであるから可笑しい。

「いいよいいよ。好きな様にし給え。じゃあ先ず私からだネ。中年男で面白くもなからうが、貴女のお好きなようにどうぞ」

反って面白かった。どんな方法で私はむか



れて行き、縛られて行くのか。私は俎上の鯉よろしく身をすべて委ねる事にした。

既にあけみの様相はひきしまっている。眼尻は心持ちつり上り、これから始まるであろう、彼女一生一代の大芝居の幕開けに自分自身心も上の空に、魂を宙天に飛ばせているのかもしれない。

折もよく、雅子が湯沸しを湯気を立たせて持ち帰って来た。茶濾しでお茶を入れ、戸棚から生菓子を盆に盛って出す。

私は差し出された茶をすすり乍ら、フォト

を片付けていた。雅子の耳許にあけみが口を寄せて何か囁いていた。ありありと困惑が雅子の眉間に流れ、いやいやをしていた。きつく叱りつける口調であけみは雅子の肩を叩くと、やっと彼女は渋々納得した模様だった。おネエのあけみすら縛ることの出来ぬ雅子に私を縛れと命じているのであろう。

「辻村さん、服と靴下を脱いで下さい。そしてこの手拭で眼隠しさせて下さい。顔を見られると雅子が恥かしがるんです」

それは女王さながらの命令調だった。

「いよいよ本番ですネ。じゃあ」

私は冗談めいて言い乍らも、いよいよお出でなすったなと覚悟をきめた。眼隠しとは、なるほど女らしい思いつきである。

私は服を脱ぎ捨て、カッターシャツとズボン下の姿になってしゃがみ靴下をとって、部屋中央にどっかとアグラを組んで坐った。

あけみが私のうしろに廻って、日本手拭で強く眼隠しをした。視界は全く断絶された。

ハアハアとあけみの息使いは荒い。これから始まる対男性のゲームに、彼女自身、激しい心のたかぶりを覚えているのであろうか。

その姿の俤、冷めたい柔かい手が、おずおずと私の両手を後ろに廻す。あけみのきつい

叱咤の音が押し殺して聞える。私の両手は離され、ネクタイに手がかかり、カッターが脱がされて行く。私自身見えぬ雅子の動く手にかつて経験したことのない異様なときめきを感じた。心臓のドキドキする音が手にとるように我々から分る。押し殺した声で、ああだ、こうだと、あけみは指図しているらしい。部屋の隅でガタゴト云わせ、カチャカチャ金属音の鳴るのはカメラ準備でもあろうか。部屋は幸いにスチームの残温でさして冷めたくなく、むしろ汗ばむ程度の気温になっていた。

アンダーシャツが頭を通して脱がされると、ヒヤリと素肌に、部屋の空気が触れた。柔かいロープが私の背の両手の後ろで、モタモタとまといついている。鼻を吸る音と、吐く切迫した呼吸は、あのあどけないマサコのものに違いない。カメラ準備の音は私の前で、相変らず聞えているのだから――。

何とゆるい縛り方だろう両手とワザと少し離した後手に廻しているの、どうやう結び終ったらしい私の両手は、二三度ゆすつてこすり合わすと苦もなく脱けた。

「ダメだわ」

雅子の泣声にも似たつぶやきが背後で聞えた。よくよくしとやかに出来ているらしい。

そのいじらしさが、あけみにとっては、また耐らない魅力にもなっているの、あろうか。ヒタヒタと私の横をふんで、あけみのところへいった気配である。

「仕様のない子ね。仕方ないわ、私やるから手伝って。遠慮しなくていいから、きつくくればいいのよ」

あけみの声ははっきり耳に残った。やれやれ、こんどは誤間化せそうにないわい。

かなり邪慳に私の両手はぐいと背に捻じ上げられ、今度は犇々と両手が締まった。余ったロープが私の両肩を通して胸に廻り、そこで一結びして腕にかかって、更にもう一度両手にかかり、腰に廻った。胸で結び終るとシュツシュツと縄をしごく音が更にして、私の首にかかった。これは危険だ、下手に動くと首がしまるかもしれない。三重許り巻いて、あけみは指をのど仏と縄の合間に入れ、締めり加減をたしかめて前で固く結んだらしい。「立上って頂戴。首の縄を引っ張るからソロソロ歩くのよ。介添えは雅子がするわ」

声と共に私は立上ろうとするが、両手の自由がきかず、視界もなくて立上れない。雅子が私の腕を抱きかかえるようにして立上らせてくれた。首に巻きついた縄のはしはあけみ

が握っているらしい。縄が引かれるにつれて私はヨタヨタと一歩二歩あゆむ。私の裸身をだき抱えるようにして、雅子はより添っている。ドアの開く音がし、ヒヤリと廊下の外気が私の肌をなでた。重い扉の音、そして数歩つまづいて二、三段コクリートの階段を下ると、足がザラついて、漆喰の上を歩いていった。微かに油くさい臭いが鼻をかすめる。

女二人は無言。半身ハダカの私は首を引かれて、おそらく屠所へ引かれる豚の如きみじめな姿を、彼女達の前に曝していることだろう。足が妙にネバっこい。油のかたまりを踏んだのかヌルリと滑って前のめりに倒れかかる。雅子のぐっと引いてくれた腕で、私の体は、上体を前に浮かせて辛うじて転倒をまぬがれた。

やっと立止った様子である。外界と隔絶されたビル内は奈落の底のように静まり返っている。夜を乱して、二人の女は、これから私にどうしようというのか。

腕をとっていた柔かさとは異なるあたたかい手が、私の上半身をじりじりとその俤うしろへ押し、そこでヒヤリと冷めたい金属の感触が、先ず私の縛られた両手指先に伝わり、背骨を冷めたくした。どうやら金属棒を背に

したらしい。そこに私を立て、あけみらしい手が、首の縄を後ろに引いて金属棒につないだ。なるが尽に私は抵抗もなくなっている。チクチクと肌をさす荒縄が金属棒と私とを轟々と強く接触させて私の体を締め上げていった。ゲームどころか、これは仲々堂に入ったSプレイではないか。女は所詮カマトト。何もかも或いは知っていた乍ら、とぼけていたのだろうか。しかし私は声を立てなかった。

冷めたい手（これは雅子だ）が、私のズボン下をぬがせにかかった。手が震えているのが鈍感な私の腿にも感じる。そして最後のもの剥ぎとられていった。

足首に荒縄がかかり、揃えて締め上げられ股に腿に無限に荒縄はかかっていった。

私の横に微かな息使いがあり、どちらかがいる。そしてかすかな音が前方で響いた。一瞬、手拭を通して白く感じた。（カメラのストロボの光、そしてシャッター音だろうか）

私は雁字搦目に縛られてしばらく佇立していた。長い時間に思われた。早春の夜寒がゾクゾクと肌身に沁み込んで来た。一体女達は何をしているのだろう。体の前に熱さが伝わって来た。その時――私の後頭部に手がかかり、日本手拭の眼隠しがとられた。一瞬眼

も眩む、強烈なライトが私を射て、ハッと私は眼を閉じる。手拭をといったその人はさっと闇の彼方にとけ込んだ。徐々に開く、私の眼前に、一キロを超す五つのライトが私目掛けて一斉に光を放っていた。ライトの後ろに立つ二人の女性の姿は、暗くとけ込んで、私の視界にない。仮に視界に入っても、近視である私が眼鏡をとられているのだから、定かには見え様もない。ストロボと感じたのは、ライト点火の瞬間だったのか。馴れた眼に、その場所がガレージであることを私は知った。小型の軽四輪が一台入っているが、優に小型なら三台格納出来る広さである。ガレージの奥の、工具台の前の鉄棒に私は轟々と縛りつけられていたのであった。

カメラをとり終ったらしい気配がした。パツと一斉にライトは消え、私の網膜は灰色の宙に浮いた。そしてやがて、ガレージを照し出す、天井の蛍光灯の光が淡く私の眼底に光を送って来た。

黒眼鏡をかけた二人が私の浅ましい緊縛の前に立ちはだかった。眼鏡は己れ自身の眼の隠蔽であるらしい。

二人は黙々と私の荒縄をとき、首縄をもとき放った。今度は眼隠しもしない。



丸顔の佐伯あけみのひたいに脂汗がにじみ
牧野雅子は蒼腿めて見えた。カメラ類を片附
けるのは雅子の役らしく、ライトを外して元
通り箱にしまっている雅子をあとに、あけみ
は私の後ろに廻り、縛った両手の縄を握って

歩く様に押した。押されて歩く私はガレージ
の入口で数段上り、数歩あるけば早くも彼女
達の部屋に到達した。あけみはいった。

「縄をといいたらその尽、向う歩きに立って
ネ。雅子が入口に下着を置いたから、といた
らすぐ着て頂戴。みなり整えて、二十分し
たら三階へ上って来て下さい。カメラを持
ってネ。そこで私達、待っています。部屋
を出て突き当りの右がトイレ。左が三階へ
通じる階段よ。三階の電気のついていいる部
屋に私達いますから——」

昂奮さめやらぬ声で、彼女は後ろから私
に早口でそういうと、逃げるように部屋を
出ていった。

解き放たれた私はノロノロと服装をとと
のえる。大きな部屋をゆるがすくしゃみが
二ツ三ツ。時計を見ると九時十分。しから
ば九時半にそろりと参ろう。

服装を整え繕っても五分とたたない。部
屋中を見廻し、この辺りと目星をつけて、
私は彼女達の愛のかたみのフォトを探し求
めたが一向に見つからない。どこへ蔵って
あるのだろう。確かにある筈だが……。勝
手にゴソゴソやるのは紳士の行為ではない
が、私にしては既にその代償を払った気で

いるから、さして罪悪感を感じない。

ソロソロと押入れをあけると、真中が棚に
なっていて、上段は、眼も鮮やかな夜具がキ
チンとたたまれている。下の段に、下着が数
枚、乱れ簾に投げ入れられている。フエチで
ない私だが、その一枚をとって、フト匂いを
嗅いで見たくなった。桃色のパンティ。これ
はあけみか雅子か。私は雅子のものであると
自分自身の心に云いきかせ、微かな匂いを吸
い込んだ。乱れ簾の下にダンボールの箱があ
る。そしてお手のもの、カメラ材料用の箱
が一杯。ひとつひとつ開くわけにはゆかぬ。
アルバムにしているとすれば、かなり大きい
箱だし、フォトの尽蔵えば、カメラの空箱で
充分だ。えいっと見当をつけて、キャノンの
空箱をとり上げるとずしりと重い。他の箱に
比して、少し傷んでいるのが、よく触わる証
拠、私の直感に狂いなく、箱の蓋をとると、
数百枚のフォトがギッシリつまっていて、皆
裏返しに入れてある。ゴム判の日附けらしき
ものが裏に押されている。表返すと果せるか
な彼女達のいう、ゲームフォトが私の眼を射
た。雅子の手をねじ上げているあけみの姿、
どちらもブラジャーとパンティ姿であった。
時間はあと十分。私はキャノンの箱ごとたた

みの上へドサリと引くり返し、超スピードで一枚一枚それこそ飛ぶ様に見ていった。これは予想もしない収獲だった。平凡なものの中に、一見ドキリとするものが、時偶交っていた。ビル内を縦横無尽に使ってとっている、思い掛けない場所でのものが多い。

階段で、トイレで、オフィスで、美容体操具を使って、ソファで、デスクの上でと、あらゆる個所を縦横に駆使して、しかもそのフォトはシャープで正確で、構図も顔負けする程よかった。全裸は全体の三割程度だが、中には女同志のプレイが、かくも激しいのかと驚嘆するものもあり、ゆくりなくも、二人の秘密のすべてを覗き見る機会をつかんだ。すでに先刻の屈辱的なM行為への代償は、雲散霧消し、私はその代償故に知り得た、女同志の秘密の探知に、限らない喜びを覚え、胸のときめきは隠しようもなかった。

これだけのフォトを、もっと時間をかけて見たかったが、それは許されない。時は迫っていた。大急ぎで揃えて、裏返しにして箱に納め、元の位置に戻す。殆んどが雅子Mの立場で、あけみがSになっていたが、雅子のみをうつしたのもかなりあった。そして僅かに数枚、簡単に縛られているあけみ独りのフ

ोटが、その中に散在していた。

× × ×

夜を乱してコトコトと私は階段を昇る。汚れた素足に、じかに履いた靴下は何かねとついて足にまとわりつく。しじまを破る足音は無気味ですらある。この三階でこれから何が起ろうとしているのか。昇りつめた正面に光が洩れていた。二人はその部屋にいららしい。

右側の部屋は暗く静まり返っている。淡い廊下を照らす蛍光灯の光の下に、金文字の扉の字が浮んでいる。K運動用具販売株式会社大阪営業所。そして今、光の洩れるその部屋は、どうやらこの会社の控え室兼用応接間であるらしい。

私は静かにノックした。

「いいわ、お入りになって……」

あけみの声につれて

「ネエちゃん恥かしいわ。カンニンして」

という雅子の声が洩れる。

扉をあけた私の眼前に、既にゲームは展開されていた。自転車に似た、脚線美をつくる美容体操用器のサドルに、パンティ一枚にむかされた雅子が、後手に両手を縛られ、二重に胸に縄をまかれて、足をペダルにかけて、身



をくねらせていた。その雅子を、スポンジが尖端にとりつけられてある棒ぎれで、あけみが、これも上半身裸体となり、シユミーズを腰まで降り降して、ペタペタと背を打って責めていた。打つ手をやめて、あけみは艶然と

笑った。

「辻村さん、お約束だからとっていいのよ。御遠慮なく」

その声につられて、私は眼をパチパチさせて、無言で大急ぎで、カメラやストロボをとり出した。

「おやおや、オリンパスペンなのネ。案外貧弱なのネ」

「軽いからネ」

「でもシャープなものは無理でしょ。まあいいわ、最初に仰有っておれば、店に幾らでもカメラありますから、お貸ししたのに……」

「いや、これでいいんだ」

安物扱いされて、私は多少懺然たる気持でオリンパスペンを構えた。毎日カメラを扱っているあけみにとって、私のこのハーフカメラは如何にも貧弱に見えたのであろう。

「さあ、雅子、懸命にペダル踏むのよ。なまけたらお仕置よ」

言葉につれて、しなやかな足が、必死にペダルをこぎ始めた。ゆるやかなになると、スポンジ棒が背中や肩にとんだ。私のハーフカメラは、七二枚撮り。惜しげもなくパッパッとそれに閃光を走らせる。第一段階は終り、雅子は軽く汗をかいて、それを降らした。引立て

る様にして窓際のマットレスに、雅子を横たえ、パチパチとスポンジ棒が雅子の体に飛んだ。悲鳴をあげると、その声を押えるかの様に、棒は雅子のアゴを突き上げた。

「余りなくと、罰にこれも脱がすよ。ホラ」

あけみは、雅子の纏っている最後の一枚をも剥ぎとって押えつけた。私の眼になれたのか次第に二人のゲームはスムーズに白熱化していった。カーペットの敷いた床ヘッドサリと転がり落ちて、あけみは馬乗りになり、くすぐり責めを始めた。最早Sになり切った彼女は、私の眼など全然意識していない。いやむしろ、私あって尚更ハッスルしているのでもあろうか。悶え、呻き、歓喜する雅子には、M感覚が一杯にあった。それが宿命かの様に被虐に身を委ねて、いつしか雅子の口からはおネエさんおネエさんという呼びが洩れていた。あからさまな、女同志のプレイは、これ以上は描写出来ない。あけみへの約束もあるからだ。秘術をつくしきった感で、やがて放心したように、あけみは雅子の縄をとき、疲れた体をソファに投げた。あけみはユルユルとシュミーズを肩にたくし上げ、雅子が、黒いシュミーズをつけようとする、と、

「その尽、私の横へ坐るのよ」

恍惚のあとにくる放心が二人の表情を物懶げにしていた。あけみの先刻までのドキドキする程とぎすまされていた眼は、ややたるみあらぬ方をぼんやりと見ていた。

「これでおしまいよ、私たちのゲーム。辻村さんが物足りなかったら、一度だけ縛らせたげる。いい？」

「じゃあ、お言葉に甘えて一度」

「疲れてるから、ゴテゴテと縛るのいやよ。」

「雅子はシュミーズをつけて……」

「じゃあ、その革紐で、雅子さんをあけみさんが縛るところを少し」

ロッカーを背に、ソファに坐った尽、云われた通りあけみは雅子を縛っていった。もう先刻のあの激しい緊張と歓喜はあけみにはない。私に対するお義理めいたものである。それでも縛り終ると、雅子の髪を掴み、ぐいと後ろに引き絞ってポーズをとらせた。

「今度は、あけみを私が一度——」

縛ってやりたいと思った。

「ええ、いいわ」

案外あっさりと彼女は応じた。紐で簡単にシュミーズの上から縛る。そして私は雅子の革紐を一旦とき、先刻雅子を締めていたロープで彼女を後手にした。シュミーズの肩紐を

平等にどちらも片一方ずつ外す。ついで余った紐でソファの肘にあけみの足首を縛りつける。今は私の自由時間だ。簡単乍ら兎も角私は二人の女を縛った。スポンジ棒をとり上げると、最初はポンポンと軽く交互に、まるで肩でも叩いてやる調子で、そして次第にそれに力をこめていった。等しい力で交互に叩いて雅子は軽く呻き、あけみは激しく喘いだ。する事はあっても、される事はついぞなかったこれは一つのデーターであろうか。どんなりしていたあけみの眼は、次第に光を帯びてきた。そして打たれる喜びを甘受して、今まで果し得なかった自分のM性に深沈し耽溺しようとしていた。Sの表面の、その奥の奥に隠されている、女性本能の被虐の甘みがジワジワと、彼女の体内から、にじみ出して来たのであろうか。

私は打つ手をやめて、雅子の縄をといいた。眼顔で、先に下に降りる様告げた。私の今の威力に圧されて、素直に雅子は、あけみをチラリと見てから部屋を出た。ヘップを突っ掛けて、ヒタヒタと足音を忍ばせて行く音は遠ざかった。

「一対一になったよ。もう少し本格的に責めのプレイをやるうじゃないか。いやならいい

んだよ。約束違反だからネ。どうする？」

「いいわ。私一人なら……」

既に欲楽の表情を浮べて、あけみはきっぱりといった。

「じゃ、とも角縛り直した。これじゃ子供だましかからネ」

解き放すと、ボンヤリとあけみはその場に放心した様に佇立している。私はスルスルと彼女のシューミーズを足元へおろす。盛り上った胸は大きく弾んで、豊かな乳房が浪打っている。短かい紐で両手のみ後手に縛り上げ、ロープを使って左右の足を自転車のハンドルの左右に別々に縛りつけた。余った革紐で、胸が深々とくびれる程つよくしめあげ革紐のはしをマットの鉄脚に結びつける。こうしておいて自転車を後ろに引くと、あけみの体は背をカーペットにつけて、下半身は宙に浮き上った。私はズボンの革のバンドを引き抜く。さっと振りかぶり、腰に打ちおろすと、ギャツと絶叫が、狭い部屋に轟いた。痛烈な痛みが、ジーンと腰からのどへと突き上げたらしい。太腿に、豊かな胸に私のバンドは容赦なく走った。やがて声も立てず、その度に呻きを洩らして、あけみの肌は、徐々にバンドの条痕を浮き上らせていった。

私は靴下をぬぎ、脂で汚れた素足をあけみの顔の上にのせて、踏みにじった。油くさい匂いが鼻をかすめ、眉間がたえ間なくゆれてあけみは私の足をさけ様としてもがいた。私はMにされた復讐の気持も昂じて、その足をいっかな降ろそうとした。

私の右足指の二本が、生きものの様に、缺となつて、あけみの皮膚を挟み、胸のふくらみを挟んでひねり上げていた。その足は徐々に腹から腰へと伸びていった。

× × ×

雅子が改めて漉れてくれた紅茶が莫迦にうまく感じた。快よい疲れが私の体に糖分を要求していたのかも知れない。

あけみは私の凌辱に対し、いかにも満ち足りた放心の笑顔を続けていた。雅子とのゲームで、自身の体内で内攻していたナニモノから、私とのプレイによって吹っ切れ、発散したせいかも知れない。

「お互いに、すべてをさらけ出してしまった感じだね」

「辻村さんって人が怖いことを思い知らされたわ。でも、これでいいっていう気もするんだけど……。雅子どう思うの？」

「私……分らないわ」

「呟やいて生菓子をそっと口に運んでいる。」

「じゃあ、そろそろお別れだね。約束通り、履歴書一筆かいてゆこうか」

「もういいわ。でも矢張り知っておきたいから書いてもらおうかしら。最初の気持と違った意味で——」

「これでいいだろう」

私は名刺を渡す。うるんだあけみの瞳が名刺に落ちて、そっと私を見上げる。何かを語りかけたい眼である。

「帰ることにするよ」

「又遊びに来てくれる？」

「気が向けばネ」

「薄情なのネ、辻村さんって……」

「私の気が傾むくのを心配するからさ」

「傾いたっていいじゃないの」

「雅子ちゃんもいるんで、可怪しいことになるぜ」

「あの、私だったら構いませんことよ。おネエさんが、あの様に仰有るのだから、又よかつたら……」

来てくれと云いかねて、雅子はもじもじとしていた。

「辻村さんの書いている本って教えて」

「でも一寸女の買にくい本だ。よかたつら

直送してもらおう様頼んでおくよ」

「私達のことものせる？」

「出来れば、そうしたいネ」

「うまく書いてネ」

「ああ、美人二人に辻村隆、大いにモテるとネ」

「すぐ茶化してしまう」

あけみに変っていた。確かに身内に変化を起していた。あの革バンドの鞭打ちが、内潜していたM性を惹起させて、かくも人恋しく変貌するものだろうか。

フオトの成果は、さして期待した程かんばしくなかったが、私はSのあけみを征服した事に、胸がふくらんでいた。お望みとあれば夢ももう一度。その時はどうなるかも知れない。単刀直入に飼育すれば、あけみは一変して素晴らしい対象となる事だろう。

未練は尚も残ったが、私は潔く引揚げることにした。ガラガラとシャッターを揚げて注意深くあけみは先に表へ出た。私はうしろに随う雅子の手をそっと握りしめた。やはり冷めたかった。しかし心は暖かいのだろう。素早く暗やみで唇をよせると、意外にも、彼女の舌がスルスルとぬめり込んで来た。呀っという間の刹那のくちづけ。

あけみに気付かれてはならない。雅子の体を離し、何事もなかった様に私はそっと表へ忍んで出た。午後十時を過ぎると、問屋街のこの辺りはヒソと静まっていて、堺筋通りを走る車のヘッドライトのみが、次々と光芒をまきちらしては走り去っていった。

△この雅子という子は、あけみの独占慾によって、行動を共にしているが、或いは二十四才という年令が、男恋しさに、恋情をたぎらせているのではなからうか。だから刹那のくちづけにも、舌を割り込ませたのではなからうか……▽

若い女二人は手を握っていた。逢うは別れの始めかも知れない。私のSMの遍歴の一頁に、こんな異色が又一つ殖えた。納まっていた。春の嵐が、又夜の乱れと共に吹き始めていた。比良八荒の荒れ仕舞か——。

独り呟やいて私はもう振り返らず、月もなく、春一番の暗く吹き荒れる闇夜の舗道を、車を拾うべく、大通りへと、肩をすくめて小走りに走っていった。

(おわり)

× × × ×

女相撲物語

“花の女斗美たち”

(6)

奮斗士好太

〓カット・雪崎京人提供〓

こうして入ったばかりだというのに、いろんな出来ごとが起って、その度ごとに、びっくりしたり、悲しんだり、あわてたり、喜んだりしているうちに、まるで走り去ってしまふみたいに日が経って行くのでした。

だんだん日が長くなって、それにつれて次第に日光も、その強さを増して、日陰が欲しくなる季節がやって来ました。

青空一ぱいに陽光がまぶしくあふれ、白い雲までが、キラキラと射すように輝いています。教室の窓から見える住宅街の家並の間にしまい忘れられたような鯉のぼりが、グッタリと疲れ果てた姿で羊にブラ下がつているのが見られます。

時々風がやってきて、まつわりつくとも、その度毎に、ものうさそうに日にあせた体の尾ビレのあたりをちょっと動かして相手をしますが、またすぐグッタリしてしまいます。

家並を越えたはるか遠方の公園の森は、まるで一本一本の木が、空に向かってその緑の茂みを勢いよく吹き上げているみたいな生氣に満ちた眺めを見せています。

間近かに迫った毎年のメインイベントである、県下高校体育大会が、その歓声をこの森にコダマさせることでしよう。

眺めていると、ナマケ心など吹っこんで、おなかの底からファイトが湧いてきて、じっとしていられないような気持になるのです。

このメインイベントへ向かって、各運動部が一せいにハッスルしているのは壮観です。

私たちの相撲部も、もちろん例外ではなく毎日の練習も、すっかり軌道に乗った感じですが、ますます熱がこもってきました。

私たちは女性ですから、一日も休まずにというわけにはいきませんし、とくに相撲のようには、マワシ一つを身につけただけの素裸になって激しい運動をするようなものには、少しの無理も許されないので、それでも私たちは、練習場に顔を出すことだけは、決して怠らないのです。

そして、マワシを締める手伝いをしたり、猛練習に汗ビッシヨリになった体をふいてや

ったり、その合い間にも上級生たちの押し合いがいけいこや、申し合いなどを熱心に見学するのです。

ヒロちゃんに強引にさそわれた時は、自分で相撲をとることなんか気が進まなくて、イヤなら止めてもいいというヒロちゃんの言葉を逃げ道みたいに考えていた私だったのですが、もうこの頃では相撲の魅力にスッカリとりつかれた気持なのです。

いつかヒロちゃんが、じょうだん半分にいった「一日に一回マワシを締めないと落ちつかない」というのがウソでなくなってしまったようでした。

身につけたものを全部脱ぎ捨てて、素裸になるということは、ほんとうにスバラシイものです。

小さな子供が、お風呂へ入ったあとなど、なかなか服を着たがらなくて、素裸のまんま逃げまわるのを、お母さんなどが追っかけている風景をよく見かけるのですが、裸のままがいちばん気持の良いものだということを子供は本能的に知っているのだと思います。

とくに苦が手の課目で、さんざん苦しんだ日なんかは、放課後になるが早いか真っ先に部室へとんで行くのです。

そんな時は誰かが声をかけても、知らん顔です。ヒロちゃんを誘うのだってスッポかしてしまします。

一枚一枚、着ているものを脱ぎとって行く、クサクサした気持や、不愉快な思いがだんだんと消えて行くのです。そして、おしまいに素裸になってしまふと、何ともいえず伸び伸びした気持にひたれます。自由の身になったドレイの気持って、こんなかしらなどと考えたりするのです。

すこしオーバーかも知れませんが、それくらいに嬉しくて、若いことってほんとにイイなあと、しみじみ思うのです。

思いっきり背のびをすると、まるで私のからだがふくれ上がって、一まわりもふたまわりも大きくなったような気持になります。

そしてマワシ——相撲の時身につけるた一つのもの——そしてすべてのものであるマワシ——を締めます。

前日、キッチンとたたんでロッカーにしまいい込んだのを取り出し、ちょっとキスをしてから端をひろげ、それを前に当てます。分厚い布地の感触がジーンと肌にしみ透ってきいて思わずブルッと身震いが出ます。

私は大体がブキツチヨな方なのですが、マ

ワシを締めることだけは、ふしぎに思うくらい直きに上手になってしまいました。

毎時間シボラレても好きでない課目はいっとうに覚えが悪くて、抜け道や、サボルことなどばかり考えているのですが、別に苦心したわけでもないのに、簡単に、そして当然のことのように覚えてしまったのは、相撲がよほど好きなせいなんだわと思います。

ひろげて前に当てたマワシの端をアゴではさんで、股を通す部分を細く折り、それからお尻へ引き上げて右腰へまわす。いつも繰り返すことではありますけれど、それがまるで自分の身体を動かすみたいにスラスラと運ぶのです。

そしておヘソの下あたりへグイグイと締め込んでいくと、ズッシリとしたポリウムがふくれ上がろうとする筋肉を気持よく引き締め、私の若い血がかき立てるファイトを身体のスミズミにまで行きたらせるのです。

これでもうすっかり気持は相撲のことだけに集中して、ほかのことは、ちがう世界のできごとみたいにしから考えられなくなってしまふのです。

最後の結び目をすこしキツイくらいに、思い切って引き上げると、股をくぐったところ

が、ギョッと締めつけられて、少し痛いけれど、それだけに一層緊張を昂めてくれるのです。

マワシを締め終ると、さっそく練習場へ入ります。誰もいないガランとした練習場には人待ち顔の土俵がポツンと取り残されたみたいに置かれ、何とも殺風景なのですが、それだけに一番乗りの味が一層強く感じられてくるのです。

誰もいない練習場―私ひとりの練習場―それはまるで私の王国みたいな感じです。

まず、軽く屈伸運動をしてから四股をふむのです。

両足を軽く半歩ずつ開き、ヒザを直角に曲げて、それに両手を乗せ、上体を前かがみにならないように注意して、グッとおなかに力を入れます。これはなかなか苦しい姿勢で、ともすればお尻を突き出して、上体を前へ倒す型になり勝ちなのですが、それを我慢して右：左：と一足ずつ、ていねいに力を込めてふむのです。

「ストーン：ストーン：」とふみしめる足が、練習場の土に足型のくぼみをつけるような気持で、思い切っておるすのです。

習いはじめのころは、とてもこんな思い切

ってなどできませんでした。だいいちそんなに高く足が上がりません。せいせい五〇センチか六〇センチくらいがやっとなのです。ヒロちゃんや、津野さんだって同じことで、本人たちは、いかにも立派そうな顔で、四股をふんでいるのですが、上げた足だって習ったようにヒザは伸びないで曲がったまま、それに時々、支え足の方がフラついたり、ひどい時には、一本足でトントンとよろけ、ひっくりかえりそうになって危く踏み止まる有様。テレかくしに乱れてもいないマワシを気にして、立て禪のあたりに手をやったりしているのがおかしくてたまらず、まったく見ているとこちらの練習に身が入りません。

しかし、やっている本人たちは、大マジメで、おそらく頭の中では、大相撲のお相撲さんたちの四股のように足を高々と上げて、力強く踏みおろしているつもりなのでしょう。ですから私も、せっかく熱心に練習しているのをわきから口出しをして、いい気持になっっている夢をこわし、そのプライド？を傷つけるのは悪いと思って、笑うのを我慢しているのです。

それでも、たまにはとてもたまらなくなっ

て、吹き出しかけては、あわてて、よその方を向いて、口をおさえたりするのですが、笑うまいと思うとよけいに笑いがこみ上げて、おなかが痛くなることもあるのです。

そんなに、こちらが苦労しているのも知らずに、ヒロちゃんなどは

「ネエ、ちょっと見ててヨ」

と、とくい気な顔つきで

「どう？ このくらいだったら、小林さんだって大してちがわないと思うんだけど」

などと、四股にかけてはプロ級？ とふだんから自他ともに許すほどの先輩とくらべるようなことをいうのですからたまりません。

聞いている方が、恥しくなっちゃって

「そうネ、同じくらいとまではいかないけど大分似てきたようだよ」

といいますと、ヒロちゃんは嬉しそうに

「そう。どんなところが似ているの」

「そうだよネエ：マア、足が地面からはなれるというところが似ているかしら」

ヒロちゃんは、さすがに赤くなって

「ヒドイこというわネ。そんなら、あんたやってごらんよ」

そういわれると、私にしてもヒロちゃんよりは上手だとはとてもいえないので

「そりゃ、わたしだっておんなしだワ。習い



始めたばかりで、そんなに上手になったら
その方がおかしいんじゃないの」
「そうね、相撲はわたしの方が先輩なんだし
ネ」

「そうよ、あなたより上手にならないように
気をつけますから、よろしくお願いします。
先輩さん」

わたしが笑いをこらえて、できるだけマジ
メな顔をしていると、ヒロちゃんは一層とく
い気な様子になってまた四股を踏むのですが
気どっているものですから、かえってうまく
できず、私の方を見てテレクさそうに笑うの
で、とうとうおさえていた笑いが吹き出して
きて、二人ともおなかを折りまげて、涙の出
るほど笑うのでした。

でも、上級生にしても皆が全部上
手だとはいえず、小林さんなどは特
別なのです。

高く上げるといふこともなかなか
できないのですが、おろす時にして
もいわれたように爪先に力を入れる
と、突き指をしそうでコワくてたま
らず、反対に突き指ばかり心配して
カガトからおろしたため、それこそ
頭のテッペンまでズーンと響く痛さ
に、ベソをかいいたりしたこともあり
ましたが、今はもうそんなことはあ
りません。支え足のヒザを伸ばして
もフラつくことはなくなりましたし
上げる足だって最初の頃の二倍くら
いにも高く上げられます。
「ヨイショ、ヨイショ」

とかけ声をかけながら右左二十回ほどふ
みますと、もう額のあたりにじっとり汗が
にじんで、息も切れてきます。

そして、一息入れているところへ、後から
やってきた人たちが、マワシ姿になって練習
場へ入ってくるのです。

いつも何やらおしゃべりをしながら賑やか
に入ってくるのはヒロちゃん。

入り口の敷居の上に両足を揃えて立って、
そこから、ピョンと一足跳びにまるで巾跳び
みたいな真似をするのは津野さん。

浅黒い肌に、白いマワシまでがスマートに
見える長身でスラリと入ってくる松田さん。

いつきたのかわからないくらい、音もなく
入ってきて、まるでさっきから見ていたのよ
というような顔をしている西田さんなど、そ
の人その人の性格や特徴が、よく表われてい
て、練習場へ入って来るのを見ているだけで
も、おもしろいのです。

そしてそれから練習が始まるまでの間が、
私たちのおしゃべりや、ふざけっこの時間にな
るのです。

ある日のことでした。いつも賑やかなヒロ
ちゃんが無だか深刻そうな顔をしています。
この人のことですから、そんな顔をしてい

でも、本気なのか、じょう談なのか見当がつかないのですけれど、私や津野さんをチラリチラリと見くらべるようにしたりして考え込んでいます。

「どうしたの？ また何か……」

私が尋ねると、マジメな顔のヒロちゃんは「わたしって、ヤセたかしらネ」といいます。

何だ、またじょう談だったと思いながら「サア……そんなことないでしょう。どうして？」

「でもネ、腰のまわりが、細くなっちゃったようなのヨ」

私は笑いのこみ上げてくるのを、やっとこらえながら

「まあそういうええ、そうとも思えるわネ、でもスマートになって、いいじゃないの」

「ひやかさないでよ、わたしほんとに心配してるんだから」

「でも、細くなったなんて、計ってみたの」

「ウウン、計りやしないけど」

「それじゃどうしてそんなことわかるの？」

「マワシを締める時にわかるの」

「ヘエ、どうやって？」

「ウン、それは……」

ヒロちゃんがいかけたところへ、津野さんが顔をほさみしました。

「どうしたの？」

「あのネ、このひとがヤセちゃったようだった心配してるところなのヨ」

わたしがいうと、津野さんは

「アーラ、ふとるのを悩んでるひともあるってのに……さまだだわね」

「そりゃそうよ、わたしなんかもふとりたくてたまらないっていうのに」

私がうらやましそうに津野さんのかたとぶりの胸や肩のあたりを見ながらいうのに

「まあ、あんたの場合は、そうかも知れないわネ」

と津野さんはツケツケとえんりよもなく

「でも、チットも細くなってなんかいいいよ、うよ、かえって太モモの辺なんか、たくましくなったみたいよ」

とヒロちゃんにいます。ヒロちゃんは

「じゃ、足だけ太くなっちゃったのかしら」

とますます憂うつそうです。

「そんなことないワ」

と津野さんは

「全体にこう形が良くなってきたようね。お尻だって丸々としてきたし、オッパイだって

ズーッとボリュームがでてきたんじゃない」

津野さんのいったとおり、前から肉づきの良かったヒロちゃんの肩から胸のあたりは、ますます丸味を増してきたようなのです。

巾の割り合いには厚さのもうすこし欲しいという感じのお尻なども、ピンと張り出して腰のところからグッと段がついてしまったように見えるのでした。そしてキリリと締め込んだマワシがとてもしりしくて、肉のうすい貧弱な私のお尻のことを思うと、チョットにくらしくさえるのです。

ですから、津野さんのいっていることは、半分はヒヤカシなのでしようけれど、あとの半分は本当なのです。しかしヒロちゃんは、「でも、マワシを締めると、前より細くなつたようなのヨ」

といいながら、たたんで前禪にはさんである端を引き出しました。

ダラリと下がった端がヒロちゃんのヒザをわずかにかくれるところまで届きました。

ヒロちゃんは、それをなでさするようにしながら

「最初締めてた時は、ここが大いヒザの上くらいのところだったのよ。それがだんだん下がって、今なんかヒザがちょうどかくれる

くらいになっちゃったのよ。十五センチも細くなっちゃったわ」

「締めかたで、そのくらいちがうわよ」

津野さんが、当然そんな顔で判定を下しました。

「締めかたって……」

「たとえばさ、ギューッとキック締めた時と、すこしユルク締めた時とじゃ大分ちがうんじゃない」

「そうじゃないのよ、いろいろやってみただけど、ユルクしてもキックしても、そんなにちがわないの」

そばで松田さんもニヤニヤしながら聞いています。津野さんは

「あなたおなか空いてんじゃない、今日おべんとう食べなかったんでしょ」

「食べマシタ」

「でも食べるのこし……」

「じょうだんいってるんじゃないのヨ、ひとが本気になって聞いているのに」

ヒロちゃんが、大きな声を出したので、屈伸運動をしていた金子さんまでやってきました。そして私たちの説明を聞くと

「そりゃ、あんたがヤセたんじゃないのヨ」

金田さんは私たちの顔を見くらべながら

「つまりね、マワシが伸びちゃったの」

「アラこんなに厚いんでも伸びるんですか」

ヒロちゃんが、びっくりして聞きますと

「そりゃ伸びるわよ、あんたのスゴイ馬力で引けば針金だって伸びちゃうわ」

「アラ、失礼しちゃうワ、わたし、そんなに力ありません」

ヒロちゃんがおこったので、金子さんは笑い出して

「そりゃ、じょうだんだけど、いくらマワシの生地が厚くたって、毎日毎日同じ方向にだけひっぱられるわけなんだから、伸びるのがあたりまえよ。つまり細長くなったってわけなのよ」

「ア、そうか」

ヒロちゃんがうづないで、私もそうなんだわと思いました。

「ネ、わかったでしょう」

と金子さんは

「でも、マワシの生地は特殊な織り方だからほかの生地にくらべたら伸びない方なのよ。逆に弾力がなくてゼンゼン伸びない生地だったら、だいいち、からだにピッタリ締まってこないでしょ」

「どうしてですか？」

ヒロちゃんが聞きました。

「だって、あんたがマワシを締めるときは、ただ巻きつけるだけでなくて、グッと引っぱるでしょ。引っぱられたマワシはまたもとの長さに戻ろうとするわけよ。それで、からだにギューッと締まってくるの。あんた、電柱に針金を巻いたら、どうなると思う？」

金子さんに逆に聞き返されたヒロちゃんは「アラ、あたしのからだだ、とうとう電柱になっちゃった」

とテレかくしに、私たちを見まわしながらペソをかく真似をして見せました。

すると金子さんは、ヒロちゃんの前へまわって、四つに取り組む形になり、両方のマワシを握るとグイッと引きつけました。

ヒロちゃんは引かれてちよっとフラつき、そして、吸い寄せられるように、金子さんのからだに密着してしまいました。

ピッタリと合ったふたりの胸の間で、四つのお乳までが押し合いをしています。

押しつぶされて扁平になった乳房が、両ワキからのぞいているのが何かまぶしいものを見るようで、私の胸のあたりまでがムズムズしてくるのでした。

「何んだ、キック締めてるってほどじゃない

じゃないの」

と、金子さんはヒロちゃんのマワシにかけた手を二、三度握り直したりしていましたが、ちよつと力が入ったかなと思うと、ヒロちゃんの体が軽々と宙に浮き、そして、キツク締めていたはずのマワシがずり上がって、丸い肉づきの腰のあたりがすっかりむき出しになつてしまいました。

金子さんは、ヒロちゃんを下ろすと、

「ホラ、一回吊られただけで、もうそんなにゆるんじやったじゃないの」

といいながら

「じゃ、こんどはわたしを吊ってごらん」

ヒロちゃんは、うながされて金子さんのマワシを握ろうとしましたが、なかなか指がかかりません。指先に力を入れて一本一本ねじ込むようにしてやっとマワシを引くと腕に力を入れてグッと吊り上げようとしてしまいました。

金子さんの体が少し浮いて上がりかけましたが、爪先がまだ土に着いています。

ヒロちゃん、はそのまま力まかせに持ち上げようとするのですが、どうしても爪先が離れません。

真赤な顔になったヒロちゃんは、一たん金子さんを下ろすと、もう一度、マワシを握り

直し、十分に腰をおとして吊りにかかりました。今度は金子さんの足が離れて十センチほど宙に浮きました。

しかし、ヒロちゃんが下ろしたところを見ても、金子さんのマワシは、ほとんど乱れていないのでした。

「へえー、マワシの締め方ひとつだって、こんなにちがうんだわ」

と感心していると、隣にいた松田さんも

「これじゃ、わたしたちのは、締めてるんじゃないくて、ただ巻きつけてるだけみたいなのね」

とびっくりしたようにいいました。

「キンちゃん、キンちゃん」

と呼ぶ声に、皆が入口の方を見ますと、小林さんの丸い大きな姿がユラリと立っていて金子さんを手まねきしていました。

金子さんはふりかえってそれを見ますと

「アッ、そうそう」

と何かを思い出した様子で、そちらへ歩いて行きました。

私たち一年生の中に入っていると、無駄なく引き締まった筋肉のつき具合や、日に焼けた肌の艶の色など、何か圧迫されるような大きさを感ずる金子さんですが、さすがに小林

さんと並んでいるところを見ると、二まわりくらい細かい感じで、すっかりスマートに見えるのでした。

「ネエ、あの人のマワシって、きつと特製なんだわねエ」

と津野さんがいいました。

「なぜ？」

松田さんがたずねると津野さんは

「だって、わたしたちと同じのだったら、二回くらいしか腰に巻けないんじゃない？」

なるほどそういわれてみれば、小林さんの腰のまわりなどは私たちの二倍もありそうに見えるから、私たちのと同じ長さのマワシだったら、私たちが五回巻いているところを三回くらいがせいぜいかも知れません。

私たちがジロジロ、ヒソヒソと話していると、小林さんも気になったのか、ちょっとニラムようにこつちを見ました。

「何してるのー。始めるわよー」

笠原さんの声がしました。

「グズグズしてないで、整列、せいれーっ」
毎日の練習は、まず全員揃っての四股踏みからです。全員といっても一人も欠かさずということはできませんが、その日の練習に参加できる人数が、大体揃ったらしいことに



なるわけです。

そして、号令をかける人を中心にして、全員が半円型に並びます。

「イーチ」

で一せいに右足を上げて、ドシンとおろし「ニーイ」

で今度は左足を踏むのですが、上げる時はそろっていても、おろす時になると

「パタ、パタ、パタン、パタン」

と、にぎやかなくらいに不ぞろいになってしまふのです。これは、私たち一年生たちが足を上げたままこえられなくて、直ぐおろしてしまうために、上級生たちのペースに合わなくなってしまふからです。

上級生たちは、支え足に十分重心をかけてからだをその足の上に乗せる感じで足を上げそして上げ切ったところで、今度は重心を上げている足の方へ移しながらその足をおろすのです。ですから見た目にも大へん力強く感ずるのですが、私たちのはその重心の移動がうまくゆかず、いわばはずみで足を上げているようなものですから、どうしても早くおろさなくてはならないのです。

そして、足を上げることだけに気をとられていると、たちまち姿勢が崩れて注意がとびます。

「ヒロちゃん、アゴを引いて！」

「松ちゃん、からだを倒さないで！」

テルちゃん、お尻が出てるわよ！」

片っ端から私たちが槍玉に上げられます。私の斜め前に例の小林さんの大きな体があります。

いつもながらの、悠々としたテンポ、そして、あのからだでと思うくらいのやわらかい動作が、私たちよりよっぽどスマートな感じに見えて、思わず見とれるのです。

からだ全体の重心が、支え足一本に完全に乗っていて、ピクツともゆれないのです。

「ドシン」と足を踏みつけると、肉づきのよい、広い背中一帯が、そのたびごとに「ブルブルツ」とゆれ、グツと膝を深く曲げて腰をおとすと、おもちのようにポテポテしたお尻が、まるでそこだけ別の生きものでもあるようにムククリと盛り上がって、その二つの丘の間を立禪が深々と割って沈み込んで行くのです。

丸く盛り上がった肩のあたりから、汗が一粒流れ落ちて、背筋の深くくぼみをスーッと下がっていきます。

「わたしも、あんなふうにやれるかしら」などと考えているとたちまちまた

「テルちゃん、ボンヤリしないで！」

と声がとんで、あわててまた皆について足

を踏みます。

ところで、小林さんの四股も見事ですが、もうひとり、二年生で中川さんという人の四股もなかなか立派です。

小林さんは、うまいのを、なにか鼻にかけている感じですけど、中川さんは、そんな気どったところはなく、もっとスマートなです。そしてこの人は、相撲部第一の美人で体格もよく、一七二センチ、六十三キロとすばらしいグラマーなのです。

映画スターの鰐淵晴子に似た目鼻立ちのハッキリした顔で、道を歩いてると、男の人がビックリしたような顔でマブシそうに眺めていることもしばしばです。

美人で、その上に男の人に負けないくらいの体格なので、きつと大ていの人には劣等感を持ってしまうのかもしれないのです。

でも、その相撲ぶりは、美しい顔に似合わずに大へんイサマしいものです。

大柄なからだを生かした突張りや、押しがとくいで、とくにその猛烈な突張りをマトモに受けたら、超重量級の小林さんでさえも持ちこたえられないほどののです。

しかし、その立ち上がりの攻撃が止まって四つになって、おたがいにマワシを引き合う

形になると、中川さんには攻め手を持たないという弱点があるのでした。

投げるでもなく、寄るでもなく、ジリジリと相手の喰い下がってくるのにまかせただけで、せっかく握っていたマワシまで離してしまい、まるで自分のからだを持てあましていくような格好になってしまふのです。

とくに内がけ、外がけといった足業にはとてもモロク、あっけないくらい簡単に転んでしまひます。

それで、動きの早い三年生の野川さんや、腰がよくて投げ業の武器を持っているキャプテンの今井さんなどには全然といってよいくらい歯が立ちません。

突っぱる腕をうまくかわされて、ふところへ飛びこまれ、前禪を引きつけられてしまふと、もうどうしようもありません。

好きなようにゆすぶられ、振りまわされては投げられたり掛け倒されたりでサンザンな有様です。

負けぎらいな中川さんは、そんなふうにしてころがされると、顔を真赤にして、まるで歯がみをするような勢いで突っかかって行くのですが、それがかえって悪く、気持だけがあせるので、ますます相手の思うツボになっ

てしまふのでした。

突張って行く腕をハジかれて横向きになったところを押し出されたり、時には体を変わされて自分ひとりで土俵の外まで飛び出して行ってしまったる有様です。

それでも、まわりの人たちの笑い声など耳に入らないほど一しうけんめいで、何度転がされても止めません。

マワシが乱れても、締め直している時間が惜しいのか、結び目が解けてはずれかかっているのに取り組んで行くのです。

マワシといえば、この中川さんには、おもしろいくせがあるのでした。

それは、ユルフンというのでしょうか、とにかくスゴクゆるく締めているのです。

私たちの場合は、マワシを腰にまわすと力一ばいに引っぱり、そしてひと巻きごとに息を止めては締め、マワシと肌の間に指一本も入らないほどにキツク締め込むのですが、中川さんのやり方は、一ばん下の肌についた一巻きだけはキツチリと締めるのですけれど、そのあとはゆったりと型の崩れない程度に巻いておくだけなのです。

ですから組み合ってちょっとでもマワシに指がかかれば直ぐに握られてしまふのです。

そして取られたマワシを引きつけられるとたちまちズルズルと伸びてしまつて、前禪などは、おなかの上のあたりまでズリ上がってしまい、前ブクロがはずれて落ちはしないかしらとハラハラさせられます。

しかし、中川さん自身は一向に平気で、彼女の説明によると、こういうわけなのです。

「あたしって、四つになつてしまつとテンデ業がないでしょ。だから相手のひとにマワシをとられてもいいように、ワザとユルフンにしておくのよ。なぜって、そうしておけば相手のひとが投げようとしても、マワシが伸び

ちやつてるから力が入らないでしょ。そこがこっちのネライってわけよ。モタモタしてるのをスーッと吊り出しよ。吊り出しくらいだったら、あたしだってできるからネ」

でも、実際には、すっかり興奮した彼女はそんな作戦など忘れてしまふらしく、吊り出して勝ったところなどめったにお目にかかれないのでした。

たまに、とくいの突張りが命中して、相手を一方向的に突き出して勝った時など、ほんとうに嬉しそうで目がキラキラと光り、美しい顔がいっそう輝いて、見ている私までが、ま

るで自分が勝つたように楽しくなるのです。

マネジャーの笠原さんの話では、この中川さんは来年度のホープで、四つ相撲になった時の技を何か一つでも身につけたら、県下の女子相撲選手のベストテンに入れるだろうというのでした。

しかし、そのためには、ムキになつてしまふのを直すことと、ユルフンをどうしても改めなければならぬということ、大会になると、マワシの乱れはすぐ取組を中止して締め直させられるので、中川さんの作戦？ は全然通用しないのだそうです。

「とにかく、マワシがゆるんだりするのはすぐキビシイからね」

と笠原さんは私たちに何度も注意して「あんたたちも、ヘンな作戦を考えたりしないでちょうだい。マワシはそんな作戦のために締めてるんじゃないんだから」

笠原さんにいわれるまでもなく、私は、私の体の中心をキッチリ引き締めてくれるあのマワシの肌ざわりが好きなのですから、中川さんのような作戦など考えられないのです。

そしてさっきの金子さんの時で見たようにまだまだ締め方が下手なんだと思ったばかりなのですから。

(未完)

◎本誌二〇〇号突破記念◎△原稿募集▽

▽内容 容△

一、特異なる風俗文獻誌を標榜する本誌にふさわしい内容の力作をお待ちします。

一、見る雑誌より読む雑誌として脱皮するため、後世に残しておきたい文獻的価値のある資料は、長短に拘らず歓迎します。

一、SMその他、フェティッシュ、切腹、女闘美、女相撲などは勿論のこと、新しく登場した生首狂崇、妊婦嗜好などの例にみる新分野の開拓を大いに期待します。

一、形式は創作、小説などのフィクションも結構ですし、自らの体験をお持ちの方は告白も大いに結構です。更に論説、意見、感想、手紙、随筆、シナリオなど、最も効果を發揮できるものを、お選び下さい。

▽規 定△

一、内容については、今後毎月課題を出したいと思っております。

一、作品はすべて未発表の自作品に限り、引用部分の出処は明記願います。

一、枚数は一切御自由です。

一、締切日は別に定めません。優秀なる作品は、最近号に掲載いたします。

一、採用原稿に対しては、作品相当の稿料をお支払い致します。

一、御送稿は開封第五種便（五〇グラム毎に十円）にてお願い致します。

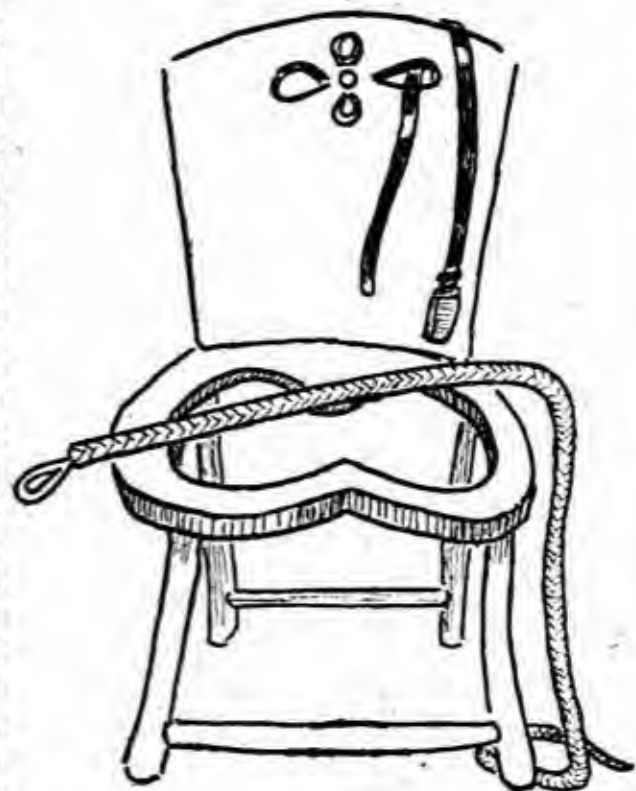
一、〇以上の内容規定にて、奮て御応募下さらんことをお待ち申し上げます。

連載サディズム小説

心 傷 た む 遍 歴

△第二十章 織りなす糸 (二)▽

西 条 操



イヴェットは詰所に入ったかと思うと、すぐさま立って、監房の前の通路をコツコツと往復して居た。

「あの娘、一体何だって云うの？ 折角の日曜だと云うのに、オチオチ出来やしない」

靴音の度に姿勢を正す女囚達がぶつぶつ云う。イヴェットに見れば、監視して回って居るつもりではないが、鉄格子の中の女囚達にとっては、その制服は矢張り恐ろしくて煙たい。イヴェットは涼しい詰所に憩う気になれないのだった。監房内の暑さ苦しさは充

分に想像できるし、ことに今日は今夏最高の気温だ。窓を閉めた監房内に身動きすら許されず、汗にまみれて喘ぐミシュリーヌ奥様の呻吟を思うと、冷房の中に安居するに忍びない彼女なのだった。

「けど、おかしいじゃないの。あの娘、向うの方ばかり見てるわね」

その通り、イヴェットの視線はともすれば広間の窓を見てしまう。半開きの窓の向うには、第四監舎の監房の窓がビッシリと閉じて並んで居る。其の右から四つ目の窓は第四監

房、あの中にミシュリーヌ奥様が……。イヴェットの胸はいたわしさに一杯、飛んで行きたい想いを抑えるのが漸くだった。

「あの娘、溜息ばかりついてるじゃないの」

「ありゃ恋病いに違いないねえ。保安課の二枚目達にや皆マダムがござる、と云う筋。あたしゃ、そう眠んだね」

「ふん。他人の恋路の心配するひまがあったら、自分のことの算段をおしよ。亭主、大丈夫かい？ 今日面会に来なかったじゃないか」

「へ、へん。憚りながら、うちのはね、あたしの性的魅力に首ったけさ。先週来なかったのは二日酔いだよ。今日来れなかったのはね、あたしの睨んだ所じゃ……」

「よく睨む女だね、あんたは。あーあ、死んじまいたい暑さだよ。冷たいビールをグーッとやれたら、年期が二、三年延びてもいいわ。もう、干上っちゃって汗も出やしない。あら、あれ御覧よ。シャワーから水がチョロチョロ洩れてるじゃないの!!」

「ほんと。もったいないねえ。ああ、ちくしよ」

「シーッ。ホラ又来たわ、あの恋患いの娘」

「今夜あたり、首吊っちまうんじゃない？」

あの思い詰めた顔だと、パッと散るわよ」

「ねえ、イヴェットちゃん。いい子ちゃんだから詰所でおとなにしようでよ。その方が人助けだよ。そんなに働いたって、お給料はおんなじじゃないか」

女囚達はこぼしながらも、まくった裾を直して両手を腿に置いた。

ミルドレーヌを連れてマジョーリが面会室から戻って来た。前手錠を腰バンドに押えられた姿のミルドレーヌは打ちうなだれて、背を丸めて眼頭を押え押えして居たが、何とな

しに嬉しげだ。

「御苦労様。あと何人ですの？」

「あと二人よ。三七四号と三三九号」

「じゃ、あとは私がやりますわ。お休みになつて」

イヴェットはそう申し出で、デスクで日直のモレシエンヌが口とがらせる。

「あーら、交替して呉れるんじゃないの？ 詰んないわ」

マジョーリは面会に付添ってやるのが好きだ。日曜に勤務する限り、殆んどの面会業務は彼女が切り回し、最大限の便宜を計らってやって居る。洩るマジョーリを詰所へ押し込み、イヴェットは面会伝票を引ったくった。

第十房の三七四号、年下の大学生のボーイフレンド達に、国家試験の問題を盗んで教えてやった元文部省秘書、背任で二年半の二十四才金髪だ。ボーイフレンド連中は全部起訴猶予で、自分だけが体刑だと云うのに愚痴一つこぼさない彼女は、今日はとりわけ浮き浮きして居た。繰返し繰返し手紙を書いた末、念願叶って、今日は彼等の中の二人が来てくれたのだ。

「パパやママじゃ肩が凝っちゃうし、こっちまで貰い泣きしちゃうもん」

革の腰バンドをイヴェットに締められながら唄う様に云い、

「やっぱし、セルジュとエドモンが一番誠実だったわねえ。どっちにしようかしら。あ、ちよ、ちよと待ってよ」

と、髪を掻き撫でる。

「やっぱり、かぶらなきゃいけないの？ 此のネット」

「当り前よ。早くしなさい。さ、いいわね」

イヴェットは、腰バンドの鉄環を潜らせた手錠を娘の両手に嵌めた。

「ほんと嫌ねえ、これは」

胸のあたりまでしか上がらぬ両手の縛しめをガチガチと鳴らし、若い女囚は眉寄せる。ベルディーヌあたりだったら、忽ち張り倒される所だ。うら若い娘の身で、こんな恰好のままボーイフレンドに逢うのは、陽気に振舞っては居ても悲しかろう。しかし、これが規則だから仕方がない。好いた男に逢いに行くのだと嗅ぎつけた連中が、鉄格子の中から白い眼を光らせて見送った。

面会室には二種類あって、大抵は一般面会室だ。そこは床から天井までが二重の鉄網に遮ぎられ、女囚は鉄網の内側に、手錠腰バンド姿のまま立って全身を相手に晒して会う。

鉄網の外側には椅子があるが、使用する面会者は先ず居ない。内側にも椅子があるが、それはロープ尻を握る看守用だ。鉄網の内外の者が味わう屈辱感と不憫さ、それを越えてな
お逢いたいと思う者同士だけが、此の獄舎で面会する資格あり、と云う訳だ。そもそも、ここは社会を害した者を社会から隔離しておく所なのだ。其の位の扱いをしておかねば、面会々々で日が暮れてしまいかも知れない。
何しろ、面会を禁止するには、表向きにはちゃんとした理由が要るのだ。社会に住む者には、面会を求める権利があるし、又、面会の呼び掛けを無視する自由もある。それとともに、囚人の方にとって、逢いたくない面会なら拒絶する自由もあるのだ。特別面会室にも矢張り二重の鉄網はあるが、下半身を遮る仕切りがあるし囚人も腰掛けさせて貰える。
しかし、特別面会室で面会させて貰える者は三監にも数名しか居ない。本館の個室へ移されると無条件で特別面会室、それも手錠なしと云う扱いになる。その時には、大抵の女囚が嬉しそうに両手を台上に置いて、縛しめないことを知って貰いたがるものだ。
三七四号は勿論一般面会室。扉の外の下でイヴェットに駄々をこねた。

「ね、担当さん。縛られてるのは仕方ないし諦めろわ。ですから、お願い。ほんの少しでいいんだから、口紅だけ塗らせて」
「駄目よ」

イヴェットは言下にしりぞけ、若い女囚の素顔が悲痛に歪んだ。イヴェットにもお白粉気はないが、口紅は生々と紅い。

「一生のお願いよ。すぐに落としますわ。恩に着ます。私の気持ちにもなって見てよ。靴底でも舐めるわ、お慈悲ないの？」

「駄目ったら駄目。早く入りなさい。それとも止める？」

面会室は保安課の所管。暑いので油売って居るのか今は空だが、通路の入口には、おっかない小母さんのデスクもある。モタモタ揉み合って居るのを見られたら面倒だ。如何にマジョーリとて、まさか化粧させたりはしないだろう。新米だと思つて些かなめて居る。
「さ、行くの？ それとも戻るの？ どっちにする？」

イヴェットはピシリときめつけた。

「こんなに頼んでのに駄目？」

女囚は恨めしげに、同じ年頃のイヴェットの唇を盗み見た。哀れさにイヴェットは

「第一、ここでそんなこと云つたって、私持

ってないわ」
と逃げ口上を呟く。

「嘘!! 胸ポケットに入ってるわ。私、ちゃんと知ってるのよ。ね、お願い。跪くわ」

云わでもがなの嘘を見破られたイヴェットは腹を立て、腰のロープを手荒く引上げた。

「立つのよっ。いい？ これ以上云うと、抗拒に取るわ」

女囚はよろよろと立って鼻を吸った。大体がイヴェットは手ぬるい。こんな時には、さつさと腰ロープを引き摺って連れ戻せばいいのだ。受刑者の分際で化粧をせがむ等とは飛んでもない女、面会取消しどころか、二、三カ月の禁止処分を喰わせるに充分な理由になる。

「罪に服する身で化粧なんか出来ると思つてるの？ 自分を何だと思つてるのよ」

腹立ちまぎれにイヴェットはつい云つてしまひ、若い女囚は身を揉む。そして

「すみません」

泣声で呟き、鉄鎖を鳴らせて眼頭を指先に持って行った。

「分つたらいいのよ。さ、会うの？ それとも……」

哀れさが又も胸にきざし、イヴェットは声

を和らげた。女囚は激しくうなずき、イヴェットは其の顔の涙と汗を拭ってやった。

泣いた女囚は面会室に入るや、忽ち陽気になって嬉しげな素振り、縛しめの身もなんのそので、男二人の名を呼び、いそいそと鉄網に寄った。イヴェットはロープを握って腰掛ける。女囚が床の制限線を踏み越えたら、革ロープを引き絞って、後ろ腰を引戻してやらねばならない。女囚は懐かしげに身悶え、さも嬉しげに口数多いが、二人の青年は口も重く、互いに顔見合せて女から視線をそらせ勝ちだった。まあ美人の方だろうが少々芯棒の抜けた女、そして、怠惰で卑怯な有産層の青年達。見るともなし、聞くともなしのイヴェットの想いは、又してもミシユリーヌの上に馳せる。

今朝、礼拝堂へと地下道を歩む女囚の群、その中に見出したミシユリーヌ奥様のうなだれた横顔は凄艶に朧たけて居た。薄暗い地下通路に、化粧もなしに灰白く浮んだ其のくればせは、イヴェットにとっては神々しいまでの美しさだった。

(拗ねても悪びれてもいらっしやなかったわ。御立派なミシユリーヌ様……)
時計を見たイヴェットはあわてて立った。

「さ、時間よ」

ホッとした様な色を浮べた二人の青年がイヴェットを眺め、カチ合った視線をうろたえて伏せる。

(私の威厳に打たれたのかしら? 制服の威光で凄いわね。馬鹿な坊や達だこと。あんた達が私を怖がることはないのよ)

「あらっ。もう時間?」

女囚は切なげに嘆き、動こうとしない腕をイヴェットが扼した。

「ね、また来てね。来てくれるわね?」

振り返って声を投げる女囚に青年達は

「ああ」

と生返事をし、逃げる様に立ち去って行った。大抵の面会者は、女囚が扉の向うに消えるまで見送るものだ。女囚は次の面会を既に胸に描くのか、廊下を曳かれながら嬉しげだった。しかし、あの返事の工合では、青年達はもう再び来る気づかいはないだろう。イヴェットは革ロープを握り直し、扼した腕を放してやりながら、そう思った。愚かな女心むき出しの若い女囚は、再び彼等が来てくれると信じて居るのだ。それ所か、先刻の話しの工合では、自由の身になった暁には、元通り彼等と遊ぶつもりなのだ。

(馬鹿な女ねえ)

イヴェットは思った。夫婦ならいざ知らずこんな浅ましい姿を見てしまった男が、二度とそんな女とつき合ってくれるものか。しかし、そんなことはイヴェットには関係ない。

監舎に戻って見ると、一騒動納まった所だった。余りの暑さと苦しさ、三一〇号のルーシーが失神して倒れたのだ。快適な場所にしか居たことのない彼女には、酷暑の監房に端座の責めが限界を越してしまっただけ。第十一房の鉄格子から突き出した腕が跳き、日直のモレシェンヌが飛んで行って見ると、ルーシーがベッドに横たわって蒼白な顔、ミルドレーヌが甲斐々々しく、シモーヌはオロオロと手当てして居た。手当てと云った所で無論何もある筈はなく、獄衣の胸をはだけ、素手で風を送ってやる位のことだ。モレシェンヌが現われるや、シモーヌはオロオロと席に戻ったが、ミルドレーヌは病囚に屈み込んで、閉じた瞼を引っくり返したり、脈を調べたりして居た。ベルディーヌあたりだと、先ずミルドレーヌを一喝して席に戻らせる所だが、モレシェンヌは

「ど、どうしたの? 大丈夫?」

と、うろたえて覗き込む。

「なあに、ビンタの三発も喰らわせればシャ
ンとするわよ」

「そうさ。仮病かも知れないわ。依怙最氣す
ると承知しないよ」

モニカとエドウィージュが毒ずいて呟き、
腕振って叫んだクリスチーナが

「お可哀想なこと云うもんじゃないわよ。あ
たしだって最初の夏は死にそうだったもん」

蓮葉女はそれなりに同情を示して、年下の
モレシェンヌ看守の意を迎える様に媚びた。

「暑さと心身の疲労による代謝機能の障害で
すわ。日射病の症状を呈しています」

ミルドレーヌは、きつい調子で云い

「何故、窓ぐらい開けといてくれませんか」

と更にモレシェンヌを責め、手の甲で額を
拭った。

「いいわよう、女医さん。しっかりね」

エドウィージュが小声でしかける。

「そりゃ、私だってそうは思うけど、でも規
則なのよ」

とモレシェンヌは弱気だった。

「ともかく、少しは涼しいとこへ寝せてやら
なきゃ。どうせ出して、呉れはしないんでし
よ。規則なんですものね。お水を恵んでくれ
る気ある？ ちゃんと手伝ってよ、シモーヌ」

ミルドレーヌはテキパキとルーシーの体を
抱え、最前席のベッドに横たえた。

「あら、ここだって同じよ」

クリスチーナはモレシェンヌを覗いながら
ベッドを病囚に譲り、ルーシーが弱々しく喘
いだ。

「御覧なさいよ。いくら罪人だからって、こ
んなにまで苦しめなくてもいいじゃないの。
所長さんに会わせて頂戴」

気押されながらも精一杯の威厳を繕って
モレシェンヌは云った。

「お黙り、三八五号。勿論、出して上げるわ
よ。鍵取ってくるわ」

モレシェンヌは、もとより出してやるつも
りだった。ただ、状況報告のことを考えて少
しおそくなっただけなのだ。ちゃんとした理
由なしに監房の戸を開けると、あとで根掘り
葉掘り看守長女史あたりがうるさい。

「担当さん。錠は仮錠よ。まだおてんと様が
カンカン照ってるわよ」

エドウィージュが嘲ける様に云った時、マ
ジョーリが飛んで来た。

「天使様が飛んで行ったよ。これで一命は取
り止めるわね。でも、おそかったわねえ、天
使様」

「そんな大袈裟なんじゃないわ。天使様だっ
ておトイレに入るわよ。ああ、あたしもぶっ
倒れようかしら。何しろ、今はこれだもん。
信用していたわってくれるわ」

八号監房あたりでマーサ達が呟き合う。

「馬鹿お云い。仮病は案外難しいもんさ。お
前さんの国みたいにガサツじゃないんだよ、
あたし達はね。感受性が繊細でさ、看守にな
る様な出来損ない女でも、アメリカじゃ立派
に名料理人で通っちゃうの。お前さんなんか
が、いくら赤札ぶら下げて泡吹いて見せたっ
て、すぐ見破られて一巻の終りだわ」

「そうとも。仮病だけは、使わない方がいい
よ。バレたら身の毛がよだつからね」

マジョーリは、一目見るなり仮錠のハンド
ルを引いて、ルーシーを出してやったのだっ
た――。

イヴェットが三七四号を連れて帰監した時
には、ルーシーは詰所のソファに横たわって
居た。マジョーリは、ミルドレーヌとシモー
ヌに命じて病囚を運ばせ、何かと用を云いつ
けて其の二人をも詰所に留めて居る。涼しい
所で息抜きさせてやろうと云う魂胆なのだ。
「どう？ 大丈夫かしら。どうなの、ドクタ
ー」

「もう、大丈夫ですわ」

と、ミルドレーヌは嬉しげだ。

「でも、再発したら大変だから、もう少しここに居なさい。坐っていいわ」

ミルドレーヌは白い歯をこぼして涙ぐんだが、かぶりを振って立ったままだった。

「あの、私もう戻りますわ」

シモーヌが云う。寝転んだり雑誌を見たりして屯ろするマリイやジャンヌ達に気がねしそして同囚連中にも気がひけるのだ。

「お前は雑用係よ。ここに居なさい」

シモーヌも涙ぐんで片隅に立った。涼しさに、立った二人の汗が見る見る消え、申し合わせた様に吐息をつく。そして次には、冷蔵庫の上の冷水器を見やって唾を辛うじて呑み込んだ。顎を撫でたマジョーリがさりげなく云う。

「もう少し水を飲ませた方がいいんじゃないかしら？ 先生」

「そうですわね」

と、ミルドレーヌが脚を踏み替えた。

「じゃ、飲ませておやり。今度はお前達二人で口移しに飲ませるのよ。分った？」

謎かけられた二人の女囚は冷水のコップを手に、代る代る屈み込んで咽喉をうるおし、

横眼で見やるジャンヌがニヤニヤした。ベルデイーヌあたりが居たら、あとでマジョーリと口論することだろうが、今日は非番だ。

電話が鳴り、モレシェンヌがイヴェットに云った。イヴェットは広間で三三九号の両手に手錠をからませた所だった。

「三三九号の面会は中止よ。面会者が帰っちゃったんだって」

「あら、そうお。どうしたのかしら？」

三三九号の肩がガクリと落ちて震え、耐え切れない嗚咽が洩れた。三三九号は四十半ばの栗色髪の色白女、戦争で良人を失ったあとを女手一つで一人息子を育てた苦労が、額の小じわと小柄な体に滲んで居る。息子も漸く成人して二十才、ホツとした所を年下の男から云い寄られ迫られて、勤め先の職を利用しての保険金詐欺、悔いた彼女が金を返すと云い、それを止める男をつい殺す破目になって八年の刑。かれこれ二年を過ぎるが、初めのうちは息子への手紙も梨のつぶて、半年前から漸く返事が来出して三通ばかり。マジョーリが面会業務交替を渡ったのも道理で、女囚の念願漸く叶って息子が逢いに来て呉れる気になった今日なのだった。

「お気の毒ね」

イヴェットは震える肩に慰さめた。

「あの子は……未だ私を許して呉れないんですのね。でも……でも、無理ありませんわ。あの子は父そっくりの頑固者で、曲ったことが大嫌いなんです。私は……泥棒女でその上に人殺し……」

三三九号はむせび泣いて呟き、手錠をはずされても背に両手を組むのを忘れ、茫然とした足取りで房へ戻って行った。

半時間の後、マジョーリは二人を詰所から連れ出して監房に戻した。

「さっさと入るのよ。どこまでグズグズしてるの、お前達は」

監房の前で、マジョーリはよく透る声で叱りつけ、大きな音を立てて、鉄格子戸を閉じた。息抜きをして来たミルドレーヌとシモーヌを、同囚達の陰険な矢面から少しでも庇ってやろうと云う慈悲の芝居だ。マジョーリは乱暴に二人の背を押しもしたのだった。

「ずい分と気を使ってるわ。そんなことしなくてもいいのよ、聖マジョーリ様。あんたならね」

どこかの監房で誰かが呟いた。

パリ警視庁捜査二課の朝の一刻。シンシア

婦人刑事が煙草をふかしながら云った。

「どう？ この新型。少し重いけど、扱い易いわ。軽々と回ること」

半環をはね上げては落として彼女が弄んで居る手錠は、装備課からねだって来た新品、ニッケル鍍金が真新に光る。彼女はシュザンヌより年上もいい所のオールドミス、決して醜くはない女性だが、何故か男性に縁遠い。年齢を聞かれるのをひどく嫌うが、同僚の年齢などは場所柄すぐ分る。シンシアが三十二才になって居ると云うことはシュザンヌも知って居た。シュザンヌはシンシアが嫌いだった。勿論、年齢の故ではなく、性格と云うか何となくウマが合わない。シンシアの方でも若くて美しいシュザンヌをうとましく思っている。平凡以下の容姿のセシリア婦警と仲が良い。捜査上必要なコンビを組ませる時にはメグレ警部も頭が痛いことだろう。とは云えシンシアは既にベテラン、ひよこのシュザンヌは其の指示や教えを仰がねばならないのだが、シンシアの意地悪さに齒がみするものも屢々だ。超党派のレイモンドが陽気に云った。

「あんたはアクセサリーに凝るのね。早いところ、それを嵌める相手を見付けることよ、シンシア」

(そうよ、そうだわ。何よ、こないだもヘマやって、アルペールに迷惑かけた癖に)

シュザンヌが痛快がった時、メグレ警部が顔を出して皆に云った。

「マダムもお嬢さんも、婦警は全員、明日九時に集合だよ。総監室だ。御不在の向きにも忘れずに連絡」

明くれば八月七日、パリの婦人警官を動員しての作戦が発動された。警視庁捜査課の婦警は全員、そして各警察署から選抜されたのと合わせて五十名を超える婦人警官達は、総監じきじきの訓辞と激励を受けて振るい立った。

後日、新聞の伝える所によればこうだ。

「……稀代の殺人鬼ガブリエル・パロー、十数名の街の女をいたぶり殺した此の兇悪犯に對し、最初の被害者アニーの死体発見後四十日にして、当局は遂に四戦術に踏み切った。眦を決した婦人警官達は、つつましくもいかめしい其の制服をかなぐり捨て、唇を赤く塗り眼にかけを刷き、軽やかに派手なスカートと舗道に穴をあけそうな細い踵のハイヒールを穿いて、身を挺して夜の街を往ったのである。結局は無駄骨に終ったとは云え、命を賭けての其の活躍振りには、全く涙ぐましいものがあった……」

のがあった……」

婦人警官達は緊張しながらも、時には浮き浮きと嬉しげだった。所詮縁のないことだと諦らめて居た濃化粧や派手なドレス、男の目をひき誘惑することのみを目的とするそれらの粧いは、女性の本能として、表面は軽蔑しつつも潜在意識には憧れを持って居る。天下晴れてアイシヤドウもつけられるし、肩むき出しで町を歩けるのだ。それに、なんと嬉しいことには衣裳代と化粧料を支給して貰えたのだ。

「私、透き通ったスカート穿いて、背中を大きくあけちゃおうと」

「素敵なのを誘惑しちゃおうかしら」

そんなことを口走るのは、容姿容貌に些か自信ある連中、彼女達は熱心に、服装や化粧に就いて研究し合うのだった。担当区域や連絡方法等に就いての細部の打合わせも何度か持たれ

「見る男が見たら、私なんか魅力百パーセントよ。警部には女性を見る眼がないのよね」

四部隊の第一線からはずされたレイモンドがふくれ面をした。

次の日の夜から、婦警達は街に盛り場に、バッジと拳銃を秘めたバッグを手にして散っ

て行った。注意深い遊び人ならば、夜の天使達の数が些かふえたと感じたかも知れない。

それも、少々ギコチない新米女達だ。細いズボンの兄さん達が時々近寄っては、二言三言からかつて行く。彼等も警官だ。然るべき筋には話しを通してあるとは云え、チンピラや正真正銘の街の女達から、健気な婦警達を護ってやらねばならないし、情報の交換や連絡もあると云う訳だ。犯人の名前はるか、漸く聞き込み得て居る体格人相もまちまちで、曖昧極まる状態。だから、声かける男には大抵応じて、念入りに調べねばならない。

最初の晩、シュザンヌは忽ち四人の浮かれ男に捉まった。彼女の方から声をかければ、十人は集まっただろう。打ち合せてあるホテルやアパートに連れ込み、単なる遊蕩男と見定めてから、口実を作って突き放す。彼女は金額を吊り上げると云う手を使った。二人の男はぶつくさ云いつつも去り、その一人は、警察に届けると捨ゼリフを残した。憤慨の余り、ほんとに訴えたかも知れないが、所轄署では苦笑いして追い返したことだろう。三人目の男は値上げに応じて迫り、隣室に待機する警官が、ヒモを装うて追い払う破目になった。四人目は彼女に酒をしつこくすすめて自

分も酔払い、彼女の一突きで他愛なく床に伸びた。

(ほんとに男って卑らしいのねえ。でも、二人目のはちょっと素敵だったわ。残念だったかもね。アルベールったら、私のこと一体どう思ってるのかしら)

昼に寝て夜起きる生活もこれで三日目、夜目にも白々とそびえるサクレクル寺院を見上げ、シュザンヌはふと男を焦がれるのだった。ピタリと腰の線をきわ立たせたドレスの裾は軽々と、むき出しの肩や胸許が夜風に涼しい。この姿をアルベールに見て欲しい様な、見て欲しくない様な心地だった。マルソ一通りのはずれ、一軒の酒場の前で、彼女は屈強な男に声かけられた。彼女が其の酒場の扉を押して居たら、初恋の男アンリ・クリュイタンスのピアノ弾く姿を見出だしたであろう。しかし、彼女は踵を返して男と歩んだ。

「ひまかい？」

「ええ」

「きみは未だ新米だね。ショルダーバッグを肩にかけてるものな。手にさげるもんだよ、粹にね」

「あらそうお。誰も教えてくれなかったわ」「いくら？」

「百フラン。朝のコーヒーと一緒に飲むのなら二百五十よ」

受け答えしながら、シュザンヌは男を観察した。どうもあて外れらしい。こんなに遅ましく屈強だと云う線は出て居ないし、どうやら訛はイタリア系だ。

「高いな。ま、いいだろう。勿論、きみのアパートへ行くんだね？」

定められたアパートの室なら、自分の住いと装おえもしようが、先刻の連絡によれば、此のあたりの特定アパートは生憎皆ふさがって居る。

「う、うん。ホテルへ行くの。その方がいいわ」

「いや、きみんちの方がいいんだ。落ち着いて趣味に合うのさ」

男はシュザンヌの肩に手をおき、女の住いを主張した。

「でも、私のアパートは遠いのよ」

シュザンヌは男をここで突き放そうとし、そして其の瞬間、心に思い当たった。先月、ミラノの警察から手配のあった男によく似て居る。名は分らないが、モンタージュ写真は回付されて居た。

(さよならはよししたわ。確かめて、見ようっ

と。でも、私の此の記憶力!! セシリアあたりだと、こうはともに行かないわね)

男の容疑は官名詐称、脅喝だ。夜の女の弱身につけ込んで、体を切り売りした金を脅し取る常習犯、イタリヤでの稼ぎもヤバくなったのでパリに来たらしい。

「いいわ」

男の手を肩から離しながら、シュザンヌは云った。そして、あたりを見回す。警察に引き渡すのは簡単だが、若し間違つて居たら大恥だ。何しろ、彼女は本庁の婦人刑事なのだから。ともかく、現行犯を取押えるに如くはない。パトロールしている筈の私服は見当らず、地下鉄の入口でシンシアに逢った。

「あら、いい男を捉まえたのね」

「ウフン。このひとつたら案外ケチなの。プロヴァンス街へ帰るわ。あたしんちでなきゃ嫌だって」

片眼をつぶって見せたシュザンヌは安心した。いくら仲の悪いシンシアでも、これで一応の手配はしてくれるだろう。いざとなったら大声を挙げるだけだ。柔道は茶色帯のシュザンヌだったが、此の大男を独りで取押える自信はなかったのだった。

「ここよ。ちょっと待ってね」

彼女は念のため、廊下を曲ってサンシールの室をノックしたが、どこをうろついて居るのか返事はなかった。電話をかけたかったが室へ入れた男が気になった。物色されれば、身分の知れる物を見付けられるかも知れないのだ。自室に招じてしまったことを軽く後悔しつつ彼女は意を決して男と向かい合った。

「商売に似合わない暮らしをしてる様だな」

「あら、こう見えても、あたし家柄と育ちはいいのよ。ねえ、三百フラン頂戴。ここへお連れしたのは初めてなんだから」

「いいよ」

男はあっさりと三枚をほおり出した。

「取れよ。そして、早く支度しな。いいアンヨしてるじゃないか」

(さあ、ことだわ。身分、明かしちゃおうかしら。凄い冒険を初めたものね。お金、取ったらどうなるかしら。テレビだと、ここでアルベールの登場って場面よ。でも、笑いごとじゃないわ)

男は彼女の体を眼で舐め回しながら

「さ、早く納って、シャワーでも浴びな」

と促がす。ままよとシュザンヌの指が紙幣に触れた途端、男の態度がガラリと変った。

「よし。こら、支度して一緒に来い」

ドスを利かせてそう云い、ポケットから手錠を取り出す。

「あらっ。あんた一体なに? どうしたって云うの?」

「特別衛生法違反で逮捕する。来るんだ。手を出せ」

シュザンヌは却って落ち着いた。これで官名詐称だ。

「あんた、デカなのね。でも、見かけない顔だわ」

「こないだ風紀係へかわったとこだ」

「そうお。逮捕はいいけどペーパーあるの」

「馬鹿野郎。現行犯に逮捕状が要るものか。売春と麻薬の捜査には、囹捜査が認められるんだ」

「卑怯ね。フェアじゃないわよ」

そう云ってシュザンヌは吹き出しそうになった。彼女も、囹捜査で脚を棒にして居るのだ。

「ふてくされてないで立て。つべこべ云うとこれを引っかけて地下鉄に乗せてやるぜ。そのドレスじゃ隠しようもなからうな、え、いい育ちのお嬢さん」

男は手錠をカチャつかせた。

「だってひどいわ。ちゃんと鑑札あるのよ。」

「見せるわ」

彼女は、拳銃を忍ばせたバッグに手を伸ばす。

「動くな。あのなその鑑札は診断書なんだ。病気は持ってませんと云う証明書に過ぎんだぜ。売春して、いいと云うことじゃないんだ」

（よく知ってるわ。研究してるのね。もう少し、お芝居して見よう）

シュザンヌはバッグから手を離し、打ちしおれて鼻噓って見せた。

「ねえ、かんにんしてよ。あたし、故郷へ仕送りしてるの。母さんは病気だし……」

「パパは居なくて、小さい子供が二人居て、伯母さんに預けてあるんだろ？」

シュザンヌは更に鼻を噓った。

「少し違うけど、まあそんな所なのよ。ね、お願い、見逃してよ。恩に着るわ」

どう、私の此の演技力!! シュザンヌは冷静に観察し、男の持つ手錠に刻印のないことを見定めた。おもちゃらしい。

「うるさい。来るんだ」

男はいきなりシュザンヌの左手に手錠を叩きつける。物馴れた手付きを装おうとしたのだろうが環が回り切らずにブラリと揺れた。

（下手くそ!!）

シュザンヌは胸で嘲けりながら精一杯の恐怖を示し、男はあわてて環を閉じた。

「あつ、かんにんして……」

「おとなしく来ないからだ。暖房の利いた部屋に六、七週間御逗留願うとするか」

「ねえ、見逃がして頂戴、後生だから。あたしこんなことをば初めて未だ間がないのよ」それは本当だ。

「あんたも先刻そう云ったじゃないの。あつ両手にはかけないで。手向いはしないわ。ね見逃がしてよ。なんでもするわ。勿論、お金は返すし、なんならただで……」

男はシュザンヌの顔を見下ろし、急に態度を変えた。

「うむ、まあ話半分としても可哀想な所もあるな。暮らし振りも一応ちゃんとしてるし、更生の見込みはあるなあ」

「ほんと、もうこんなことしないわ」

「そうか。所で物は相談だが、俺も仕事だ。何もなしに見逃がす訳にゃ行かないぜ。分るだろうな？」

さあ、おいでなさったわ、とシュザンヌは更に打ちしおれ、左手を男に預けたまま、右手で眼を押えて見せる。

「今度だけは見逃がしてやるぜ」

「ほんと？ 嬉しい」

「だから、代金を払うんだ。カンの鈍い女だな」

「取引しようとするのね。分ったわ。いくらなの？」

「有金全部だ。其の体と顔じゃ、もうシコタマ貯めたに違いないな。二、三千フランがな」とは云わせないぜ」

「まあ!! そんなに儲かるの？」

「なにイ、他人事みたいに、トボけやがって……」

シュザンヌは、あわててしゃくり上げて見せる。

「そ、そりゃ、少しは貯めてるわ。でも、銀行よ」

「嘘吐け。お前みたいなお商売の女は、いつも手許に現金を蔵い込んでるのが相場なんだ。思い切りの悪い女だな。俺はどっちだっていいんだぜ。今頃の豚箱は快適だろうて」

と片手錠をグイと引張る。

「い、いたいわ、かんにん。諦めたわ。でも、明日じゃいけない？ 明日なら三千フラン耳をそろえるわよ」

「往生際の悪い女だ。現金がなけりゃ、宝石

を出せ。俺の睨んだ女が稼ぎの悪かったため
しはないんだ」

「あーら。じゃ、あんた、いつもやってるの
ね、こんなこと」

男はうろたえて呟鳴った。

「うるさい。四の五の云うと、後ろ手に叩き
込んで町を歩かせるぞ」

と、又も手錠を引張る。

「かんにん。ほんとにもう諦めたわ。お金
その鏡台の抽き出しにあるの。取っていいわ
だから、もうこれ外してよ」

「よし。自分で行って出すんだ。いいか、お
前が自発的に出したんだぞ。立て」

「かんにんして。今のは嘘よ。あたし、いつ
も持って歩いてるの。出すわ。ああ、でも二
週間分の稼ぎなのよ。泣けて来ちゃう」

「豚箱暮らし六十日よりましだろう」

「そうよねえ。いくらなの？」

「全部出すんだ。又、稼げよ」

シュザンヌはノロノロとバッグに手をかけ
拳銃を取り出すや否や左手を振りもぎり、忽
ちキッと身構えた。今度は忘れずに安全装置
をはずす。

「な、なんだ？ おっ」

仰天する大男に、シュザンヌは勝ち誇って

云った。

「官名詐称、脅喝現行犯よ。逮捕します」

男はポカンとした。

「俺は、俺は刑事だぜ、おい。君は一体……」

「ホ、ホ、ホ。私も警察官よ。ホラ」

彼女はバッジを取り出し、片手錠をぶら下
げた左手で示した。男は蒼ざめて歯がみし、
シュザンヌは胸許と裾を繕ろう。

「うまく引っかけたな」

「それはお互い様ね」

「俺も身分証明書持ってるぜ。見せようか」

とポケットに手をやる。

「これっ。じっとしてるの!! 手を上げなさ
い」

「でも、俺はレッキとした……」

「レッキとした何なの？ もし、ほんとに警
官なら、贈賄強要ね」

シュザンヌは油断なく身構えながら、手探
りで手錠を取り出した。

「これは本物よ。後ろ向いてっ」

相手が体格秀でた男なので、シュザンヌは
後手錠をかけた。銃口を男の広い背に押しつ
け、鮮やかな手際で素早く両手に叩き込む。
遅ましくガッチリした肩が無念げに悶え、シ
ュザンヌは更にきつくしてやった。こちらを

向かせると

「ちくしょう、俺もヤキが回ったなあ」

と、剃痕の濃い頬が青々と歪んだ。ポケッ
トには、やはり拳銃が忍んで居た。手錠は玩
具だったが、拳銃は本物だった。

「分った？ 逮捕と云うものは、こう云う工
合にやるのよ。え、フランチェスコさん」

シュザンヌは、更に革ロープを手錠に結び
ながら云ってやった。胸がスツとした途端、
馴れぬ高い踵によるめいたが、男には見えな
い。

「シルヴァーナさんにはマリオだったわね。
ミラノのサンドラさんにはアルトゥロだし、
どれが本名なの？」

男は歯ざしりした。

「ち、ちくしょう。ここまで手が回ってるの
か」

「当り前よ。さ、今は車に乗せたげるけど、
すぐに汽車に乗って長い旅行よ。こんな恰好
をしてね。所で、此の玩具の鍵はどこにある
の？ あ、あったわ。チャチな鍵」

シュザンヌは自分の左手のオモチャを外し
た。緊張のせいか汗が吹いて、オモチャの手
錠の内側はヌルヌル濡れて居た。

「さ、おとなしく来るのよっ。おいで」

シュザンヌは手荒く革ロープを引張り、男は痛さに呻いた。きつくかけた鋼鉄の縛しめの威力は大したもの、大の男がこれでもうシュザンヌの意のままに屈伏する。

「き、きみが連れて行くのかい？ ウッ、痛いっ」

「あら、私じゃ駄目？ あんたは私に逮捕されたのよ」

扉を出た所で男は身悶えし、肩のあたりまでのシュザンヌを横眼で見下ろし、隙あらばと云う様子だ。

「おとなしくしないと、これよ」

シュザンヌは男の利腕の肘を急所で掴み、男は悲鳴を洩らした。

「ちょ、ちょっとゆるめてくれよ」

「ダ、メ」

玩具とは云えシュザンヌは、此の男に手錠かけられて少しは痛い思いもさせられたのだ。階段ですれ違った夫婦者が驚いて見送った。

「先刻の三百フランの中からタクシー代を払うわよ。嫌なら、こうして地下鉄ね。先刻は車にも乗せてくれずに地下鉄だったわ。あんた、案外ケチなのね。どうするの？ 皆が面白がって見物するわ。ホホホ」

シュザンヌは赤い唇に勝利の笑みを浮べ、男をいたぶった。

「車、車にしてくれよ」

「そうお。あんた、体に似合わず気は小さい

女性写真モデル募集

分譲写真撮影のため

奮て御応募下さい

○本誌では、代理部分譲品用の写真を撮影するため、女性モデルを募集しています。

○本誌愛読者の方でしたら、年令、遠近は問いません。分譲品用ですから誌上に発表いたしません。又、誌上発表可能でしたら尚結構です。又、助手介添え或はプレイのみ出演御希望の方は御照会下さい。

○出演又は参加御希望の方は、年令略歴記

載の上編集部宛お申込み下さいれば、報酬その他詳細につき、お返事いたします。

○応募されました方々の個人的な秘密は固く厳守いたしますから御安心下さい。尚お好みの傾向を附記下さいれば好都合です。

○本誌の内容充実のため、並に皆様の文献研究資料作成のため、奮って御応募御参加下さるよう、お待ちいたします。余暇を利用しての御参加も大いに歓迎いたします。

○特に妊婦資料の作成に御協力下さる婦人を求めています。撮影可能の方は、遠近に拘らず御一報下さるよう願います。

△奇ク編集部△

のね」

シュザンヌはタクシーを呼び止め、自分の服装を慮んばかりで運転手にバッジを示してから、男を押し込んだ。

「煙草吸わせてくれないか」

「何云ってるのよ」

シュザンヌは紫煙をゆったり吐きながら笑った。

「あんたはやっぱりホテルの方がよかったんじゃない？ コーヒー一杯も出さなくて失礼したわねえ。これからいいところへ連れてったげる。三食付き、ただのホテルよ。六十日なんて云わないで、三、四年逗留してよ」

紫煙と共にシュザンヌはそう云い、怒りと憎悪をこめて、男の口惜しげな横顔を見やっした。事もあろうに警察官の名を騙って女性達を泣かせた此の男に対しては、その頬をぶちのめしてやりたい程の気持だった。シンシア婦警は遂に何等の手配をしてくれた気配もなく、シュザンヌは舌打ちした。

そして、今度はシュザンヌも転居することになった。そして又、目指す兇悪犯ガブリエル・パローの方は、それから五日の後、本物の娼婦の注進によって、あっさりと御用になったのだった。



△マゾヒスチック・ストーリー▽

モッキン・バード

(続)

三 原 寛

午後二時、イルゼは青山のマンション、シャトー・Mの豪華な寝室で目を覚まし、そのダイナミックに盛り上った胸を思い切り反らして大きくあくびをした。

勢よくカーテンを引くと、明るい昼下りの陽差しが部屋一杯に注ぎ込み、窓からは滴るような緑が溢れる。はち切れそうな太腿の筋肉をぷりぷりと動かして大柄なイルゼがベッドの上に半身を起すと、ベッドのばねがきしみ、イルゼはもう一つ大きくあくびをして部屋中にむせるような健康美をまき散らした。ベッドの脇の電話器に手を延して、イルゼ

は、モッキン・バードの譲を呼び出した。女王様の出頭命令である。譲が自慢していたアルファ・ロメオ・ジュリアスパイダー一六〇〇CCは今ではイルゼのクラブ・リイまでの足となって、譲自身は昔使っていたジャガー10型を引っ張り出して使っているのである。三七八CCの強力なエンジンを持っている六二年型である。シャトー・Mのパーキング・エリアになっている地階に、そのジャガー10型を勢よく滑り込ませ、タイヤを軋ませて車を駐めた譲は、細身のデニムのズボンにキッドの上衣をひっかけて、コンパスの長い足

で大腿にロビーへの階段を駆け上り自動エレベーターのボタンを押した。イルゼの部屋の前に、顔を熟れたすもものように脹らした金森が立っていた。英国仕立らしいウールの背広をきっちりと着込み手にはコートを抱え込んでいる。

「お前さんの実力じゃリターン・マッチはもう五、六十年も経って俺が老ぼれてくるまで待った方が為だろうよ。もっともお前さんの方が齡をとらないとしての話だが……」

廊下の壁にもたれかかった譲は金森の紫色に脹れ上った顔を意地悪く眺めながら声をか

けた。

「そんな話じゃない。俺は彼女に手附金を払ってある。その片を附ける為に来たのだ」

金森が恨めしそうに答えた。

「その為に、俺は朝からこうして待ってるのだ。何度呼鈴を押しても返事はないが、彼女がこの部屋から出て行った様子もない。俺は今日の夕方までに必ず彼女と話をつけねばならないのだ」

それを聞いた譲は、大声を上げて笑い出した。

「電源の切れたベルを何度押しても鳴る筈がない。朝早くからそんなものを押し続けて今まで立ちん棒をしていたとは御苦労な事だ」

譲は押しボタンの突起をつまんで右の方に一と捻りしてから、ゆっくりとボタンを押した。奥の方でブザーの鳴る音がかすかに聞えてくる。譲はボタンを左に捻って元の位置に戻した。こうすると電源が切れて、知らぬ者が押してもいちいち煩わされることがない。

ドアが開いてイルゼが顔を出した。譲の後に立っている金森をみて、彼女は眉をひそめた。

「何なの、この男？」

薄いネグリジェが彼女の胸に盛り上った二

つの巨大な乳房からカーテンのように垂れ、後からの逆光線を受けて全身の曲線がシルエットを作っている。イルゼはネグリジェの下には何も着けてなかった。

「昨夜お約束の通り、三十万円の小切手をここに持って来ました。今夜I国の局長と会って戴けますね？」

金森は、今朝早く、三十万円の小切手を書いて呉れた管掌重役の苦り切った渋面を思い出した。彼女には悪いヤクザのヒモがついていて、この通り殴られて酷い目に遭ったが、五十万円出す事で漸く話をつけたのだと説明したのだ。重役は、「先に二十万渡してあるのなら、残りの三十万円は後払いにした方がよくはないのかね」と疑わしげに眉をしかめたが、二百万弗の目前の契約と、この取引によって、I国の大統領との直結のラインにつながる事が今後十年間に亘って年間十億の賠償の独占を意味する事を考えて、今は総てを金森に一任するしかなかったのだ。

イルゼも昨夜クラブ・リイの楽屋に二十万円の小切手を持っておすおすと訪ねて来た金森を思い出した。

「だったら、さっさと小切手を出したらどうなの？ あたしに貢ぎたがってる男は大勢い

るんだから、変に勿体づけるんだったら受取って上げないわよ」

イルゼは、慌てて内ポケットをまさぐっている金森を意地悪い笑みを浮べて見下した。

譲はイルゼのベッドに腰を下して煙草をくゆらしている。金森の手から三十万円の小切手をひったくったイルゼは口許に勝ち誇ったような嘲笑を浮かべた。

「じゃあ、お望み通り、これは貢がせてあげるから、お礼を言っ、さっさとお帰り！」

小切手を片手にひらひらさせながら、イルゼは扉を閉めようとした。

「約束は、約束はどうなるんです？」

扉を手で押えて金森は必死で喰い下った。

「ああ、あの田舎の局長さんのことね？ 気が向いたら会って上げてもいいわ。六時頃、またここに来たら？」

「気が向いたらでは困るのです。必ず局長に会って戴かねば困ります。約束して下さい！」

「くどいわね、六時だって言ったじゃないの？」

泣き出しそうな金森の鼻の先で扉が大きな音を立てて閉じられた。

午後四時三十分、譲は六二年のジャガー10型三七八—CCの運転席でハンドルを握っていた。後部座席で、けたたましい嬌声を上げるイルゼの太腿を抱え込んで、そのこりこりした筋肉に唇を這わせているのはイルゼのアミであるチャーリー、アメリカの食品会社の東京支社のマネージャーである。チャーリーは本国で職にあぶれていた。あぶれていたというより、怠け者の彼に、汗水流して働らく気がなかったのだ。

大した食品会社でもなかったが、求人広告にに応じて、一カ月の講習にも真面目に出席したのは、日本へ行けるといふ魅力があったからだ。

まだ三十にもならぬ彼は、東京駐在員として、予想以上の実績を上げ、一年のうちに、出張所は支店に拡張され、支社になって、彼はマネージャーの地位にのし上った。彼の手腕が卓越していた訳ではない。彼が本国で受けた講習会のガリ版刷りのテキストに、やせ馬の鼻先に人参を吊るした挿画があり、説明の方は何と書いてあったか忘れたが、全く日本という国は彼が実績を上げるのに都合のよい国だった。

彼が新聞広告で大勢の応募者の中から選ん

で採用した秘書、富村梨枝子は、実際、全く申し分のない手腕家だった。チャーリーは、万事を富村梨枝子にまかせて、ただ遊んでいればよかったのである。支配人室の革のソファにふんぞりかえって足を投げ出したチャーリーの前にひざまずくようにして靴のひもまで結んでくれる富村梨枝子も、同じ日本人使用人達に対しては、まるで虫けらを扱うように扱った。チャーリーの仕事は本国から輸入したインスタント食品類を、セールスマンを使って売り捌く事だったが、本国に較べると驚く程安い報酬で日本人達は全くよく働いていた。それでも、ノルマの落ちたセールスマンは富村梨枝子は容赦なくクビにした。

代りはいくらでも募集出来た。学歴も年令も問わず、実力本位のこの会社の報酬は、それでも他の日本の会社よりは好条件なのである。ノルマの達成出来ない男は当然だったが富村梨枝子の御機嫌を損じる事も直ちに失職を意味した。仕事面ではチャーリーに総てをまかされている彼女は絶対権力を握って女帝の如く君臨していた。彼女をみだらな眼で見たという理由でクビになったセールスマンもいた。それで、セールスマン達は彼女の前に出ると、おどおどと眼を床に落してうつむく

のだった。ノルマを達成すれば五万円の固定給がつき、それ以上に実績を上げると歩合給が貰えるのだがいつの頃からか、誰からともなく、この歩合給の分はそっくり富村梨枝子への貢ぎ金という事になっていた。それでも学歴、職歴のない連中にとって、五万円の報酬はなかなか他では得られない為、不平をいうものはなかった。そして、たとえ、ノルマを月々達成していても、それ以上の実績が上らず、彼女への貢ぎ金の出来ない男は、不利な地域を担当させられたり、配達とか集金とか売り上げに関係のない雑用を命じられて、結局ノルマが達成出来ない様な破目に追い込まれて、辞めさせられてゆくのだった。彼女の気まぐれ次第で固定給も自由に上げたり下げられたりした。彼女がトイレに行くと、蒸しタオルを捧げ持った男達が先を争って飛んできた。鼻をかんだ紙を床に捨てるとバツタのように飛びついた。

チャーリーは富村梨枝子を時々可愛がってやった。事実上は彼女のお蔭で、本社でも驚く程の実績が上り、月収三千ドルの現在の地位に安閑としていられる訳だったが、それに彼女は、ファッション・モデルをしていた素晴らしい肢体と、日本人離れのした彫りの深

い端整な容貌が冷いまでの尊厳さをさえ感じさせて、近寄り難い印象を与えるのだったが、あつけない程簡単にチャーリーの誘いに乗ったばかりか、本国で日本帰りのG・I達に聞かされた「黄色い便器」^{イエロー・ストウール}そのままの奉仕まで進んで行なうので、今では、お情けで恵みを垂れてやっているのだという気にさせられていたし、富村梨枝子もそれにすっかり満足しているようだった。チャーリーとしては、今では、この東京支社マネージャーという、うまい地位を確保する為に、時偶、富村梨枝子を「黄色い便器」^{イエロー・ストウール}として使ってやる事以外に意味のない行為になっていた。そしてチャーリーの本当の情婦はクラブ・リーのダンサー・イルゼであった。



午後八時、熱海のゴージャスなホテルの一室で、パンティとブラジャーだけになったイルゼは全裸の譲を馬にして、部屋中を乗り廻して面白がっていた。

プロ・ボクサーだった譲は全身が鋼鉄を叩き上げたように強靱だったが、大柄のイルゼが背中の上で嬌声を上げて躍動すると背骨が折れそうにしない、膝の痛みはまるで拷問に遭っているようだった。筋肉の盛り上った太

腿で譲の腰を締めつけ、薄いパンティを通して感じる譲の背中の暖いリズムカルな動きがイルゼの興奮を誘い、イルゼはこの遊びを容易にやめようとしなかった。チャーリーはソファに仰向けにひっくり返って、ジンをがぶ飲みしていた。

イルゼは思いがけず五十万円の現金を手にして、すっかり御機嫌だった。早速チャーリーを呼び出して、譲に運転させて、熱海に遊びに来たのだ。今夜は、クラブ・リーなんて糞喰らえである。馬乗りに倦きたイルゼは、譲を控えの間に追い出した。歓楽の一夜をチャーリーとゆっくり味わうのだ。控えの一室は廊下にそのまま面した狭い部屋で、ここで一寸した来客の応接をするように、丸い硝子の卓子と小さな椅子が二つ、卓子の上には灰皿が一つ。そして籐製の寝椅子が一脚、部屋の隅に置いてあった。

譲は電灯を消して籐椅子に横になった。幸い暖房がきいて全裸の身体を毛布でくるんだだけで全然寒さは感じない。暗い中に、じっと目を閉じて眠ろうとするが、隣室の嬌声が耳について落着かない。ドシンという物音、チャーリーの悲鳴、イルゼの大きな笑声、余程の悪ふざけをしているらしい。ベッドのき

しむ音、呻き声、揉み合う気配、譲は頭を抱え込んだ。譲はイルゼのモッキン・バードである。イルゼは未だ彼に肉体を許してないし、今後も許してくれないだろう。譲と知り合ってから、イルゼはチャーリーをはじめ、次々に男を漁り遊び廻っているが、身体を許す相手は白人だけである。黄色い人種に身体を許すなんて思いもよらないことである。それこそ、豚に真珠の首飾りをつけてやった方がまだ冗談としては気が利いている。夜通し悩まされた譲が漸くうとうとしはじめたのは、もう翌朝の太陽が、かなり高く登った頃だった。譲は、いきなり髪をつかんで引き起された。イルゼが女豹のような表情で立っていた。チャーリーはイルゼにすっかり精を吸いとられて、ベッドの上に鮎のように眠りこけていた。イルゼは譲の髪をわし掴みにして床の上に引きずり下し、足を上げて譲を床の上に押し転がした。

譲は、イルゼのこの行為に慣れていた。パンティとブラジャーだけのイルゼが腰に手をあて、仰向の譲の頭上に股をひろげて立ちはだかった。『毎朝の規則正しい便通はあなたの健康のバロメーターです。』というテレビのコマーシャルを譲は何となく思い出して

た。イルゼがパンティをずり下しながら言った。

「昨夜はラングウスト・オ・シャンパーニュ（伊勢えびのシャンペン揚げ）にアルティシユー（花野菜）、チャーリイったら、知らないでアルティシユーの葉を食べようとしたわフフ、それからデザートはオムレツ・ノルヴェージュ（アイスクリームにラム酒を注いで火をつけたもの）だったわ」

食べたものを聞かせるのがイルゼの癖である。食べるのはイルゼであって、譲は昨日から何も食べさせられてない。イルゼは例えそれが一旦自分の体内を通過したものであっても、兎に角御馳走を与える気にいるし、譲もこれを ambrosia（神の美食）として拝受していた。譲は、この用語を、パリの男色バーダに美少年漁りに来ていたサディスティンのマムに "Nouriture Ambrosiaque" つまり神に与えられるかぐわしき餌として教え込まれたのだが、イルゼにしてみれば、自分の排泄する汚いものをネクターとかアムプロウジャとか勿体をつけて譲に下げ与え、それをまた譲が随喜の涙をこぼさんばかりにおし戴くことにいいようなない優越感を満足させていた。

実際、ネクターとかアムプロウジャとは

いっても、人間にとって最も汚らしいものの一つであり、それを口にすることは、それを排泄した相手の高貴な美に対する崇拜の念が極致に達せねば出来ない事で、一方、与える方にしてみれば、同じ人間が自分の排泄物を涙を流して有難がりながら口にするということには、人間として味い得る最高の優越感に浸れるというものである。固い床の上に仰向きになった譲の顔の上に、イルゼの豊満なお臀がずっしりとのしかかり、譲は息を詰まらせてあえいだ。

イルゼは卓子の上に手をのばしてシガレットを一本抜きとり、口にくわえて、カチリとライターをならした。譲の熱い鼻息、ぬめぬめとうごめく唇の感触を心地よげに、腰をしやくっておしつぶしたイルゼは、ふうっと紅い唇から、紫煙を朝の空気に向かって吹きつけた。

午後八時、金森はTホテルの正面ロビーから、回転ドアを通過して力ない足どりで冷え込んだ夜風の当る車寄せの隅にたたずんでいた。

午後六時、約束の時刻にシャトウ・Mのイルゼの部屋を訪れた金森は、エレベーターの

脇の管理人室の白い詰えりのいんぎん無礼な雇人に「彼女は四時頃、お連れの方とお出かけになりました」と告げられた。その青白い若者の勝ち誇ったようなしたり顔の前に、それ以上悲痛なうちひしがれた自分をさらしものにしたくなかった金森は、早速クラブ・リイに電話してみたが、まだイルゼは来てないとの事だった。シャトウ・Mのパーキング・エリアの前で寒風にさらされながら一時間も待ったが、イルゼが、帰って来る様子もなかった。もう一度クラブ・リイに電話すると、今度は別の男が電話口に出て、ミス・イルゼは今晚は欠勤すると連絡があったと教えて呉れた。

持ち逃げされたのだ。いずれ、このシャトウ・Mに戻ってくることは判っているのだから、取り戻すチャンスはあるのだが、それよりも、彼女自身を、どうしても、たった今、掴まなければならぬのだ。表沙汰には出来なかった。贈賄、外国為替管理法違反、売春斡旋、これは言い繕う余地がなかった。それに、事件を拡げない為には彼自身背任横領の罪を着ねばならないおそれさえあった。途方にくれた金森は、Tホテル、新館四階のI国の国防局長の部屋をノックした。部屋の中か

らは数人の談笑が聞える。ぶくぶくと醜く肥え太った局長が、ずり落ちそうにふくれ上った腹をよちよちと短い足で支えながら、両手を広げ肩をすくめた。背の低い局長の頭越しに、顔見知りのS商事のY課長の顔が部屋の中に見える。

「ユー・カム・トウ・レート・ネ」

脂ぎった顔に淫らな笑みを浮かべた局長は部屋の中を振り返ってみせた。ベッドに金髪の女が、恰好のよい脚を組んで、しどけなく腰を下していた。局長が振り向くと、腰をくねらせ、ウイंकをして、真赤に塗った唇をすぼめてちゅっと鳴らした。

「わたし、ジャスト・ナウ、S商事と、コントラクト・サインしましたね。アイムソウリイネ」

局長はするそうに肩をすくめて、テーブルの上にあった紙片をひらひら振ってみせた。

Y課長が得意然と金森を見やった。

「こ、これはどうなるんです」

頭に血の上った金森が、用意して来た契約書を内ポケットからとり出した。社長のサインがしてあり、局長のサインをもらえばかりになっているのだ。

「おう、ノウ、これ、もう要らない。シクレ

ット・大事ネ」

金森の手から契約書を取り上げた局長はそれを金森の目の前で二つに引き裂き、更にそれを四つに裂き、八つに裂いてテーブルの上の灰皿に入れ、ライターをならして火をつけた。局長の顔から、それ迄浮べていた笑みが消え、急に獐犢な射るような目付きで金森を睨み据えた。

「もう、お前に用はない。お前の所の条件が合わなかったのだ。S商事と取引する事に決めた。それだけだ。出て失せろ！」

部屋中の空気が凍りついた。I国の独裁者S大統領の懐る刀として辣腕を揮っている国防局長である。全国に張り廻らしたI国秘密警察の総元締めでもある。流石の金森も役者が違う。凄みのある目で一瞥されただけで身がすくんだ。

Tホテルの前で寒風にさらされながら、金森はいつ迄も動かなかった。



金森は喫茶店の一隅で、今迄自分の勤めていた会社の社長秘書岡島啓子と向い合っていた。

五十万円も使って、その契約をS商事にさらわれたのだ。成功寸前に迄詰めていた話が

である。五十万の金を女にただでまき上げられた上に社長のサインした契約書は金森の目の前で引き裂かれ灰になったのである。裂火の如く怒った社長は、即座に金森をクビにした。会社に五十万円の実損をかけたのだ。退職金も貰えないのは当然だった。

「それで、これからどうする気なの？ クビになりましたってS銀行にでも使って貰う気？」

岡島啓子が意地悪そうに金森の顔をのぞきこんだ。大体、金森が、こんなヘマをやるようになった原因は岡島啓子にあるのだ。T大経済学部を出て、S銀行重役をしている父親が自分のところに引取るといふのを無理に押し切って、自分の実力を試したいからと、強引に今の会社に入ったのだ。そして、金森の自負通り、入社以来ぐんぐん頭角をあらわし業界でも名を知られる程のやり手としておそれられるようになったのだ。それが、岡島啓子のモッキン・バードにされて以来、女性の前に出ると、おどおどと劣等感に苛まれて、正常な判断力さえなくしてしまうのだ。そして女性に対するこの劣等感は岡島啓子によって、この一年間みっちり植えつけられたのだ。カミソリとあだなされる位の金森がいと

も簡単に五十万円をただ取りされたのだ。五十万円位なら金森は自分の懐ろから弁償できない事もないが、取引に失敗したという事は彼の社内地位に致命傷だったし、そして会社をクビになった等と、今更父親に泣きつかなかった。金森は岡島啓子の前で深く頭を垂れたまま、自分でもどうしてよいか判らないとつぶやいた。

「今更、会社をクビになったからってS銀行に入れて貰う訳にもゆかないわね。そうかといって、家の世話にはならないといって、独り立ちしているあなたが、明日からどうやって食べてゆくつもりなの？」

岡島啓子は金森のうつむいた顔に煙草の煙を吹きつけた。

「その気なら、今迄と同じ給料で勤め口を世話して上げてもいいわ」



金森は女性の残酷さを身に浸みて味わわれていた。岡島啓子が世話してくれた勤め口というのは、彼女が「あたしのスレーヴになる事よ」と平然と云ったのけた時に決ってしまったのだ。金森が、岡島啓子のハイヒールを口にくわえて四つん這いになっている写真を彼女におさえられている限り、他に就職出来

るチャンスはないのだ。岡島啓子はアパートに女友達と二人同居していた。女子大時代のクラスメート富村梨枝子である。金森は二人のスレーヴとして、彼女等のアパートに住み込む事になったのだ。

女中代りである。二人の女性は、金森を自分達が飼っているのだという立場で、思うさまいじめ抜いた。お金を出すとすると、女性の方が、がめついのだ。徹底的にこき使われた。彼女等二人の朝食の仕度、彼女等はそれをベッドで召上る。その前にベッドに入ったままで洗面を済ませるのだが、その為には金森自身が汚水を吐き込む生きた洗面台に利用された。勿論、朝の用便も金森を利用するのだ。お二方のネクタールをたっぷりと味わせられるのだが、富村梨枝子が「エサ代が勿体ないわね。あたし達のだけで生きてゆけるように少しずつ仕込んでみたらどうかしら」と提案してからは、彼の食費は大巾に削られ、その代りに彼女等のアムブロウジヤをたっぷりと与えられる破目となった。

今では彼女等がトイレを使うこともなくなったので、その一室は金森の居室と定められ彼女等の就寝前の足舐め等の御奉仕が済むと夜も、金森はトイレの中で寝るように命じら

れたのだった。朝食の済んだ彼女等二人を背中に乗せて、化粧台迄運び、それから、金森は彼女等の靴を磨いて揃える。そして彼女等がおでかけの時は床に這いつくばって、つき出されたおみあしに靴をおはかせするのだ。

昼間は割とひまである。部屋中を片付け、掃除をして、それから彼女等の下着類の洗濯を済ますと手が空くのだ。用のない時は、化粧台の前に土下坐して、彼女等のスリッパを頭におし置き、何度も額を床にすりつけて、化粧台の上に飾ってあるお二方の写真に礼拝を捧げるのだ。これは、岡島啓子と富村梨枝子の退屈しのぎの一興に命じられてやるようになったことだったが今では金森の習性として身に浸みついていった。

「御二柱の女神様方、私めは、御二方の御情けで命をつながせて戴いて居りますスレーヴでございます。輝やくばかりにお美しい御二方の香わしい御体内で醸造された御下賜品で露命をつながせて戴いて居ります。私めは御二方にとってはこの上もなくいやしい犬畜生でございますが、私めにとりましては御二方は私めの死活を自由になさる絶対権力の女神様でございます。私めの頭は御二方のおみあしの踏み台としてのみ存在し、私めの背中は

お二方のおみあしの御負担を軽くする為の馬代りでございます。御二方の便器として生きながらえさせて戴く為に御下賜品を拝受申し上げる私の口は、高貴な御二人を讃美する時と、御二方のお気晴らしに私の唇に鞭を当てられて私の悲鳴をお楽しみになる時の為のみに声を出すのでございます……」

まだ長く続く唱文を一心にそらんじながら誰もいないアパートの一室で、額に汗を流しながら金森は礼拝を続けるのだった。岡島啓子や富村梨枝子が傍に居る時だったら、二人

は体を折り、腹をよじって笑い転げるのだった。そして時々、無理に真顔になって「頭が高いわよ」とか「もっと真心を籠めて」とかいつては金森の頭を足を上げて踏みつけたりするのだ。

「ウッフ御下賜品だって、あたし達のを食べさせて貰って命をつないでるなんて、蛆虫だわ。ああいやらしい、アッハッハッハ」

富村梨枝子が大きく無遠慮な笑顔を立て、「じゃあ、お望み通り、音を上げさせてみるわよ」と岡島啓子は金森のむき出しの唇に鞭をふるったりした。

この礼拝と、足舐めはも早、金森の生活の一部であった。お二方が在室している時、他に御用命のない時は彼女等のおみあしの裏を舐め続けていなければならなかった。彼女等が雑談している時でも、テレビを見ている時でも彼女等の足許に這いつくばって金森は舌で舌の感触を楽しむのが習慣になっていた。金森は、二人の美しい暴君に飼われるモッキン・バードになってしまったのである。

(終)

「最新版」女体責写真五十粒選

A組五十集 大手札判印画紙(9×13) 焼付

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	七〇〇円
三十組三十枚	五〇〇円
四十組四十枚	三〇〇円
五十組五十枚	四〇〇円

A1	フミツケ汚辱縛り(新井)
A2	手吊り乳房責め(五月)
A3	ハリツケ狼ぐつわ(新井)
A4	全裸正面柱しばり(遠藤)

A5	亀甲強烈乳房縛り(遠藤)
A6	全裸手吊りムチ打(遠藤)
A7	豊満乳房いじめ(遠藤)
A8	乳房責め股間縛り(遠藤)
A9	鼻責鼻梁いたぶり(遠藤)
A10	全裸後手高小手(遠藤)
A11	膨隆臀部さらし(長野)
A12	全裸正面強烈縛り(長野)
A13	うねる緊縛裸身(長野)
A14	色耀の開股しばり(長野)
A15	正面縛蛙股ひらき(長野)
A16	裸自慢縛りヌード(長野)

A17	正面アグラしばり(長野)
A18	正面大の字開股縛(長野)
A19	遅ましき裸しばり(長野)
A20	荒縄縛豆絞り猿轡(大塚)
A21	両手前縛り髪首絞(大塚)
A22	両手吊り股間吊り(桜井)
A23	両手膝下しばり(関谷)
A24	淫れんする裸身像(関谷)
A25	両股縄掛け開股縛(大塚)
A26	正面裸身強烈本縄(梨花)
A27	乳房晒し肉体自慢(長野)
A28	責衣にはみ出る肌(東浦)
A29	投げ出した全裸縛(長野)
A30	捕われの全裸緊縛(梨花)
A31	羞らいの両股縛り(大塚)
A32	猿轡乳房いたぶり(遠藤)
A33	荒縄全身縛り豆絞(大塚)

A34	盛り上る乳房縄目(長野)
A35	亀甲本縄鼻いじめ(大塚)
A36	ムチ打悶えポーズ(関谷)
A37	椅子またぎ汚辱責(東浦)
A38	縦縄股間縛り正面(関谷)
A39	ゴム猿ぐつわ全身(大塚)
A40	くさり乳房責め(長野)
A41	強制片足挙げ責め(大塚)
A42	正面乳房くびり縛(関谷)
A43	鴨居正面ハリツケ(梨花)
A44	手吊りパンティ落(絹川)
A45	白バンド後手吊り(東浦)
A46	豆絞り高小手呻(絹川)
A47	裸縛り鼻いじめ(梨花)
A48	ガンジガラメ立縛(愛川)
A49	亀甲本縄股間縛り(絹川)
A50	立木縛竹棒責め(桜井)

悦子恋縄譚

えつこれんじょうものがたり
 〈続〉

麒麟児 久

六、前戯の被縛

Q氏は怪しげなトリック写真を密造するほどの男であるから、写真屋ではないが、押入れを暗室に利用して、フィルム現像から、引伸操作まで全部自家製造である。扱いなれた一眼レフにネオパンFの超微粒子フィルムから照明器具、薬品、暗室用具、印画紙など常備している。撮影から、D・P・Eの技術もまずまずと自惚れている。

Q氏には、一つのアイデアが浮んだ。「残念ながら、今ここに8ミリカメラはあり

ませんが、一眼レフとフィルム、暗室用品は全部揃っています。そこでですな、これから始まる人造トイレショーや緊縛プレー、その一駒一駒を撮影しておいて、悦子ショーが終ってから、皆様に送別のプレゼントとして進呈したいと思います。それもショーが終ったら直ちに現像して悦子自身の手で、手札版の写真としてもらおうじゃありませんか。御自分で引伸操作した経験のあるお方はよく御存知でしょうが、ほの暗い暗室のバットの中で印画紙に白い内腿が朦朧と浮び上って、やがて輪郭のハッキリしたヌード像になる。その楽しみは秘密の匂いがして男のみが知る快楽

であります。押入れの中の引伸機をこの座敷に持ち出して来て悦子嬢に操作してもらう。嗜虐場面の顔のアップや、苦痛にあえぐ乳房や腹が印画紙に浮び上る。モデルも悦子嬢。写真の製造人も悦子嬢——この組合せを四十の眼が好奇的に眺めるといいうわけです。御出席の方々には、お好きなフोटを一枚ずつ選んで頂いて悦子嬢にサインさせる。そのサイン入りプロマイドに悦子のお乳を貴方のためにVとかハ悦子のお乳は殿方を愛するためにあるのVとか、気の効いた言葉をついでに記入して貰う。悦子嬢にフィナーレのサービスをして頂こうじゃありませんか」

一同は有頂天になって拍手喝采を送る。

Q氏は一眼レフにフィルムを装填して、ストロボを装置する。

縛り役は、籤引で決める事になり、五人の男が選ばれた。

中年のサラリーマン氏が、謙虚な態度でいった。

「わたしは女房なら縛った経験がありますが夫婦間の事で、股間縛りを、わたしどもは悦楽責と呼んでいます。それなら多少心得があるのですが……」

「悦楽責め大いに結構ですね、ぼくはストーリー劇場の経営者——それなら見たり試したり、ぼくにも経験あるよ。だけど、こんなに若くてグラマー美人の悦子嬢、相手ではつい手許狂って、自信ないけどね」

そういうのは口臭がニンニク臭い、痘痕面あはたの韓国人である。

仙人も悦楽責めに賛成のようだし、黒メガネの重役タイプの紳士は黙っている。

もう一人籤運に当たった純情そうな青年が、熱っぽい口調で声をふるわせる。

「しかし、悦子嬢の魅力は何んてったって、この立派なおっぱいですよ。横から眺めると重くて垂れ乳のようだが、真正面からながめ

ると、見事に盛り上って、まるで外人のピン

アップガールを見ているみたいだ。この悩ましいポリウムと濃い膾脂色の乳当を見て下さいよ。砂丘に赤い薔薇が咲いたように壮観

だ。ここをギリギリ、ブラジャーみたいに縛り上げて、乳房責めにしなくちゃ。悦楽責め

は、その後でもいいじゃないですか」

「同感、乳房は愛の呼びリンといいますから前戯として乳房縛りに賛成ですな」

観客席からも声が掛って悦子嬢はブラジャー縛りから始められる事になった。

選ばれた五人の共同作業で、手ぎわよく乳房に縄が掛けられていく。

「肌理の細い餅肌ですな。こうしていても縄が吸いつくようだ」

「まったくだね。こうやって力いっぱい引張っても、縄目がいくらでも乳房に喰い込んでいく」

「う、うーうう。い、痛っ」

悦子嬢は首をねじって、呻き声をあげる。

しかし瞳は妖しく濡れて、苦痛とは裏はらの甘美感を体の奥深くで味っているように見える。操り人形のようにまかせ切った表情である。後手縛の両手は、膝を折って足裏の踵に載せたヒップの深い割れ目のあたりでじっと

した怠動かない。

「う、う、うう——」

再び、悦子嬢が切なげな呻きを洩らす。

乳房縛りの縄尻は咽喉の下で結び目をつくり、重い両乳房を両側から吊り上げる恰好になる。男達は無抵抗をいい事に、力まかせに引張り上げて、首縄にして捲きつける。

正面から眺めると丁度ブラジャーをしたように見えるが、両乳の縄目は輪の窄衣のようになって、絞り上げられた豊かな隆起は、縄目から突起して、異様にふくらみ、残酷美を生み出している。

「悦子嬢——そんなひどい縛られ方して、痛くないんですか」

自分から発案しておきながら、青年は顔色を真青にして心配する。

悦子嬢はベテランモデル嬢のプライドか、取乱した様子を見せまいとするが、首縄で乳房の窄縄を絞め上げられる苦痛に、首をうな

だれている。前髪の乱れた額には脂汗がういている。赤黒く変色した乳房の谷間やヒップ

のあたりに玉の汗が吹き出して、電灯にキラキラ光っている。

しかし猿轡の上の瞳は、恍惚と見開いてい

る。青年の質問も聞えない様子だし、ストロ

ポの閃光も気にならないように、自分だけの世界に陶然としているようだ。身体中の骨がなくなったように、ぐったりして、肩先を男達の膝にもたせかけている。

「さすが乳房美人だけあって、縄目のブラジャーが、よく似合いますね」

「だが、女の生命という乳房をあんなにひどく縛られて、形は確かに一段とよくなりましたが、乳首など飛び出そうで、まったく痛痛しい限りですな。あんな姿をさすなんて肉体的苦痛も耐えられんでしょうが、奇クで飼育教育は受けているとしてもですなあ、女性心理としてやはり耐え難いでしょうな」

「いいえ、貴方。悦子嬢のあの眼の色と、ぐったりまかせ切った様子を御覧なさいよ。縛られて彼女すっかり気分を出してしまっただうですよ」

寝室から三面鏡が持ち出されてくる。

「さあ、気分の出たところで、悦子嬢、一つ鏡でも御覧になりなさいよ」

「三面鏡だから、どっちを向いても悦子嬢がいる。こりゃあナルチシスト、縄にもだえるおのが裸身にうっとり見惚れるという図だ」

「悦子嬢、どうですか。ブラジャー縛りの自分の姿を、こうやって眺める気分は？ 自分

でもつくづく美しいと、思うでしょう。さっきまでの陶然としたポーズを、もう一度、やって見せてくださいよ」

「奇クのモデルになるまでは、悦子嬢、貴方は、自分の肌を自分で縛っては、ひそかに、こうやって観賞していたのではないの？」

非情の鏡は体の隅々まで冷酷に映し出す。それを自分自身でながめなければならぬ残酷さ。アングルが違っただけで、三面とも同じ羞らしいの姿をしている。逃げ出そうにも、鏡には直ぐ背後に、眼を血走らせた男達の姿が迫っている。悦子嬢にはいつも静かで楽しい一時を過す鏡台が、今夜ばかりは呪わしい拷問具に見えてくる。

受縛に感応し始めた夢見心地が一度に醒めた。わたしは縄目を受けながら、こんなに恍



惚とした媚態を男達に見せて、愉しませていたのか。悦子嬢は男達の期待通りにされて自分自身が口惜しい。うらめしい。

三面鏡の中で、悦子嬢は羞恥と屈辱に、白い体を蛇のようにくねらせる。

「まだ、これからが、面白いんだぜ」

男達は三面鏡の前で、組になった小さな丸椅子を使えという。

「これは美容体操だから、もっと楽しそうにやらなくちゃ駄目じゃないか」

しかし丸椅子は、悦子嬢の豊臀を載せるに

は小さすぎる。それを背中に敷かされて仰向けさせられただけで、乳房責めの縄目に締め上げられて、息も出来ないほど苦しい。それなのに、男達は丸椅子の上で、動物的なポーズやアクロバットのような曲技を強要する。鞭音の代りに、見物人の叱咤や命令が悦子嬢を追いまわす。

「お願い、後手と猿轡を解いて」

とうとう悦子嬢は、丸イスの上から転落して、悲痛な哀願の声を出した。畳の上に桃色に染った女体を投げ出して、激しく息を弾ませている。汗に光る全身が波打ち、もう指先一つ動かす気力もないようだった。

七、悦子嬢股裂き

しばらく休憩してから、また新しいプレーが始まった。悦子嬢はまだ猿轡を解かれた口と鼻をふくらませて、苦しそうな吐息をしている。

「今度はストリップ縛りといきましょうか。悦子嬢は大分お疲れの様子だが、今度はじっとしているだけでいいですよ」

五人の男に抱き起された悦子嬢は、坐らされた背中を前に押し出される。グラマーの割

りにはスラリと華奢な感じの手足を、足首の関節でつなぎとめられる。

「そ、そんなひどい、許して……」

眼尻が恐怖でつり上っている。

「昔は牛馬でやったらしいが、これから股裂きの刑だ」

足首の縄目に新しい麻縄が掛けられ、その縄尻を仙人とサラリーマン氏が両側から引張る。

「アッ、う、うう。ひ、ひどい……ま、まだこんな浅ましいポーズさせられた事は悦、悦子、一度もないのよ。許、許して」

四肢はじりじり二十名の観客の前で、思い通りにされていく。いくら肉体派モデル嬢とはいえ、悦子嬢の繊細な手足では、どうしようもない。手足と一緒に引き起された上体を思い切りのけぞらしく、顔面を真赤にして唸りながら、満身の力をこめて抵抗する。

「あっ、あ、ああー」

恨めしげな呻きが、噛み締めた口唇からもれる。苦渋の顔はもみくちゃになっている。

眉間に皺が寄り、眼もつぶれよとばかり閉じた両眼から、大粒の口惜し涙がホロホロ落ちる。荒い仕事一つした事もないお嬢さん育ちと想像される繊美な指先は、苦痛に折れまが

っている。桃色に染った足裏からマニキュアされたつま先まで、グラマーの肢体を支えるには小型で形がよいといえる足全体は、苦悶に硬直しているのだが――、その引きつってけい攣したようになった表情に、異形美というか、女体のクライマックスに似た感応を、Q氏は感じてしまうのだ。

「あ、あっ、ど、どうしよう。止めて。アッ見ないで、お願い」

両側からピンと張り切った麻縄は、悦子嬢を、股裂き刑のポーズにしてしまった。

悦子嬢はベテラン人気モデルという見栄も外聞も脱ぎ捨てて、いまはキャーキャーヒイヒイ泣きわめいている。

人垣の輪は一斉に悦子嬢の前方に殺倒してより一層縮った半円型がつくられる。彼女の脱衣シーンを始めて観賞した時より一段と悩ましげなため息が長く尾を引き、四十の血走った好奇の眼が夢中になって覗き込む、ストロボが何発も続けて閃光する。

「おい、影になってよく見えないぞ、前方、もっと頭を下げんか」

悦子嬢は、目と鼻の先まで人垣に取囲まれている。そのために折角の見世物も、人影で隠くされてしまう。Q氏は三百ワットの写真

用ライトを持ち出して、立見の観客に手渡すと眩しいばかりの強烈な光線が、悦子嬢を照し出す。

悦子嬢はスポットライトをあびて、毛穴の一つ一つ、産毛の一本まで男達に知られてしまふ。その忍び難い屈辱と恐怖。それなのに羞恥に火照る肌は、艶々とした紅色に輝き、むせびかえるようなお色気を発散して、一層観客を喜ばせてしまふ。いまは号泣する気力もなく、ただ涙に光る顔を厭っ厭々と力無く振るだけである。

韓国人の劇場主が、鈴なりにになった人垣を見廻して、誰にいうともなくため息まじりに感歎する。

「ヘエー、オオー。こんなにしちゃっていいんですかね。ぼくヌードスタジオやってる。特出の女の子、エプロンステージへ出て、電気点く、全ストやる。男とびつく、覗くね。そのお客の気持よく判るよ。ぼくともスゴイ、えげつないよ。だけど問題にならない。これ本当にスゴイ、スゴイよ。ぼく頭くらくらするよ」

「そりや君、当り前ですよ。貴方のとこのストリップパーとは格が違うんだ。モデルが奇ク一番のグラマーガール、悦子嬢の全ストだ。」

——それもこう見せつけられたんじゃ頭がカッカして、気が狂いそうになるのが当り前ですよ」

「ぼ、ぼくなんか、もうこれで眼がつぶれて盲になっても悔いはない。勿体無くて、ぼちが当りそうな気がしますよ」

「お蔭で眼の毒——いやこれ以上の眼の保養はありませんよ。このフォートは是非わたくしに譲って下さいよ。撮影の方もすっかり頼みます。そら、そんなに手がふるえて大丈夫ですか」

観客達はお互いに顔を見合せては、興奮した感想を述べ合う。その中から刺青姿のヤクザ者が、顔が赤らむような質問をする。

「よう姐ちゃん。お前さん、ミスかミセスかよ。この瓢箪みたいなオッパイは、恰好よくて、子供生んだ事はなさそうだが、この大きい色気たっぷり乳首や、俺にはお前さんのお臀が少し平っぺだったくなっていてみたいだぜ。よう悦っちゃん。お前さん、バージンかよ。フッフ男を知らねえとはいわせないうぜ。何んなら俺が調べてやってもいいぜ」

観客達も内心では、余りにエゲツないと悦子嬢に同情するのだが、全身真黒になった入墨と凶悪な人相に怯えて掛り合いになつては

損と黙っている。或いは、ヤクザ者の淫猥な質問に、心の片隅では一種の好奇心と痛快さを抱いているのかも知れない。

三面鏡には、男達と一緒に悦子嬢のバックスタイルが映っている。その中の一つの顔が厭やらしく笑うと、鏡台の上から手鏡を取り上げた。

「よう悦っちゃんよ。そんなに泣きべそばかりかいていないで、パッチリ可愛らしい眼を開けて、自分の知らないところを、これでもくながめてみなよ」

ヤクザ男は手鏡をさし出す。悦子嬢の前でライトにキラリ閃いて、円い反射が天井で煌く。

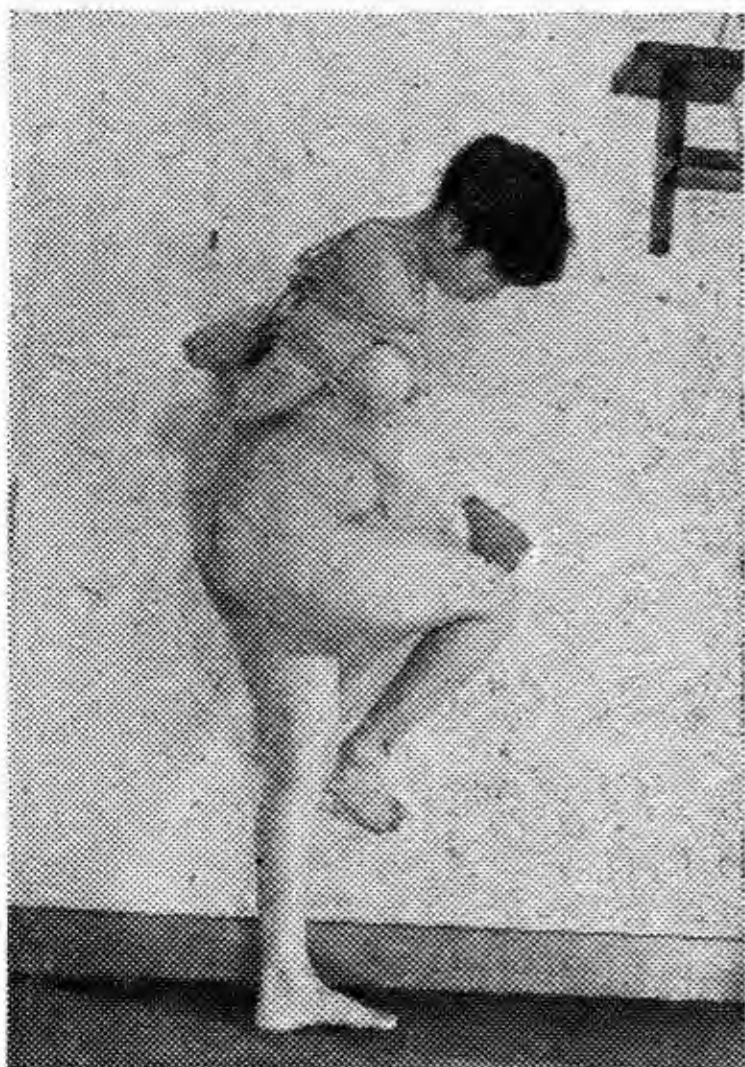
「よう一度、見てみなよ」

もう一度そう強要すると、片手を悦子嬢の体に伸ばそうとする。

一瞬、人垣が驚いて後退するほど、大きく甲高い声を挙げて、悦子嬢はヒステリックに叫んだ。カッと白眼をむき眼尻がつり上る。

「何、何よ。バ、バカにしないでよ。悦子はストリップパーでもパン助でもないのよ。貴方達はよってたかって、どこまでわたしをオモチャにしたら気が済むの」

あとは言葉にならない。白い咽喉をひくつ



かせて、悦子嬢は歎息した。

それは処女のプライドを傷つけられた生やさしい感情ではない。ファンとはいえ、いまは淫獣と化した男達に人間性を無視したさげすみを受けながら、ながめられるままどうする事もできない悲憤と口惜しさ。その激情が堰を切って夢中でいわせた抗議であろうが、悦子嬢の気持は晴れない。知らず知らずに口走った自分でも驚くほどはしたない言葉が自己嫌悪の念としてはねかえってきて、悦子嬢の気持を傷つけるのだ。

その悦子嬢の打ちしおれた哀切な姿に、鬼

でもケダモノでもない彼女のファン達が心を動かされぬはずがない。

もともとビールや清酒やウィスキーで元気づけられるまでは、奇巧誌上でしか見た事のない悦子嬢と面会できた歓喜と興奮に顔を上げさせながら、誰しももっと近寄って手に取るようにながめたり、気の利いた言葉の一つもいって悦子嬢に好感を持ってもらいたいと心の中ではあせっても、できなかった連中である。皆がそのグラマーな姿体に圧倒されて一様に卑屈になり憧憬と欲望の混った目で時々盗見するのがやっと。その恐縮した様子は十八名の花婿候補が、悦子嬢と見合しているような光景であった。

一瞬、室内はしゅんと静まりかえって客人達は首をうなだれてしまう。興奮の余り夢中でもらした痴言や厭らしい目付きで、悦子嬢を冒涇した自分達を悔悟する。悦子嬢の前の人垣は後退して、このままでは折角のショーも流会になりそうな気配だ。

しかし、それではいいよこれから脂が乗ろうというQ氏のオトギ話もおしまいになってしまふし、それでは欠伸をしながらも、ここまで付き合ってくださいった読者諸君にも申し訳がない。だが御安心して頂きたい。作者はその夜出席された同好の士が『常識人』であった事をいいたただけだ。だって君。考えても見給え。目の前に一万札が落ちていくのに、そのままだまって立去る男もあるまい。

八、股間自縛ショー

Q氏は一刻も早く人造トイレショーを始めたのだが、寢室を覗きに入っても、シヤンペンガラスの方は、まだ三分の一ほどしか溜っていない。

Q氏は腕時計を見た。——午前三時。夜明けまでにまだ時間がある。

人垣の中から遠慮した小声で発言がある。「ほくたち、もう見たいだけ見てしまっんだし、第一このままじゃレディに対して失礼ですよ。パンティか腰巻きくらい御使用させて上げたら、どうでしょうか」

劇場主が、最前列から進み出ると、ニヤニ

ヤしながら悦子嬢に囁く。

「……ね、悦子さん、判ったろう」

「ハ、ハイ。でも悦子——そんなこと」

「言わなきゃ、あそこに転っているゴルフ道具で、このまま両足を縛りつけて一晚中放って置くよ。それともヒッヒ、別の使い方をしてもいいのかい」

その続きは再び二人の間の密談で、観客達には判らない。

「アッ、ヒ、ヒーイ。ハ、ハイ、いいます。」

悦子嬢、パンティ……いいえ、バタフライ代りに縄が欲しい。ああ……縄が……それも一筋ではいや。二本の縄をよじり合せた太いので……縛ってもらいたいの。だって何もなにより隠すものがある方がいいんですもの」

群衆の中にはクスクス吹き出す者もあるが腹の底からの陽気な笑いではない。熱で咽喉が乾いて、声がかすれている。

悦子嬢は口惜し涙に曇った瞳で、見物人を見廻す。

「誰、誰か。お願いします。悦子を股間——パンティ縛りにして頂戴。そんなに見てばかりいらっしやらないで、悦子さんがこんな甘い声を出してお願いしているのに——それともせっかく悦子さんがこうしてお願いしてるのに、殿

方はどなたも触りたくないとおっしゃるの。

ああ、悦子の体は、そんなに魅力がないのかしら」

「よう、その調子その調子。御自慢の婀娜っぽい流し目でチラリながめて、おっぱいと腰でもくねらせれば、百点満点ね」

韓国人は上気嫌になって、股裂き役の二人に手を離すように合図する。

悦子嬢は桜貝が殻を閉ざすように膝を合わせると、下眼使いの目配せで、早く縄を解いてと催促する。

男たちはまた新しい人垣の輪をつくり、その中から別の提案がなされた。

「どうでしょう。今度は一つ悦子嬢自身の手で縛ってもらうことにしては——」

その男は立上って、力強くいった。

「いつも被害者の立場にある悦子嬢に、今度は自演していただく。実は小生切腹マニヤですが、小生には悦子嬢の自縛股間縛りに、縄と短刀の違いこそあれ、自虐の悲愴感というか、倒錯した美を見い出すものであります」
「そりや結構ですね。誰だって女性自分ではパンティをお穿きになる。何処の小屋だってパンティを脱ぐ姿ならさらに見られますが、逆にパンティを穿いて見せるストリップパーは

ありません。それと同じ理屈で、パンティ代りの縄ですよ、悦子嬢。やっぱり御自分でお縛りになった方がいい、こりゃまた格別の興趣があるというものです」

悦子嬢は開股縛りの縄目を解かれただけである。蹲った悦子嬢に、いま解かれたばかりの麻縄が手渡される。男たちが後手からねじ上げるようにしてズルズル立上らせる。

悦子嬢は一同に助けを求めるように、怯えた口調で懇願する。

「ああ、悦子、やっぱり、どなたかに——」

「いや皆様は、悦子嬢が自分で縛るのを観賞したいと、おっしゃっているのですよ」

「そ、それでも、わたし、いつも縛られる方なので——どうしたらよいか、判りません。本当に知りません」

「へー。結構なお惚気話ですな。悦子嬢、股間縛りってそんなにいいんですか。その間羽化登仙、天国に遊ぶ心地がして、もう無我夢中、何も判らないというわけですね。こりゃ驚いた——こんな虫を殺さぬ美しい顔をして、股間縛りが大好きだなんて貴女もなかなか隅に置けませんな」

悦子嬢はその男をうらめしげ睨みつける。
「いや、そんないい方……悦子、決してそ



んな意味では——」

そうして顔をかくして膝頭をふるわせている。

「それでは、貴女絶対にできないの。よろしい。仕方ないよ。それなら悦子さんの大嫌いな——ほれ、生娘かどうか調べてやろういったあの人に縛ってもらうよ。あの人とてもコワイ、助平ね。貴女乱暴される。皆な知らん顔して見物する。それでいいの」

指さされたヤクザ者はウィスキーを瓶ごとがぶ飲みしながら、ニタリと、凄味をきかせる。本当に呼ばれば、無防備の悦子嬢に何

をやり出すか判らない。

「分りましたわ。悦子、やらせて頂きます」「いい加減にゴマカシたりすると、あの人体の隅々まで調べさすよ」

悦子嬢は、いつも普段着のように馴れ切った筈の縄が、今夜ばかりは蛇か何かの恐ろしい物体に見えてくる。しばらく掌中の縄を呪わしげにながめてから、シュウシュウとしていて、意外に手ぎわよく胴縄をまき始める。

「それみなさいよ。そんなに上手なくせに、まるで湯文字でも巻くみたいですよ」

——正面からながめる悦子嬢の立像はスラ

リと伸び切って完全に近い八頭身といえる。しかも裸にしてみるとガッカリする貧弱なファッションモデルの肉体とは全く違う。肢体の繊美ともいえる割には、バストはびっくりするほど大きく豊かである。しかしバックスタイルの競艶となるかどうか。例えば絹川文代嬢のおやかな肩から背中にかけての優美な曲線と、窈窕たるお色気を

発散するヒップがある。遠藤百合子嬢の丸々と発達した豊かさの中に、形よく引締ってピチピチした健康美と新鮮なエロチズムにあふれた女学生のようなヒップもある。両嬢の方に軍配を挙げたいが、読者諸君は、果してどうかな。

それがどうであろうか、胴と腰に、二筋づつの縄が掛けられただけで、悦子嬢のバックスタイルは見違える程、美しくなる。二つの縄目は胴体を締めつける窄衣の役目を果たしたのだ。発達した胸や腹部の女盛りという感じに比較して、やや丸味とボリュームを欠き平坦な趣きもする彼女のヒップ、胴と腰を矯正されて、見事な盛り上りと深い谷間を見せている。

「その意気その意気——さあ、今度は本番の股縄を掛けてくださいよ」

悦子嬢は怨めしげに、声の掛った観客席をながめる。自縛のヒップから麻縄が二本ぶら下がっている。彼女はどうしても、その縄尻をつかむことができない。

悦子嬢は始めて奇クスタジオで股縄をかけられた時の狼狽を思い出す。思わず顔を覆いたくなる羞恥の極限。知らぬ間に眼を瞑って体を固く縮めた恐怖と緊張感。それから麻

薬のような妖しい魅力——その裏表の感覚に、悦子嬢は肉体の芯から、屈服し尽してしまつた。やさしく肩をたたかれて、ふと我にかへた体から、止め縄を脱ぎされる一瞬の抑え難い恋縄の情。

△あの時はカメラマンと二人だけのスタジオであつたが、こんな衆人注目の中で密室的な痴態をどうして自演する事ができようV

「皆さん、お願い。か、かんにんして——申訳けございません。これ以上は、悦子には、どうしてもできません」

悦子嬢は泣きはらして真赤になつた眼に——っぱい涙を溜めて、どうか許してと両手を合せて哀願する。

Q氏もその客人達も、いまは哀れな女奴隷と化した悦子嬢の必死な数願に、憐憫の情が湧かない道理がない。しかしここまで来てしまつては、男なら誰しも当然持合せている嗜虐本能と征服欲のトリコになつてしまふ。その一瞬、八畳間の光景が人気小説『花と蛇』の名場面に似てくるのも仕方があるまい。

特殊な風俗誌である奇ク以外の世界でも、待合や料亭、熱海や白浜あたりの温泉場で女学生ではない女に無理してセーラー服を着せた8ミリ映画が歓迎されているのは、どうい

うわけか。セーラー服はバージンを連想させるのか——

さて話は脱線したが、身体中を真赤にして身悶えする悦子嬢の哀訴も、結果は男たちを一層煽情させるだけである。

「何も覆うものがないより、縄一本でもある方がよいとおっしゃったのは、一体どなたでしたかね」

「縄一本に何をもじもじしてやがるんでえ。あんまり、勿体ぶるなよ。生娘でもあるまいに」

「悦子さん、こういうオオカミみたいな男もいるよ。油断大敵ね。その縄。太い方がいいよ。貴女の大切な体を守る貞操帯ね。しっかり締めげなくちゃダメよ」

卑猥な野次と一緒に、目と鼻の近くに取囲く男達のツバキが悦子嬢の素肌に掛る。

「ああ、自分で、そ、そんな真似をするなんて」

しかし男達の強要する密室演技をやらなければ、どんな露骨な言葉で責められるか、恐ろしい人相をした遊び人風の男や、細い目のつり上った韓国人に、股縄を掛けられるだけだ。あの二人なら、どんな淫虐な玩弄も平気でやりそうだ。

仕方なく、取巻き連の眼を盗むように、そろそろ片足の爪先をずらして、畳の上の麻縄をはさむと、恥かしそうに引き寄せる。

「さあ、早くしねえかよ」

そうけしかけられて、悦子嬢は右手を腰のあたりでもじもじさせてから、やっとの想いで縄尻を拾い上げる。

「悦子嬢。愛のテクニク——よく縄をよじり合せてくださいよ」

眼を落すと、視界一っぱいに自分の白いうるおった肌が飛びこんできて、悦子嬢はハッとす。ヒップから繫つた麻縄を自分の力で引張り上げねばならぬ辛さ、悲しさ。全身火の出るような想いに、悦子嬢は身体を固くして、生きた心地もない。

二本の麻縄をよじり合せるためには、その縄尻を厭でも胸の高さまで持上げ、力いっぱい締め上げなければならぬ。

悦子嬢は白い咽喉をふるわせて嗚咽する。

両掌の縄にポトポト屈辱の涙が落ちる。

室内は、男達の荒い呼吸が熱氣を孕み、時々淫びなしのび笑いが聞える。

生活の垢もシミもないしなやかで綺麗な悦子嬢の指先は、花卉が開いたようにそり反っているが、その掌にはさまれた世にも残酷な

拷問具——二本の麻縄は、ねじられよじられて、段々太くみじかくなってゆく。

悦子嬢は、三角木馬の鋭い稜線で責められる想い。いや、もっと救いのない、苛酷な体刑に感じられる。三角木馬は形こそ女体には恐ろしく見えるが、同じ苦痛でも、あれなら眼を瞑っていても乗る事ができる。しかしこの自縛責めだけは、しっかり大きな眼を見開いていなければならないし、虚脱状態ではとてもできない。

男達は息を詰めて、自虐の焦点を見逃してはなるものか、と執念深くみつめている。

「く、くう——」

悦子嬢は咽喉の奥から、異様な呻きをもらして、身をくねらせる。

よじり合せた股縄を力をこめて、くびれた胴縄に繋ぐ。女盛りの白いむっちりした肌に非情の縄目は男達の期待通りに喰い込んでいった。どうしようもない。

しかし自縛の肌は、しっとりとしたうるおいを増し、酔うような艶めかしさだ。悦子嬢特有の隠花植物を想わせる切れ長の瞳も、湿润な光りを帯び始める。縄目にくびれた乳房がせつなくあえいでいる。

やがてもだえる縛女——悦子嬢はひっそり

してしまった。よろめいて倒れそうで、倒れない放心状態にある。瞳はうつろに見開いている。それは諦念しきった屈服と敗北の姿体とも思えるし、女体をつつむ新鮮な縄目に陶然としているかのようにも見える。

△股間縛りって痛いよ。わたし自分から奇クスタジオに通ったけど、これほど劇しく縛り上げられた経験があるかしら。だけど、このまま放って置かれたら乳房縛りの方が心配だわ。血行が止まってしまわないかしら。この人達誰もそれに気付かないのかしら▽

悦子嬢は、次第に朦朧としてゆく夢見る心地に、自分が思いのままの操り人形と化していくのを自覚しないわけにはいかない。異常な蒼白に変色した乳房に眼を落して、ほんやりした意識の中で他人事のようにそう思った。

九、硝子トイレと人造便器

悦子嬢の頬の肉はゲッソリそげ落ちて見えた。もともと円顔豊頬という顔立ちではないが、長時間にわたる羞恥責めの心労で、その夜の彼女は、ひどく頬がこけて見える。

アイシャードのせいもあるが眼窩も落ち窪

んで一面に色濃い疲労の色が浮び、瞳だけが生氣を帯びている。せつかくのお化粧も涙と汗で剥げ落ち、ルージュの唇も地肌が覗いている。吐息もけだるそうで、体全体にたい廃美が感じられる。

体中一面に赤紫色の縄模様がかっきり描かれている。悦子嬢の肌はねり絹のようにぬめりとして、爛熟した女体の柔かさがある。縄目はいくらでも喰い込んでいく。それだけに受縛の傷跡も残酷なまでに劇しく、見る眼に痛々しい。肌が白いだけに条痕も色鮮やかで毒々しく、世にこれほど妖艶な女体があるのか——。

彼女は汗をバスタオルで拭いたり、手足の関節や縄目の跡をマッサージしたり、四肢をくねらせて軽い柔軟体操のような真似をしている。お化粧や髪も直したりしている。さすがは奇クの調教に鍛えられた悦子嬢、全身に疲労困憊の色を浮べながらも、体内の奥深くには、まだ疲れを知らぬスタミナと余裕を残している様子である。こうして坐った俛次のお仕置を待とうとするのか。

しかしQ氏は、そういう悦子嬢にやはり墮落と憐憫を感じてしまう。被縛にしろ自縛にしろ、身体一面アザになった縛痕をながめて

男達はどんなに有頂天になるか。その名残りを実際に白い女体に見付けたり、触れたりする事ほど、S趣味にとって快楽はあるまい。

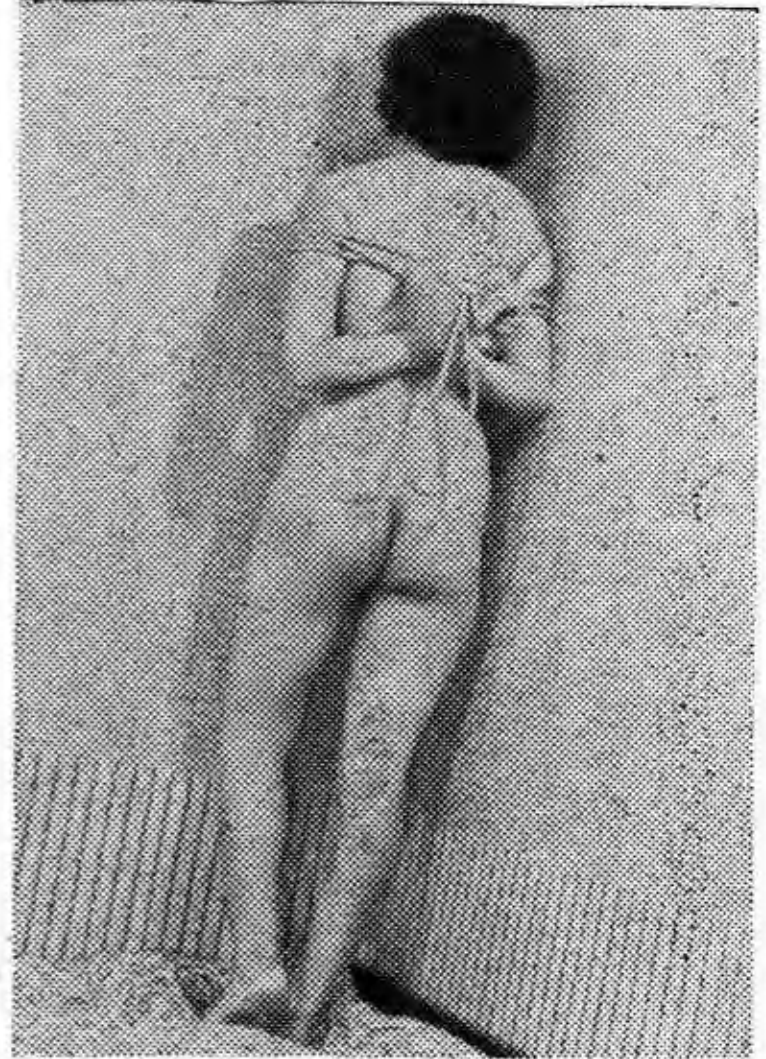
いまの悦子嬢はそれを屈辱とも羞恥とも感じていないのか。確かに暖房と人いきれでむんむんするこの部屋に着物は無用かも知れないが、これでは出番を待つドサ廻りのストリップパートと同じではないか。これでは御

主人を喜ばせるためなら、進んで鞭痕の肌を見せる女奴隷の心境と変わりはない。

八畳間の男達は、限らない征服感に酔い痴れ、底知れぬ新しい嗜虐欲をそそられて、舌なめずりをして待ち構えている。

襖を取脱した八畳と六畳の真中に、特大シヤンペングラスが持ち込まれている。何にしる高さが一メートル半近くあるので、机や木棚や洋ダンスが運れてきて、排泄台兼観客席が急造される。

グラスはその半分くらいの高さから、盃の底が始まっている。それは実際にこうして眺



めてみると、空中浴槽ともいえるし、トイレの中から便器だけを取り脱して、拡大し透明にした感じにも似ている。寝室に置いてある間に使用された透明トイレには、半分近く二十人分の排泄物が溜っている。ほのかに立ち昇る異臭。硝子は汗をかいて曇っている。

その中で奇ク読者が、いやモデル嬢の裸体には馴れた奇ク写真家や編集部だって知らない——愛川悦子嬢の入浴シーンや排泄図をじっくり観賞しようというのだ。

室内は真昼もあざむく明るさだ。三百ワットのランプが二つ天井に向けて配置され、白

い漆喰い塗りの天井に反射して、平均した光線をグラスに投げかけている。更にもう一組同じように二個のリフレクターランプを使用して、グラスの底から照し出すように採光されている。

その熱度だけで、透明浴槽は暖まり、悦子嬢に風邪を引かせる心配はなさそうだ。

「さあ皆さん、それではそろそろ観客席に坐っていただきますようか」

急造のスタンド兼排泄台は、十名を収容するのがやっと、窮屈そうに坐っている。残された観客は、畳に座布団を敷いてグラスの底から見上げる事になる。その中の二人が、悦子嬢が暴れるとグラスが倒れてしまうので、柱のように太いグラスの摘みを支える役目をさせられる。

「悦子嬢、この中に入っていないのは、貴嬢のお神酒だけです。それは、のちほど、この中でゆっくりどうぞ」

すでに悦子嬢はギリギリ海老責めに縛り上げられて、もがき続けている。その前に相当激しい抵抗があった。

いくら女奴隷と化して被虐境に愉悦するかのように見えた悦子嬢とはいっても、つんと鼻にくるアンモニヤ水を目前にしては、生理

的嫌悪に襲われて、腹の底から絞り出すような悲鳴を挙げた。

「いやッ、ヒエー、た、たすけて」

後手縛りにされている最中に、あばれ出し、盛り上った臀の双丘をふり乱して、ドアの前まで逃げ出した。鍵を外そうにも両手は拘束されて、縄尻を座敷まで、引きずっている。その前に蹲って泣きじゃくる悦子嬢に伸びる男達の手。忽ち座敷の真中に連れ戻された悦子嬢は奇妙な恰好に折り曲げられる。目の前にさし出した足裏が、眩しいほど白い背中を丸め、口に唾えられた縄が女体に巻きついていく。悦子嬢の身体はまるで骨がないように、しなやかで柔かく、思い通りの姿態に緊縛されていった。

「この方が隠すものがあっていいでしょう」

観客の一人が悦子嬢の耳朵を摘み上げる。確かに悦子嬢は、二つに折り曲げられて俯伏せた顔面が下腹を蔽っている。あぐらを組まされた両足は、すべっこい太腿がふくよかな腹に密着している。

「ぎ、ぎえっ——」

悦子嬢は苦痛の呻きをほとばしらせる。さきほどまでのお遊び的な猿轡ではない。舌を噛み切って自殺されないように、唇を引き裂

いて、白い歯をこじり開け、かました麻縄を幾筋も力まかせに捲きつけてある。嵌口具の圧迫感とフェチ責めの生理的悪感に、悦子嬢は何度も白眼をむいては劇しいゲロを吐く。口から胃液を吐くような苦しさ。裂かれた唇から唾液がダラダラと流れ、嘔吐と一緒に涙がふき出す。

悦子嬢は両膝の間から、ときどき顔をのぞかせては泣きじゃくる。許される筈もない哀訴を瞳いっぱいに籠めて男たちを凝視する。サルグツワの口がもどかしそうに戦慄く。

しかし、それは徒らに男たちの嗜虐本能を挑発するだけだ。

きゅうと胸が締まる一瞬だった。Q氏と外の二人で、恐怖と汚辱に狂ったようにもがく悦子嬢を昇ぎ上げて、硝子トイレの底に沈める。海老責めにする時は、暖かくぬめりとした肌だったが、その一瞬ばかりは汗で体がつるつる滑るのに、肌だけはブツブツ粟立った感触だった。

海老責めの女体は、まさにシャンペングラスとびったりサイズが合う。悦子嬢は漏斗型の底に、縛り痕の残った臀をのせている。彼女の体重で、淡黄色の浴槽は八分通り満水となった。

透明浴槽に溢れてはち切れんばかりのグラマーな肉体。観客達は物に憑れたように見物している。

それが一番肌を濡らさない姿勢なのだが、悦子嬢は人体に許された最小限度の体位に締められている。そのために生暖い液体は、膝頭スレスレに浸水し、この腕と一緒に縛られてくびれた乳房も、後手縛りの高手小手もほとんど肩のあたりまで没している。その位置では、海老責めの鼻先まで漬りそうだ。

悦子嬢は凄まじい形相をしている。必死になって両膝に挟まれた首を振り上げる。しかし足首に連繫された首縄にはばまれて、どうすることもできない。もがけば不浄の飛沫がとぶし、頸を反り上げるようにして急場をしのぐのがやっとだ。

気持があせればあせるほど、激しく息切れがしてくる。猿轡がその呼吸さえはばむ。眼がつり上り、自然鼻孔がふくらんで、すすり上げるように息をする。鼻腔をつんざくアンモニヤの臭気に、悦子嬢はむせび苦しむ。切迫した息と一緒に、硝子トイレの中身まで啜り込みそうになる。

素肌を襲う耐え難い触感。毛穴の一つ一つから生ぬるい、もぞもぞい悪感がしみ透って、



悦子嬢は身震いする。底にベッタリ密着したヒップをもじもじさせる。

つり上った眼が、観客席を睥睨する。その狂気の瞳にあるのは、もう哀願でも羞恥でもない。悦子嬢特有の憂愁と色気のひそんだ陰湿な瞳でもない。ただ何んとか助かりたいという本能が充滿しているだけだ。顔面は蒼ざめ額にはギラギラ脂汗が浮んでいる。

しかし悦子嬢自身、もがけばもがくほど上体はヌルヌルした硝子に滑って、便器の底に沈んでいく。蟻地獄に陥った事に気付いている。不自然な恰好に緊縛された苦痛もさる事

ながら、二十人分の男達の排泄物で、柔肌をじわじわ責められ、身動き一つ、悲鳴一つあげられぬ辛さ。

悦子嬢はワーと慟哭したい衝動にかられる。両手で頭でもガンガン叩かないと気が狂ってしまいそうだ。

男たちはこの静かな拷問シーンを――、台上の客は上から首を伸して覗き込み畳の上の客は中腰になってグラスの底に、目鼻をくっ

つけるようにして見惚れている。

しばらくは異様な興奮に咽喉が詰って、声も出ない様子であったが、やがて観客席の一人が唇を舌でしめらせながら言った。

「この俎では、美しいお人形がお風呂に入っているみたいで動きがない。一つ、ひっくり返えしたり、もっと仰向けにしたりして、あらゆる角度から眺められるよう悦子嬢にウルトラCの演技をやってもらおうじゃありませんか」

上からも下からもお喋りが始まる。

「ハリウッドの女優は牛乳風呂に入るといい

ますが、これは人造の美容風呂というところですね。もっと体の隅々までたっぷりつかってもらわなくちゃ折角の我々の好意も水の泡ですよ」

「それに、いくら暖房が効いているといっても、この寒空に水行水も気が効きませんな」「まったくですね。こちらで新しいお湯でも入れて、湯気が立つほどの中で、たっぷり空中温泉の情緒を楽しんでもらわなくちゃ」

「ハッハ。お互いに振る舞い酒を御馳走になつて、お湯を湧かすのには造作無いですから一つ皆さんお揃い蛇口をひねってホットビールでもそそぎますかな」

浴槽の中の悦子嬢には、思わず耳にセンを込めたくなる恐ろしい話だ。総身が怖気立って、吐き気をもそおす。知らず知らずに体が動いて、悦子嬢は逃げ出そうと身悶えした。

その瞬間、円錐型のグラスがゆらぎ、ちゃぽんと波打って、黄色い飛沫がとぶ。ワーツと火の子でも振るようにするスタンドの客。下の客は俄か雨にあわてて頭に手をやった、鼻をつまんだりする。

悦子嬢の顔は、透明トイレの底で、黄色い泡を吹いて苦悶している。グラスから出ているのはあぐら縛りにされた足の裏だけ、上体

は、逆転した太腿とヒップの下敷きにされて
いる。

空气中でさえ海老責めで、こういう風に仰
転させられれば四転八苦の拷問である。まし
てや愛川悦子嬢の場合は、そういうポーズに
伴う想像を絶した羞恥心に、しかも黄色い人
造液の中でさらさねばならない。

助け出された悦子嬢は、顔をくしゃくしゃ
にして苦しみもだえている。乱れ髪は頭に貼
りついて、しずくをたらしている。鼻は詰ま
って劇しく咳き込む。

咽喉を痙攣させて、飲み込んだ液体を、元



の便器に吐き出そうとするが、嵌口具のよう
な猿轡にさえぎられて満足にはできない。ゲ
ーゲーとこみ上げる嘔吐が体内に逆流してま
た一層苛酷な発作となって繰り返えられる。

「お願い。こんなひどいことだけは許して」
猿轡だけは許された。男の手が後髪もわし
づかみにしてないと、悦子嬢は再び底に横
転しそうだ。胃袋から吐き出す汚水と一緒に
悦子嬢は息を切らせて叫んだ。

「あ、あ、ああ——あんまりですわ。か、か
んにんして。悦子……ここから出られた
ら、どんなお仕置でも喜んで受けます。ムチ

打ちを百回といわれても、何、
お浣腸のお相手でも、何、
何んでもいたします。そ、
それから……ああ、悦子、
もうどうなってもいい、悦
子の全、全部を……」

助かりたい一心から夢中
でそう口走ってしまったか
ら、余りの情無さに、悦子
嬢は両膝の間に顔を埋めて
痛哭した。

首縄をわしづかみにして
持ち上げた悦子嬢の絶望の

顔を、例のヤクザ者が覗き込む。

「よし判った。それじゃ、この花びらみてな
口を便器にしてもいいのだな。フッフ。お前
さんの唇は大きくてよく似合いそうだぜ」

「ハ、ハイ。あっ嫌っ、気狂い。誰が……誰
が死んだって、そんな事を」

「あ、そうかい。それじゃ一晩中そうやって
雪隠詰めになっているんだな。それとも口以
外なら、どうだい。お前さんのこのデッカイ
おっぱい、このむっちりした肌を眺めている
と、俺あ、滅茶苦茶にしてやりたくなる。ど
うせ一度ビショ濡れに、汚れちまった体だ
ぜ。新しい熱いお湯を浴びるくらい何んでも
あるめえ」

黄色い浴槽に沈んでいるバラ色の悦子嬢の
裸像。アンモニア水の痒感と海老責めに苦悶
する肌は、ところどころ石鹼をねだくったよ
うになって、薄黄くぬらぬら泡立っている。
風呂の異臭がやがて悦子嬢の体臭になってし
まう。

濡れて締った縄目は蛇のように肌身をしめ
つける。呼吸をはばまれるような苦痛。その
黄色く染った縄が柔肌に喰いこむさまは、さ
ながらへビ責めにでもあっているようだし、
全身を這いまわる痒感と戦慄は、くすぐり責

めにあっているようだ。

その何をされても、されるままなのといった殉教の姿態は、実際はヒップにローラースケート靴を穿かされたみたいで、腰一つ動かさないのだが――。それは愛川悦子というモデル嬢のM的ムードに、不可思議なほど似合う。この無抵抗の人形の白い美肌を人間便器にして思い切りけがしてやるんだ。そんな悪魔的欲望を抱くのはQ氏一人ではあるまい。

Q氏は咽喉からかすれた声を出した。体中が火のように熱くなって顫えてくる。

「どうです。さっきの話、さっそく実行してみようじゃないですか。だがこの尽ではいくらなんでもレディの前では、余りに失礼だ。悦子嬢には目隠しをしてもらおうじゃないですか」

一同は息を呑み込んで誰も返事をしない。だが誰の顔面にも猥奇と興奮の色が一面にみなぎって、頬を紅潮させている。

硝子トイレに拘束され、黒布で目隠しされた悦子嬢を、二十名の男達が取囲む。全員が背を組むようにして観客席に昇ると、狭い台の上は、ラッシュアワーの電車以上に混み合っ

て立錐の余地もない。ただ、頭が天井につかえて、全員が屈み込むようにしているのとは他人の眼を意識し合って、緊張した膝頭をかすかに震わせている事だけが、満員電車とは違う。正直に、うしろめたいという気持を顔色に出している者。わざと悪党ぶって平然とすまして見せる者。その態度や反応は様々だが一様に興奮と期待で、胸をわくわくさせている。正確には十九名で、霞を常食とする仙人にはしたくとも、そんな真似はできないので太いグラスの足を支える役目にされ、ぶつぶつ不平を洩らしている。

真白の女体に加えられた黒い目隠しの布。それだけで、悦子嬢は見違えるほど妖美な見世物になる。

眼が見えないことは、悦子嬢にとっても、男たちにとっても、一種の麻酔剤の働きにはなる。しかし悦子嬢にとってはやはり、めくらにされた目と鼻の先に誰とも知れない男達の気配や体臭に取囲まれて、お仕置を待つ瞬間は、気が違うほどの恐怖であり、舌を噛み切ってしまいたいほどの屈辱である。それだけに男性側には、この上ない嗜虐と所有欲の対象となる。

思わず悦子嬢は海老責めの身体を一層不自然に縮めようとする。後手がつり上って、黄色いグラスにつかっていた指先が、空中で劇

痛に折れ曲っている。その反対に伏せられた顔は、硝子トイレの中身を鼻と口で味わなければならぬ。その味覚と臭気に悦子嬢は首を振りまわす。反射的に彼女は顔をふり上げる。結局お仕置を待つ一番安全な姿勢は、首だけ前にさし出す――ギロチン台に登った女囚のポーズだと悦子嬢は観念したようだ。

黒い目隠しで判らないが、きっと悦子嬢は黒布の下を眼を瞑っていると想像される。

観客で埋めつくされた台上では、一斉に、公衆便所の壁を取り壊して公開した光景が開始された。悦子嬢の頭上を襲う黄色い驟雨。

悦子嬢は、首を刎ねられる美しい女囚のよう

に、浴びせられるまま姿勢をくずさない。温度と鮮度の相違こそあれ、眼鼻の一寸先には、責め道具の人造湖が迫っているのだ。肩を叩く熱いシャワーのような音。立ちこめる異様な湯気と、五色の虹。十九名分の俄雨は、悦子嬢の体を洗うだけではない。刻々と硝子トイレは増水して、彼女の肌を暖める面積を拡げて円錐型の硝子をいよいよ曇らせる。水位は首まで浸し、顎スレスレの高さにある。

それでも悦子嬢は、肉体美に比較して繊細な美人型の首を伸して、甘受している。黒髪

はびっしり濡れて、襟足の後れ毛が首筋にまわりついている。凄艶というか、残酷美というか、胸をかきむしられるような風景である。

水びたしの真最中、悦子嬢は誰か判らない男に、顔を持ち上げられた。強い照明をまともに受けて、嚴重に目隠しされた黒布の中で眼の前が明るくなったなと感じた途端、

「あっ、ぎ、げえっ——ぶ、ぶう……か、かんにんして。あ、あ、お、お願いサルグツワを、猿轡をして……」

吐き気と一緒に、悦子嬢は断末魔の悲鳴をあげた。その絶叫に近い哀願の声は劇しい排泄の響きをつき破って、天井にこだますほど大きく絶望的であった。

果して人造便器にされた悦子嬢が、どんな痛ましい顔をして、どんな動物的な姿勢をさせられて、たらい廻しに全量拝受したかは、とても作者には書く勇氣も筆力もない。どうか、読者諸君が勝手に想像を逞しくして空想を愉しんでくれ給え。

十、排泄水車ショー

どうやら作者のペン先は、悦子嬢悦虐図の

トリコになってしまったようだ。我等の悦子嬢を簀巻きにして長い長い坂道を転すように無器用なくせに、ペンがどこまでも追いつけなくなる。もう夜明けも近い。明日の会社勤めもある。肩はコチコチに凝るし、煙草も吸い尽してしまった。欠伸も出る。

しかしせっかくの透明空中トイレを登場させながら、それを御使用になる悦子嬢の姿を描写しなければ、読者もガッカリしようし、作者自身も鰻井の匂いだけをかがされたような口おしい気持になる。明朝いや今朝のタイムレコーダーなど気にすまい。気にすまい。

さて、悦子嬢がQ氏のマンションに御来迎になつてから、もうかれこれ四時間近く経っている。酒党らしい彼女は、入浴後お化粧をしながらビール一本を空にしている。或いはアルコールの力で羞恥本能を麻痺させて、大胆な演技をするつもりだったかも知れないしヤケ酒半分の捨鉢な神経でなければ、その夜の客人達のお相手はつとまらなかつたというわけだ。

悦子嬢はまだ透明トイレから出る事を許されてはいない。

彼女は女の業の深さというか、女体の弱さというか、女性の神経というか、自分自身の

実体が自分で判らなくなる。股間自縛ショーを強要された時に、彼女は羞恥の衣を脱ぎ捨てて、素裸の女に生れ替つたつもりだった。自分の乳房は美しい。猿轡美人と賞讃され、肢体も八頭身だと批評された。自分の肉体の魅力が男をトリコにする、その優越感悦子嬢にとっても誇らしく楽しい。縄の芸術品と呼ばれたわたし自身の恋縄の情——だからこそ男達に加虐の対象にされてしまうのだ。それなら、この美しい身体も心も捧げて、どんな動物的な醜行にもひたすら奉仕する女奴隷になり切ろうと願った。

しかし裸になつたつもりでも、皮膚の下にはまだ何枚かの脱ぎ切れない着物があつた。人は女のつつましさと呼ぶが、それが邪魔をして無益な抵抗や哀願や、悲鳴や、涙を出させてしまう。それらは悦子嬢自身が、男達の快楽や征服欲を一層満足させる結果になるだけだと知っているのに。

わたし未だ調教が足りないのかしら。悦子嬢は自分自身に裏切られた想いだった。彼女は屈辱と敗北感に唇を噛む。

時間にしたら十五分程度だったが、黄色い浴槽で受けた羞恥責め、わたし最後に人造便器にされて、一体どんな表情をしていたかし

ら。黒布で目隠しされていただけに、悦子嬢にはどんな生き恥じをさらす真似をさせられていたか判らない。それだけに四十の男達の眼に映った自分の醜態を想像すると、わっと十七、八の小娘のように声を挙げて泣き出したくなる。

へわたし手足が痺れて感覚がない。体中の骨や関節がポキポキ音を立てて折れそうだわ。本当にもう骨の随まで、疲れ切ってしまったわ。ああ、それにわたしV

悦子嬢の口は自由である。それなのに彼女は下腹からつき上げてくる劇しい尿意をどうしても訴える勇気が出ないのだ。もちろんお行儀のよい悦子嬢では、この空中トイレを無断で使用する勇気もない。

「お願い。海老責めを解いて。貴方達はもうしたい放題の事をしてしまったのでしよう。お願い、早くここから出して」

やっとそれだけは言えたが、あとはどうしても言えない。黒い目隠しだけはされた俥で居たいと思った。あんなひどい仕打ちを受けた顔を見せるなんて、一体悦子、どういう顔をしたらよいのかしら。とても恥しくて悦子にはできないわ。

悦子嬢は自分の肉体を無性に呪わしく思っ

た。人造便器の代用をされた腹部を思い切り引き裂いてやりたい。分譲フォートでは切腹擬態のモデルになった経験もあって、大塚啓子嬢と並んでかなり人気を得たものだが、その夜ばかりは、悦子嬢には切腹の自虐さえ、痛快に感じられるのだった。

しかし悦子嬢は、とてもそんな……と自嘲の唇を再びかみ締めた。——おトイレへ行かせて、それくらいのことさえ言い出せないわたしが、どうして切腹などできよう。

悦子嬢の切迫した生理的要求など、いくら縄目に拘束された体とはいっても、ちょっとした身動き一つ、表情一つにも表れている。視力を奪われた悦子嬢には判らないだけで、目と鼻の先で目撃している見物人には、それが手に取るように判る。

悦子嬢はたまらないほどニンク臭い口臭をかがされたが、自分の方がよほど臭いだろうと卑下した。

「貴女のしたいこと、ぼくにはよく判る。この中に、無いの悦子嬢のだけ、遠慮いらさないよ。それ見物できるサービス、ぼく大変嬉しい。ぼく始めて見る、たまらない」

「だけど、この俥じゃ、彼女もあれほど海老責めを解いてくれと懇願しているんだから、

一応縄と目隠しだけは、解いてやろうじゃないですか——」

「フッフ。そうだったら、この透明トイレいっぱいになって、こぼれ出しますな」

その時、Q氏には或る珍妙なアイデアが浮んだ。一同にちよつと待つように、合図をして置いてから、Q氏は応接間に駆け込むと、直ぐ引きかえしてきた。

「これを悦子嬢の勢いで、廻していただくという趣好ですよ」

Q氏の指先には直径十五糎ばかりの水車が摘まれて、しずくを落している。応接室には熱帯魚が飼われている。その水槽の中で噴出する酸素気泡にくるくる廻っていた品物だ。水車は軽い合成樹脂でできていて、重りの役目をする田舎家が鋳物でこしらえてある。

一目見ただけで、全員がその意味を悟り、興を誘われた顔色をする。

縄目を解くために悦子嬢は空中トイレから引き出され、大きなビニール布で包まれて浴室へ運ばれる。

浴室ではザーと湯を浴びせる音や、監視の役目を忠実に果そうとする叱咤や強要の声。そのために何をされたのか、悦子嬢の逆上した悲鳴も聞かれる。

数分後、再びシャンペン風呂に入れられるために登場した悦子嬢は、赤黒い縄の条痕が一面に刻まれた体を、再び十字架縛りにされている。両腕は箒の柄に案山子のようにぐるぐる巻きにされて、開股された足首をゴルフのクラブ二本を使って束縛されている。それを四人の男が肩に載せて、縛女の御輿という恰好だ。

「さあ、いよいよ透明トイレを使用させていただきますよ」

「い、いやっ、こんな中で、ひどいひどい」空中であばれ廻るヒップから、再び黄色い浴槽に漬けられる。箒の柄と二本のクラブをまともにグラスに掛けては、頑強に反抗する悦子嬢の体重で、せっかくの空中便器も割れる危険があるので、四方を長身の観客が支えるようにしている。

悦子嬢は、お湯で何度も洗われて薄桃色に輝く肌を再び汚物だけがされる嫌悪に、V字型に沈められた体を持ち上げようと、盛んに

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千円
佳作	一篇につき	二千円

☆規 定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文獻味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思えます。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号に発表。

一、入選作には掲載誌発売と同時に、賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「懸賞」とお書き下さい。

異臭の飛沫をとばす。Q氏が台所から、一メートルばかりの棒の先に丁度乳房を伏せたような丸いゴムの付いた——流し台などが詰った時そのゴムで圧縮して掃除する道具を持ち出して来る。それを使って台上から二人掛りでV字型の底部にあるおへそを力いっぱい押え込み、いやがる臀部をグラスに固定してしまふ。

手足の自由は効かないし、流し台の詰ったのをポコンポコン圧縮する掃除器で、生理の苦痛に張った下腹を押えられる苦しさ。それは白い凝脂の浮いた女盛りの腹に、大きな蛸の吸盤のように吸い付いて離れない。

「あっ、お願い。目、目隠しを取らないで——悦子、顔を見られるのが羞しい」

真昼の直射日光のようなライトに射すめられて悦子嬢は眼をパチパチさせて眩しがる。

「だって、目隠しを取らなくちゃ、これを上手に廻す事はできないでしょう」

Q氏のさし出す水車を、悦子嬢は恐怖に凍った瞳をいっぱい見開いて凝視する。さっき言葉では聞かされたが、いまこの眼でその実体を知った悦子嬢。羞恥に身体中が燃え立ち戦慄が肩中を走る。あわてて眼を逸らす。

「この水車をどう使うか——悦子嬢にも、よ

くお分りでしょう」

水車は、Q氏が軽く吹いただけで、くるくる廻る。

「それとも、もっと具体的に、悦子嬢の口から御説明していただきますようか」

「悦子。知っています。だけど、そんな浅ましい芸当をさせられるなんて、それだけは許して——」

「そんな恐い顔して睨まないで下さいよ。悦子嬢の勢いで、ただこうしてくるくる回すだけ——別に難しい芸当でもないし、練習もいらないでしょう」

別の観客が、それならと腰を挙げる。

「それなら、浣腸ごっこでもしましょうか。」

こっちの方が水車廻しより、見物人には御使用中の姿がよく見えるし。暖かいお湯の中での浣腸——」

男はパジャマのポケットから、イチジク浣腸を取り出して、掌でもてあそぶ。それも一つや二つではない、全部で五個ある。

「それじゃ、やはり浣腸責めにするか」

おどかしだけじゃないんだぜと、イチジク浣腸が一つ押しつぶされる。飛沫が悦子嬢の顔に飛んだ。

「あっ、ひ、ひいー、そ、それでは悦子、水

水車を回さしていただきます」

恐怖に声を顫わせてそう云ってから、悦子嬢は声だけで歎息する。

Q氏は、ナイトガウンの袖を肩まで捲り上げて水車を、女体の真中に沈める。もう無我夢中で、同性の黄色い液体に手を入れる不潔感も気にはならない。

畳の上の観客は一樣に立上って、ガラスの底をみつめる。

「う、う、うう」

悦子嬢の呻きは、いよいよ末期的な様相を呈する。首がのけぞって齒ぎしりするのは生理現象の一つで仕方ないにしても、悦子嬢は目的物をどうしても正視する事ができない。しかしいくら羞恥の顔を真紅にして、眼を外らしてみても、要求通りの曲芸をしなければあとは更に怖ろしい黄褐色の拷問が加えられるだけだ。そのどうしようもない窮地に追い込まれた絶望とあせりに、悦子嬢はうろろろするだけである。

「やい、もっと大きな目を開いて、よく見ろよ。水車を廻すのはお前さんなんだぜ。泣きべそばかり掻いていねえで的をよく狙うんだ的を。早く水車を使いたいといったのは、お前さんだぜ。上手に廻らなかつたら承知し

ねえぞ」

手首まで入墨をした腕が伸びて、悦子嬢の顎をねじ切るようにして俯向かせる。

「あ、あ——どうしよう」

悦子嬢はとうとう、観客達の覗き込む中で女体を沈めた硝子トイレを使用して見せた。

悦子嬢自身も男たちの視線と一緒に茫然自失とした表情で、淡黄色の底を眺めている。

——透明トイレの底で、水車は期待通りに勢いよく回転する。水車は、眼には見えないが激しい暖流の勢いに押されて、ぶくぶく黄色い気泡を吹き上げる。熱帯魚の水槽にある時より、速力も早く威勢もよい。その黄金色の水槽には、愛川悦子という浴槽もはち切れんばかりのバラ色の肉体を持った人魚が一匹飼育されていた。

× × ×

作者は両手を伸して、あーあーと、大きな欠伸をした。ペンは原稿用紙の上に落ちて、両手で拳骨をつくっては、しきりに肩を叩いている。

時刻は午前五時半——。作者は小便に出掛ける。厠の窓から覗くと、冬の空はまだ夜の帷につつまれて、空には、円い月が輝いてい

る。昨夜来の門灯だけが佗しく光っていて凍りついた街路に牛乳配達達の黒い影がちらちらしている。背後にその物音を聞きながら「さて気の効いた完結にしなければ」と、作者は真赤に凍えた指先に白い息をふうふう吹きつけながら、書斎に急ぐ。

——その頃、Q氏のマンションでは、仙人が帰宅するところだ。Q氏は四階の窓を開けて見送っている。雪明りの道をサンタクロースの真赤なマントが急ぐ。仙人が願って手を振ったかと思うと、一陣の風と一緒に木の葉になつて、あとには、雪の足跡だけが残され

た。
悦子嬢とその夜の客人達は自宅で眠っている。暖い寝床の中で長い夢を見て、寝言を云っている——何んだ、もうオシマイか、と。

(完)

△華々しき女体緊縛の組写真集▽

美しき縛しめ [第四集]

限定版 グラビヤ印刷写真集

頒価一部 一〇〇〇円 (送共) 略号「美4」

◎縛られた美女ばかりのフोट八十態◎

最新撮影の新しいモデル、山原清子、木村洋子、玉田美佐子による美しい緊縛フोटに加えるにベテラン大塚啓子の極最近撮影のフोटなど、ここ数カ月に亘って、フोट・アルバム「美しき縛しめ」用として撮影し保存してきた写真を、極めて鮮明なるグラビヤ印刷の特アート紙によって、皆様にごらんに入れます。写真は、どれも未発表のとおきおきの傑作ばかりです。各モデル嬢の特徴をそれぞれに十二分に発揮した文獻的価値豊かなフोट揃いです。春の暖気に匂う花の如く全紙面から、にっこりと皆様に微笑みかけています。緊縛による苦悶や苦痛も、皆様に見て頂けるといふことだけで、彼女たちも嬉しいのです。どうか、この素晴らしい一冊をお求め下さるようモデル嬢たちと共に心からお待ちいたします。

登場モデル 山原清子、木村洋子、玉田美佐子、大塚啓子

◇写真集アルバム内容◇

- 刺青女体の逆エビ責め (山原清子)
- 鉄扉に緊縛首吊り晒し (玉田美佐子)
- ブロックの石抱き責め (木村洋子)
- 箆子の浣腸器と鼻責め (大塚啓子)
- 両足吊りにあう刺青女体 (山原清子)
- 古墳にて後手吊り組写真 (木村洋子)
- 両手吊りに悶える組写真 (山原清子)
- 立木から完全逆さ吊りに揺れる女体 (木村洋子)
- 猿ぐつわ百態組写真 (大塚啓子)
- 革拘束具による組写真 (大塚啓子)
- 柱縛りの晒し責め組写真 (玉田美佐子)
- セーラ服緊縛組写真 (大塚啓子)
- 野外に於ける晒責組写真 (玉田美佐子、木村洋子)
- 刺青女体の柱吊り責め (山原清子)
- 捕獲された縛られ女、裸身の悶え (大塚啓子)
- 入墨に映える緊縛絵模様 (山原清子)
- 両足半吊りの表と裏 (山原清子)

△以上緊縛写真八十葉▽

以上の通り、本誌のグラビヤにし、何カ月分にも相当する豊富な女体緊縛写真を、特アート紙に對して鮮明なるグラビヤ印刷によって、写真集を完成いたしました。必ずや皆様の御満足を得ることと信じます。限定版につき一般書店には姿を現わしません。数にも限りがあり、お申し込み下さい。お早くと。

一般書店売は一切いたしません。直接発行所へお申込み下さい。

＜KK文芸時評＞

橘 行 司 子

—五月号の展望—

紅一点、出雲肌香嬢に拍手！

力作揃って編集本腰入る

「心傷たむ遍歴」に思想小説の声



告白「ふんどしを締めましょう」など

四月号のハサロ/V冒頭に「女性の読者」という題で、女性の執筆者や寄稿家がどんどん増えてくれると一層うれしいのだが、という編集子の言葉があったが、これは行司子も期待していることで、早速「時評別冊」を書き上げ、女性読者のみなさんVとして編集部へ投稿したほどである（これを執筆している現在は未発表）

早くも五月号の本文に紅一点、出雲肌香の「ふんどしを締めましょう」の告白が発表されたことをよろこびたい。男性群がズラリと顔を揃えてる真ツ只中で、二十才の女店員です。ではじまるユーモラスな文体は、ほんとうのオシャレなら、未来の流行の最先端を行くふんどしを締めましょうの（おしまい）まで実に愉快な筆致である。特に、ふんどしと、共産圏の国立サーカスの女芸人などを結び付けたりする近代的な「ふんどし考」の所

は面白く興味深い物がある。フンドシ乙女、出雲肌香さんのキュッと締めたフンドシしての登場に拍手を送りたい。

大島幸「小原真澄嬢に魅せられて」は、作者は「十年来の『奇譚クラブ』の愛読者」であるようだが、グラビヤ、口絵が廃止され挿絵も申し訳け程度しか掲載されなく、それが恋人を失ったような気持というのは理解できる。とにかく、K誌にとってグラビヤフォトは金看板であったし、そのみが目的で購入したマニアも多かったのであるから。このようなお気持は大島さんのみでないと思う。しかし、制約下にあつては「編集後記」挿絵が少いとか写真がないとか、いろいろ不満を洩らされる方々も多いのだが、事情御推察の上今暫く辛抱して頂くようお願いしたい。の編集子の言葉を察すると、強くは行司子も要望出来ない感がある。むしろ、四月号より本誌に使用されている頁（紙質）が良くなりサロンにしても「カメラ・ハント」にせよ、掲載された写真が、より鮮明になってきたことに注目したいのである。また、三月号からは目次裏に五月号では表紙裏に「見る広告」がお目見得しているのも見逃せない。

大島さんの「マスキ嬢は『SMカメラ・ハ

ント」最大の収穫だと小生には思われます。言葉には賛成したい。時評(四月号の展望)にも「辻村氏のハント、——まさに快調」とペンしているので参照されたい。

間宮清満彦『カシモド』の恋入書籍紹介は、奇譚クラブに「奇譚」が薄く、むしろ、そうでないと思われる世界(出版界)に相当突込んだ? 奇譚があるようだ。

——という、この所「小説現代」や、推理作家が物す単行本などにテーマされるSM的要素に関する話題の、ひとつの具体的な紹介として興味がある。多分、編集子を書いたと考えられる四月号「話題」一八八頁。「(梶山季之)」という作家は、今までの本誌にも、ときどき話題にのぼっていたが、と前置して、どうも、奇クの愛読者というより熱読者、いやマニアといった方がいいかもしれない。と、手ばなしでSM本家(奇譚クラブ)のK K的免状をくれようと云わんばかりの調子だから、これは話題に筋金が入ったようなものだ。「サロン」の辻村隆八楽我記Vにも「黒岩氏で想い出すのは」として、社会派推理作家・黒岩重吾のことが、氏の描く世界と私の拙作とは類似点もあり、氏もどちらかと云えばアブ好み」として紹介され、大映の某氏を

通じて、一度黒岩氏が会って見たいと仰有つてこられた」と「アブ文学」という共通の場からK誌の外で活躍している花形作家との結び付を期待している口ぶりを見せている。一般作家とK誌の作家との関係。その作品の比較論。K誌から見たマスコミの動きなど、種々と考えるべき課題はあろうが、いま、ひとつだけ言えることは、SMというテーマが、もはやマンネリ化したと、評される一般文学(推理小説もふくむ)の中にあつて、その突破口として、認識、クローズアップされてきたことで、単なる出版社側のセンチシヨナルな商業政策とは別に、SMは、作家自身にとっても避けられぬテーマとなってきた。特に、興味あるのは、かつては江戸川、谷崎両氏が好んでSMを創作の手段とされたのが、社会派と目される梶山氏などに応用されてきたことによつて、作品をとおして、一般読者の心に、それが現実感として受け取られるようになり、SMの世界は、単なる空想的な限られた特殊な物でなくなりつつある事である。探偵小説というジャンルが、はじめはマニアの世界のものとして出発し、やがては推理小説。松本清張が、これを社会的事件小説とまで巾をひろげたことによつて、推理小説

ベストセラー全盛時代を到来させ(黒岩、水上、梶山等がこの系統に入る)いまは推理小説と一般小説との区別が曖昧となり、本来からの「推理小説」が低調を叫ばれるようになった。

K誌を母胎として開拓された独自のK K的小説その他が、はたして一般文学との関係にあつて、今後、どのように発展されるであろうか(K誌の文壇にあつて論される問題のようだ)

「心傷たむ遍歴」について

山口広「読者通信」四月号の「あなたは最近号では、西条さんの『心傷たむ遍歴』を見落しておられるような気がします——氏の筆力に、もっと注目されるべきではないでしょうか」(福田久文)の「橋氏のように難解だとはあまり思いませんが」等の「K K時評」二月号の展望八愚作というより難解、サーピス精神に欠けている。だが、わが道を行く——と作者に云われれば、それまでのことVに對する声についてふれて置きたい。小説作法の本質からいって、だれにでも読まれるという点が先決される。「作者一人が力みすぎて空まわりしている感じ(天道公平)」の読み

づらいという投稿も見逃すことは出来ない。しかし「わが道を行く」という言葉を付け足すことによって、K誌上では特に限られた少数党対象、エリート意識も許されようというふくみもにじませた。また「作者みずから」想うこと（三たび）の中で文学観を述べている。このエッセイを再読して「とも書いて置いたが、なお八新刊八月号を見てV四十年九月号。西条操氏の本格サディズム小説の「心傷たむ遍歴」（第十二章まで連載され、まだ未完）そのオースドックスな御執筆振りに拍手を送る。そのドッシリとした作品よりにじみ出る風格は「SM」より見た世界史シリーズ・黒淵嬰一氏と共に、本誌の双璧をなすものだ」と時評のペンをふるっている。とにかく、各自の好みが一層、作品評価の基準を複雑にしているK誌上であって、行司子の軍配も又、スッキリしない点もあるので、そのことは御許し頂きたいが、けっして「心傷たむ遍歴」を無視してないことは、以上述べた事で御諒解願いたい。

今回の『読者通信』（大阪・黒淵嬰一）は二月号の「想う事」二カ月かかって読みました。「想う事」を読んで漸く此の大作が思想小説である事に気付き始めました」と

述べているが、この労作「心傷たむ遍歴」はエッセイ「想うこと（三たび）」に、そのテーマを理解できようカギがあるので、それを提言した裏付が、ここにはからずも、黒淵さんの便りで表面化されたことは、うれしいことでもある。

奇クサロン

編集子「踊子開陳と春婦検診」いつもK誌専属モデルの裸をみてるようなので、わざわざお金をはらって編集子、ストリップ御見学などしないのかと思ってたら、やはり踊子の御開帳を見に出かけることもあるのかネ。しかしM趣味氏なら、きっと彼女の臀の下に敷かれてみたいと願うだろうとか「写真撮影の話」を座長に申出るなど書いてる所を見ると、これもお仕事の内かな。いや、大変ゴクロウサマ？ ですね。それに八占領軍の強権で占領地の女性を掴まえさせてきては、無理矢理強制検診をするVことより「踊子が楽しんで開陳サービスしているのを眺めている方が、心楽しい」と、ちゃんと話の落^{おち}まで付けている。これで、サロンの冒頭、一頁が埋まるのだから、編集子もころんでは只^{ただ}で起きないサムライさ。

小竹一浩『夫婦SMプレイ雑感』

「最近奇ク^クの誌上は論評の花盛りだが拙作拙文は自認している故、字句の批評は平に御容赦願いたい」と作者が断わっているの、フオト評をしたい。

写真(A)の乳房のクローズアップは芸術的な意味と、形のよいオッパイに縄がキウツと締まっている点、素晴らしいの一言につきる。

加茂南北『私のカメラ・ハント』

二枚のフオトの内、下段に掲載されている後手に縛られ、腹の上に花が生けられてある水盤をのせた物が、迫真の表情をよく捉えて佳品。ちょっと、かつてのK誌のモデル、梨花悠紀子嬢の再来を思わせる。

黒井珍平『日本の良心に期待と不安』

ひとくせあった木戸川健「世相診断室」が閉鎖してより、しばらく社会時評もサロンで聞かれなかったが、ここに往年の論客、黒井珍平さんによって再開されたことは当を得たものとしてうれしい。これで、いま千草忠夫さんも「のおと・あと・らんだむ」で活躍されてあり、ベテランが二人、健在であることは本誌にとって心強いかぎりである。マスコミに対しての鋭い筆致は教えられることが多々あり、敬意を表したい。

花田沙登子『愛犬飼育の記』

サジスチン、花田嬢には、是非！ 本文に手記をお願いしたい。それこそ、これからの誌上を期待します。

六角京之介『女志士孤剣乱刃に死す』

三枚のフォト中、半裸で右手に剣をかざし左手に棒を持ったポーズが出色。よく孤剣乱刃のさまを表現して妙。ただし、撮影条件もあろうが、バックはもっと、荒れはてた部屋の感じがあつたら一層、リアル感が出た。惜しい。

保藤久人「変身」など

△サロン散文▽四月号で、保藤久人さんが「本格的なSM小説」と言葉を出した時。これは小説を書くなとひとそかに期待していた。特に「耕土散筆」で、あざやかなペンさばきを見せているのを見ては、一層の望みが持たれたわけだ。保藤さんのあの緻密に計算されたエッセイは、小説にも大いに手腕を発揮する要素をひめていた。

△心理小説▽「変身」が発表されたのを見

現在在庫『本誌既刊、限定版写真集』案内

○限定版写真集「豊満と清楚」女体緊縛ケラフ集

頒価 一〇〇〇円 略号「限二」

○限定版写真集「美しき縛しめ」第四集

頒価 一〇〇〇円 略号「美4」

○限定版写真集「女性刑罰拷問特集」日本版

頒価 一〇〇〇円 略号「美5」

○限定版写真集△緊縛美女艶姿百態▽

頒価 一〇〇〇円 略号「美6」

○限定版写真集『刺青の魅力を探ぐる』

頒価 一〇〇〇円 略号「美7」

○限定版写真集「女斗緊縛競艶写真特集」

頒価 一〇〇〇円 略号「美8」

て、その心理というタイトルに、成程とうなつた。しかも、この作品は、単なるSM小説になつてゐるのではなく、奇妙な人間関係、男女の心の葛藤が、谷崎潤一郎の「鍵」を小道具として鋭くえぐり出されている所に、読者を捕えてはなさない、作者の内的衝動（生命力）が感じられる。

「何しろ、君と僕との出会いは、この雑誌だからな。二人の交流は、この中の活字で繋がっている。そうだろう」という省三に対して、「そう……ね。その通りよ。その本のお陰で私は省三さんを知り、今は楽しい生活をさせて貰っている。でもね……正直に言つて、私マゾヒストって嫌いなもの！」とさけぶ新子との会話は、二人の宿命的な影まで暗示させ、ピンとはった緊張感は、次に展開される場面へのこうふんをかりたて、まさに心にくいばかりの書き振りである。しかも、生半可な口先の言葉だけでは満たされなくなつて来ていた。実際に、より現実的に新子の脚に縫いつきたいのである」という省三の気持を出すことによって、さらに両者の複雑性をドラマティックに盛り上がらせる。———そのような波乱が描写されて、ラスト近い———水を浴びて、反射的に省三は距離を保ったが

真っ盛りの花は妖美に匂いつつ彼を誘う。完璧な霊花、神秘のヴェールを脱ぎ捨てた真実はこれか、と省三は見た。——水!!…神の——? という、こん度は信子夫人との妖しき一瞬が、新子との伏線あって、さらに強烈なクライマックスをよぶ。△省三は机に向っている。用箋を拡げて、簡単に数行の文字を綴る。宛名を「北口新子様」とした△に、「俺は少しおかしいのかな、と思う。そして、人間の性格なんて、全く奇妙なものだな……と思う。それが偽りのない心境であった」と結んでいるのは、北口新子に手紙を出すという一節があって生きている。

Sと違ってM小説は、フェチ的な素材もあって、特に男性作家が書く場合、ややもすると観念的になる恐れがある。これは小説だけでなく「読者通信」にも、たまたま見られる事である。芳野眉美さんが開拓された△神酒小説△に、一般文学上の立場からすれば、その必然性が問題になるように（「酔人醉談」木戸川健。新年号、参照）

『変身』について面白い、興味あるという感想は出せない。むしろ、真実が、読者のむねに感動をもたらすとしたい。また「黒と緑が鮮烈に艶々して美しく見える」葉包カプセル

の背景と、純情な麗花、尚江を△唯、待てばよいのである△と終り近くに入れることによつて、この、はてしない泥沼のような、そのくせ、せっぱつまつた物語に、作者の「哀れさ」その余情をともなつて、未来の△救い△をイメージさせる。この『変身』はすべてでなく、序章であることに、今後の創作が期待される。

『変身』の他に、今回は力作二篇、悦子恋縄譚（麒麟児久）。「続・蚯蚓のたわごと」田代俊夫が発表され、読む雑誌のカケ声も、いよいよ本腰が入ったことを読者と共によろこびたい。麒麟児久さんの作品は（つづく）ことになっていくが、達者な場面の運び方は、一気に読ませる力をもっており、作家・柴田鍊三郎の筆致を思わせる軽妙さがある。併載されたフォトカットと共に、奇抜なアイデア（硝子トイレを使った、フェチ責めの構図など）によるストーリーは、実に楽しい好読物となっており、次回が待ち遠しい。

田代俊夫さんのエッセイは、すでに保藤久人「蚯蚓のたわごと」を読んで（新年号）——知られているように、幾多の問題提起をふくむ文献価値を持っている。

今回の△続△も、その意味で反響を願っている。

「のおと・あと・らんだむ」について

「四月号の展望」で「おそかりし? 千草ゆらのすけ殿、行司子せめて粗酒なり一献」と重要な問題がある割に、その反響の少ないことに、千草さんの心情を察して△粗酒一献△とシャレて、その労をねぎらったわけだが、ようやく「読者通信」福田久文さんから「千草さんの評論に満腔の敬意を表します」と、その「欧米の優れた数学の論文を読むのと同じ喜びと爽やかさを覚えます」と、感想が出されたことに、うれしい気持を覚える。正しい論壇は、けっして奇クにとつてマイナスでは無い。むしろプラスになると思うのだが……。そして「のおと・あと・らんだむ」は、その新しい論壇の明日を暗示していると信じるのだが……。

◎訂正（五月号誌上の「四月号の展望」）

△風俗雑報△映画「人類学入門」にふれた個処、大和のOL（OB）は「大阪」が正。

（終）

アルバム「美しき縛しめ」第六集 愈々完成!

緊縛美女艶姿百態

頒価一〇〇〇円(送共)
略号「美6」

特アート紙グラビヤ印刷、女体緊縛百ポーズ写真集

新人モデル、ベテラン・モデル緊縛写真オンパレード

〔出演モデル〕 ○山原清子○東浦ひかる○木村洋子○鈴木晃子○増田みゆき○大塚啓子○玉田美佐子○梨花悠紀子○絹川文代○長野良子○桜井葉子○新井マリ子○刑部典子の十三名

十三名の若々しいピチピチとした若鮎のような新鮮なモデル達の柔肌に厳しく掛った縄目、これすべて緊縛女体のポーズの中で、とっておきのものばかり百態を選びだしました。いずれも未だどんな形式にしる一度も発表したことのないものばかりです。最近の傑作、力作をすべて網羅しました。十三名の美女の緊縛艶姿百態が、この一冊で皆さまの物となるのです。何卒一冊を座右にお備え下さい。

アルバム「美しき縛しめ」第一集、第二集、第三集「美3」は残念ながら売切れですが、「美4」「美5」「美6」は只今在庫しております。引続いて「美7」「美8」の企画をしておりますので、どうか一括してお揃え下さい。

◆美しき縛しめ百態、新人ベテランモデル競艶決定版内容◆

亀甲縛り乳房責め (大塚)
猿ぐつわに悶える (山原)
緊縛に微笑む典子 (刑部)
瘦躯をくびる縄目 (木村)
逆さ吊りに泣く新妻 (増田)
痛めつけられる牝豹 (鈴木)
益々肥った肌に縄 (東浦)
鮮明な刺青緊縛 (山原)
長髪は肌になとう (長野)
ゆれる吊られた女体 (梨花)

太股の刺青をはだけ (山原)
荒縄と荒蕪で苛なむ (大塚)
顔をいじめられる (新井)
柱の立しばかり (山原)
赤いオシメカバー (絹川)
荒縄拷問哀愁 (梨花)
全裸の後手吊り (玉田)
案山子縛り (新井)
正面ウエスト縛り (絹川)
可愛い尻えくぼ (長野)
樹間のハダシの囚女 (桜井)

肉体自慢の開股縛り (長野)
火あぶりにあう囚女 (大塚)
汚れた麻縄縛り (絹川)
豊胸を二つに割る (長野)
水着を剥がれて縄 (梨花)
ゴムカバーの艶 (大塚)
真白き肌に樹洩れ日 (絹川)
着衣は無惨に剥がれ (山原)
裸身を晒して悶える (梨花)
縄は胸に息苦しい (大塚)
背中の刺青をさらす (山原)

全裸後手縛り引回し (大塚)	両手吊りに耐えぬく (玉田)	後手吊り麻柱晒し (山原)	ネットをかぶらせる (梨花)	山の木に曝す (絹川)	庭前に見える艶姿 (山原)	高小手足首縛り (大塚)	手ぐさり足枷 (絹川)	裸身に光と影の綾 (大塚)	後手は高々と吊り (梨花)	木馬に跨がる乙女 (大塚)	逆さ吊りにあえぐ女 (梨花)	デニムの拘束衣 (大塚)	海老縛りに耐える (東浦)	女囚第六十三号 (梨花)	吐きだした布片 (絹川)	白肌にフンドシ縛り (大塚)	後手の背面さらし (山原)	柔肌に喰い入る麻縄 (大塚)	後手吊りに浮かぶ女 (梨花)	鎖に吊られた両手 (大塚)	黒革製の猿ぐつわ (新井)	スダレの中の晒し (玉田)	巻煙草責め (大塚)	日本髪腰巻しばかり (山原)	後手高小手しばかり (絹川)	立木縛りムチ打ち (桜井)	エビしばり苦悶姿態 (梨花)	高島田着物あて姿 (山原)	臀部誇張股間縛り (大塚)	強烈な後手と乳房 (梨花)	脱げかけたズロース (絹川)	柱に後手しばかり (玉田)	強烈な鼻ひねり (大塚)	足挙げ椅子しばかり (東浦)
手摺りに開股責め (梨花)	裸身の開股縛り (大塚)	お茶目ぶり発揮 (長野)	猿ぐつわと荒縄縛り (大塚)	高島田の全裸の縛り (山原)	裸身にハイヒール (大塚)	プロックの石抱き (木村)	生ゴムの猿ぐつわ (大塚)	緊縛の悦虐表情 (梨花)	後手に縄はきびしく (刑部)	豊満に挑戦する縄 (東浦)	黒紐は白肌に映える (絹川)	裸身を踏まれる (大塚)	破られたシュミーズ (梨花)	六尺禪は白く映える (大塚)	いたぶられる足 (梨花)	蕨の中の緊縛肢体 (大塚)	鼻責めにあう晃子 (鈴木)	責めに酔う恍惚境 (東浦)	逆エビにもたえる (山原)	椅子責め媚態 (大塚)	見事な臍窩を晒す (大塚)	豊満を割る縦縛り (東浦)	足下にもがき苦しむ (新井)	黒革のフンドシ縛り (大塚)	浣腸器の恐怖 (大塚)	美肌は縄に酔う (長野)	吊られ吊られて (木村)	白禪の後手しばかり (大塚)	責めに愉悅する女 (山原)	マゾの境地露呈 (木村)	プレイに疲れはてる (絹川)	乳房は光り輝やく (大塚)	全裸美プラス縄目 (長野)	

濡れにぞ濡れし

芳野眉美

△古都の休日▽

花田沙登子さんとの一日

三月中旬京都で個展を開く葉山啓氏（四十年七月号シナリオ「いちぢくの実を持つ女」参照）と同行する予定だったが、彼が仕事の都合で夜行になったので早朝一人で新幹線ひかりに乗った。

目的は葉山啓氏の個展に出席することと、奥嵯峨を歩くことと、そして、花田沙登子さん（四十一年四月号奇クサロン「どなたか、私の飼犬になりませんか」参照）に会うことである。予定は二泊三日。

京都を通過して新大阪へ。地下鉄で難波に出、ガールハント思ひ出の千日前、戎橋の難

踏をぶらぶらする。法善寺の水かけ不動は苔に埋もれて美しい。

約束の喫茶店で花田沙登子さんを待つ。定刻、スラックスにセーターというスポーティな彼女があらわれた。自動車の教習所の帰りだという。笑っている。

注文が注文だけに、彼女も困ったらしい。

「ビールでも飲めば……」

ということになった。ビールに限る。が、

まだバーの時間ではない。

「ビヤホールでも行きますか」

快晴だった空がいつの間にか曇って、歩道が濡れている。

「雨ね」

喫茶店の窓ガラスにも雨の粒があたった。「ホテルで飲みましょう。そのほうがくつろげる」

二人は立上った。

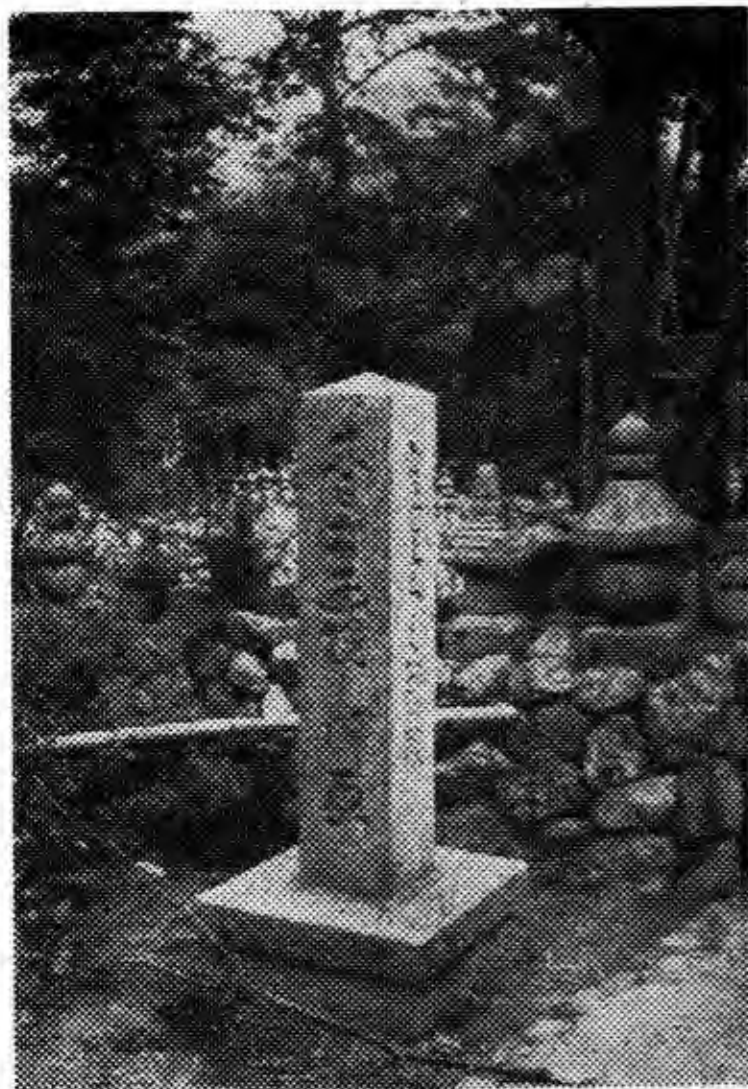
彼女は大阪弁だけど、私は関西弁を知らないから、私流の言葉で会話を進めることにする。彼女の印象が違ってしまふのは残念だがこれは仕方がない。

近所のホテルに雨をさけた。

ビールを注文する。一本しか持って来ないから四五本置いておいてくれと云う。これから神酒をせっせと製造しなければならぬ。

「でるかしら」

「でますよ」



京都嵯峨

西院の河原

こうなると図々しい。どちらが飼育しているのかわからない。

「酒は強いですか」

「強いほうね」

「じゃ、飲んで下さい」

彼女は急ピッチでグラスをほす。見ていてもおいしそうに飲む。私はあまり飲まない。花田沙登子さんの体内を通過したビールを、あとでゆっくり飲めばいい。一緒になって鯨飲していたら、せっかくの美酒が飲めなくなる。もったいない。

一度飲んだビールを、二度飲むなんて、全く経済的な趣味の持主だと思わない。これで

酔った奴が俺の友達にいる。ホント。

寝室と浴室の境のガラスがくもった。浴槽にお湯をためているのである。

「あつい」

と彼女が云った。ほんのりと酔がでてきたらしい。

「脱ぐわ」

カーテンの内側に消えた。ベッドの端が見える。洋室に通してくれたらしい。

彼女は素肌にタオルを

巻いただけで、あらわれた。これは心臓によくない。

「コップにして、あげようか」

「いやですよ」

「どうして」

「コップにしたら、それだけの意味になってしまふ」

「それだけって」

「Urine」

「あら、それでもいいっ

ていう人がいるわ」

「それはいますよ。コップでも、洗面器でも女性のが入っていればいい人がね」

「いやなの」

「私は、いやですね」

「贅沢ね」

「贅沢ですよ。蛇口に口をつけて飲まないと飲んだ気がしない」

「蛇口だって」

「あたたかい蛇口」

「ビール」

「はい」

そろそろ逆転してきた。

「お湯がたまったかどうか、見てきます」

「いいから、そこに坐っていらっしゃい」

目の毒なんですよ、というおうとしたが、やめた。

「女をくどいては、瓶詰めにして、コレクションしている人を知っているわ」

「瓶詰めですか」

「そうよ。それをカクテルにして飲むのよ」

「カクテル」

「二三人のをミックスして飲むわけね」

「シェーカーでふるの」

「まるでホームバーよ。うしろの棚に、いろ

んな女の瓶詰めが並んでいるのよ」

「洋酒の代りに、女性の瓶詰めがね」

「古いのや、新しいのや、種々有るわけよ」

「それそれ。腐るよ、でも」

「そうでしょうね」

「防腐剤でも、いれているのかな」

「さあ」

「味がおちないかな」

「そんなこと知らないわ」

「しかし贅沢だな。それこそホンモノだ」

「費用はかかるわね」

「花田さんのもの、コレクトしていったの」

「どうかしら」

——カクテル「飼育」

花田沙登子の Urine ½

小原 真澄の Urine ½

シェークして、カクテルグラスへ。

チェリーを飾る。

なんて、面白いだろうな。

一人で面白がっていてはいけない。次に進もう。

「お先に」

浴室に入った。旅の垢を洗わなくてはなら

ない。風呂は好きだ。

浴槽に長々と寝ていたら、

「早く」

彼女が飛び込んで来た。タオルは……とっ
ていた。

「寝るのよ、そこに」

あわててタイルに横になった。桶が枕にな
る。彼女の両足が、胸をまたいだ。

奥嵯峨の春

花田沙登子さんと別れ、京阪急行で京都三
条へ。タクシーで奥嵯峨に直行。

タクシーの運転手さんが親切な人で、旅館
をさがしてくれたのだが、このあたりでは、
紹介がないと男一人の客は泊めないと、京都
弁の綺麗な若い女中さんにやりわりことわら
れた。主人が留守だから相談も出来ないとい
う。

西院の河原の石仏を観に来たと云ったから
自殺にでも来たのかと思ったのかしら。

「二人で心中でもしようか」

と女中さんに云ったら、女中さんは笑って
いた。しかし、雨は強風を伴って、一人で寝
たら、それこそ死にたくなるような光景だっ
た。ここから仇野の念仏寺は近い。

「奥嵯峨の道はいくつもあるが、藪を抜ける
径を奨めたい。この深い竹藪を抜けてこそ、

はじめて嵯峨が実感として、あなたのものに
なる」

と誰かの京都案内にあったけれど、風雨の
すざましい夜に来てごらんよ、それどころじ
ゃないよ。

その若い女中さんが、嵐山の旅館を紹介し
てくれた。わざわざ電話をかけてくれたので
ある。有難う。助かった。渡月橋の近くの旅
館に泊る。タクシーの運転手さんも、やれや
れと思ったのに違いない。いい経験になりま
した、と云っていた。あの女中さん、見送っ
てくれて

「今度は、奥様とおこしやす」

有難う御座居ます。秋にアベックで伺わせ
て頂きます。

夢にまで、無数の朽ちれた石仏があらわれ
て参った。一人で寝るものじゃないね。

翌朝、目がさめて雨の音にがっかりした。
が、カーテンを開けると、青空が見える。雨
の音だと思ったのは、竹藪に吹きつける風の
音だった。朝刊が、西日本に吹き荒れた春の
あらしを告げていた。

二尊院——

小倉山二尊院華台寺、天台宗、嵯峨三名蹟
の一。円光大師の廟が山頂に有る。

本堂の前から右に、山を登り、旧三帝陵に急ぐ。土御門、後嵯峨、龜山三帝の分骨を納め、明治維新までは御陵としての取扱いを受けていた墓である。

急斜面に、鎌倉時代の三帝陵があった。別に三帝の名が彫ってあるわけでもない。三帝から見下すと、土に埋もれ、倒れ、朽ちれた無縁仏の墓石が群がっている。

大雨でもあれば、三帝陵は、一気に押し流されて、眼下の墓石群に埋没してしまうのではないかと思われるほど、急斜面に、三つの石塔は無造作に置かれてあった。

祇王寺——

真言宗大覚寺の塔頭、尼寺。清盛、祇王、祇女、母刀自、仏御前の木像が仏間に安置されている。二間の小さな庵である。

もう少し遅かったら、寺の玄関から落花が見られたのに、残念だった。

二尊院には人影が無かったが、祇王寺には三人四人とグループが談笑している。祇王祇女の恋話はロマンチックだから、新婚旅行にもいいのかもしれない。

寺の左手の奥に墓がある。宝篋印塔の祇王祇女母刀自の墓が左、右に五輪の平清盛の供養塔。

祇王寺の静かなただづまいは、箱庭のようだ。

念仏寺——

華西山東漸院念仏寺、浄土宗。

最終目的の西院の河原に着く。無数の小さな無縁仏は、実に壮観である。五輪の塔に囲まれた墓地に、八千余の石仏が並んでいる。ただの石と見られる一つ一つに、仏が刻んである。

古来、仇野は、死骸を捨てて風葬にした場所であったという。鳥獣に喰い荒らされた骨肉散乱の惨状を見て、数千体の石仏を刻んでこれを救済した。嵯峨帝の頃である。この為に仇野一帯の土中に埋没する無数の石仏があり、明治末年、現在のように蒐集し、無縁仏の浄土にしたという。

春のやわらかい日射しをあびた石仏は、おだやかな表情で並んでいる。悲しみも、淋しみも感じなかった。いるところにいるという安心感がそこにあった。竜安寺の石庭と同じように、石仏の群れは、その時の心の動静を種々に反映するものと思われる。

念仏寺のおばあさんと、おうすを飲みながら話をしていると、観光客の一人が写真をとらせてくれという。サングラスにまっ赤なセ

ーターでおうすを飲んでいたので、よほど奇妙に思われたらしい。苦笑したら、シャッターを切って、礼を云った。

秋が一番一年中で美しい、とおばあさんが云った。紅葉と無縁仏の取り合わせも悪くはない。

祇王寺で会ったグループが三三五五登って来る。人があまり多くなるとつまらない。

「秋にまた来ます」

とおばあさんに云った。

紫野の二院

念仏寺から嵐山にもどり、紫野の大徳寺に直行した。一人旅は足が早い。

三玄院——

三玄院を訪れる人は七五三の庭（昨雲庭）や八方睨の虎、利休七哲の一古田織部の八窓の茶室（簾庵）を見学することだろう。

だが、三玄院の墓地にひっそりとたたずむ石田三成の墓を訪ねる人は少い。何も刻まれていない細長い墓である。それだけである。

墓地を一周して、片隅に出雲阿国と名古屋三左衛門の二対の墓が有るのに気がついた。小さな、小さな五輪の塔は、寄り添うように立っていた。名前を告げる木札が添えてなけ

れば、古びた、埋もれた、なんの注意もひかないただの石であった。

春の日射しが、木立の間から、やがては消えて無くなってしまおうであろう二対の墓を、やさしく包んでいた。

三玄院は、石田三成、浅野幸長、森忠政の建立による。大徳寺塔頭の一。

高桐院――

楓樹の敷石道を歩いて高桐院に入る。楓だけの簡素な庭を、一人で見守る和服の婦人にひかれた。禅寺の庭は、一人を受け入れてくれるから不思議だ。

細川忠興と、ガラシャ夫人の石灯籠の墓を参る。利休秘蔵の天下一の称なる灯籠だという。一名欠灯籠。完全を忌む三齊公（忠興）が欠いたと記録がある。面白い。

高桐院は細川忠興の建立による。大徳寺塔頭の一。

夜、葉山啓氏の個展に出席した。

小原真澄さんとの一日

辻村さんに電話をしたら、そこまで来ているのなら寄れというので、挨拶方々一泊することにした。

辻村さんに会うと、どうしても話が長くな

る。たまたま、カメラハントのマスミ（四月号SMカメラハント可愛い小悪魔の群れ「小原真澄の巻」参照）の話になった。

「マスミの乳房を、わしづかみにしている写真があったでしょう。あれショックでした」

「そうですか」

「バストコンプレックスがあるから、すばらしい乳房にはどうも弱いな」

辻村さんは笑っている。

「その後、マスミさんとは」

「それがね、やいやい云われて困っているんですよ」

「中年男の味をおぼえたのかしら」

「まさか」

「辻村さん、何かしたのでしょう」

「何もありませんよ」

「どうかな」

「たまに付合ってあげようと思ってはいるのですがね、なんせ仕事に忙がしくて」

「カメラハントも、でしょう」

「それもありますけど」

「もったいないですね、マスミさん」

「全く、もったいない」

「代りましょうか」

「うん」

と辻村さんがうなった。

「明日は日曜ですよ」

「そうだね。マスミを、知らないわけでもないし」

「ユリコが怒るかしら」

「さあ、どうかな」

「今だから話をしますけどね、始めはマスミをねらっていたんですよ」

「そうだったの」

「肉感的な子でしょう。でもね、マスミがボスみたいだったから、遠慮して辻村さんにゆずったの」

「あんなこと云っている」

「辻村さんだって、始めは、マスミを私の手にさせるつもりだったでしょう。カメラハントにそう書いてあった」

「そう。したら、いやにユリコとびったり息が合っているものだから」

「決まった」

と私は宣言した。

「連絡して下さい。マスミがOKなら、付合って、それから東京に帰ります」

「浮気者だな」

「――火ならなんでも熱いものだ。なぜそうなのか。それは火の性質だから仕方ない。」

という宮沢賢治の童話がありますよ。

——男は浮気をするものだ。なぜそうなのか。それは男の性質だから仕方ない」

寝たのは、午前四時だった。

翌日、朝昼兼用の食事を囲み、辻村さんの言を借りれば、スーツケースを提げて、飄々と飛び出した。

マスマミがOKしたのである。ツイテル。

再び難波に出る。

約束した喫茶店に、見覚えのある顔が待っていた。定刻より早い。

「よう」

挨拶はこれだけである。

「今日はスラックスじゃないのか」

「女らしいほうがいいでしょう」

彼女も大阪弁だけど、花田さんの時と同様私流の言葉で失礼させてもらう。だから、カメラハントとは、印象が違ってしまいかもしれないが、許していただくことにする。

「食事は」

「まだいいわ」

「それじゃ、鯛焼でも買うか」

マスマミがペロツと舌をだした。可愛い。ボーイッシュな短いカットがよく似合う。

「ユリコ、元気」

「元気よ」

「ユリコを連れて来るのと思った」

「そのほうがよかったの」

「いや、マスマミさん一人のほうがいい」

顔を見合せて、ニヤツとした。どうもくすぐったいらしい。御免なさい、ユリコ君。

ベンチャーズの『君といつまでも』が聞こえてくる。

「好きだわ」

とマスマミが云った。

レコードのことである。

「加山雄三が作曲したやつだろう。俺も好きだ」

「——夕陽、いろあせても、ふたりの心は変わらない」

とマスマミは口ずさんだ。

「辻村さん、ちっとも会って下さらないの」

「仕事に忙しいからね」

今日は代役だよ、と云おうとしてやめた。

主演に早代り。

「そうそう、辻村さんがね、ユリコをくどくって云っていたよ」

マスマミの返事は、あっさりしていた。

「ユリコさえよければいいわよ」

現代っ子だよ、二人とも。

辻村さん、小悪魔の続編といきましょう。

ユリコに会いたくなったな。ウン。

思い出の法善寺横町を通ったとき、ローソクを三本買って、水かけ不動にそなえた。私と、小原真澄さんと花田沙登子さんである。マスマミが何を願かけたのか知らない。

歩きながら、

「いつ帰るの」

とマスマミがきく。

「八時のひかり」

「早いね」

ユリコのときもそうだったが、なんとなく忙しい。まるでホテルだ。それにしても、今日のマスマミはしとやかでおとなしい。背がすらりと高く、連れて歩いていてもすばらしい。

「ところで、俺の癖は知っているね」

寄り添うようにして歩いているマスマミに云った。

「ユリコからきいたわ」

「それなら話が早い」

「いやだなあ」

これは、否定の言葉ではない。

これ以上、書くことはないよね。楽しかった。

はな

花

と

へび

蛇

団

鬼六

続編（第十八回）

嵐のあと

美しいものに対する羨望と憎悪が嵩じ、それが加虐的心理に移向するのであろう。義子や悦子は、暴虐の嵐に打ちひしがれ、身も心も無残に踏みにじられて、号泣しつづける美津子と文夫に対し、なおも、盛んに、揶揄しつづけるのであった。

美津子も文夫も、後手に固く縛しめられている身を、マットレスの上で折り曲げるようにし、肩を震わせている。

鬼源と捨太郎の太い腕に抱きかかえられ、何度もそうされようとして、死物狂いで暴れ

たものの、見物していたやくざ達が、わいわい乗り出して来て、それを手伝ったため、美少年も美少女も遂に万策尽き果てた如く、烈しく泣き合いつつ、荒々しい悲しみを押し合いい、つき合いするようにして、連中の期待する行為を演じてしまったのだ。

口惜しさと羞恥の間を漂いながら、みじめに打ちひしがれて、頭をマットに押しつけるようにして泣きじやくる美津子と文夫。しかし、義子と悦子は、ゾクゾクした気分で、そんな哀れな二人の肩に手をかけ、ひっぺ返えすようにして、上体を起させるのであった。「そうメソメソする事はないじゃないか。二人ともこれで思いが叶ったんだろ。ニコッリ

笑い合ったらどうだい」

そんな事をいって、義子は、美津子の雪白の肩を揺さぶるのであった。

「もうこれで、あんた達は、れっきとした夫婦よ。これからは、びったり呼吸の合った夫婦コンビとして大いに活躍して貰うからね」

義子と悦子は、顔を見合わせて笑うのだが、

「でも、困っちゃうわね、この坊っちゃん」

悦子は、手をのばして、握ろうとする。

文夫は、獣のように、うめいて、身をちぢませるのだった。

カメラマンをやっていた井上が舌打ちしていう。

「一本分を撮り終らねえうち、駄目になっちまうとは、仕様のねえスターだな。おい、あと四本、今日中に撮影する予定なんだぜ。しっかりしろい」

井上は、近寄ってくると、身をちぢませている文夫の腰のあたりを足で蹴り上げるのだった。

田代が笑いながら、それをとめる。

「ま、そう、ガミガミいうな。何んていったって、この二人にしてみりゃ今日始めての事なんだ。美津子にしても、かなりのショックだった筈だ。シートの上を見たらう」

そのシートは、悦子達を取り除いていたが邪悪な恐しい計画の中で、遂に可憐な美しい花は、散ったのだ。

しかし、見物人のやくざ達は、それで、おさまるわけではない。

「何だ、森田組のショーは、こればっちで終りかい」

「人をカッカさせといて、これからという時、幕切れとは、ひどいじゃねえか」

などと、連中の怒号が巻き起る。

「ま、お静かに——」

と、森田は一座をなだめた。

「そのかわりといっちゃ何だが、本日は特別

に、山本富士子と新珠美千代をチャンポンにしたような、すごい美人を登場させますよ」
そう森田がいったので、一座は、シーンと静まった。

次に田代がいった。

「実は、その女、美貌と教養を兼ね備えた、ある大家の令夫人なんで、関西の岩崎親分がお越しになった時の特別番組にしていたんですが、若いこの二人のショーが、こう不首尾におわっては、そのお詫びに出演させないわけにいかんでしょう」

待ってました、とやくざ達の歓声があがった。

その時、この密室のドアが、にぶい音を軋ませて開いたようである。

銀子と朱美が、静子夫人を引き立てて、入って来たのだ。

「ひえーこいつは、すげえ美人だ」

やくざ達は、唾をのみこんで、眼を大きく開く。

背丈は五尺三寸、乳房といい、腰つきといい、いわば、熟れきっている女盛りの静子夫人が、その柔軟な白い肌に、本縄をかけられて、ズベ公達に背や尻を押されるようにしてぎっしり、埋まっている野卑な男達の中を、

奥の雛壇に向かって進んで行くのだ。

「さ、少し、道を開けて下さいよ」

銀子と朱美は、寄りたかって来るやくざ達を押し返すようにしながら、前かがみに歩く夫人を押し立てて、一旦、雛壇の上へ、登らせようとする。

たくましいばかりに盛り上った尻を揺らせるようにして、夫人が台の上へのぼって行くのを、男達は舌なめづりをするようにして眺めるのであった。

ようやく、台の上へあがった静子夫人は、マットの上で、涙のにじんだ黒眼をちらっと向けた美津子の方へ、視線を向けた。この、悲哀をこめた美しい夫人の瞳に柔かい線がかかる。——可哀そうな美津子さん、でも、生きる望みを失っちゃいけないわ——そのように夫人の瞳は、美津子に語りかけたようであった。

「さ、ぐずぐずせず、その柱を背にして立つのよ」

銀子は、邪慳に、夫人の背をぐいっと押した。

雛壇の上の二本並んで立っている柱の一つを背にして、静子夫人は、ぎっしり埋め尽すやくざ達の方を向き、すっくと立つ。

銀子と朱美が、その両隣に立ち、別の縄をつかつて、ひしひしと夫人の体を柱にゆわえつけていく。

何時であつたか、京子と共に、この柱を背にして立縛りにされ、全身、総毛立つばかりに恐しい剃毛をされた記憶が生々しく静子夫人の脳裡に浮かびあがってくる。

あれから、京子と共に地獄の調教を受け、次第に身も心も別個の女に作り変えられたのだ。静子夫人は、軽く冥黙するように眼を閉じ、一切はうちやくの沈黙をつづけている。

キラキラする卑劣な男達の眼に映ずる、まぶしいばかりに光沢のある麗夫人の全身像。

銀子は、夫人の足首を揃えさせ、かつちり柱に縛りつけて立上ると、やくざ達が一せいに注いでいる視線を面白そうに見ている。

「ホホホ、少し薄いので不思議に思ってるんですよ。最初はね、こんもり、見事に盛り上って、大家の若奥様らしく、堂々としたものだったのよ。でも、あんまり生意気な態度をとるんで、きれいに剃り上げてやったの。ねえ、そうでしたわね、若奥様」

銀子は、楽しそうに、そんな事をいい、静子夫人の頬を指でつつくのだった。

「そうそう、あの時のものを記念品として、

客人に一本ずつ差上げる事にしようじゃありませんか、社長」

森田が、田代の顔を見ていった。

よかろう、と田代は、懐から、封筒を取り出し、朱美に渡す。

朱美が、そんなものを、ワイワイいって手を出すやくざ達に配って歩いてる間、銀子は口元を歪めて、静子夫人に近づき、

「ホホホ、どう、若奥様、貴女のことをみんなが奪い合うようにして受け取ってますわ。大した人気ね」

銀子は、そういって、縄にしめあげられている夫人の豊かな乳房を指ではじくのだったが、静子夫人は、とぎすまされたような冷たい沈黙を守り、固く眼を閉ざしているのだ。

銀子は、フン、と鼻に小じわを寄せる。美しく緊まった高貴な感じさえする静子夫人の鼻すじを見ているうち、今に見ろ、この妥協を許さぬといった冷たい美しさが屈辱に歪みやがて、ペソをかくのだ、と闘魂のようなものを銀子は湧き立たせるのである。

「さ、早く、ショーのつづきをやってくれ」

「真正面から、見せておくだけってのは、かえって罪だぜ」

男達が、そろそろ文句をつけ出した。

・銀子は、鬼源を手招きして呼び、立縛りにされている静子夫人を中に、はさむようにしてショーの打合せを始める。

「バナナ切りをさせ、そのあと、客人達の手で、黒くなってきた所を元通り、剃り上げさせるってのは、どう」

「だめだな。今日の客は、それ位じゃ満足しねえよ」

「じゃ、とっときの手を使おうよ。捨太郎とこの若奥様を組ませるのさ」

鬼源と銀子のそうしたやりとりは、嫌でも静子夫人の耳に入ってくる。

捨太郎と組ませる——いよいよ落ちる所まで落ちたのだという絶望感が静子夫人の胸一杯にこみ上って来た。一滴の涙が、夫人の切長の美しい瞳から、したたり落ちた時、この密室の戸口の方が、急にがやがやと騒がしくなった。

「お、吉沢じゃないか」

観客席という事になっている場所の一隅で千代や伊沢と酒をくみかわしていた田代が、のっそり立上る。

吉沢がニヤニヤしながら入って来たのだ。そのうしろに、チンピラの堀川の背に、おぶわれて入って来たのは京子である。

「一体、どうしたんだよ」

見物人達の間に混って、酒を飲んでいた川田も、眼をパチパチさせて立上るのだった。

「いや、実はね」

吉沢は、森田と川田の所へ来て、見物人達には聞こえぬよう小声で話し出す。

「今日は客人が集る日でしょう。俺の女だからといって、そんな日に、一人占めにしているのは何だと思つたもんで」

「成程、おめえにしちゃ、見上げた心がけだな」

と森田は笑つたが、吉沢は、うしろで堀川に背負われている京子の方をニヤリと笑つて見ながら、

「というより、親分、このショーに出るといふのは、この京子の希望なんですよ」

吉沢がいうのには、美津子が今、文夫とプレイをして、集った客人達の気嫌をとつてると聞かされた京子が、せひとも自分を出演させ、美津子に辛い思いをさせないでくれと泣いて頼んだそうである。

「そうかい。なかなか感心だぜ、京子。お前が来てくれたんで、こっちは大助りだ」

森田と川田は、堀川の背から、京子を抱き降ろしてやる。

光沢のある京子の肌には、どす黒い麻縄が数本、その形のいい乳房の上下に巻きついてゐる。相も変らず、きびしく緊縛されたままの京子であるが、一昼夜、吉沢の執拗な色責めに合ひ、身も心もくたくたになつてしまつたのであろう。歩く力とてなく、緊縛された裸身を堀川の背中にあずけて、ここまで、運ばれて来たものと思われる。

その場に立膝をして、小さくうずくまつてしまつた京子を見た森田は吉沢にいった。

「ここへ連れこんでくれたのは有難いが、お前、京子をガタガタにしちまつたんじゃねえか」

「へえ、そりやもう。何しろ、俺にとつちや恨み重なる阿女ですからね。だが、何しろ、これだけいい身体をしてる女だ。ショーに出演出来ねえ事はないと思いますよ」

よし、わかつた、と森田は、京子の縄尻をとつた。

「さ、行くんだ」

京子は、縄尻をたぐられて、ふらふらと立上り、深く首を垂れながら歩き始める。

「さ、一旦、台の上へ上るんだ」

森田に背を突かれた京子、ふと、マットの上で、えびのように身体を曲げ、すすり泣い

ている美津子に気づく。

「あつ、美津子！」

京子は、思わず叫んで、緊縛されている身も忘れて、かけ寄ろうとする。

「おっと、勝手な真似をするんじゃない」

森田が、力一杯、縄尻をひき、川田と吉沢が、京子の白い柔かい肩に手をかけて、引き戻す。

「美津子っ、美津子！」

京子は、男達に、取巻かれ、取押さえられる中で、必死に叫ぶのだった。

マットの上で、泣き伏している美津子と文夫。これまで、どのような事が、野卑な男達の見守る中で行われていたか、京子にも想像は出来た。どんなに辛い、苦しい思いをしたことか。京子は、それを思うと、胸がはりさけるような思いになつたのである。

狂つたように暴れ出した京子を、うしろから羽交い絞めにするようにして川田がいう。

「やい、京子。おめえ、これ以上、妹に辛い思いをさせたくねえんだらう。それじゃ、自分のやるべき事をやるんだ」

京子は、血の出るほどかたく唇を噛みしめ美しい眉をきりと上げて、川田を見る。

「な、なんという恐い人なの。貴方達は、

罪もない文夫さんや美津子を——よくも、なぶりものに——」

涙声になって、あとは言葉にならない京子の頬に、吉沢の平手打ちが飛ぶ。

「生意気な口をきくねえ。手前も美津子も森田組の商品だって事がまだわかんねえのか。

美津子は好きな男と結ばれたんだ。ほんとなら、俺か、森田組のチンピラ達の手で女にされる場所だったのによ。むしろ、幸せ一杯

ってところじゃねえか。つべこべいうねえ」

さ、とつとと歩くんだ、と吉沢は、京子の尻を蹴りあげた。

ふらふらする足どりで、雛壇の上にあがる京子、その上の一本の柱に、きびしく立縛りにされている静子夫人を見て、はっと棒立ち

になる。夫人がここへ連れて来られている事に京子は気づかなかったのである。

京子は、この密室内で、美津子と文夫が受けている恐しい責めを中止させるため、自分

が、二人にかわり、どのような、辛い責めを受けてもかまわぬと吉沢に哀願し、ここへ連れて来られたわけであるが、一歩先に、静子

夫人も引き出され、なぶりものになっているとは想像もしていなかった。

「奥様！」

京子は、泣き腫らした眼を静子夫人に向ける。

鬼源や川田達に、ムチ打たれるようにして女同志のコンビになるべく調教されているう

ち、何時しか、一種の愛情めいたものが芽ばえ、やがて、この地獄の苦しみを忘却する意

味にも、二人は精神的にも離れられない間柄となったのであるが——吉沢という悪魔の化

身のような人間を、自分のきまった男として持った事を何としよう、そんな京子の気持だったのである。

静子夫人とて、思いは同じだ。遠山家の女中であつた千代や、自分から一切の地位財産

を奪いとつた伊沢という悪徳弁護士在地獄のなぶりものになり、そのあげく、悪魔の種を

どうしても宿さなくてはならなくなったという運命をどうすればいいのか。

「京子さん！」

静子夫人も、涙にうるむ切長の美しい瞳を京子に向け、声をつまらせるのであつた。

「フフフ、久しぶりで恋しい人に逢えたって感じね」

銀子が台の上へ上つて来て、静子夫人と京子の美しい横顔を見くらべるようにしているのだった。

「さ、京子、おいで」

銀子と吉沢は、京子を押し立てて、夫人が立縛りにされている隣の柱に、京子の背を押

しつけ、別の縄をつかつて、ひしひしと縛りつけていく。

京子は、静子夫人と同じく、すっかり観念したように眼を閉じて、きびしく縄がけされていくのであつた。

吉沢は、京子の足首にも縄をかけ、ほつとしたように立上ると、口を歪めて、京子の頬を指でつつく。

「へへへ、嫌だとか、口惜しいだとか吐かしながら、昨夜は何でえ。手前、何回やらかしたか覚えてるかよ」

京子は、眼を閉じたまま、キリキリ歯を噛み鳴らしている。

「まあ、そうなの、ホホホ」

銀子は、笑いながら京子に近づいて

「案外、貴女、好きなのね。というよりも、どう。吉沢さんて、なかなかのテクニシャンでしょう」

次に、川田が、せせら笑うようにいった。

「二人とも、昨夜はそれぞれ楽しい思いをして、喜び疲れた事と思うが、今日は、二人、久しぶりの対面だ。大いにハッスルしてもら

うぜ」

銀子は、京子のおごに手をかけ、顔をこじあげるようにして、見物しているやくざ達の方へ向ける。

「どう、皆さん。こちら美人でしょう。京子さんという名でね。元、ある探偵局の女秘書だったんだけど、この森田組の内情を探りに来たという事が運のつき、今じゃミイラ取りがミイラになったというわけで、妹の美津子と一緒に、ショーの花形スターになったというわけよ」

銀子は、得意気に、京子のおごに手をかけたまま、そんな事をしゃべるのだったが、見物人達が一せいに注いでいる眼の行方にくと気づいて、笑いながら、

「あら、お下品ね。そんな所ばかり、じろじろ御覧になるものじゃありませんわ。でも、無理もないわね。こちらは、一本もないんだから」

やくざ達は、哄笑する。

「何しろ、元、探偵の秘書なんかやっていただけあり、気性の強いのが玉に傷、一度、刺ってやったのだけど、あまり、根性がよくならないから、昨日、また、のびかけてきたものを残らず剃りあげてやったの。でも、かえ

って、この方が可愛いいでしょ」

意志を失った人間のように、必死になって無表情、無感動を努めていた京子であるが、銀子に、なでさすられるに及んで、うとうめき、首を垂れ、肩をぶるぶる震わせるのであった。

「能書きは、それくらいでいいぜ。さあ、何か早く見せてくれよ」

見物人達は、茶わんをたたくようにして、がなり出す。

銀子は、夫人と京子の間に立って、二人にいい聞かせる。

「奥様と捨太郎のプレイを最初、予定していたんだけど、こうして、京子が応援にかけつけて来たんだから、久しぶりに、ぴったり息の合った同性のプレイを開帳して頂くわ。いいわね」

そして、銀子は、台の下に座っている朱美に向かっている。

「その若い二人をのけて、このベテランスターのための土俵を作ってよ」

あいよ、と朱美と井上は、マットの上に顔を伏せている文夫と美津子を抱き起すようにして、隅に並んでいる椅子に腰かけさせ、身動きの出来ぬよう縄止めをする。

森田と川田は、マットの上の天井のハリに縄をかけ始め、つまり、静子夫人と京子が、スタンドプレイするための支度にかかり始めたのだ。

「さ、皆さん、どうぞ、この周りに坐って下さい」

天井から、二本の縄が、からみ合うようにして垂れ下がると、川田は、やくざ達に声をかけた。

ぞろぞろと、マットの周囲に来て、あぐらを組み、妖しい期待に胸をときめかすやくざ達。

川田は、ふと、何かに気づいたように、井上にいった。

「面白い事を思いついたんだ。桂子をここへ連れて来てくれないか」

二人の花形

京子も、静子夫人と同様に、朱美の手で、手早く髪を結いあげられ、くまなく、顔は化粧されていく。

銀子も、朱美に手伝って、京子の頬をパフしてやり、唇にピンクの口紅をぬりながら、「奥様とあなたとのコンビは、ひょっとする

と、これっきりになるかも知れないのよ。若奥様は、千代夫人のいいつけで、妊娠して頂くための特別調教を受ける事になったんだからね。だから、今日は、最後だと思って、大いに燃えてごらんよ」

といって、乳首を指ではじいたりしたが、京子と静子夫人は、自分達が立縛りにされている台の上へ、美津子と桂子が、井上や川田達に追い上げられるようにして上って来たのを見て、はっとした気持になる。

「桂子さん！」

「美津子！」

静子夫人も京子も、新たな恐怖におびえて慄え出し、二人の美少女を引き立てて来た井上や川田に、憎悪をこめた瞳を向ける。

「一体、こ、この二人に、何をさせようというの」

京子は、泣き濡れた瞳を二人の男に注いだまま、唇を震わせるようにしていった。

「ま、今にわかるさ」

川田は、とぼけた顔を作っている、井上と二人で、美津子と桂子を縛りあげている縄をとき始めるのだった。

ようやく両手が自由になった二人の美少女は、共に乳房を抱くようにし、その場に猿の

ように小さく身をかがめてしまう。

川田は、ニヤリとして、静子夫人と京子の顔を見くらべるように眺めているのだった。「これから、お前さん方のショーの支度は、何時も、この若い二人にさせる事にしたからな。つまり、静子夫人は桂子に、京子は美津子にといった具合だ。その方がこっちも手間がはぶけていいからな」

静子夫人も京子も、すぐにはその意味はわからなかったが、銀子が何か得たいの知れないどろどろしたものが入っている播鉢を、朱美が桐の箱を持って来て、美津子と桂子の前へおいた時、夫人も京子も、激烈なショックを覚えて、共に顔に血をのぼらせる。

「な、なんてことを！」

京子は、苦痛に顔を歪め、歯をかみ鳴らした。川田や井上のいう支度をさせるという意味がはつきりわかり、いいようのない戦慄が体内を走ったのである。

そのような事を、美津子や桂子の手で行わせるなど、何という恐しい悪魔の着想であろう。

あまりの恐怖と屈辱に、声も出なくなってしまう静子夫人と京子を川田は面白そうに眺め、そして、がくがく身体を小刻みに慄わ

せている美津子と桂子の白磁の背を足でつつくようにしている。

「すりこぎを使って、播鉢の中のものをよくこね廻すんだ。奥様も京子嬢も、お前達とは違って、ベテランの域に達しているんだ。それだけに、身体のお芯まで、かゆくなるよう、うんと薬味はきかしてある。さ、早く仕事にかかりな」

夫人と京子を、どういう風にして、支度させるか、この若い二人の美女は、すでに川田の口から因果を含められているのであろう。

美津子が播鉢を押さえ、桂子がすりこぎを使うのだと井上に指示されても、二人は、ただ、漆のように黒い頭髪を左右に振って、すすりあげているだけである。

「早くしねえか、この阿女！」

突然、井上が大声をはりあげて、二人の頭髪をひきつかみ、激しく振り廻す。悲鳴をあげて床へ這いつくばった美津子と桂子の腰のあたりを更に川田は、情容赦なく、けり上げるのだった。

やがて、むせび泣きつつ、美津子は播鉢を押さえ、桂子は、その中身をすりこぎで、すり始める。播鉢を押さええている美津子の瞳から、ポタポタと涙がねり上げられていくその

中身へ、したたり落ちるのだった。つい、さつきまで、美津子は、これを使われて、気も狂うばかりの思いになり、なかば、無我夢中で、文夫とああいう事に、なってしまったのだ。それを、姉の京子に、自らの手でほどこし、狂乱の態にさせなければならぬとは、美津子の胸一杯に恐怖とも羞恥ともつかぬものがこみあがり、心臓は高鳴りをつづけた。

「よし、その位でいいだろう」

川田は、鉢の中をのぞきこんでいい、「じゃ、次にする事はわかってるな。お客さんも、しびれを切らしてお待ちかねだ。てっとり早く頼むぜ」

その途端、美津子も桂子も、床に顔を押しつけるようにして、激しく肩を震わせる。

「出来ない、出来ないわ。お願い、もう、これ以上許して！」

泣きわめくようにして、哀願する二人であったが、そんな事に耳を貸す川田や井上ではない。

「馬鹿野郎、今になって何をいいやがる。おい、朱美、その青竹を持ってこい」

川田は、朱美に手渡された青竹を持つと、力一杯、美津子と桂子の背へ打ち下すのであった。

「あっ」

と叫んだのは、美津子や桂子より、静子夫人や京子の方だった。

ピシリ、ピシリと背や尻に青竹のムチを当てられて、のけぞり、苦悶する二人を見て夫人と京子は血の気を失った表情になる。

「お願い、やめて、川田さん！」

川田は、じろりと、夫人と京子のひきつった顔を見て、

「へへへ、俺も別に手荒な事はしたくねえんだよ。じゃ、お前さん達から、この若いお嬢さん方を説得してくんな」

川田にそういわれた静子夫人と京子は、どうにも抗する事の出来ぬ悪魔の宣言を脳天からたたきつけられたような思いになる。

静子夫人は桂子を、そして、京子は美津子をして、悪魔の生贄にする事から何としてでも救おうと人間的思念を捨てて、死ぬより辛い数々の羞しめを受けて来たのだが、しかし、結局、それは、水の泡に終わってしまったのだ。

となれば、未練な感慨をこの若い二人に持つというのはむしろ悲惨であり、この地獄屋敷の中で、これからもなおつづくであろう悪魔共の残忍な調教に対し、少しでも、それを苦痛と思わせないよう見守ってやり、指導して

やるのが、せめてもの慈悲だと、静子夫人も京子も考えたのである。すでに自分達の心と身体には、こうした日毎夜の調教のために今までは想像も出来なかった肉と心の斜面が新しく現れはじめている。そうしたものをこの若い娘達にも持たせ、何かを切替えた新しい女に作り変えてやる事こそ、この地獄の苦しさを逃がれる唯一の手段だと思ふのであった。

静子夫人は、哀切的に眼をしばたきながら桂子にいう。

「——桂子さん、お願い、この人達のいう事を聞いて頂戴」

つづいて、京子も、泣き腫れた瞳を美津子に向けていうのだった。

「美津ちゃん。いわれた通りにするのよ。さからっちゃ、いけないわ」

そして、静子夫人も京子も、力尽きたようにがっくり首を垂れ、声をあげて、泣きじゃくるのであった。

「お姉さん！」

「ママ！」

美津子と桂子は、泣き濡れた顔をあげ、何か一つの幻影を見るように、柱に立縛りになっている美しい二人の女性を見上げるのだった。

た。

銀子と朱美が、クスクス笑いながら、近寄って来る。

「まあ、奥様も京子さんも、よくいってくれたわ。それでこそ、ショーの花形スターといえるわよ。じゃ、あたい達も、お嬢ちゃん二人が仕事しやすいよう手伝ってあげるわね」

二人のズベ公は、身をかがめて、二人の美女の足首にかかっている縄をといてやり、両肢だけ自由にさせると、銀子は、静子夫人のうしろへ、朱美は、京子のうしろへ廻り、柱ごと抱えるようにして、見事な胸の隆起を両手で包むように押さえるのであった。

「まあ、柔かい、いいおっぱいだこと」

銀子は、静子夫人の乳首を指でつまみあげ豊かな白い丘を掌で撫でさすり始めた。

朱美も銀子と呼応するように掌を動かし始め、二人の美女の柔かい雪白の胸の丘は、ズベ公二人の手の中で、ゆるやかに、また、激しく、揺れ動くのであった。

「柔らかくなったと感じたらいうのよ。お嬢ちゃん達に仕事してもらうからね」

銀子は、静子夫人の雪のように白い、陶器のように艶やかな、うなじのあたりに鼻をすりつけるようにしつつ、調子をあげて、揉み

始める。

「京子姐さん、どう、そろそろ美津子に頼んでみちゃ」

両肢をすり合わせたり、悶えさせたりし始めた京子に気づいて、朱美は、せせら笑うようにいうのだった。

見物人達は、ごくりと唾をのみこみ、ズベ公二人に、責められる美女に喰い入るような視線を送っている。

静子夫人の美しい額には、こまかい汗の玉が浮いている。眼は、かたく閉じているが、小さく開いた唇の間から見える真珠のように美しい歯が、時々、カチカチ音を立てて鳴るのであった。

「もういいんですよ。奥様。桂子嬢に——フフ」

静子夫人は、銀子に、催促され、ふと、上気した瞳を気弱にまたたきつつ、桂子に向ける。

「桂、桂子さん、お、お願いするわ」

同時に、京子も、朱美に、幾度も耳など引っ張られて催促され、

「——美津っちゃん、さ、いいのよ、ぬ、ぬって頂戴」

さあ、仕事にかかるんだ、と川田と井上は

美津子と桂子を蹴りあげる。

「お姉さん！ ゆ、許して！」

美津子は、京子の足元にすがりつくようにして、激しく鳴咽するのだったが、悦子が、鉢を美津子の鼻先へ突きつけるようにする。

「ぐずぐずしちゃ駄目、さ、早くこれをたっぷりぬりこんであげな」

強引に、美津子の掌の中へ、どろどろしたもの流しこむ悦子。慄えの止まらない美津子である。

「おい、早くしねえか」

川田の手にある青竹が、再び、ピシリッと美津子の尻の上へ打ちおろされた。

その音に、固く眼を閉ざし、顔を横へそらせていた京子が、はっとして、顔を正面に向けた。

暴虐の限りを尽す川田に、京子は、一瞬、憎悪に燃える瞳をキラリと光らせたが、すぐに、足元に泣き伏している美津子に対し、励ますように声をかけるのだった。

「美津っちゃん。いいのよ。さ、ぬりこむのよ」

京子は、これ以上、美津子が、悪魔達に責めさいなまれるのを見るに忍びず、叱るように声をかける。

美津子は、すすりあげながら、顔をあげ、立膝をしながら、震える指で、それを――。京子は、わざと冷たい動かない表情を作り、歯を喰いしばっている。

そんな京子の背後で、朱美は、ニヤリと口元を歪め、一段と調子づいたように揉みあげ出した。

実の妹の美津子に、そんなものをぬられる京子の苦悩、強制されて、姉にそんなものをぬりつけねばならぬ美津子の苦痛。

「フッフ、京子姐さん。美津子の指でさわられるなんて、すばらしい気分でしょう」

朱美は、京子の耳に口を寄せるようにしていう。

吉沢は、じっと美津子の作業を横手から眺めていたが、

「そんなに遠慮していちゃ駄目だ。こういう風にするんだ。見てな」

と、美津子の横に身をかがめ、如何にも事務的な仕草でゴシゴシぬりこむのであった。

「うっ」

と、京子は、首を大きくのけぞらせ、キリキリ歯を噛み鳴らす。脳天をつきあげるような、呼吸も止る屈辱。しかし、吉沢は、素知らぬ顔つきで、挿鉢の中のものを指で再びす

くいあげるのであった。

美津子は、体内の中をスーッと走る寒さに似た恐怖をおぼえて反射的に顔をそむける。

「さ、美津子、やってみな。今、俺がやったようにゴシゴシぬりこむんだ。おめえの姉じやねえか。何も遠慮する事はねえだろう」

吉沢に肩を突かれた美津子、ぐいと眼の前に突き出された挿鉢の中を涙で曇る瞳で、しばらく眺めていたが、窮鼠、猫を噛むの思いで、きつとした表情になり、白魚のような可憐な指先は、その中身をたっぷりすくいあげるのだった。

「お姉さんっ、許して！」

そう吐き捨てるようにいうと、全身を火のように燃えさせた。

「――ああ――美、美津っちゃん――」

京子は、顔面真っ赤にしながら、ぶるぶる震える全身を何とか落着かせようと努力し、美津子の責めを甘受しようとする。

一方、静子夫人の方も、桂子の指先で、おぞましい業をぬりこめられている。

「ママ、許して、かんにんして！」

と、桂子は、すすり泣きしつつ、川田に指示された通り、万遍なくぬりたくるのであった。

「いいのよ、いいのよ――桂子さん」

静子夫人は、固く眼を閉ざしながら、うめくようにいいつつける。そういう行為を受ける自分より、そういう行為を無理に行わされている桂子や美津子の方が、どれだけ苦しく辛い思いに追いこまれているか、静子夫人はそれを想い、必死な思いで、桂子に責められつつも、桂子をいたわり、慰めているのであった。

やがて、川田の合図があり、その恐しい仕事から解放された美津子と桂子は、同時に床にくずれるように倒れ伏し、声をあげて泣きじゃくる。

銀子は、若い二人の娘の手で、細工された静子夫人と京子の脂汗をにじませている肌をしげしげと見くらべるようにして、

「フッフ、何も、娘や妹に、はっきり見られたといったって、そんなに情ない顔をしなくてもいいじゃないの。そういう関係はこじや通用しないのよ。貴女達は、一様に女であり、ショーのスターであるの。おわかり」

朱美も、京子の乳房責めをようやく中止して、夫人と京子の前へ廻り、腰を低めて、見くらべる。

「まあ、お二人とも、もう待ちきれないよう

ね。フッフ、無理ないわ。元々、愛し合っている間柄だもんね。でも、もう少し、辛抱するのよ。今、ぬりこんでもらった薬が、効力を発揮し出すから。そうしたら、骨がとけちゃう位に激しくプレイさせてあげるわよ」

そんな事を朱美がいつているうち、ぬり薬は、ぼちぼち、その恐ろしい威力を発揮し始めたようである。

「うっ、あっ、つう！」

京子が、急に、がっくり垂れていた首をうしろへのけぞらせるようにして、齒をカチカチ噛み鳴らしつつ、身悶えし始めたのだ。

「——ああ」

つづいて、静子夫人が、美しい眉を八の字に寄せ、肉づきのいい、艶やかな太腿をくねらせるようにして、悶え出したのだ。

夫人の額にも京子の額にも、玉のような汗がにじみ出す。

ぬり薬の効力がますます力を発揮し出し、静子夫人も京子も、やがて悲鳴に似た声をあげ合い悶え苦しみ出した。

「さっきの美津子達の時とは違って、ベテランスターを泣かせるために、南方の島で出来る薬草の汁をつかってあるんだ。せいぜい、いい声を出し合って泣くんのだな」

田代と森田は、顔を見合わせて北叟笑み、そんな事をいう。

二人の美女は、柱に固定されている縄目にギイギイ音を立てさせ、きらめくように白い肌を掻き立てさせるようにして、狂ったように悶え出す。

乳房は波打つように揺れ動き、のたうつ腹部、切なげにもじもじ動揺する太腿、とぎれとぎれに舌足らずの悲鳴をあげる二人の美女のすさまじさを見て、田代も森田も、このぬり薬の物凄いばかりの効力に舌を巻くのであった。

川田も、へえーと眼を丸くして、美女の狂乱図を眺めていたが、

「こいつは愉快だ。これだけの妙薬があればこの別嬪さん方を心の底から森田組に服従させる事が出来ますぜ、社長」

と、誇らしげにいう。

二人の美女の紅唇からほとぼしり出る悲鳴に追い立てられるような思いで、鬼源と捨太郎は、台の上へのぼり、柱に、ゆわえつけられていた縄を解こうとする。

「おっと、プレイをさせる前に、この別嬪さん方に念を押しとかなきゃならねえ事があるんだ」

川田は、そういつて、鬼源を押しとどめ、まず、狂おしげに、首を振り、尻を揺らすせている静子夫人の横に立つ。

「へへへ、奥さん、そんなに苦しいかい」

「お、お願い——助けて、川田さん、ああ、たまらない、ねえ、か、川田さん！」

「どこが、そんなにかゆいんだよ。はっきりいつてみな」

「ああ、川田さん」

静子夫人は美しい顔をひきつらせ、声をあげて泣き出してしまふ。

「ふん、大家の若奥様としては口に出せないってのかい。仕方がねえな、それじゃ、そのまま、もっと苦しみ抜くだけだ」

「嫌、嫌、もう、が、がまん出来ない！」

静子夫人は、悲痛な声をはりあげて、身悶えしながらいう。

「がまんが出来ねえとよ」

見物人達がどっと笑った。その中の一人が立上って大声でいう。

「よう奥さん、そこは、——というんだ。よく覚えときな」

再び、どっと哄笑が巻き起った。川田が、再び、静子夫人にいう。

「さ、客人が教えてくれたじゃないか。大き

な声でいってみな。そしたら、何とか、方法を考えてやるぜ」

静子夫人は、ぱっと顔に紅を散らしたが、身体の芯にまでつきあげてくるかゆさには勝てず、もうどうともなれという血走った気持ちになり、再び、川田が、

「さ、かゆいのは、静子のどこなの？」

と、ふざけた調子で甘ったるく聞いて来たのに対し、川田の視線から眼をそらせるようにして、

「——そ、それは、静子の……」

「聞こえないね。もっと大きな声でいうんだよ」

「——静子の、静子の——」

夫人がやっと、その言葉を口に出していった時、見物人もズベ公達も手をたたいて笑いこけるのだった。

美女合戦

美女の苦悩と狂乱が激しければ激しいほど川田を始め、見守る悪鬼達の悦びは大きくなるようである。

屈辱の極に打ちひしがれるゆとりもない静子夫人と京子は、相も変らず、ときれときれ

の悲鳴と哀願を口ばしり合っている。

川田は、それでも表情を変えず、最後の仕上げにかかるよう捨太郎を手招きで呼び、静子夫人の横に立たせるのであった。

「いいかね。奥さん、あんたと京子の悩みを聞いてあげる前に、一つ大事な事の約束をしておこう。京子には、吉沢兄貴という立派な旦那の世話を受ける事になった。だから、あんたにも、きまった旦那を持たせてやる事になったんだ。この捨太郎という白痴の男さ」

川田が、含み笑いしていると、銀子も横から口を出して、

「いいね。今日から、あんたの旦那さんは、この白痴の大男さ。フッフ、これで、元遠山家の令夫人もめでたく再婚の相手が決ったというわけね。すばらしい組合わせじゃない。天下の美女と騒がれた大家の若奥様とゴリラのような醜悪な大男」

つづいて、朱美が、口を出す。

「今夜からのゴリラ男と夫婦生活に入るのよ、若奥様。そして、一日も早く、ゴリラの種をお腹に宿すよう努力して下さいね」

静子夫人の、固く閉ざした眼尻から、一筋二筋、屈辱の口惜し涙が流れたが、今は、精神的な苦痛より肉体的苦痛が先に立つのだ。

泥沼にのたうつように、身を悶えさせ、あえぎつづける静子夫人に対し、銀子は、意地悪く、尻たぶをつねりあげていう。

「わかったのかい。ここに居る捨太郎は、あんたの夫なんだよ」

「——わ、わかりました」

静子夫人は、もう終局に立たされた心境になり、肉体の苦痛をこらえながらいう。

銀子は満足げにうなづいて、捨太郎にいった。

「じゃ、捨太郎、あんたの花嫁を舞台に連れて行きな」

捨太郎は、手の甲で口のよだれをふくと、夫人を柱に押しつけている縄尻を解く。

静子夫人は、その瞬間、くずれるように床に身を落とし、ぴったりと立膝して、ぶるぶる身体を震わせ、気の狂いそうなかゆみと戦っているようであった。そんな静子夫人の前に立った捨太郎は、くるりと背を向けて、身をかがめる。

「舞台まで捨太郎が肩うまして運んでやろうといってるのよ。さ、奥様、お乗り遊ばせ」

銀子と朱美は、くすくす笑って、身悶えしている静子夫人の肩や腰に手をかけて起こし捨太郎の肩へ乗せあげるのだった。

静子夫人は、もうされるがままになってい
る。怪力を持っている捨太郎は、夫人の美し
い肢に手をかけると、かけ声をあげて立上っ
た。

捨太郎は、雛壇を降り、のっし、のっしと
足を踏みしめるようにして、静子夫人をマッ
トの上へ運んで行く。

待ちかまえていた田代と森田が、捨太郎の
肩から夫人をひき降ろし、その縄尻を上から
垂れ下がっている一本の縄につなぎ止めるの
であった。

つづいて、捨太郎は、京子も肩車にして運
んで来る。

遂に、静子夫人と京子は、互に縄尻を天井
からの縄につなぎ止められて向かい合う。

その周囲を、ぎっしり埋めつくす野卑な男
達の異様な視線も辛く感じとるゆとりもない
ぐらゐに、二人の美女の肉体は、しびれるば
かりのかゆさに熱く燃え立っている。

「——奥様！」

「——京子さん！」

静子夫人と京子は、涙にうるむ美しい黒眼
を向け合ったが、たまらなくなつたように、
ぴったりと頬と頬をくっつけ合うのだった。

「——京子さん、かゆい、かゆいわっ」

「——奥様、私も、私もよ」

泣きじゃくりながら、二人の美女は、もう
無我夢中になつたように、胸と胸を触れ合わ
せ、それをすり合わせ始めたので、川田も吉
沢も、声をたてて笑つた。

「気の早い別嬪さん達だ」

銀子や朱美も、ぶつと吹き出して、

「お道具はいらないの。すり合わせるだけで
かゆみがおさまるかしら。フッフ」

静子夫人と京子は、おびえたような顔つき
になつて、動作を止めた。あまりの苦痛のた
め、はしたなくも、身体を夢中で触れ合わせ
てしまつたが、それが一瞬、たまらない羞恥
となつて二人の頬は同時にぼつと上気する。
「あわてるコジキは何とかいうじゃないの。
今カメラの支度をしている所よ」

銀子は、桐の箱を小脇にかかえて近づいて
くると、吉沢を手招きした。

「これは、あなたの花嫁道具よ。旦那の手で
取りつけてあげた方がいいじゃないの」

よしきた、と吉沢は、銀子から、それを受
取り、京子の横へ立つ。

銀子は、小刻みに身体を震わせている京子
の尻を平手打ちしていった。

「そら、旦那さんが取りつけて下さるのよ。」

感謝の気持を表さなくちゃ駄目じゃないの」
と、銀子は迫り、激烈なかゆみのため、尻
を振り、齒を噛み鳴らしつつける京子の耳に
口を近づけ、こういう場合におけるスターの
技巧というものについて教示し始めるのだつ
た。つまり、それは、見物する男達の要求を
駆りたてるためのポーズであり、この種の技
巧を捕われの美女に仕込むのが、銀子や鬼源
達の仕事でもあるのだ。

そうした銀子の要求に対して、今の京子は
もう屈辱とか羞恥とかいう精神的抑制は起ら
ない。ああ、何とか、このかゆみを——京子
の願いはただ一つ、それあるのみであった。
それで、吉沢の手が、うしろから肩にかか
り、くろりと身体を廻され、吉沢の正面に立
たされた京子は、顔をそむけつつ、小さく唇
を開く。

「あ、あなた、お願い——も、もうがまん出
来ないの——」

吉沢は、ニヤニヤしながら、桐の箱を開け
るのだった。

「ねえ、あなた、浮氣をしたなんて怒っちゃ
嫌よ。お仕事なんですから——ああ、たまら
ない。貴方、早く、早く」

吉沢は、銀子に強要されるまま、そんな事

を口走り、身をよじらせる京子を面白そうに見て、わざとゆっくり箱の中のものを取り出すのであった。

「ああ——あなた」

京子は、吉沢にそれで、臍のあたりをつつかれ、全身を揺さぶるようなじれったさに鼻を鳴らして、嫌々と狂ったように首を振る。

それは、銀子に強要されて演ずる浅薄な技巧ではなく、肉体の芯まで、しびれてしまった京子自身に発生した女のシンフォニーであった。そんな京子が、たまらないほど可愛くなって、吉沢は、いきなり京子の肩を激しく抱きしめ、その紅唇に口を押しつける。

京子は、もう備えを忘れたように、びったり、吉沢と口を合らし、吉沢自身がおどろくほどの熱烈な接吻の答礼をしたのである。

吉沢の舌を吸いつづけた京子は、ふっと息を吐いて唇を離すと、吉沢の耳元に美しい顔を押しつけるようにして、はにかみをこめたねだりの言葉をつづける。

吉沢は、ほくほくした気分で身を沈めた。

「ああ——」

京子は、小さく唇を開き、白い美しい歯を見せて、首をのけぞらせる。

「さあ、いいね、京子。可哀そうに若奥様が

先程から、お待ちかねよ」

銀子は、吉沢に取りつけられた京子を見ると顔をくずして素晴らしい、京子の身体を元通り静子夫人の方へ向き直らせる。

いよいよ開幕だと今まで思い思いの恰好で寝はらばったりしてニヤニヤ見ていた見物人達も、上体を起して坐り直すようにマットの周囲を取り囲む。

「さ、若奥様に京子さん。長い間、お待たせしたけれど、もう誰に遠慮する事もいらないわ。二人とも秘術を尽して、大相撲をとってごらん。そして、最後は、お互に合図し合って仲良く一緒に——フッフ、わかったわね」

銀子は、そういつて、両手を開け、スター

トの合図をする気で、夫人と京子の尻をたた

くのであった。

「ああ、奥様——」

「京子さん」

二人の美女は、その途端、もう羞恥の片鱗

も忘れ果て、磁石に吸いつかれるようにびっ

たりと身を寄せ合ったのである。

歯と歯をからませるようにして、唇をむさ

ぼり吸い、乳房と乳房をねじり合うようにす

り合わせる。

見物人達は、息をのんで見つめているのだ。今までにない、その物凄さに銀子も呆っ気にとられたように見つめていたが、ふと我にかえたように傍で眺めている井上にいった。

「何してんのよ。カメラ、カメラ」

「おっと、忘れていたよ」

井上は、あわてて、持場にもどる。

やがて、美女二人は、びったりと頬と頬と

を合わせあい、互に耳元で、教え合うように

しながら、きびしく緊縛された身をつながせ

るべく懸命になり出す。鬼源達の力を貸りず

に、そうならうと努力し合うのは、ベテラン

の貫録というのではなく、どうにもならない

このかゆさと狂おしい想いのためであり、人

の手助けなど待つゆとりはないのであった。

見物人達にとって、それは、すばらしい光

景であった。見事な双曲線を持つ、盛り上っ

た艶めかしい二つの尻がぐねり合う。目的を

達成しようとする静子夫人と京子。遂にその

努力は報いられ、二人の美女は、嬉しさとも

悲しさともつかぬ涙を流して、再び、びっ

たりと唇を合わせあい、激しく、互の舌を吸っ

たり吸わせたりするのであった。

(つづく)

映画人でもない私が、折角苦勞して作った商業映画をはたから、とやかく云うのは当を得てないかも知れないが、いやしくも総天然色と銘を打ったからには観覧料の手前云いたいことあるというもの。

過日封切られた大映の「刺青」は一寸近來にない映画だったが、妙に黄色い痰阿を切った若尾文子の演技はさて置き総じて配色の点でもう少しというところで百点満点とはいかなかったように思う。新銳増村監督の下で、



牧高志

文子

いろいろと工夫が払われている点は認めるが、例えばヒロインの若尾文子は筆者が数えただけでも赤い長襦袢をそれぞれ柄の違ったものを三、四回替え、またきものもお座敷着を含めて五回程衣替えしている。その色彩もいわゆる大映カラーというやつで色の出方もまずまずの出来だが、ただ時代劇に欠かせぬ赤い湯文字だけは感心なことに一向に取り替えた様子が見られなかった。

湯文字と云えば、この締め方が一風変わっている。つまり歌麿の描く海辺の海女のように白い腰布なしの一枚赤の布を前結びに腹の下で結んでいるのは史実通りで感服したが、どうせこの映画が徹頭徹尾娯楽本位だときめつけるなら、いっそのこと仕立方を今風なお腰式にした方がよっぽど魅力ではなかったかと思う。

ところで問題は若尾文子が腰に締めていたこの湯文字だが、これが筆者の見たところどうもさりとした布地でなく何んとなく部厚い毛織物（例えば毛布）のような感じがしてならなかった。勿論あれだけリアルに飛んだりねたり転ろげ廻わったりする女が、そよ風位で簡単に裾が捲くれ上ったりしては困るから、いくら緩く腰に巻きつけていたにせよ

(事実ずり落ちんばかりだったが)思い切って緞帳のように重量感のある布地を選んだのかも知れない。撮影レンズでクローズアップしたところを見ると確かに心持ち毛ばだったことからも想像出来よう。腰巻そのものの布地論はそれ位にして、一方この映画位女の裾が極めて安直に捲くられる映画は、これまた前代未聞である。

船宿で手代と同棲中でも若尾文子はまるで露出症にでも取りつかれたかのように平気で立膝をし花模様の長襦袢や赤い腰巻をのぞかせるし、また寝床の中で横転すればきまって裾が前後にはだけて赤いものが閃らめく……といったところから始まって悪党の権次の女房が殺ろされる時もわざわざ股を拡ろげて白い脛を出して丁寧に赤い湯文字を左右に捲く……である。

旗本の好色武士が料亭で若尾を抱く時も当然かのように平気で二言三言の後若尾扮する芸妓の裾を捲くったり、また権次が若尾を手込めにするシーンも多聞に洩れず若尾の裾を大っぴらに捲くってスクリーン一杯に真紅の腰巻を開陳する……といった有様である。このあたりは映画監督の指導で便法的に何んでもなるものかも知れないが、お蔭さまで目

の保養になったことは事実である。

現代劇だと余程のエロダクシヨンの製作でない限り、こうはしないものだが、そこはまずに時代劇という特殊な治外法権的な安全弁であればこそ誰はばかりことなくこの際遠慮会釈は吹っ飛ばせとばかりパアパア裾が捲くられていたのには、ひとかたならず観る方で驚き入った次第である。

ところで話は最前に戻るが、スクリーン狭ましとばかり大いに暴れ廻ったヒロイン若尾文子という一個の女性についてみると、この人の吐くセリフは、およそその時時の顔の表情とは分離しているかのような感じを与えるから不思議だ。つまり海千山千の水商売の女には真からなれない性分だと見える。後手に縛られて貸元の家に運び込まれた時「ほどうたらどうなんだ、お前達に取っても傷がついちや困る大切な商品なんでしょう」とか「早いとこやっちまいな」など放言する時は精一杯な痰呵に反比例して余りにもお嬢様然とした純情さが一向に消えないので、何んだか無性にいじらしくなり、美女若尾の為にひとかたならず気の毒にもなる。

カラー映画と云えば背中に彫られた女郎蜘蛛がカットシーン毎に色が褪せたり濃くなっ

たりするのは一寸不手際だ。この白い肌にきざみ込まれたやや細ぼった凄味の若干足りない女郎蜘蛛のために純情可憐な若尾文子があるだけの殺人(自分で手を下さずとも)を何故しなければならなかったかも作為されたストーリーのためかも知れないが少くとも現代社会唯一の安全弁的逃避場所である時代劇で、おまけに色にうったえた総天然色映画とあるからには今少しく画面全体を明るくしどす黒い赤のほかに出来れば鮮やかな朱色を一杯に効かせたかった。未成年禁止映画だからいいようなものの、ペンキかエナメルのようなヌルヌルした血の色はいくら赤系統が好きでも私には過剰的サービスである。筆者が愛好する8ミリでも国産フィルムでさくらカラーで朱色が生きフジカラーで青みがかって来る。そのいわゆる緋縮緬的色彩をふんだんに盛り込んで、演技を少々派手に振舞うことだって許される限界ぎりぎりの点で何故撮影されなかったかと惜しまれてならない。

例えば十回のうち一回位はヒロインの乳房やその周辺の肌を見せたって損はないだろうし、もともと緩く腰に巻きつけてあるなら組んずほぐれつする挙句に湯文字がはずれてしまふことだって当然有り得る筈である。

船宿で独りぼちにされた手代の若僧が淋しさのほかに怪気も手伝い若尾の脱ぎ棄てて行った湯文字を探し出し、そっと頼ずりし抱きしめるシーンだって観客は心から了解する筈である。それにしても問題の縛りシーンが赤い腰紐オンリイで済まされては不満やるかた無しと云うべきで、お座敷内の咄嗟の出来事ならいざ知らず、いやしくもあの美女を前もって誘拐してやろうと計画をしていたというのなら当然黄褐色の毛ば立った荒縄の一卷位は用意して然るべきである。ところが素手で権次一派が若尾の部屋に突走るからこういう破目―見ようによっては赤い腰紐はなまめかしく映るものだが―となったのだ。くどいようだが、あれは当然荒縄をしていて若尾文子を手後に縛るべきであつたと思う。ただ腰紐だとスクリーンに後手首の割合ひき締つた緊縛さが見られるのに荒縄に代ればスターをあは縛れまいかも知れない。つまりどうしても手加減が、避けられないという意味である。こういうところが仲々むずかしい点で講談調ならさしずめ、ぎりぎり肉に喰い込むなどと描写しても実際に女体をしかもリアルに縛ろうとすること自体色々な意味で気が引けるものと見える。

もう一つ「刺青」を観ていて奇妙に思ったことは若尾がみず転芸者になってからお座敷の行き帰りにはいわゆる左棲を取って歩くが、その前後のシーンには別に無地の赤い長襦袢は着ていないとにらんだのに、いつも裾から何やら赤いものがチラチラこぼれていたことである。もっとも総天然色映画だからサ―ビス本位に裾をからげて置けば本来なら長襦袢が出るのが当り前なのに、適当に赤いものを出しておいたんだ…というのなら話は判るが、大方雨降りや天候不順な日ばかり続いたからわざと赤い湯文字を出していたのかも知れない。

話は余談だが筆者もある日中央線の某駅で夕立に逢い、折柄大安のよき日に列席したと見える若い三人の女性が、困惑も物かわ、いきなり駅頭で訪問着の裾をくるりと捲くりあげ、それでも不充分と見て緋縮緬の長襦袢を続いて捲くって今時珍らしいメリンス物と思われる鮮やかな、赤いお腰姿となつたのである。あいにく雷鳴の轟く暗明なシーンとて携帯のカメラも8ミリも間にあわないうちに三人の女性はハンカチを頭に載せたまま駆け出して去って行った…。この場面が「刺青」の場面とよく似ているので内心感心した訳であ

るが詮議立てすれば、その都度文句も結構出てくるというものである。

序でもう一つカラー時代劇映画の娛しさがある。若尾の家出娘が船宿で大いに退屈している時「奥へ行って御覧なさい」と云われて、だらしなく裾を曳いて賭博場へ入って行くところがある。多分中は板の間である部屋の入口に立って足を入れ賭博の円陣を組んでいる外廻りを一周する訳だが、その時の衣裳は黄地に紅葉散らしの長着の裾を曳きその上に同じく黄地に松葉ちらしの羽織を引っ掛け裾を三角に開いて中から緋縮緬と云いたいが赤地に桜か梅の花をあしらった長襦袢を出しやや上の方にたたみ込まれた緋の湯文字をからみつかせていた。

洋装時代と違って女の足や脛の肉は当時の若い男達に取っては何よりも垂涎のまゝであつたから板の間にあぐらをかいていた男達はこれを絶対に見逃しはしない。実はここに背中に彫った刺青師が居合わせた訳だが彼とても、若尾がいとなまめかしく裾を曳いて通る瞬間を片ずを呑んで凝視しているシーンが映る。若尾にしてみれば退屈しのぎの一種のデモかも知れないが、賭博の男達に取っては、これまた簡単に看過出来ないしろ物である。

往年の性科学者高田義一郎博士に依れば、完全な性媒なのである。を構成していたと見るべきで、筆者は苦勞してそのシーンをカラーフィルムにスナップした位である。

要するに総天然色映画特に時代劇の妙味と魅力は我田引水的な云い方をすれば人間的な匂いがぶんぶんとするところと如何に色けを誘

発するか、平らたく云って性的興奮をどう誘起させるかがであろう。願わくば、こうした条件下に在って大映映画「刺青」で演ぜられたリアルな後手縛り、豆しぼりの猿轡、手間を折らせやがった女房の殺ろし、江戸時代には無かったと思われる派手な長襦袢、赤く厚っぱった湯文字といった色け専門の素材を

今後も豊富に盛込みふんだんに駆使してこそ茶の間のTVにまさる世界が自からひらけ、小細工な筆禍ならぬおっぱいな色禍に溺れることが出来るというものである。

(終り)

〔最近撮影新趣向分譲品〕

極鮮明印画紙焼付写真

遅ましき賢責め

大手札三枚一組 三〇〇円

美木乃々子 略号(ぬい)

柔軟二つ折緊縛

大手札三枚一組 三〇〇円

美木乃々子 略号(ぬに)

猿ぐつわ全裸縛り

大手札五枚一組 五〇〇円

美木乃々子 略号(ぬへ)

真紅腹巻着用縛り

大手札三枚一組 四〇〇円

美木乃々子 略号(ぬち)

柱縛り宙吊り晒し

大手札二枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(つめ)

柱縛り全裸賢晒し

大手札五枚一組 五〇〇円

柱正面縛り折檻

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(つも)

座禅縛り足吊り揚げ

大手札二枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(さは)

柱抱擁全身厳重縛り

大手札二枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(さけ)

足挙げ全一正面縛り

大手札二枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(さこ)

柱縛り賢部晒し

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(さく)

柱縛り正面晒し

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(さき)

鼻腔煙草挿し責め

鼻責めのアップ

大手札五枚一組 六〇〇円

美木乃々子 略号(ぬは)

強烈縛り美貌翻弄

大手札八枚一組 八〇〇円

美木乃々子 略号(ぬほ)

開股高手小手逆吊り

大手札二枚一組 三〇〇円

木村 洋子 略号(つほ)

高手小手逆吊り正面

大手札二枚一組 三〇〇円

木村 洋子 略号(つふ)

浣腸悦楽独りプレイ

大手札五枚一組 五〇〇円

美木乃々子 略号(ぬる)

施される浣腸の義味

大手札五枚一組 五〇〇円

美木乃々子 略号(ぬか)

女体浣腸独り遊び

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(ると)

縄に悶える裸身

大手札三枚一組 三〇〇円

木村 洋子 略号(さひ)

全裸股間縛り

大手札三枚一組 三〇〇円

木村 洋子 略号(さふ)

襲いくる浣腸器

大手札二枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(るち)

挿入された嘴管

大手札四枚一組 四〇〇円

大塚 啓子 略号(るて)

相撲着用裸女艶姿

大手札十二枚一組 一〇〇〇円

美木乃々子 略号(ぬわ)

六尺着用裸女艶姿

大手札七枚一組 七〇〇円

美木乃々子 略号(ぬお)

本誌二〇〇号突破記念原稿

アリアドネ

黒淵 嬰 一

ビブリオテケー　さいへんせい
 〓希臘神話の再編成〓

モロク

今年は紀元前一四九三年。即ちハピル人のエジプト出国から二年が経過している。

所はカナーン地方ヒンノムの谷。後年のパレスチナである。

ヒンノムの谷はカナーンに分立する群小都市国家の共有地で、カナナイト諸族共通の神を祭る神聖な場所だった。此処の地形は幾つかの岡が集って谷を囲み、自然の競技場を成している。今日は大祭典があると見え、数千のカナーン人が谷を見下す丘陵の斜面に群集していた。

谷の中央に高さ二十キュービットの青銅製

神像があった。その頭部は牛角を生じ、胴は人の形をしていた。腰から下は石の爐であり神像の背後に焚口があった。爐の中で火が燃え、神像の胴が煙突の作用を成し、煙は像の後頭部から天に立ち騰っていた。

「モロク神よ。汝が魔力を以てカナーンの上に太陽を再び輝かしめ給え」

剃髪した紅衣の大僧官が祭壇に上って神像に呼び掛けた。

「モロクよ。大魔王よ。偉大なる魔神よ」

数千人の群衆が双手を差し伸べ、声を揃えて叫んだ。薄い黒紗の単衣を着た巫女十余人が山積された薪を炉に投げ入れ、火力を煽っている。神像は赤熱し、熱風は一種の唸りを発して口から噴出していた。

「三災七難交々到る。願わくは兵革を止め、疫病を治め、物産を豊饒ならしめ給え」

厚い塵雲が天を蔽っていた。彗星の残した微粒子は大気圏上層に滞留して日光を遮り、農作物は不作。家畜は斃れ野獣は減少し、饑饉は世界的規模で拡がっている。冷涼な氣候が続き、霖雨止まず、疫病が人口を減少せしめたが尚食糧の不足に追い附かなかった。カナーンの住民は空中に凝固した炭水化物で餓を凌いでいたが、これは旧約聖書の『マナ』や希臘神話のアムプロシアと同じ物で、白色、水溶性の可食物だった。旧約聖書は此の物質が露や川に溶ける様を『乳と蜜の流れる地』と表現している。

「モロク神よ。恵みを垂れよ。饑饉を終らし

め給え」

幾多の民族が居住地を離れ、食物を求めて放浪していた。ハピル人もその一つだった。

「モロクよ。我等の捧ぐる供物を受けよ」

モロクは、ヘブライ語のメレク（王）に当る。本来は統治者の長寿を祈願する対象だった。それが次第に強力な神に成長し、万能の魔神になった。併しモロクは魔力の代償として常に莫大な供物を要求した。それは往々にして社会の負担限度を越えていた。

紅衣の大僧官が釣竿で、モロクの胴にある扉を開いた。中から烈火が噴き出した。牛、羊、鶏、猿等の犠牲獣が次々に火の中へ送り込まれ、脂肪を吸った火は妖しい色彩に揺らぎ、モロクの火焰の吐息がそれに答えた。

群衆の間に動揺が起った。最も貴重な、そしてモロクが最も嘉納する供物が続々と祭壇下に到着している。人間だった。その数は一年の日数に揃えてあった。カナーン人の巫女が薪を焚き加え、モロクの食欲を増した。

後代のモロクは鉄製神像であり、フェニキヤを経てカルタゴに及び、セム人種の間で一千年間君臨した。紀元前五世紀以後のモロクは男の幼児のみを要求したが、紀元前千五百年頃は年令、性別に拘らなかった。当時の社

会は貴重な男児をモロクの要求する数だけ供給する力が無かった。曳き出されて来た犠牲者を見ると、性別は女が多く、年令では子供が多かった。社会的損失を最少限に止めようとする打算が感じられた。饑饉に際して口を減らす意味かも知れない。自発的犠牲でない証拠に、三百余人のすべてが抵抗の自由を奪われていた。黒衣で肩から足迄蔽っているが背中が盛り上って見えるのは、両手を後ろに縛られている為に相違ない。顔面は黒布で包まれ、眼が見えないようにしてあった。その為、犠牲者達は曳かれて行く目的を悟らず、意味の解らない恐怖に戦慄しながら、追い立てられる俤に歩いていった。

祭壇下で三百余人の犠牲者は留められた。紅衣の僧官が二十人程現れ、両足を縛って廻った。然る後、顔面を掩う黒布と着ている黒衣が剥ぎ取られた。或は坐し、又は横臥して手足を縛られている犠牲者の眼前で、モロクの巨像は火を吐きながら聳えていた。青銅の膚は灼熱して妖しく輝き、熱せられた空気は凄い音を立てて口から噴出している。犠牲者達の間から一斉に恐怖の吐息が洩れた。剥がれた黒衣の下は腰布だけの半裸体だった。幼少の者は何も着ていなかった。カナ

ンの土着人は少く、他種族の特徴を持つ者が多い。髪も皮膚も雑多な色をしていた。捕虜や奴隷らしい。年令、性別に関係なく、一樣に両手を背に縛られ、且つ首に高く吊られ、両足首を揃えて縛られていた。

「全能のモロクよ。我等が捧ぐる供物を嘉納するならば、汝の魔力を示し給え」

紅衣の僧官が二人進み出た。両手足を縛られて最前列に臥っている十才位の少年を、肩と足を掴んで持ち上げた。少年は叫びながら抵抗したが、非力な上に手足の自由も奪われているので何うする事も出来なかった。僧官は少年を担いでモロク神像の前に築かれた階段状の祭壇に上り、最初の犠牲者を高々と持ち上げて全群衆に示した。カナーン人が同音に「モロク」と呼ばわった。僧官は両側から少年の体を一揺りして、モロクの胴に開かれている扉の中に投げ入れた。扉から噴き出す火が一瞬だけ明滅したが、薪の一本が焚かれた程の変化もなく、神像は厳然と立ち、人間の悲鳴は火勢の唸りに掻き消された。数万のカナーン人は怒号とも歓喜とも聞える咆哮を発した。火焰の息吹きが神像の口から答えた。それは恰も、次の食物を要求するモロク自身の声のように思われた。

犠牲者達の中から絶叫が湧いた。最初の一
例が残る全員の運命を知らせた。哀哭や悲泣
や助命懇願の声が渦を巻き、地を駆け廻って
暴れる者や、不自由な体を揺すって他人の隠
に潜ろうと争う者も居た。中年女と少女が縛
られた後ろ手で握り合っているのは母娘らし
い。モロク神の僧官はそのすべてを無視して
犠牲者を一人、又一人と火中に葬って行く。

「モロクよ。汝の最も好む餌なるぞ」

カナン人はモロクの感情を口から洩れる
熱風の音で判断した。モロクが若い女の肉を
呑んだ時に喜ぶ事は経験的に知られていた。

これは脂肪分と水分の含有率に関係あるらし
い。紅衣の僧官二人は黒髪暗白色のセム系少
女を曳き出していた。

少女は縛られた後ろ手で引掻きながら暴れ
たが、火を吐く神像の前で高々と差し上げら
れると遂に気絶した。

この時、犠牲者の中からもう一人、娘が転
げ出した。何か叫んでいたが、群衆の怒号や
火の唸りに遮られて聞えなかった。容姿が似
て幾分大柄、且つ年長らしく見えるから姉の
ようだ。逼って、転んで、祭壇下に辿り着く
と、両脚を揃えて縛られた俛、一跳躍して壇
上の僧官に頭から突き掛った。噛みつきうと

したのかも知れない。だが縛られているので
跳躍が不充分だった。階段に足を引掛け、一
回転して頭から落ちた。数人の僧官が綱を持
って駆け寄り、落ちた娘を蹴倒し、叩き伏せ
背中て手足四本が一纏めになる程引き振って
固く連結した。此の間に妹の方は早くもモロ
クの腹中に消えた。意識不明の俛で焼かれた
のは寧ろ幸福だった。カナン人の祈禱が一
区切つくと、芋蟲のように縛られた姉の方も
妹を追って永遠に見えなくなった。

人身犠牲は間断なく捧げられた。併しモロ
クの食欲は満たされなかった。大僧官は祈禱
し、巫女は薪を焚いた。黄褐色の、異臭を伴
う煙がヒンノムの谷の上空に立ち騰った。

犠牲者達の中に、一人だけ泰然としている
女が居た。両手を背に吊られ、縛られた両足
は、揃えて前に投げ出しているが姿勢を崩さ
ず、正面からモロクを凝視している。純白の
皮膚。焦茶色の長い髪。黒い瞳に二重瞼。明
らかにセム系とは異なる。二年間に容姿も幾分
変ったが、今年二十一才のアリアドネに違い
無かった。

長い髪は艶も失せ、乾燥して乱れていた。
表皮は荒れ、痩せが目立っていた。併し天性
の美貌は未だ失われていなかった。縛られた

両手を背で固く握り、アリアドネは犠牲者が
一人焼かれる毎に軽い目礼を送った。

傍にコルキユネが居た。手足を縛られ、疲
れ果てた身を投げ出し、眼を閉じていた。動
こうともしなかった。

何故アリアドネがカナン人に居て、モロク
に捧げられようとしているのか。

旧約聖書ヨシユア記に依ると、ヘブライ人
のカナン征伐は極めて短期間で達成された
事になっている。砂漠の放浪が四十年。征伐
戦争が約十二年である。併しこれはヘブライ
人の一方的宣伝である。

発掘されたアマルナ文書の中に、カナン
のウリセルム(エルサレム)王がエジプトの
ファラオ・アメンフィス四世に援軍を求めた
書簡がある。東方から侵入して来た蛮族の名
はカピリ族又はアピル族、或はハピル人と読
める。書簡は三通あり、最初はハピル人の出
現を報じ、次は大挙侵入を知らせ、最後は城
壁ある都市以外のすべてが征伐された事を告
げている。これは紀元前一三五〇年代の事だ
である。

旧約聖書はヘブライ人がエジプトで労役に
服し、ピトム及びラメセスの町を建てた次第
を伝えている。エジプト史に依れば、此の町

の建設者は第十九王朝のラムセス二世で、エジプト出国はラムセス二世の晩年か次の王の初期とも思われる。映画「十戒」は此の説を採っていた。

ヘブライの一神教はアメノフィス四世、即ち有名なイクンエンアトン王のアトン神からヒントを得たものであろう。従ってヤーヴェーが唯一神としての地位を確立したのは、紀元前一二〇〇年頃かもしれない。併しエジプト出国とカナーン建国を連続した単一の事件とする必要はない。ヘブライ人は一種族ではなく、信仰を同じくするセム系諸族の宗教連合である。出埃及記からは多神教的要素が多く発見され得る。エジプト出国はヘブライ人が、未だ唯一神信仰に到達していなかった當時に行われた証拠である。或はヘブライ人の一派がカナーンを侵略しつつある間に、他の一部はエジプトで労役に服しつつあり、後者が一神教を持って前者に合流したのかも知れない。筆者は本篇を進めるに当って以下の如く推定する。

紀元前千五百年頃ハビル人を率いてエジプトを出たモーセは、カナーン征伐の立案者或は一神教の完成者とは別人である。一神教確立後、旧約聖書の集成者が先祖の大事業を、

最も偉大な指導者モーセに統合したものであろう。

エジプト出国後、強大になったハビル人はカナーン侵入を試みたが、それは征伐ではなく単なる掠奪が目的だった。ハビル人は未だカナーンに国家を建て得る程に組織化されてはいなかった。掠奪には成功したがカナーン諸王連合軍の追撃を受け、カデシュ附近に負傷者や物資の一部を遺棄して砂漠へ遁れた。縛られていたアリアドネとコルクユネも、その際カナーン人の手に落ち、ハビル人捕虜と共にモロク神の供物に加えられた。

モロク神に捧げられる犠牲は、既に過半が消え失せていた。焰は白色に変化し、火の底に人の形をした塊が見分けられた。人体から噴き出す水分と脂肪分が火勢を抑制し、神像は幾分か飽食の態に見えた。巫女達が青銅の大きな熊手で灰を掻き出し、薪を燃え易くした。木と骨の混った灰は群衆の頭上に撒き散らされ、カナーン人は狂的に咆哮しながら灰を呑んだり身体に塗ったりしていた。

遂に二人の僧官の手が、アリアドネを掴んだ。傍のコルクユネが挽ね起きて叫んだ。

「わたしを先にして」

だが、それはクレテ・ミノア語だったから

カナーン人の僧官には通じなかった。アリアドネは静かにコルクユネを制した。

「騒いではなりません。エウローペ様が予言された東の国で神に捧げる為に焼かれるのが運命なら泰然と赴くべきでしょう」

更に僧官に身を委ねながらカルデア系標準セム語で問いかけた。

「一つだけ教えて下さい。これだけの人達が焚かれる事に依って、モロク神は愛と平和を授けて下さいますか」

僧官は一寸動揺したが何も答えなかった。矢張り罪悪感が内心に有ったのだろうか。

「わたしのすぐ後にあのコルクユネを続かせて下さい。二十年間一度も離れた事は無かったのですから」

アリアドネは重ねて質問しなかった。顎と眼でコルクユネを指しながら別離の合図を送った。そして僧官達に担がれながら顔を伏せた。アリアドネの疑惑は決定的な失望に変っていた。モロクも亦、愛の神ではない。焚かれるのは無意味な犠牲だ。

アリアドネの頭を持った僧官が、先に立つて階段を上った。他の一人は足を抱えて続いた。アリアドネは抵抗しなかった。焦茶色の乾いた長い髪が火勢に煽られ、上昇気流に吹

き立てられて高く躍った。

此の途端、後側の僧官が手を離し、一声叫んで転げ落ちた。他の一人も驚いて駆け下りた。抛り出されたアリアドネは祭壇下に墜落した。身体柔軟なアリアドネでなかったら、背中を強打して気絶しただろう。手足を縛られていながら、アリアドネは巧妙に転回して脇から接地した。それと同時に半身を起して事情を確かめようとした。そして驚いた。紅衣を通して僧官の背に切斑の矢が深々と突き刺さっていた。

異変は一局部だけの現象ではなかった。僧官の背を貫いたのは偶然の一矢に過ぎない。ヒンノムの谷全体が、騒擾に巻き込まれていた。無数の矢は閃々としてカナン人の頭上に飛び交い、逃げ惑う群衆の悲鳴が四囲の丘陵に反響した。モロクの青銅像に音を立てて命中する矢もあった。

アリアドネは膝で立ち、祭壇にもたれながら周囲を見廻した。事態急変の原因を見定めようとした。すると岡の上に半弓を構えた射手の散開線が見えた。

「アリアドネ様。流れ矢が危険です。姿勢を低くして。今の間に縄を解くのです」

コルキユネが、傍に転って来た。言いなが

らアリアドネの足を縛ってある縄に噛みついた。アリアドネは後ろ手の指先で、自分の手首を締めている結び目を搜した。アリアドネのような柔軟な体を持った者にとって、単純に手と足を縛るだけの拘束なら、自力で解放する事はさして難事ではない。だがそれにも幾らかの時間が必要だった。そしてその隙は与えられなかった。

射手の間から甲冑剣楯で完全武装した重歩兵の数縦隊が駆け下りて来た。旗旒も標章も見えず大した兵力ではないが、よく訓練された巧妙に運用されている。迅速な展開。無駄のない動作。精巧な武器と熟練したその操作。これはハピル人のような野盗の群ではない。明らかに文明国の正規軍だ。

モロク神像の周囲は忽ち乱闘、と言うより寧ろ集団殺戮の場と化した。カナン人は多数だが武器の用意は少く、祭典の興奮で疲れていた。然も襲撃は突発的であり、カナン人は一方的に蹂躪された。

手足が飛び、首が転った。アリアドネもコルキユネも、駆け違う無数の足で踏みつけられ、青銅の半長靴で蹴転がされた。起き上がりかけると直ちに押し倒された。青銅の槍尖や剣刃が身近で唸り、鍔や篋が体の下に散乱し

た。半裸体で手足は縛られている。縄は未だ解けない。間もなくコルキユネは死屍の中に埋って動かなくなり、祭壇と神像の間に隠れたアリアドネも鼻血を噴いて喘いでいた。

「コルキユネ。起きて頂戴」

アリアドネは頭で死体を押し除けながら、全身でコルキユネを揺った。騒乱は鎮りかけている。逃げる機会は今しかない。

遂に後ろ手の縄が解けた。アリアドネは急いで自分の足を自由にし、続いてコルキユネの縛を解いた。

「さあ早く。走るのです」

コルキユネの手を引いて立たせた。だが既に遅かった。アリアドネは背に冷い金属の触感を覚えた。槍の穂尖に違いなかった。短槍を構えた武装兵二人が背後に立っていた。

アリアドネの敏捷を以てすれば此の窮場からも遁れ得たかもしれない。だがコルキユネを見棄てる事は出来なかった。アリアドネは僅か数分間だけ恢復した自由を再び諦めた。

アリアドネの両手が逆に振じあげられた。革紐が手首に縋みついた。恐ろしい早さで細い強靱な革が胸から肩へ往復した。その間、青銅の穂尖は頸に触れた俛だった。数呼吸の後、コルキユネも迅速に縛りあげられ、アリ

アドネと首を繋ぎ合わされた姿勢で引き据えられていた。

「素晴らしい手練です。あの早さで縛られたのに、簡単には解けそうにもありませんよ。わたしは何度も縛られた経験があるけれど、これ程美事に捕われたのは始めてです。尤も正確に言う一人だけ、この位上手な人を知っていましたけれど」

アリアドネは一旦諦めるともう落着いていた。これから何のように状況が変化するとしても、モロクの腹中で焼かれるより悪くなる事はないだろう。

「変な事に、感心している場合ではありません。人を縛る事が上手な連中が良い者達である筈もないでしょう。御覧なさい。人を狩るのが目的だったようですよ」

コルキユネに言われる迄もなく、アリアドネは四囲の観察を怠らなかつた。カナン人の数百人は殺され、一部は遁れ、大部分はモロク神像の附近で囲まれていた。襲撃が激しかった割に殺された者は少い。威嚇の目的で最初は大殺戮を行い、あとは群衆の恐怖心を利用して自然崩壊させたいらしい。包囲された数千人は武器も統制も無いので抵抗出来なかつた。

襲撃者の人数は意外な程少く、五百人位だった。だが弓箭剣槍を油断なく構え、寸分の隙も見せなかつた。百人程は革紐の束を持ってカナン人の中に分け入り、相手を選別しながら縛っていた。縄捌きは巧妙且つ迅速でアリアドネやコルキユネと同様な姿に縛られ首で繋ぎ合わされた囚虜の長列が見る間に百人、二百人と出来上って行く。それも決して無差別ではない。壮丁や若い女、働けそうな子供達が限度で、老人や幼少者、負傷者や虚弱そうな者は無視された。例外はモロク神の祭典を主催していた僧官や巫女で、他の者が上体と首を縛られたただけなのに、紅衣、黒紗の男女は首から足迄、荷物のように扱われ祭壇下に転がされていた。

「コルキユネ。あの者達は確かに訓練ある兵隊です。けれど皆、小さい体をして力は強そうに見えませんか。子供みたいなのも居ます。彼処に居る隊長らしいのは何う見ても女でしょう。兜の下から長い髪が出ているし、腿の形でも解ります。その横に立っている弓兵も女ではありませんか。胸甲を帯びていないから乳房の隆起が察せられます」

アリアドネがコルキユネの膝に頭を載せながら言った。コルキユネも感附いていた。

「不思議な集団です。そう言えば先刻縛られる時の手触りが随分柔らかでした。女だったかも知れません」

号令は一つも聞えなかつた。同じような甲冑を着ているが、処々に指揮官らしいのが居て、兜や楯に小さい目印を付け、手信号だけで集結や散開を行わせていた。

襲撃者達は捕虜の選別を終ると縛った千人程の人数を追い立てた。槍や鞭を把った兵士が周囲を警戒した。鞭は威嚇の為に振られたが、直接打撃を加える事は余りなかつた。

数珠繋ぎの大縦列が漸く歩調を揃えて駆け出した。アリアドネは後方に凄じい悲鳴を聞いたが、首を繋ぎ合わされているので容易に振向けなかつた。やっと首を振り曲げ、横眼で見ると、縛られた僧官や巫女が一纏めにモロクの炉へ投げ込まれる処だった。火勢は衰えかけていたが、余燼尚燃え、モロクをして数十体の新しい餌を消化させるには充分だった。残る者達は無視され、危害も掠奪も被らなかつた。カナン人は疾風の如く去って行く襲撃者を呆然と見送っている。

「此の連中は何者ですか。何の目的でわたし達を捕えて行くのですか」

アリアドネは走らされながら近くのカナ-

ン人にセム語で尋ねた。

「フィリスチン海賊だよ。モロク神の御威光も地に墜ちた。祭礼の最中を襲われた上、僧正様や巫女方迄焼かれて了ったのだから」

カナン人は歎いたが、アリアドネはフィリスチンという名を知らなかった。

ヒンノムの谷から平野に出た処で眺めるとチャリオットの一隊が縦横に馳駆し、幾つかの村落が炎上しているのが見えた。各方面から百人位宛の男女が緊しく縛られ、繋ぎ合わされて連行されている。

襲撃者の人数は大した事はないが、その作戦は大規模で、カナン地方の諸市諸村落、沿岸地方全部が同時襲撃を被ったらしい。然も斯かる襲撃に熟練している如く、計画は巧妙、実施は大胆、行動は迅速で、且つモロク祭を察知して試みた奇襲と覺しく、被攻者は完全に虚を衝かれ、少数の武装兵は城壁のある都市に追い篋められて連絡を断たれ、無防備の村落は侵入者が自発的に後退する迄の短時間、占領されたようだ。だが斯くも成功せる襲撃を行いなから、フィリスチンと呼ばれる侵入者は何等の財貨も掠奪せず、働けそうな男女だけを縛って連行するのみだった。何の目的あつての事か。

海岸近くにフィリスチン海賊の陣営が有った。天幕が並び、砂浜には小舟艇多数が引き揚げてある。沖には数十隻の大船が舳舻相含んで威容を示していた。

縛られたアリアドネ達は陣営の広場に引き据えられた。大柄な武将が前に立ち、手で平伏せよと合図した。真鍮のヘルメットに馬尾を飾り、大剣を帯びた指揮者であるが、鎧から露出している四肢は柔かそうで、顔も柔和に見えた。

天幕からは甲冑に重ねて紫紅色のマントを着た武将が現れた。背丈は中位だが瘦形で、海賊の大將よりは君主に似ていた。その傍には六、七才位の男児が、王子然とした金糸刺繍の亜麻服に短剣を帯びて立っていた。

「カナン人を二千人程捕えて参りました」指揮官が地に片膝をつき、右手を伸べて報告した。その声は身体の割に甲高く、明らかに女性のものだった。アリアドネとコルクユネは驚愕して同時に跳び上った。報告の言葉は久しい間、二人が話す時以外に聞いた事のないミノア・クレテ語だった。

首で繋ぎ合わされている縦列の中から二人だけが駆け出したので、前後の何人かは曳き擦られ、折重つて転倒した。武装兵数名が走

って来た。暴れ者を引き離し、押えつけようとした。コルクユネは忽ち振じ伏せられて了ったが、アリアドネは首が締るのも構わずに前列へ逼り出した。何か叫んだが綱が咽喉に搦っているのに声にならなかった。

クレテ語で報告した指揮官が鞭を振り上げて駆け寄り、アリアドネの背を連打した。叩かれながらアリアドネは挽ね起きた。今度は明瞭な声で正面の君主に呼び掛けた。

「エウクシノミア」

確かに見覚えがある。ミノス五十二世ラダマンテュスの第四夫人。且つ第八王子エウクサンティオスの母でありながら、王后パーシファエー在世中はアリアドネと同様に不遇だった義母に違いない。

指揮官は振り上げた鞭を頭上で止めた。アリアドネは周囲を見廻す余裕を得、三人の顔を改めて見直した。

四年を経過して顔も体格も変っている。併し義母と言ってもアリアドネとは一才違い。今年二十二才の筈で、容易に老けるわけはないが、四年間の変化は余りに大きく、アリアドネも即座に見分ける事が出来なかった。十八才から二十二才へとと言うと、女が大人に成長する、容姿の最も変り易い時期ではあるが

ミノス大王を陶然たらしめた若さは失われていた。美貌の面影こそ昔の俤だが、黒い髪に艶が無く唇の色は褪せ、皮膚は荒れていた。歳月の経過のみではない。何かそれ以上の苦悩と疲労が感じられる。

「如何にもエウクシノミアであるが、其方は何者か」

エウクシノミアの方はアリアドネを識別しなかった。アリアドネの変り方はエウクシノミア以上であり、半裸体で後ろ手に縛られ、鼻血と汗と埃で全身汚れ果てた捕虜の女から嘗ての美しい王女を思い浮べる事は出来なかった。

「貴女も憶えていますよ。第二王女アカレーの親衛隊だった女八勇士の一人モルパディア

連続組写真Mフォト

二人の女性の餌食

大手札 三十六枚一組 六〇〇〇円

略号(ほや)

〔MS女性〕……刺青女性山原清子他一名
〔M男性〕……Mモデル志願者M・H氏
男性をいたぶることにしては定評のある刺青女性山原清子が、他に一人のアシスタントの豊満な肉体の女性と共に二人して一人のM男性を、こてんこてんに虐めしめ、尽す有様を、順を追って刻明に写真化し、ローソク、浣腸器などの小道具を用いマゾファンの思わず、ぞくぞくする場面ばかりを連続組写真に編集しました。

でしょう。其処の王子はミノス大王陛下の九男で、わたしの末弟にも当るエウクサンティオス。今年七才ですね」

アリアドネは指揮官と男の子を見ながら言った。二人は眼を皿のようにした。

「わたしは生れた国も地位も棄てて亡命した不忠不孝の女です。その天罰でしょうか。何処へ行っても安住の地を得られず、虐められ通して、此のように憐れな辱かしい姿を曝してしまいました。元はミノス五十二世陛下の第三王女。オケワヌス(海神)の巫女筆頭で牡牛の舞を主宰する踊り手でした。思い出して下らないでしょうか」

モルパディアの手から鞭が落ちた。エウクシノミアは空徳利のように口を開けて突っ立った。二人は転がるようにアリアドネの傍に駆け寄った。

「アリアドネ王女様」

モルパディアが短剣で革紐を切った。エウクシノミアは紫紅色のマントを脱いでアリアドネに着せた。そして左右から抱えるようにして天幕に導き入れた。

「コルキュネを解いて下さい。わたしの乳母です。憶えているでしょう」

アリアドネはモルパディアに言ったが、そ

れはクレテ王女生得の威厳を見せていた。女丈夫モルパディアは唯々として従った。

「御無礼を働きました段、お許し下さい」

エウクシノミアは鹿皮の上席を譲って平伏した。

「王女様の身に鞭を当てるなどと、ヒュペリオン(太陽神)の罰の程が思いやられます。何卒お取り成し下さい」

大きなモルパディアが出来ただけ小さくなって、アリアドネの背にオリブ油を塗り込んでいた。

「無礼などと大層な。もう少しでモロク神の炉で焚かれる処を助けて戴いたのですから。改めて御礼を申し上げます」

女の兵士がクレテ風の将官服と有り合わせの飲食物を用意した。アリアドネは問われる俤に、クレテ島を出て以来四年間の事を語った。

テセウスとの別離。ディオニソス信徒との出会い。リユクルゴス王の迫害。イシュタール女神の事。染料工場。フェニキヤからエジプトへの旅。アピス(聖牛)やホルス(鷹神)やアムモン等の神々。ハトシエプスト王妃との対面。モーセとハピル人。紅海横断の奇蹟とシナイ山に於けるヤーヴェー神の自現。砂漠

の放浪とカデシュの戦。カナン囚禁からモロク祭に到る間の事。

七才のエウクサンティオスは聡明であり、四年前の記憶を微かに持っていた。

「アリアドネ姉様は大好きな方でした。いつも可愛がって戴いた事は忘れていません」

アリアドネの話を聞いたエウクシノミアは我が事のように涙を流した。

「王女様のお瘦せになりましたこと。御難儀の程お察し致します。此のような所でお会い出来たのはオケワヌス（海神）のお引き合わせと申すしかありません」

アリアドネは、エウクシノミアの手を握った。両眼に一杯涙を溜めていたが、それを溢れさせはしなかった。

「同情されるのは嬉しいけれど、わたしは四年前に自らの意志でクレテ王国を棄てた女です。王女としてのアリアドネは北の海で死んだと思って下さい。わたしは庶民の女として平和な暮らしがしたいのです」

エウクシノミアは、涙を拭きながら頭を振った。

「わたし達は久しい間アリアドネ王女様を捜していました。折角ですが庶民の暮らしがしたいというお望みを叶えてあげるわけには参り

ません。わたし達と一緒に居て戴かなければならないのです」

エウクシノミアは昔から訥弁だった。説明しようと思っている事を容易に表現出来なかった。反対にアリアドネは勘が良過ぎた。

「わたしの今の立場を忘れていました。クレテ王国で犯罪を働き、貴女達に捕えられた囚徒でした。覚悟は出来ていますから元王女であろうとも遠慮には及びません。クレテ島へ連れ帰り、競技場で公開処刑すると言われ、でも甘受しましょう。今迄に何度も死ぬ筈の処を今日迄生きて来たのですから。最下賤の奴隷にされても恨みません。染料工場や練瓦製造の経験もしました。何んな運命が待っているとも驚きません」

言葉の説明では到底アリアドネを理解させ得ないと悟ったエウクシノミアは、奥の懸幕の前にアリアドネを導いた。

「アリアドネ王女様。わたし達は何としても王女様の御承諾を戴かなくてはなりません。併し御返答を伺う前に先ずこれを御覧戴きたいと存じます」

幕を開くと四囲は忽ち金色燦然たる光輝で満たされた。アリアドネが一度も忘れた事のないヒュペリオン（太陽神）の黄金円板が厳

然と見下していた。

エウクシノミアは黄金鏡の前に平伏し、太陽神に対する作法通りの拝礼を行った。思い設けぬ場所でクレテ王国最高の宝器を見せられたアリアドネは、余りの驚愕に暫し呆然となっていたが、この黄金円板が真正の御神体である事を確認すると、忽ち畏怖に打たれて飛び退ざり、コルキユネを促しながら自分も地に額をつけて最敬礼を捧げた。併し疑惑を消す事は出来なかった。

「これはクレテ王国最高位の女性が祭祠する事に定められているヒュペリオンの御神体ではありませんか。エウローペ王太后様より他に触る事の許されない宝器である筈です。何故このような場所に持ち出されているのでしょうか」

エウクシノミアはアリアドネの問に答えなかった。代りにモルパディアが象牙製の箱を捧げてアリアドネの前に進んだ。蓋を開くと中からは赤色緑色黄色の光が射し、黄金円盤の輝きと交差した。尖頭形銅玉百八箇を連ね大蛇が自分の尾を咬えて世界を巻き固める形を象った地母神の宝珠蛇連環だった。

「クレテ王国を守護する天地二神の御神体はわたしの知る限り一度も国外に出た事がない

筈です。それが二品とも此の陣営に在るのは何とした事でしよう。これにオケワヌス（海神）のラプリス（双刃戦斧）を加えたクレテ三神の御神体はミノス王族以外の者が祭祠する事を許さないと聞いています」

アリアドネは興奮していた。併しエウクシノミアが更に語を継ぐに及んで一層驚かないわけには行かなかった。

「仰言る通りクレテの天地二神は王族中最も人格高貴な女性が祭祠しなければなりません。わたし達は最高祭祠としての、又、女王としてのアリアドネ王女様を捜していたのです」

アリアドネは或る恐しい予想に到達した。息を弾ませながら一気に尋ねた。

「クレテ王国に何か変事が起ったのですか。貴女達は何の目的で御神体を奉持してカナーンに迄来たのですか。殆んど女ばかりの軍隊を連れて掠奪を働いているのは何故ですか。カナン人はフィリスチン海賊と呼んでいたけれど本当に海賊をしているのですか。エウローペ様やアンティオペー殿が御無事かどうか聞かせて下さい」

答えようとしてエウクシノミアは突然地に崩れ、面を掩って号泣した。

「クレテ王国は亡びました。艦隊も船群もすべての青年を乗せた俥で沈んでしまいました。

クノスス市街は焼け落ちラビリンス（迷宮）には蛮族が住んでいます。エウローペ王太后様もグラウコス殿もデウカリオン殿も、すべて亡くなられました。アリアドネ王女様の妹御ファイドラ様やアンティオペー殿始め貴婦人方の多くは野蛮なギリシヤ人に捕えられて朔北の地に連れ去られてしまいました。ミノス五十二世大王陛下の血統を継ぎ得る方は幼児エウクサンティオスの他は、アリアドネ様お一人。そしてクレテ王国の遺臣として残る者は、カナン人からフィリスチンと呼ばれるわたしやモルパディアの一族だけなのです。他は悉く、アケーヤ人アテネ王テセウスの率いる野蛮人に亡されて了ったのです」

フィリスチン人は近代考古学に依る解読名で、旧約聖書のペリシテ人に相当する。パレスチナの地名もこれから出た。ヘブライ人から見ればカナン地方の先住民だが、セム人種ではなくカナン古来の居住者でもない。

事實はヘブライ人のカナン侵入よりも僅か前にカナンに入ったに過ぎない。但しヘブライ人移住当時既にフィリスチン人は土着のカナン人よりも有力になっていた。（故にこ

そカナーンの地がパレスチナと呼ばれるようになったのである。）旧約聖書からはフィリスチン人が高度の文化と組織を有した事が推測され、実際にもダビデ王以前のヘブライはペリシテ人に対し概して敗戦を繰返していたようだ。ヨシユア時代から久しい期間、新来のヘブライ人は山地に拠り、土着のカナン人は平地を占め、ペリシテ人が海岸に住む鼎立状態が続いた。

一方ウエルズ等の説に依れば、フィリスチン人は海上民族であり、ギリシヤ人の侵入で追い出された地中海先住民で、造船、航海の術に長じていた事が明らかになっている。筆者はこれをクレテ王国の遺民と考える。エジプト第二十王朝ラムセス三世の碑文に見える「海上民」も同じもので、エジプトに迄流浪したクレテ人が、エジプトの軍力で撃退され、カナンに後退して定住したものである。希臘神話は先住地中海人種をペラスゴイ人又はペラスギ人と伝えているが、旧約聖書のペリシテ人との間に共通語源が存在するかもしれない。

「クレテ王国を亡した者はテセウスを逃がしたこのアリアドネです。エウローペ様の御命を縮めたのもわたしです。その罪は余りに大

き過ぎて償い切れません。何のような刑罰を受けても足る筈がないわたしに向ってクレテ王国の女王になれと奨めるのは何故ですか」責任の重大さに悄然となったアリアドネをエウクシノミアが抱き起した。

「クレテ王国が、ギリシャの野蛮人に攻められ、防戦甲斐無く滅亡間近と見られるに到った時、エウローペ王太后様はわたしをお招きになり、ヒュペリオンの御神体を示しながら斯う仰言いました」

アリアドネは姿勢を直し、黄金円盤の前に平伏した。エウクシノミアの声を、エウローペその人の言を聞く如くに謹聴した。

「最近のクレテ王国は、天の道を踏み外していました。今日滅亡を見るのは天命であり、テセウスを逃したアリアドネの責任ではありません。テセウスが居なくても他のギリシャ人が必ずこれと同じ事を為したでありましょう。クレテ王国が亡びる時にアリアドネだけが国外に居るのも天命です。アリアドネは生きて東の国に居ます。昔よりずっと強く逞しく成長している筈です。クレテ王国を再興する指導者はアリアドネを除いて他にありません。ヒュペリオンの黄金円盤は王族中最も高貴な婦人に依って祭祠さるべきもの。これを

其方に預けます故、必ずアリアドネを捜し出して渡しなさい。そしてアリアドネを君主に仰ぎ、クレテ王国を再興しなさい」

アリアドネの脚から腰へ、更に肩から全身へと戦慄が上って来た。エウクシノミアは語り続ける。

「エウローペ王太后様はこう仰言ってわたしにヒュペリオンの御神体を渡され、太陽神殿に窺られると中から扉を閉められました。フェイストスに赴く途中で振返ると、天文台は真赤な火を吐いて燃え崩れる処でした。きつとエウローペ王太后様はクレテ王国の滅亡を生きて御覧になるに忍びなかったのでありましょう」

アリアドネは顔を上げて黄金鏡を見た。鏡に映った彼女自身の顔が涙で曇った。

「エウローペ様」

突然、鏡の中の像が鮮明になった。それは総白髪のエウローペだった。そう見えた。或はアリアドネ自身の潜在意識に起因する自己催眠だったかも知れない。

「ああエウローペ様。わたしは何をすれば良いのでしょうか。御命令とあれば地獄の底も嫌いません。でもわたしは牡牛の舞より他に何の特技も有りません。テセウスを逃した罪の

償いをする為ならば剣でも槍でも持ちます。併しわたしは戦略や戦術を知らず武器の使用法も漸くコルキュネから習ったばかりです。クレテ王国を亡したギリシャ人共に勝てるでしょうか。わたし自身は死を恐れません。けれど敗北は恐れます。クレテ王国の僅かな生き残りを最後の一人迄亡してう事にはならないでしょうか。わたしは力と自信を何処に求めたらよいのでしょうか」

と、アリアドネの耳に、地の底から響くような声が聞えて来た。そのように思えた。

「アリアドネよ。クレテ王国の再興は其方に課せられた義務です。遺臣を率いてギリシャに渡り、捕えられている者共を助けなさい。

そして新しいクレテ王国を作りなさい。軍力で支えられ、他人種の奴隷の上に築かれていたクレテ国王は亡びました。亡国は又以て存すべからず。一度亡びたクレテ王国は元通りにはなりません。其方は遺臣を連れて新しい土地で新しい原理に基いた国を建てなさい」アリアドネは思わず叫んだ。

「新しい土地。新しい原理。新しい国」

エウローペの声が再び響いた。

「それは其方自身で発見しなさい。其方は他の誰も持ち得ない力を持っています。愛の力

(未完)

△日本版▽

モデル……………美木乃々子……………山原清子

待望のグラビヤ印刷によるアート紙の「刑罰拷問写真集」成る

二種に分け、今回は美木乃々子、山原清子
二嬢による「日本版」を八美しき縛しめV
(第五集)として刊行いたしました。
純白の特アート紙に対する極めて鮮明な
グラビヤ印刷による迫力のある写真集を是
非お残め下さい。七十四葉の八女性拷問V
写真がぎっしりと全紙面を埋めてフアンの
方々の御一見を得ております。売切れに
なりませんと絶対に入手できません。どうか
未見の方は今すぐお申込み願います。

△アルバム（写真集）の内容▽

（刺青の女王山原清子、演技派の美女美木乃々子の熱演による女性刑罰拷問写真集）

○木馬責にあつて苦悶する女囚八葉一葉（美木乃々子）○白州の上で非人の騷りものにな
る女囚八葉連続四葉（美木乃々子）○牢内にて
折檻を受ける女囚——海老縛りと笞打ち。八
連続四葉（美木乃々子）○非人に縛り上げ
られる哀れな女囚八葉連続十二葉（美木乃々
子）○海老責めに放置され全身蒼白となつた
女囚八葉（美木乃々子）○非人に不浄繩
を掛けられいたぶられる女囚八葉（美木
乃々子）○荒庭の上にて荒縄の緊縛に泣き悶
える女囚八葉連続八葉（美木乃々子）○算盤
責めにあい足の指をくの字に曲げて苦悶する
女囚八葉（美木乃々子）○荒縄で乳房も
くびれるまで縛られた女囚八葉三葉（美木
乃々子）○土壇で胴斬りにされる死罪の女囚
四葉（美木乃々子）○算盤責めと石抱きの
拷問八葉（美木乃々子）○囚衣を剥がさ
れ竹のささらで打たれる女囚八葉（美木
乃々子）○刺青を晒して木馬責にあう女囚
三葉（美木乃々子）○海老縛りでムチ打ちに
喘ぐ女囚八葉（美木乃々子）○海老責に苦
悶する女囚八葉（美木乃々子）○竹の棒に
て折檻される女囚八葉三葉（美木乃々子）
裸にて白洲に股間縛りにあう刺青の女囚
八葉（美木乃々子）○礫台に括られた人墨
姐御一葉（美木乃々子）○足首を上にして逆
吊りにされた女囚八葉（美木乃々子）

以上合計七十四葉

△告白▽

『縛り』に憑かれた女性の告白

秋島とよ子

誰にも知られず極秘裡のうちに一度でもいい、本当に一度でいいから他人の手で身動きも出来ないほど縛られ天井から吊り下げられて失心するまで責めて頂けたら……と、こんな事を夢に見ながら過して参りました。

そんな私が、とうとう、こうした文章を書いて皆様に告白する結果になりましたのも、やむにやまれぬ心の発作とでも申せましょうか。

これまでも、何にかと自分なりに研究して、いろいろの書物を読んだりしながら、自分の手で自分の体を縛り責める事によって満足してきたものでした。

あんな大胆な事が、よくやってこられたものだと、自分でも驚いているこの頃です。

あれは一昨年の十二月の初めの或る土曜日の事でした。

会社を午前中で早退して、午後から母には内緒でこの市の二流館へ映画を見に参りました。この映画館は最近まで地方まわりの○○劇団とか○○一座とか言ったあまり名の知れない剣劇などをやって居りました所で、建物も大変古く、改造されたとはいっても冷暖房もない田舎町の芝居小屋でございます。

私も小さい頃には祖母に連れられて、お弁当を持って、よくお芝居を見に行ったものです。その頃はお年寄りがほとんどで場内は五センチ位の角の木で五、六人ずつ坐れる様に仕切ってありました。席をとりますと、座ぶとんやお茶をもって来てくれるオバさんが何

人も居た事を覚えております。

改造されてからは座席も全部椅子にかわりましたが、二階はそのままでも坐る様になった席の後に一列だけ粗末な木製の五人掛け椅子が真暗い中に置かれてあるだけで、観客もほとんど上っては居りません。

時に若い恋人同志が幾組か居る位で、電灯も階段の所に一個ずつあるだけといった有様です。

その日上映されましたのは『日本拷問刑罰史』でした。奇クを見て知りまして、それより二カ月ほど前、私の家からバスで四十分もの市までわざわざ見に参りましたが、その時はお友達も一緒でしたし、初めて見るすごい場面に驚いて何もわからぬままに見終ったの

で当市に上映されるのを知ると、もう見ずには居られない気持ちで、この土曜日を待って居りました。

その日も家に帰りまして、あの場面を思い出して、なかなか眠れませんでした。

それほど待ちかねていた映画ですから、最も有意義に見たいと思いついた午後から参りまして最終まで見る予定で居りました。

この劇場は横の露路からも裏道からも入れますので、大変都合でございました。

私は或る一つの計画をたてて会社の帰りに



荒物屋さんで緑と白の綾織りになった人差指ほどの太さの綿ロープを五メートルばかり買って持参しました。これはこれから見る映画の登場人物の様に自分も責められつつ共に苦しみを味わいたいと思った為でした。

第一回目の映画は勿論夢中で見終り、夜の部になりました。その休けい時間に二階へ上って見ますと、今日も向うの隅に一組のアップクが居る他は人影もございません。

「うまく行った」と思い「さて、どんな縛り方で」といろいろと考えてみたりしているう

ちに夜の部が初まりました。つまらない短篇映画が上映されましたのでこの間を利用して最初の計画通りにトイレへ行きました。

いたずらものが多いのか最近新築されたばかりの便所だというのに、鍵がみんなこわされています。人気が

のないのを幸い男子用へまわってみました、一カ所だけ鍵のかかるのがありましたので、それを使うことにしました。

私のその時の服装は、会社の帰りに更衣室で下着を全部取って毛糸の長い丸首のセーターの上へオーバーを着ただけのわざと簡単な服装で行きましたので、すばやく上半身裸になる事が出来ました。場内とはいえ暖房もなく、まして十二月の事です。素肌当たるスキ間風はとて冷たく、思わず「お寒い」と身ぶるいました。

寒さが次第に加って体がガタガタふるえだしましたが、辛抱して真新しいロープを包みから取り出し、真中で二つに折って用意して居りました直径五センチ位の鉄の輪を結びつけました。この鉄の輪が両方の乳房の上になる様に胸から腕にかけて二巻きして出来る限りきつく縛ります。そこで一旦結びまして両肩をすばめますとロープが少しゆるんで来ますので、その結び目が背中を中心に来る様にそろそろ廻してゆきます。結び目が背中にまわり二本のロープを両肩を通して前にまわし胸を縛ったロープに通して一つに結びます。更に二十センチ位の間を置いてもう一つ結び目を作って又両方に分け腹部で三巻きして後

で止めます。

その結び目から今度は二本一緒に背の鉄の輪へ通しまして、二回輪にまきつけて又、両方に分け前にまわして胸と腹との結び目の中間をロープで左右に引しほりますと乳房の下で菱形になりますので、それを後へまわし、もう一度鉄の輪に通します。更に輪に通したロープをもう一度左右に分け、腕と体との間を無理に通してヒジにかかったロープに通して後へ引しほりますと、二の腕に巻きついたロープが鼓になり、更に強くしまつて参ります。こうしてそのなわじりを腰の所の結び目に止めます。これで手首を残して上半身完全に縛られた型になります。

家で自分の部屋で縛る時には、もう一本の長いロープを使って腹部の結び目から股間を通して後へまわし、そのロープで太ももからひざの上まで堅く括ります。なぜひざの上まで縛って足首を縛らないかと申しますと、家人の寝静まるのをまわって戸外へ出てヨチヨチ歩きで散歩するのです。真冬でも下着一枚で縛ったまま戸外へ出る事もございました。こんな時はコップに半分位のお醤油をのんでおきます。そうしますと体が温くて風邪を引く事はないとの事ですから……。

でも、ここでは下半身を縛る事が出来ませんので、少し物足りない気持でした。

不自由な手と体をうまく使つて手を通さずにセーターを着る？ その上にオーバを着ました。肩にかかったロープも首の長いセーターの為外からは見えませんし、その上大きいエリのオーバを引っかけているのですから人とすれ違つても、見つかる心配はございません。

人気のないのを見さだめて便所を出て、そろそろ二階の階段を登ります。死刑台に上る死刑囚の事がフト思ひ出されました。

二階では暫く目のなれるのをまわって予定しておいた椅子に腰をかけます。別に用意していた短いロープをとり出して両端を結び大きな輪を作りまして、その一方を背中の鉄の輪に入れます。片方を椅子の後から下へ通して片足を曲げ、その輪に入れます。そうして背中に入れたロープに先ず左の手首を一巻きして入れ左手首と鉄の輪との間へ右手首をロープの下になる様に入れ左手首を背に近い方をすべらせて右手首の上へまわし更に足でロープの端を引張りますと、両肩のロープが一段ときつくしまつて手首も背まで吊り上り完全に縛られた型になります。

椅子の後を通して足に連つていたので、体を前に倒すことも出来ません。映画の場面には縛られた女が吊り下げられて凄惨な悲鳴をあげています。私もあの人たちと共に責められていたという気分になり先程の寒さも忘れてしまひ、わずかににじみ出てきた汗の為にセーターの毛が素肌にチクチクとさす様な気味悪さを加えて参りました。

暫くすると手首から先がしびれてきて指先が太くはれ上った様な感じがして参りましてそれが更にやがて指先から血がふき出すかと思われ様になりました。最後までこのまま辛抱するつもりで居りましたが、とうとう辛抱出来ず足を曲げて手首をゆるめてしまひました。少し休んで又もう一度前の要領でしめ上げ充分に責められる気分を味わいました。映画も終りに近づきましたので手首だけをほどこきました。

最初の計画では映画が終る前にもう一度トイレを使ってロープをほどこうと思つていたのがつい夢中になつてしまつて、映画が終つてしまひました。「これは、困った事になった」と思ひましたが、ほとんどの人が場外へ出ている後で長い間トイレを使うのも変な事だし「いっそ、このまま家まで帰つてみよう



かしら」ととんでもない考えが浮んで来ました。でも、そろそろ縛ってから二時間近くなりだったので、両腕が痛くなって来て気をと戻している今では苦しみを感じられてきました。少しでも早く家へ帰りたいと思うようになってくると痛みが余計に感じられて、その上一生懸命に歩いたものだから、又汗が出て来て、あのチクチクとさす様な毛糸の気味悪さが襲ってまいります。

帰る途中に、どこかでロープをとく場所が無いかと気を配りながら探しましたけれど、

此処と思う所もなく、とうとう家まで二軒近い道を半時間余りかかって帰りました。

ほっとする間もなく、急いで自室に入りましてロープを解いたのです。自分ですき好んで、こうしてしまっただからです、その苦しみも、又今となっては、たのしかった思い出となりますけれど、「もう二度と、あんな所ではしないようにしよう」とその時は心に誓ったものでした。でも、こんな苦しみは私にとって最上のよろこびでもありますので、あの時の帰り途の半時間は辛い長い時間でしたが、一つのたのしい出来事としていつまでも私の記憶に残っております。

あれから暫くして昨年のお花見の時、友達と二人で花見に参りましてその折に知り合った人が偶然にもK誌の愛読者である事を知り何度も会っているうちに、

どちらからともなく、いろいろの資料を見せ合うようになりました。

最初のうちは縛る事など、お互に口にも出す事もなく普通の恋人同志の様に平凡な交際をして居りましたが、その人が或る日「一度写真をとらせてくれないか」と申しますので何の気もなく承知したのでございます。

さて、その約束の日になって水着姿の写真をと望みました。私もその人を信じて居りましたので、気軽に承知しまして、私の家の背後にあります約六坪ほどの小屋を使うことにしました。

初めは水着を着て五、六枚とりました。

もし人が通るといけないと思って戸を締め切ってローソクを立て、カメラのピントを合せてフラッシュを使いました。何だ彼だと上手な口のにせられて上半身裸のものも五、六枚写されました。人前に白昼裸をさらすなんて、初めての事ですので恥しくてたまりませんでした。私が嫌だ嫌だと言いつつ言いなりになるので、次は一枚でいいから全裸の写真をと申しましたが、それだけは頑強にお断り致しました。そしてうっかり「上半身だけなら、どんな姿でもいいから全裸は許して欲しい」旨を告げますと、あの人は、私のこの言

葉を待ちかねていた様に本心を表わして参りました。

「ロープで私を縛る」と申します。この事を予想して居たのでございましょう。カメラを入れるカバンの底にロープを用意して居りましたのには、驚き又あきれてしまいました。

彼の計画にうまくのってしまったのです。

でも、内心初めて人に縛られるという恐い様な、うれしい様な、複雑な気持ちでした。

「余り強くしないで」と頼んだので形ばかりの縛り方で写してゆきます。私にはもうこんな緩い縛り方など何とも感じませんが唯一手首を縛られた時は、本当に縛られたという感じが致しました。又それから次第に力が入って参りました縛り直す毎に縛り方が強くなって来ましたが自分で縛っても、もっとも強く縛る事になれて居りますので、まだ物足りない気持でしたが私の口からは「もっと強く縛って下さい」とは申せません。痛くもないのに「痛い」と言ってみたり、もっともって続けて貰いたいのには「もう止めて」と頼んでみたり致しました。

本当は手も足もしびれて感覚のなくなる程きつく縛られて吊り下げて頂きたい気持なのに、こんな事には、よろこびを感じない女だ

と思わせる為にいろいろな芝居をしたものです。やがて二十個ほどのフラッシュを使い果してから、まだフィルムが残っているから戸外で写したいと申します。彼も図々しいけど私も又いい気なもんだ、何て馬鹿なんだろうという考えと又自分が満足出来ない腹立たしさも手伝って、とうとう、それきりに終りました。

「現像も焼付も自分でやるのだから他人に知れる事は絶対ない」と申しましたが「私だけがとられて、もしこの事が世間にばれる様な事になったら……」という事が心配でございましたので「交換条件として、私にも貴方を写させて欲しい。そうすればお互に秘密が守れるから」と言うことで、残ったフィルムを彼を写すのに使うことに致しました。今になって考えますと「矢張りこうしておいてよかった」とあの時の自分のアイデアを自分ながら、よく出来たと思っています。

フラッシュがありませんので山の上へ登り私なりの縛り方で彼を縛りまして、もう日が山に入る頃までかかりましたが、何とか残ったフィルムを使ってしまいました。彼は「全裸でもいい」と申しました。でも私も目の前で全裸の男性を見る事は自分の全裸の姿を見

られるより恥しくお断り致しました。

そんな事があってから一カ月ほどして彼よりその写真を見せて戴きました。ところが、その中に私が写してあげたのと違う写真が入っておりますので尋ねてみますと、「君も恥しいのを辛抱して写させてくれたんだし、自分も一番見られたくないものを渡すから秘密を守る事については信用して貰えると思ったから入れておいた」と申します。

その写真は全裸で嚴重に縛られたしかも前面をはっきり写してありまして、大変恥しくて、よくは見られませんでした。

この時、彼にも異性を縛るだけでなく自分も縛られる事には興味を持っていたと打明けて話してくれました。私一人かと思っていたのが奇クによって私の様な人が他にも沢山おられる事を知って心強く思っていたのに、こんな身近かにも全く同じ様な傾向の人が居られた事は、今までの自分自身の事が何だか恥しくなくなつた様でうれしうございました。

それから後、三回はどんなプレイをお互にたのしみました。でも私の希望するだけの強烈な縛りや責めには、とうとう至りませんでした。今ではその人も大阪へ出てタクシーの運転手をしているそうで三カ月余りは、そ



んな事も忘れて居ります。

夏の間は短い服を着るので腕に型が残ると具合が悪いので止めて居りますが、誰方も同じでしょうが毎月大体定った頃になりますと体の中の虫が動き初めます。私の場合、毎月二十日前後には特にそんな傾向が強い様に感じます。

七月の末にも自分なりに吊りという事を考えまして、何とかうまい方法で吊り下ってみたいと思い慎重に研究をして例の山小屋で試みて見ました。この時の事を少し書いて見ま

す。七月末の一年中でも一番暑い頃ですから戸を締めただけでむせ返る様な暑さでした。

一人人間の限界として、どの位の時間辛抱出来るものだろうかと言うのが疑問でした。

体を縛る事は前にも申しました通り、もう上手に出来ますので、これに加えて足を縛って(胸だけで吊り下っては苦しいし長くは続かないと考えて)そのロープは吊り縄に連結する様にしますと、いくら長時間辛抱出来ると考えまして、先ず座敷で体を縛りました。りんご箱を縦におき、その横にその半分位の

高さの台を用意致しました。体だけ縛って先に用意した吊り縄の先にL字型のもう少し曲った金具をとり付け箱の上に上って背伸びすると、丁度胸を縛ったロープに引っかけられる様にしておきます。

ロープをもう一本用意して、その

台から、りんご箱の上に登ります。ゆらゆらとゆれてなかなか思うように出来ませんでした。たが、何とかヒザの上から太ももにかけて、きつく縛り腰から背のロープへと連結しました。更に少し短いロープをもう一つ取りまして、その両はしを結び輪を作ります。背伸びをして背の結び目に吊り縄の先につけた鈎を引っかけて足を曲げて見ます。胸のロープもそう苦しくもなく太ももの方のロープが痛く感じましたが、この分だと暫く吊り下って居られると思えましたので、足を伸して立ち、以前映画館の中で縛った要領で手首を縛りたれ下ったロープを足首にグルグルと少し曲げた様にして巻きつけます。

足を曲げると吊り下りますので、少しの痛みを辛抱して、とうとう両方の足首も充分とはゆかないけれど縛る事が出来ました。

このままで、どの位辛抱出来るだろうと、時間を計ってみるつもりだったのです。

二分たち、三分すぎた頃には、胸も苦しく太ももを縛ったロープが、うんと締って参りまして痛くて居られなくなりました。多分ロープの間に皮膚をはさんでいたのでしょう。一旦おりて、もっとうまく縛り直そうと思つて足をほどこうとしましたが、念入りに何度

もくぐらせながら縛っているの、なかなか
ほどけません。

時計が五分すぎました。手首がしびれてく
るし腕を縛ったロープが強く喰い込んで痛く
なって参ります。やっと片足が抜けました。

「早く」と思って、りんご箱に足をのせまし
た。この箱の台は吊り縄より少し横になる様
にあってあるので片足だけでは台に足がさわ
るのに体をささえるだけ力が入りません。片
足の方がロープがからんでとれないので手首
をゆるめる事も出来ず、こんな事なら箱を真
下においとけば良かったと思いましたが、今
更どうにもなりません。台の上に体の重心が
持ってゆけたら立つ事が出来るので痛みをこ
らえて体を揺り動かします。その反動で台の
上に立とうとして思い切り体をゆりますと、
吊り縄を結んである横木が細い木なのでメリ
メリと音を立てています。

「一、二、三」と小さいかけ声をかけて、箱
の上に立とうとしました。うまく足がかかり
まして体の重心を持ってゆこうとした時、吊
り下った体がグルリと一回転してしまいました
た。そのはずみでクルクルと二回、吊り縄を
よじって体がまわり又逆もどりして一回まわ
りました。

太ももと腕との痛みが急に増して来て思わ
ず「痛ッ」と声を出てしまいました。それと
同時にボタンと音をたててりんご箱が倒れて
しまったのです。先に足をかけて体がまわり
そうになった時、思わず力が入って足で倒し
てしまったのです。

「サア困った」何とかしてゆるめなければ身
体が持てないと思って一生懸命になっていた
のに、今となつては、何の方法もございませ
ん。手首は足にからんだロープに引っ張られ
てきつく締まっているので、先程からしびれて
しまつて居るし肩のあたりの腕のつけ根が抜
ける様に痛いのです。誰かに助けて貰うにし
ても、この小屋から民家までは三百米もある
ので、とうてい叫んでも無駄で人を頼る事は
望めません。そうかと言って、このままでは
死んでしまふかも知れないと云う恐怖が襲つ
て参りました。むし風呂の様な小屋の中でい
くら裸とは申し乍ら汗はどんどん流れて来る
し目も口も汗の為、川からはい上った様にな
って息は「ハアハア」とはずんでくるし本当
に死ぬのではないかと恐しくなりました。

吊り縄には太い麻縄を使っていますので、
いくら体をゆり動かしても、ビクともしませ
ん。全く助かる望みがなくなり、声を出して

泣き出しました。「誰か助けてー」と大声で
叫びました。でも誰も来てくれる筈もありま
せん。「もう駄目」と思った時、フト吊り縄
を結びつけた横木が梁にのせただけで縛りつ
けてないのに気づきました。何とか横木を片
方だけ梁からはずせないかと思ったのです。

手も足も切れてしまふかと思われる程の痛
さを歯をくいしばって再び無我夢中で力のあ
る限り息のある限りと申しても過言でありま
せんでした。とにかく体を横木に添った方向
に動かしたのです。目が廻る様で回だか吐気
さえして参りましたが、根気良くやっており
ますと、少しずつほんの少しずつ前によつた
り又逆もどりしたりしています。

はずれるかも知れないという望みが湧いて
きますと、急に元気が出て又も前よりも大き
く丁度子供の頃ブランコにのって揺すってい
る要領で出来るだけ揺り動かしました。なか
なかはずれないものです。中心に荷をぶら下
げてあるのですから、はずれないのも当たり前
でしょう。でも必死になる事は恐しいもので
とうとう片方がはずれました。力一杯揺り動
かした反動で前の位置から一米も向うへ体を
横にしてドサリと落ちたのです。

「ああ助かった、もう二度と自分一人での吊

りはやるまい」と本当に心から感じました。

手首もしびれて居ますし指を動かしてみても唯意識だけは動かしているつもりなのに実際には動いておりません。足にからんでいるロープも何とか少しづつゆるめて、やっと手首をはずすことが出来ました。体や太ももを縛ったロープは、すぐにとく気力がなく指先も言う事をきかないので、しばらく冷たい土間に横に倒れたまま休みました。おりられたという安心感が今までの苦しさや痛さを忘れさせてくれました。

そんな時であったのに時計を見るのを忘れませんでした。書いて居りますと、ずい分長い様に思えますが、この間十八、九分でございました。その時の太もものロープにはさまれた跡と腕に食い込んだロープの跡が足の方は五糎位の長さで両方の足に、腕の方は黒い筋が二本ずつ一カ月をすぎた今も尚はつきりと残っております。お風呂などへ入った時、この傷跡を見る毎に吊り責めは恐いものだと、あの時の事を思い出して吊りだけは二度とやりたくない、ぜったい止めようと強く誓っているのをごいいます。それなのに最近になって、もう少し研究すれば失敗せずにやれるのじゃなからうかと精こりもなく考えるの

でございます。

ふみ台が倒れた為に、あんな苦しい恐しい失敗をしたのだから、もっとしっかりしたふみ台を使ってみたらと吊り責めへのあこがれとでも申しましようか、あの苦しみがよろこびに変わる様な時期が必ずあると確信して居るのです。

私の家に大きい木製の桶がございます。水なら一石は入るもので、まわりが約半畳位あり高さ一米位のもので大変丈夫に作られて居ります。先日この桶を逆さにふせてその上になった底に上って見ました。少々位足でトントんとふんでみても底が抜ける様な心配もありません。この上手首を縛るロープにもう少し研究をしてみても今度は失敗のない様にもう一度やって見ようと思ひ、その予定した日ももうすぐでございますので、どんな結果になるかたのしみやら心配やらでございます。

まだまだ、この他にも珍しい経験がたくさन्दございます。私の近くには蓮根という野菜がございまして三月に植付けして十月ごろに収穫するまで、その畑は水を年中十糎から十五糎位満たしてあります。その中へ入ると太もものあたりまでめり込む様な所もございます。今頃は長さ一米五〇糎ぐらいから長いも

ので二米余りもあるおや指位の茎が無数に立って居り、その先に直径五十糎ほどの大きい葉がついて居ります。

夏でもその中頃へ入りますと水も大変冷たく又その上藪蚊がブンブンというようなやさしい声でなく「ウワーン」という様なうなり声をたてて居りまして願ってもない責め場でございます。昼間でも中に居りますと人目につく心配もなく施肥が終る六、七月頃からは収穫まで何日に一度か水を見に来る耕作者がみられる程度ですので水のある畑を選べば絶対心配でございせん。

私、夜になって一度入ってみましたけれど唯一つその茎がザラザラしたトゲの様なものが無数にある為、裸では、私の場合いくら頑張っても二十米ほどしか入る事が出来ませんでした。責めを目的とされる方々でしたら願ってもない場所でございますようが……。

いろいろ経験しました事を書いておりますと、いくら書いても書き足りませんが下手な字や文で長々書かせて頂き、さぞ、お目ざわりのことだったろうと存じます。すべてこの身を以って実際に経験した事でございまして愛読者の皆様方には、馬鹿な女、変った女もあるものだとときと笑われ軽べつされることで

しょう。でも、私にはそれも一つの精神的な責めとしてありがたく頂戴致したい気持ちでございます。

今までに、たくさんの写真を写して頂きましたが、今手許に二十枚ほどしかございません。大変下手な写真でお恥しいのですが現像

焼付共に素人細工なので、わかり難いと思いましたが同封致しました。

私の体験が誌上にのらなくとも写真が複写出来ますならのせて頂いても構いません。

読者提供の写真として、もし載せて頂けますなら、投稿者として最上のごとびと存じ

ます。尚彼からもらったものも二、三枚入れました。よろしく御批判頂けます様にお願ひ申し上げます。

私は乳房が貧弱で、ちっとも良い体ではございませんので、大変お恥しいと思って居ります。

実際「花と蛇」は面白い。次々と展開される美女達への羞恥責めは、全く素晴らしいの一語に尽きる。本誌を代表する傑作として後世に名を残すものと私は確信している。

次号ではどのような進展を見せるのかと、心ワクワク、色々な連想をするのだが、以下の雑文もその一つ、但しストーリーには無関係で、登場人物(女性)を日本の映画界女優に見立てたものである。私の好みで選定したから異論のある向きも多いと思う。読者一般を対象としてアンケートをとってみたら面白いかも知れない。もっとも、いわゆるプライバシーを侵すことになる心配もあるようだが。

私の空想

—「花と蛇」の配役と感想



立町老梅

静子——著名な実業家の貞淑な令夫人、気品のある美しさ、息を呑むような美貌、豊満

な女盛りの肉体。このヒロインは日本映画界の女王山本富士子以外には考えられない。作者の意向もそのようである。彼女はまさに典型的な日本の美人である。映画界より締め出されてからは、時々テレビで見かける程度だが、結婚以来、その美貌に益々磨きがかかってきたように感じる。この才色兼備の大女優を使わないという例の五社協定とかいう制度は全くケシカランと思う。

一応の候補として、若尾文子、司葉子、岡田茉莉子などが考えられるが山本富士子には到底及ばない。すなわち三者共通の欠点として、肉体美に於て難があり、その他各人別では、若尾は庶民的なイメージがまずく、司は知的乃至近代的美人という点がマイナス、岡田はやや弱みのあるタイプといえよう。月丘夢路のムードは満足だが、少し年をとりすぎたようだ。

桂子——静子の義理の娘であるが、元ズベ公の一員（女親分）だった。その地位を銀子に奪われ、現在は専ら静子の引き立役に使われるという損な役割を演じている。この役には野川由美子が適任と思う。美人ではないがピチピチした若さに溢れ、ズベ公的ムードも満点。最近の八賭場の牝猫Vでは勇ましい立

回りを演じていた。テレビの『ごろん波止場』では、地をそのまま行っている感じ。白木マリ、万里昌代、瞳麗子なども考えられるが若さという点では野川に軍配を挙げたい。

京子——空手二段の女探偵で、若鮎のような肉体美の持主。現代感覚の美人でもある。静子を救出せんとして潜入するが失敗、卑劣漢川田の毒牙にかかって操を奪われる。男まさりの女を征服するという『じゃじゃ馬馴らし』的感興を添えることによって、この物語に強いアクセントをつけている。

京子役は候補者難。先ず柔道二段の万里昌代だが、もう少し気品がほしい。琴姫スターの松山容子は純日本風美人という点が難。白川由美は理知的美人でグラマーだが、性格的に今一つの決め手に欠ける。テレビの深夜劇場で時々顔を見せる新東宝時代の久保菜穂子がピッタリの感じなのだが、最近では年増美人タイプになってしまったので失格。結論として第一に大空真弓、次いで浜美枝を推す。現代的美人、勝気な性格、グラマーと一応三拍子そろっており、総合的で大空が少しいいようだ。

美津子——京子の妹。高校三年生。純情可憐で清楚な感じの美人。京子を屈伏させるた

め、いわば政策的に捕えられたのだが、彼女の登場によって、ますます物語の面白さが深まり、今では準ヒロイン格になっている。何の罪もないこの乙女を悪漢達の餌食にするのは、いかにも気の毒ではあるが、S派の強い要望とあれば止むを得まい。そのためか作者も彼女の恋人文夫を再び政策的に捕えさせ、貞操の危機だけは救ってやるという思いやり(?)を示している。

美津子役として第一に考えねばならないのは、吉永小百合であろう。彼女の清らかな美しさ、誰からも愛される人格の良さは周知の通りであるが、美津子役としては残念ながら不適当と思う。その最大の理由は、彼女があまりにも健康的であるということである。どんな苦境にもめげず雑草のように生き抜いていくという力強さが、美津子のイメージとやや異質のものを感じさせるからである。この点は次の小夜子の場合でも同様であろう。

芦川いづみでは年令的に無理。岩下志麻、桑野みゆき、佐久間良子などは感覚的にずれ。その他藤山陽子、星由里子、姿美千子、三井美奈、桜町弘子などが考えられるが、いずれも一長一短があり、むづかしい。こう見ると、美津子役も難産だが、私は本間千

代子が一番いいと思う。次点として歌手の梓みちよを挙げたい。尚、最近デビューした若手スターの中に適役がいるかもしれないが、あまり、よく知らないので省略する。

小夜子——寶石店の令嬢。若くてみずみずしい華麗な美しさ。彼女は弟文夫と一緒に身代金めあてに捕えられたのであるが、ストーリーの上でどれほどの必要性があるのか少し疑問である。美津子に欠けている『深窓の令嬢』というイメージを補うためでもあろうか。今のところ幾分手持無沙汰という感否めないが、作者の今後の腕の牙えを期待したい。作者は小夜子を鰐淵晴子に擬しているようであるが賛成できない。鰐淵は確かに美人ではあるがグラマーすぎる。それに日本人離れした大柄な体格が、いわゆる大味な感じでもう一つピンとこないように思われる。

この役は三田佳子に決めたい。奥床しい、令嬢ムードの溢れた女優ずれのしていない美しさは、正しく適役である。性格的な感じも丁度いい。尚、三田よりも、もう一まわりスケールの大きいところで、静子役で候補に上った司葉子がいる。司の美しさは、ある意味では山本富士子以上だし、△令嬢▽として彼女ぐらいふさわしい人はいないのであるが、

年令的に外れるのが、いかにも残念である。本命三田の対抗馬というところか。数年前映画界にいた金田一敦子もいい線だと思うが、現在どうしているか不明なので圏外。

銀子、悦子、義子などのズベ公グループには、次のような配役でどうだろうか。

小悪魔タイプで緑魔子、加賀まりこなど。性格悪女役として渡辺美佐子、野際陽子。ふ

人 物	イ メ ー ジ	配 役 (上本命 下対抗)
静 子	美貌と気品、女盛りの令夫人。	山本富士子 月丘 夢路
桂 子	あどけない不良少女。	野川由美子 白木 マリ
京 子	美人でグラマー男まさりの娘。	大空 真弓 浜 美枝
美津子	純情可憐、清楚な乙女。	本間千代子 梓 みちよ
小夜子	華麗な美しさ。深窓の令嬢。	三田 佳子 司 葉子
ズベ公	残忍、冷酷、陰湿、陰花植物	渡辺美佐子 緑 魔子 黒柳 徹子 加賀まりこ
文 夫		太田 博之

尚、蛇足ながら「花と蛇」について、私なりの感想と希望など少し書いてみたい。感想については、本小説完結のおりには、もう少し詳しく論及させていただきたいと思ってい

うてんグループで、黒柳徹子、横山道代、水谷良重など。

千代夫人は適役がない。強いていえば清川虹子か。最後に文夫役であるが、太田博之がいいようだ。川田、森田、田代などの男性悪役は省略する。皆さん考えて下さい。以上の選考の結果を多少の色どりを添えて一覧表にすると次のようになる。

るが、今は簡単にデッサン程度に留める。

一、「花と蛇」は羞恥文学の傑作であり、そのテーマは女性の羞恥感覚を侵すことである。鞭打のような女性の肉体的美しさを損う手法は一切使っていないし、生理的苦痛も極

く軽度のものに限られる。羞恥は女性の最も美しい本質であり、それへの侵害は女体の美しさを一層高める。羞恥責めはS小説の本道であり、より高次の複雑微妙な人間心理に肉迫するものである。

二、羞恥の対象は徹底的に排泄行為（浣腸を含む）へ集中される。女性の羞恥感覚の最も強烈な部分を形成しているからである。

三、文章（体）は平易であり流暢である。実に読み易い。難解な文章で書かれた作品が高度の文学（！）だとは限らない。芳野眉美氏は「花と蛇」を読物だと規定されるが私もそう思う。小説（文学）と読物の境界は昇華ということがポイントになるから、その意味では氏の指摘どおりだが、ただし、そのことは作品の価値とは無関係である。

四、性格、環境、年令、等の異った五人の女性（及び一人の男性）をそれぞれ描き分けるのは並み大抵の筆力ではできない。団氏はそれを見事にやってのける。しかも羞恥責めという限られたマンネリの陥り易い範囲で。

普通のS小説では対象となる女性は大体一人である。作者は五人の個性を巧みに描き分け、八組み合せVという大胆な手法に挑む。

五、細部の技巧が秀抜で小道具、会話、心

理描写、用語など作者の創案になるものが多い。テープレコーダ、フィルム、誓約書、剃髪、洗面器を使う、スパークする、桃の花と菊の花など枚挙にいとまがない。

六、特に優秀な技法は「意思表示」と「選択原理」である。前者にはa自白、b説明、c要求、d感謝、e詫びの各種があり、後者は△脱衣と排尿▽△排尿と浣腸▽△プレイと花電車▽などのように、二種の内一種を自発的に選べるものである。姉妹愛、親娘愛などの感情を利用するのが最も効果的である。じゃじゃ馬の京子が次第次第に屈伏してゆき遂に浣腸で止めをさされる場面は、前篇の白眉といえよう。

七、一つだけ苦情を呈したい。とるに足らないことだが、川田、銀子をはじめとする責め役がいつもアルコール類を飲用していることである。彼等の△良心▽を麻痺させるという設定かとも思うが不必要ではなからうか。尚、緊縛描写の場合も多いが、特殊の場合を除いて、それほど効果もないように思える。

八、種々の制約が多い中で、次々と見事なストーリーの展開が見られる。作者の熱意と努力には只々感激するばかりである。△組み合せ▽は、静子対京子、静子対桂子、美津子

対文夫と三種登場した。今後は小夜子の処遇と唯一の男性文夫の役割がポイントになると思う。

九、羞恥感覚の基本的なものは一応出つくしたようだ。あと一つ、大きいものとしてMemesが残っているが、これをどう取扱うかに興味が持たれる。

一〇、作者にお願いがあるが、やはり最少限度の人倫道徳(?)を守っていただきたいと思う。従って京子対美津子、小夜子対文夫の組み合わせは我々善良(?)なS派ファンの道徳感情を著しく破壊するために反対である。animals (dog……) も同様である。但し前記六の選択原理の手段としては強烈無比なものに違いない。

一一、小夜子の貞操を、どう処理するかはむづかしい。美津子の時の方法は使えないと思う。彼女が少ししか活用されないのも、作者がその対策に苦慮しているためだと思う。

一二、文夫は美津子専用にはせず、女役にするのにも面白いと思う。そうすると男役はさしずめ、じゃじゃ馬の京子ということになるうか。京子を吉沢のような男の女にするのはもったいない話だと思う。